一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 23

一般国道183号鍵掛峠道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県日野郡日南町

新屋宮ノ段遺跡
（にいやみやのだんいせき）

２０２１．３

一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 23

一般国道183号鍵掛峠道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県日野郡日南町

新屋宮ノ段遺跡
（にいやみやのだんいせき）

２０２１．３

一般財団法人　米子市文化財団

例　　言

1．本報告書は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所が計画する一般国道183号鍵掛峠道路事業に伴い、平成29～31年度に日野郡日南町新屋地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所の委託を受けて、一般財団法人米子市文化財団が実施した。

3．本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系第Ⅴ系の座標値である。またレベルは海抜標高を示す。

4．本報告書第２図の地図は、「日南町地形図34-28・29」（昭和62年５月）を加筆・修正して使用した。

5．調査の実施に当たって、基準点測量と調査前地形測量、空中写真撮影、遺構図作成の一部をフジテクノに、火山灰分析を火山灰考古学研究所に、石組遺構のリン・CN分析を文化財調査コンサルタントに、出土金属製品の保存処理を元興寺文化財研究所に、精錬鍛冶炉の剥ぎ取り調査をスタジオ三十三にそれぞれ委託した。

6．鍛冶炉の現地調査については、角田徳幸氏、坂本嘉和氏の指導を得た。

7．縄文土器の整理・分類には、柳浦俊一氏の指導を受け、第２章第２節の「縄文土器」を柳浦俊一氏に執筆頂いた、実測、拓本も柳浦氏による。出土銭貨の鑑定及び拓本は高橋章司氏のご協力を得たほか、考察も頂いている。

8．瓦については、大阪学院大学国際学部元教授の藤原学氏による調査指導を得た。

9．出土石材の同定は、高橋章司氏の肉眼観察による。

10．発掘調査によって作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに、出土遺物は日南町教育委員会に保管されている。

11．現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

淺田裕子、伊田直起、角田徳幸、影山波留声、坂本嘉和、高橋章司、藤原　学、柳浦俊一、
矢野健一、鳥取県立博物館、日南町美術館

凡　　例

1．発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。

2．遺跡の略称は「NYMD」と記載した。

3．本報告書における遺物番号は次のように記す。

Po：土器・土製品・陶磁器　　R：瓦・窯道具・窯部材　　S：石製品

F：鉄滓　　M：金属製品　　C：銭貨

4．本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。

5．遺物実測図のうち、瓦質土器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。

6．遺物実測図の縮尺は、土器・陶器が１分の１、３分の１。瓦製品が２分の１、４分の１。石製品が１分の１、３分の１、４分の１。金属製品が１分の１、２分の１、３分の１。鉄滓が３分の１。銭貨が４分の３である。

新屋宮ノ段遺跡　新旧遺構名対照表

新遺構名	遺構略名
配石遺構１	SX89
配石遺構２	SX88
配石遺構３	SX94
配石遺構４	SX100
配石遺構５	SX90
集 石 １	SX53
集 石 ２	SX52
集 石 ３	SX87
集 石 ４	SX56
集 石 ５	SX82
集 石 ６	SX81
貯蔵穴１	SX99
貯蔵穴２	SK97
貯蔵穴３	SK96

新遺構名	遺構略名
貯蔵穴４	SX95
貯蔵穴５	SK69
貯蔵穴６	SK70
貯蔵穴７	SK68
貯蔵穴８	SK67
貯蔵穴９	SK72
貯蔵穴10	SK71
貯蔵穴11	SK66
貯蔵穴12	SK74
貯蔵穴13	SK21
貯蔵穴14	SK22
陥 穴 １	SK65
陥 穴 ２	SK73
石組遺構１	SX23

新遺構名	遺構略名
銭 集 中	SX93
土 坑 １	SX92
神社建物１	SX24
土 坑 ２	SX91
建 物 １	SB58
建 物 ２	SB60
建物３・４	SB61
建 物 ５	SB75
鍛冶炉１	SX84
道 路 １	SX19
土取穴１	SX8
土取穴２	SX18
土取穴３	SX55
石組遺構２	SX83

目　　次

例言、凡例、新旧遺構名一覧表
目次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 ……1
　第２節　発掘調査の経過 ……2
　第３節　整理作業の経過 ……2
　第４節　調査体制 ……2

第２章　新屋宮ノ段遺跡の調査
　第１節　調査区の概要と層位 ……4
　第２節　縄文時代の調査 ……9
　第３節　中・近世の調査……44
　第４節　近代の調査……84

第３章　自然科学分析
　第１節　火山灰分析の結果（火山灰考古学研究所） ……102
　第２節　石組遺構から出土した土壌の化学分析（文化財調査コンサルタント株式会社） ……112

第４章　総括
　第１節　銭集中及び神社跡周辺出土銭貨の評価について ……115
　第２節　精錬鍛冶炉の調査成果 ……118
　第３節　新屋宮ノ段遺跡における瓦生産について ……120
　第４節　新屋宮ノ段遺跡の歴史的環境 ……121
　第５節　結語 ……122

遺物観察表
写真図版
報告書抄録・要約・奥付

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県日野郡日南町新屋において計画された一般国道183号鍵掛峠道路事業に係る、工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施した記録保存調査である。一般国道183号鍵掛峠道路は、広島県庄原市西城町と日南町新屋を結ぶ全長12㎞の高規格道路である。

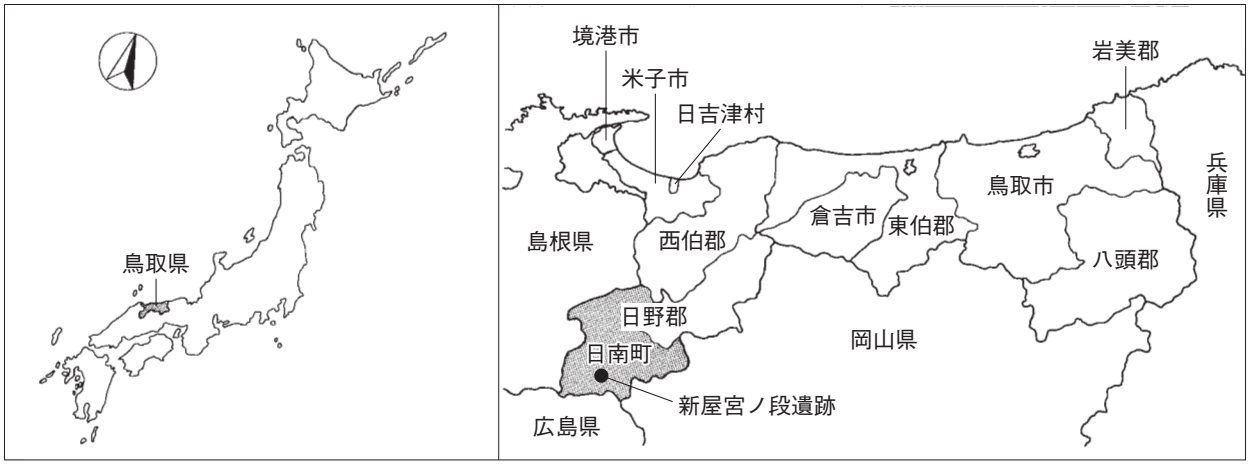
今回、発掘調査を実施した新屋宮ノ段遺跡は、平成28年度に一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室が調査を行った新屋川添遺跡の南側の丘陵上に位置している。この地点では、平成26・27年度に日南町教育委員会による試掘調査が実施され、古墳の周溝や縄文土器、鉄滓が確認されたことから、事業主体者である国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所と鳥取県教育委員会、日南町教育委員会による事前協議が重ねられ、この工事予定区間における発掘調査日程の調整を行ったが、日南町では複数年度に亘る継続的な調査実施が困難な状況であったことから、米子市文化財団埋蔵文化財調査室が３ヶ年に亘って本調査を実施することとなった。

発掘調査については、平成29年度は４月１日付で鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条第１項の発掘調査届を提出、平成29年４月10日に国土交通省と発掘調査業務委託契約を締結し、平成29年５月18日から現地調査に着手、平成29年11月30日に調査を完了した。

平成30年度は、２月15日付で鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条第１項の発掘調査届を提出し、平成30年４月４日に国土交通省と発掘調査業務委託契約を締結し、平成30年５月21日から現地調査に着手、平成30年11月30日に現地調査を完了した。

平成31年度は、３月25日付で鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条第１項の発掘調査届を提出、平成31年４月15日に国土交通省と発掘調査業務委託契約を締結し、７月24日から７月30日までの期間に鍛冶炉の表面情報を採取するため、鍛冶炉とその周辺の遺構面の剥ぎ取り調査を行い、微細サンプルの採取と鍛冶炉の完掘を行い、全ての現地調査を完了した。

令和２年度には、令和２年４月15日付で国土交通省と発掘調査業務委託契約を締結し、年度末までに発掘調査報告書の作成作業を行った。



第１図　日南町位置図

第２節　発掘調査の経過

発掘調査を行った面積は、工事対象区間のうち、丘陵上に広がる平坦地、5,620㎡を対象とし、平成29年５月18日から令和元（平成31）年７月30日までの期間で現地調査を行った。

現地調査は、現場内の丘陵上に排土置場を確保する必要があったことから、平成29年度に調査範囲の北側部分の調査を行い、翌30年度に南側と北側の丘陵先端部の調査を行った。平成31年度には、精錬鍛冶炉の剥ぎ取りを行い、詳細な調査を実施した。

調査成果の公開については、平成30年９月21日から10月７日までの期間に日南町美術館第１展示室において、「日南町の遺跡を掘る」と題して、一般国道183号線鍵掛峠道路関係の発掘調査速報展を日南町美術館と共同で開催し、305名の観覧者があった。また、平成30年10月28日には一般を対象とした現地説明会を開催し、町の内外から40名の参加を得た。

現地調査では、表土剥ぎと排土の移動に重機を使用した。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。業務委託に関しては、測量基準点の設置、調査前の地形測量、一部の遺構測量、調査前の空中写真撮影、火山灰分析、CN・リン分析、鍛冶炉の剥ぎ取り調査、出土金属製品の保存処理業務をそれぞれ専門業者に委託した。

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成30年度には、現地説明会及び日南町美術館で展示する一部の出土遺物の洗浄と注記作業を行った。令和２年度には、残りの出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末までに報告書を刊行した。

また、縄文土器の実測、拓本、分類、図版作成には島根県埋蔵文化財調査研究センターの柳浦俊一氏、鍛冶炉の調査には島根県埋蔵文化財調査研究センターの角田徳幸氏と鳥取県埋蔵文化財センターの坂本嘉和氏、出土した石材の同定と出土銭貨の分類、拓本の作成、考察には、とっとり弥生の王国推進課の高橋章司氏、瓦窯の調査には大阪学院大学元教授の藤原学氏から指導、助言を受けた。

第４節　調査体制

平成29年度（2017年度）

事業主体　　一般財団法人　米子市文化財団

理 事 長　杉原弘一郎

常務理事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

平成30年度（2018年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理 事 長　杉原弘一郎

常務理事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

主査兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　主幹兼統括調査員　佐伯純也

平成31（令和元）年度（2019年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理 事 長　杉原弘一郎

常務理事　先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員　小原貴樹

主査兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　次長兼統括調査員　佐伯純也（７月末まで）

主任調査員　高橋浩樹（８月より）

令和２年度（2020年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理 事 長　杉原弘一郎

常務理事　先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員　小原貴樹

主　　事　田中昌子

事業担当　主任調査員　高橋浩樹

調査協力・管理・指導・助言

米子市文化振興課・米子市教育委員会・日南町教育委員会・とっとり弥生の王国推進課・鳥取県埋蔵文化財センター

第２章　新屋宮ノ段遺跡の調査

第１節　調査区の概要と層位

新屋宮ノ段遺跡は、道後山（標高1.268m）から北西に細長く伸びる丘陵の先端部に位置している。現地は日野川と野組川が合流する地点のすぐ南側にあり、調査前にはスギやヒノキが植林された山林であったが、平成の初め頃までは畑が作られており、里山の景観をなしていたと思われる。

現地では濃密な鉄滓の散布があり、周辺の山林には人為的に改変された地形が見られることから、近世から近代にかけて、たたら製鉄がこの一帯で広く行われていたと推測された。また、丘陵の先端部には、大正４年まで青瀧神社が建てられており、現地には建物の痕跡が認められた。

新屋宮ノ段遺跡の発掘調査は、平成29年度に６区から14区までを調査し、翌平成30年度に15区よりも南側の調査を行った。また、平成31年度には鍛冶炉の剥ぎ取り調査を行い、全ての現地調査を完了させた。

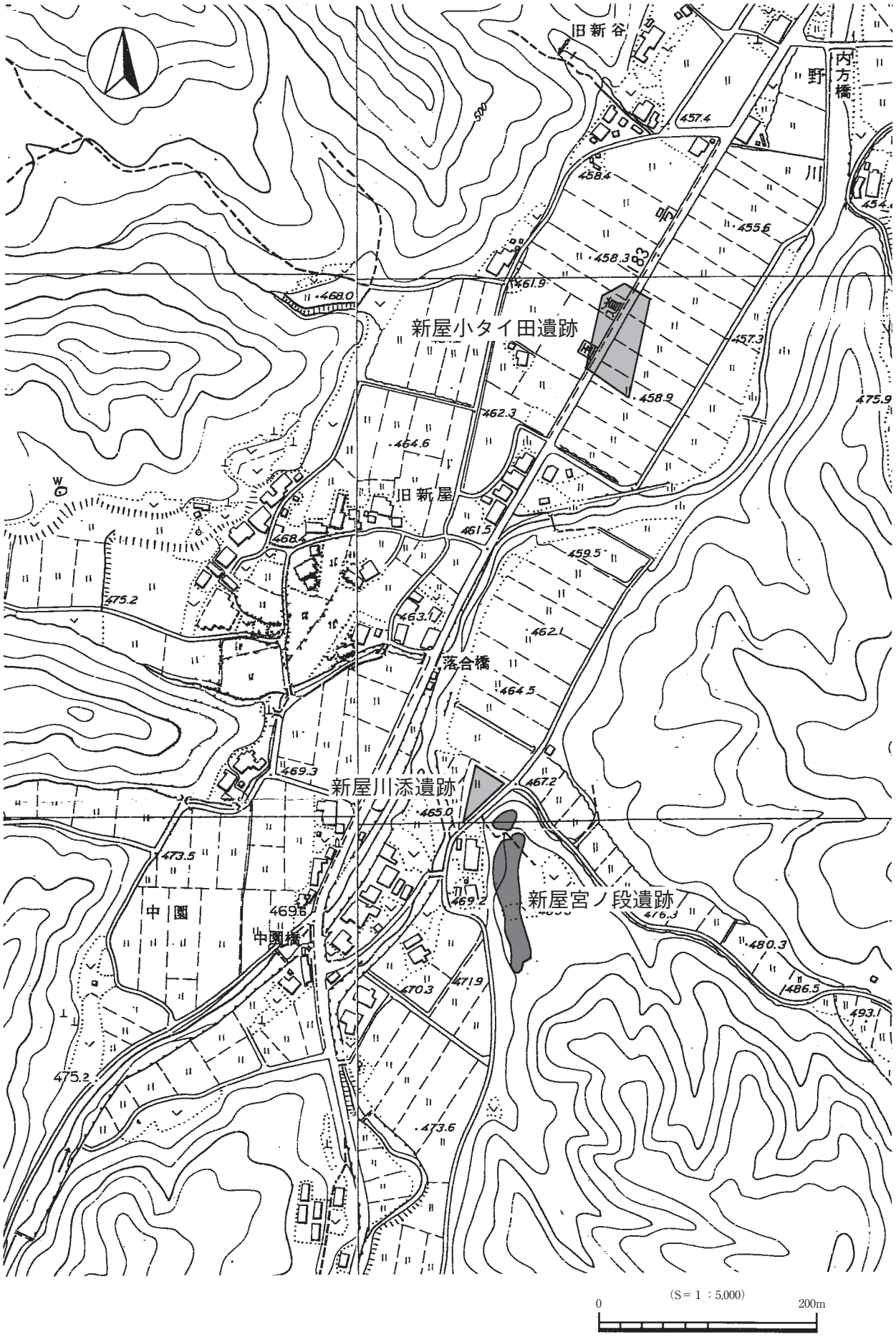
発掘調査の方法は、表土を重機にて除去した後、人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は、人力にて一輪車により運搬し、重機により調査区内の排土置場へと移動させた。排土置場については、調査区外への搬出が出来なかったことから、平成29年度には15区の南側に仮置きし、平成30年度には調査が終了した14区の北側へ排土を移動させて調査区を確保した。排土の積み上げには、大型土のうを用いて排土が流出しないよう対策を行った。

人力による遺構掘削については、鍬とジョレンを用い、遺構の検出作業についてはガリと移植鏝を使用した。現場での遺物の取り上げは、台帳を作成して出土地点と層位を記録して管理した。検出した遺構名については、調査段階では仮の略号を用いているが、本報告書作成段階で変更している。遺構番号については、同じ番号が重複しないよう、続き番号で登録した。

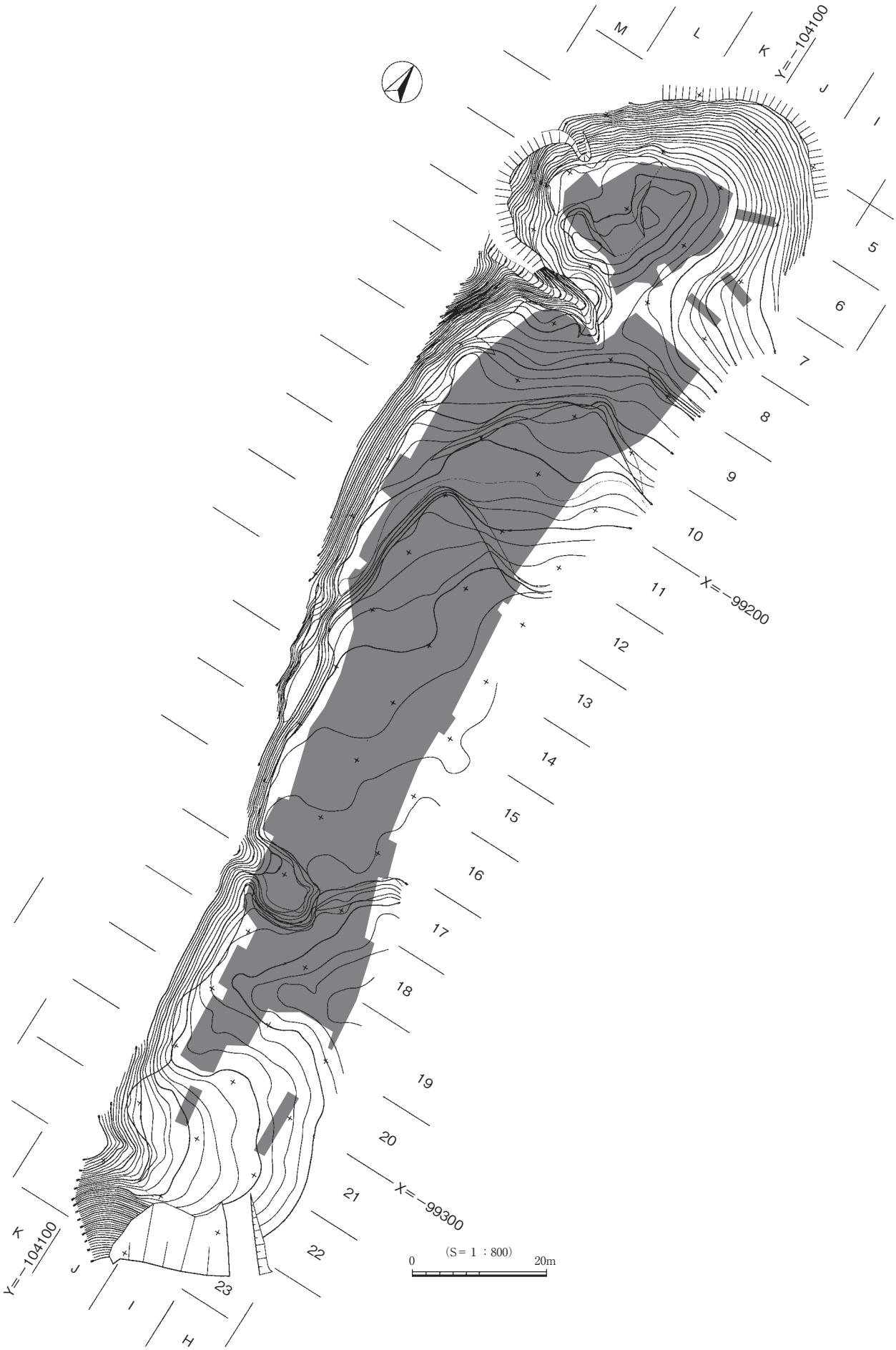
検出した遺構の記録には、トータルステーションとオートレベルを用いて実測作業を行った。また、写真撮影は、現地では35㎜の一眼レフカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとして、コンパクトデジタルカメラも使用している。遺物の撮影には、一眼レフのデジタルカメラを使用した。

調査地の堆積状況は、表土から地山のローム層まで三層に分かれており、１層の灰褐色土から２層の黒色土、３層の褐色土へと変化している。表土である１層を除去した黒色土の上面では、近代に作られた道路１を検出した。続く２層は古代から近世までの遺物を含んでおり、３層の上面を第１遺構面とした。３層の褐色土は縄文時代の遺物を含んでおり、地山のローム層の上面を第２遺構面とした。

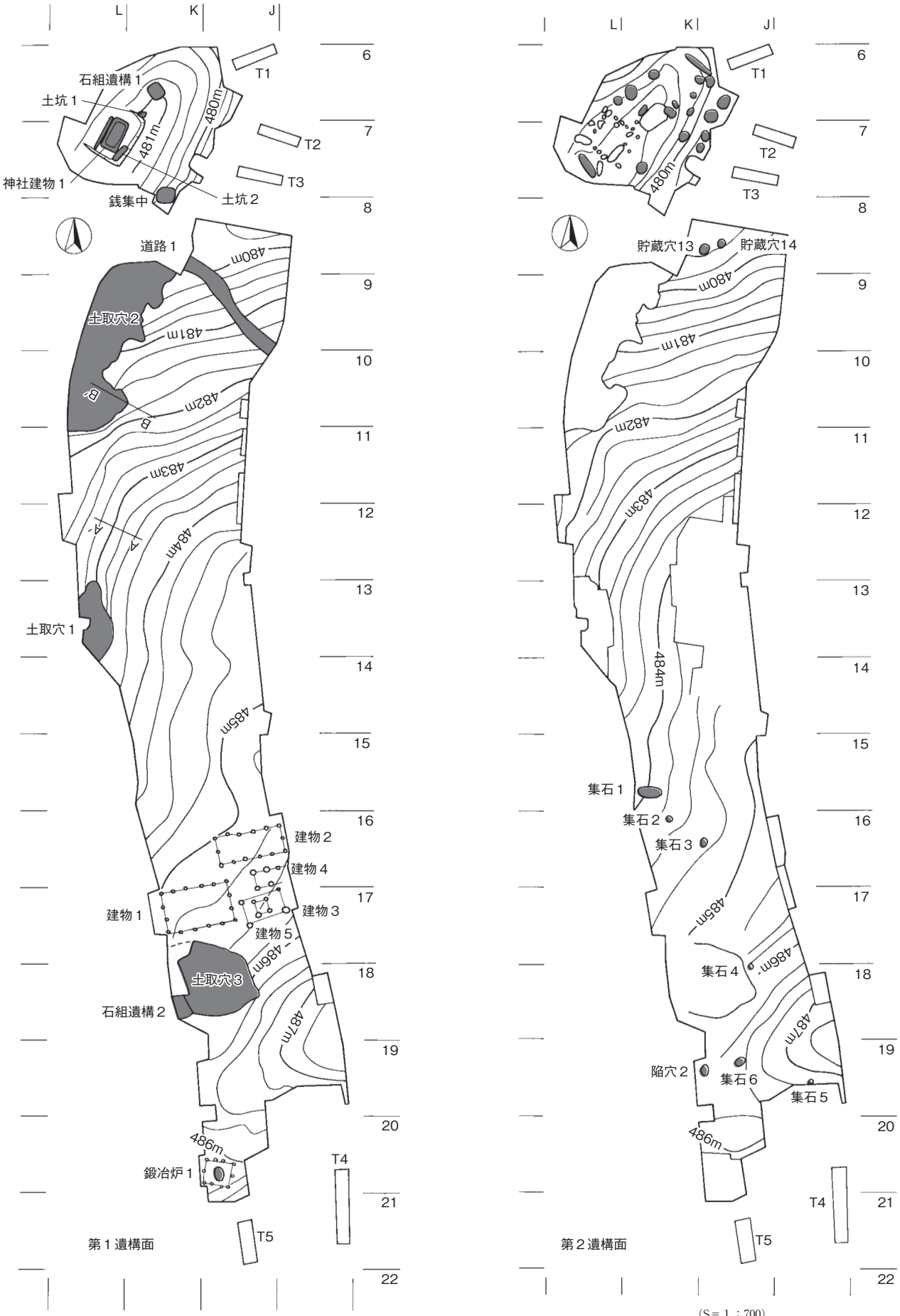
地山であるローム層については、旧石器時代の遺物が含まれていないか、所々にトレンチを入れて確認を行い、一部の地点では火山灰分析を実施した。



第２図　新屋宮ノ段遺跡位置図



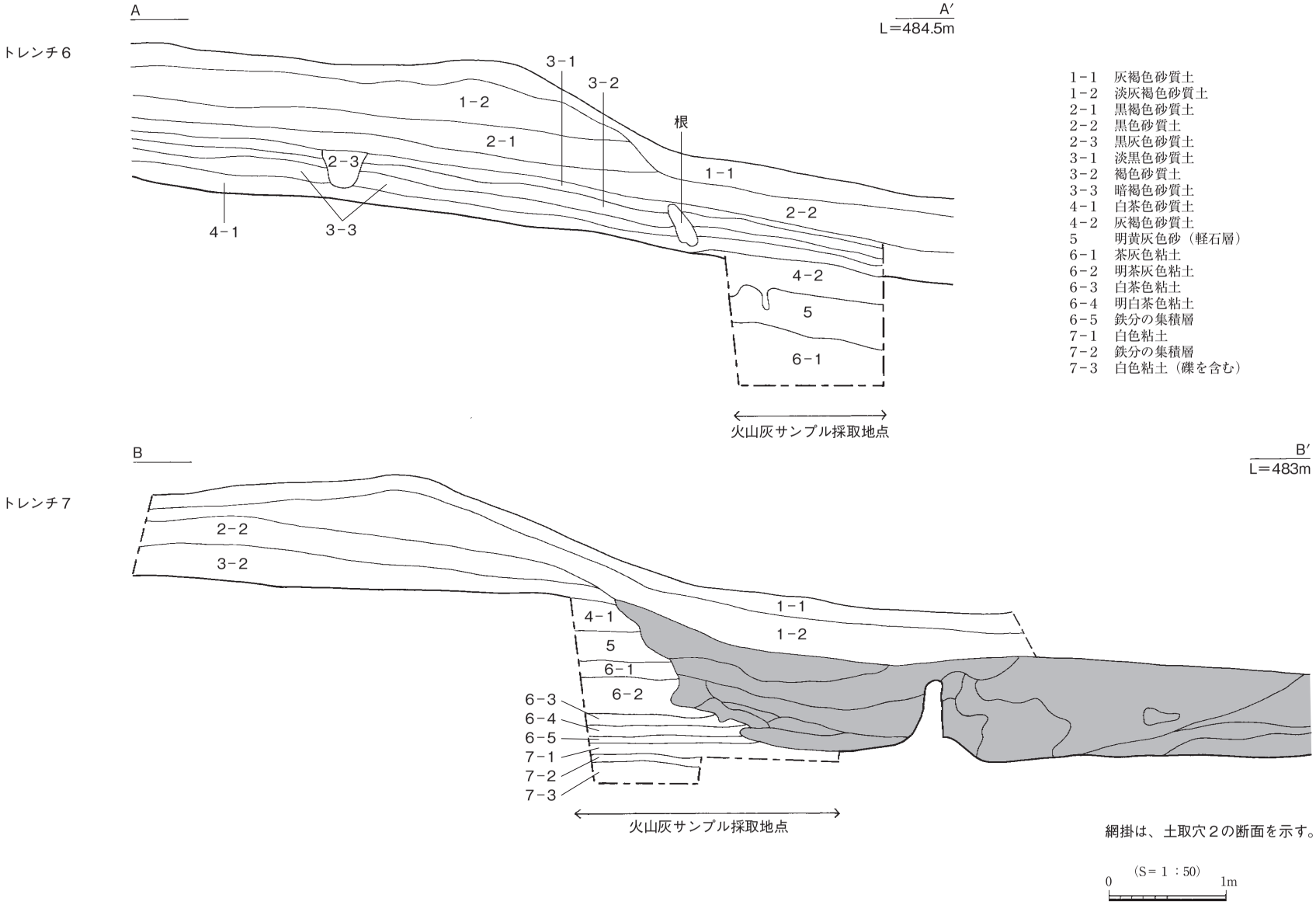
第３図　調査前測量図・地区割図



※道路１は、０遺構面で検出。

第４図　遺構配置図

※６・７区の遺構名は、第29図を参照


トレンチ６
A
A′
L＝484.5m
3－1
3－2
1－2
2－1
2－3
根
1－1
2－2
4－1
3－3
4－2
5
6－1
火山灰サンプル採取地点
1－1　灰褐色砂質土
1－2　淡灰褐色砂質土
2－1　黒褐色砂質土
2－2　黒色砂質土
2－3　黒灰色砂質土
3－1　淡黒色砂質土
3－2　褐色砂質土
3－3　暗褐色砂質土
4－1　白茶色砂質土
4－2　灰褐色砂質土
5　明黄灰色砂（軽石層）
6－1　茶灰色粘土
6－2　明茶灰色粘土
6－3　白茶色粘土
6－4　明白茶色粘土
6－5　鉄分の集積層
7－1　白色粘土
7－2　鉄分の集積層
7－3　白色粘土（礫を含む）
トレンチ７
B
B′
L＝483m
2－2
3－2
1－1
1－2
4－1
5
6－1
6－2
6－3
6－4
6－5
7－1
7－2
7－3
火山灰サンプル採取地点
網掛は、土取穴２の断面を示す。
0
(S＝１：50)
1m

第５図　土層断面図

第２節　縄文時代の調査

縄文時代の遺構は、全て第２遺構面の直上で検出した。遺物は、第１遺構面の下にある第２層と第３層から出土しており、調査区の中央部とK−７区周辺での出土が目立っているが、調査区の全体に土器の破片が広がっており、意図的な土器の集中は少ない。出土した縄文土器は、早期の土器が主体であるが、前期末までのものが一定量見られることから、縄文時代早期中頃から前期後半まで存続した集落遺跡と考えられる。

検出した遺構は、配石遺構５基、集石６基、貯蔵穴14基、陥穴２基である。このうち、遺物を伴うものは配石遺構５、集石１、貯蔵穴１、６、11のみである。遺構に伴う遺物が少ないため、遺構の年代を決めるのは難しいが、配石遺構５は大型の無文土器、貯蔵穴11は磯ノ森式土器を伴うことから、縄文時代早期から前期末にかけて作られた遺構が主体を占めていると考えられる。

なお、「配石遺構」と「集石」の違いは、「配石」が石を意図した形に配置したものとし、「集石」が石を集め置いたものとして区別した。

配石遺構１（第６図）

北側丘陵の北側、J・K−６区の第２遺構面、標高480m付近で検出した、礫を用いた配石遺構である。この遺構は、長さ4.5m、幅80cmの範囲に、丘陵の緩斜面に沿って扁平な礫を並べたもので、一部は三段に積み上げられている。

この遺構には掘形が無く、斜面に石を並べて作ったものと考えられる。

配石遺構２（第６図）

配石遺構１の東側に接して作られた遺構で、配石遺構１と一連のものと考えられる。長さ40cm、幅30cmの扁平な平石を中心に、直径１m程の範囲に礫を重ねている。最も大きな石材は、長さ35cm、幅30cm、厚さ15cmである。遺構の周囲には、陥穴１や貯蔵穴７があるが、この遺構との前後関係は不明である。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

配石遺構３（第７図）

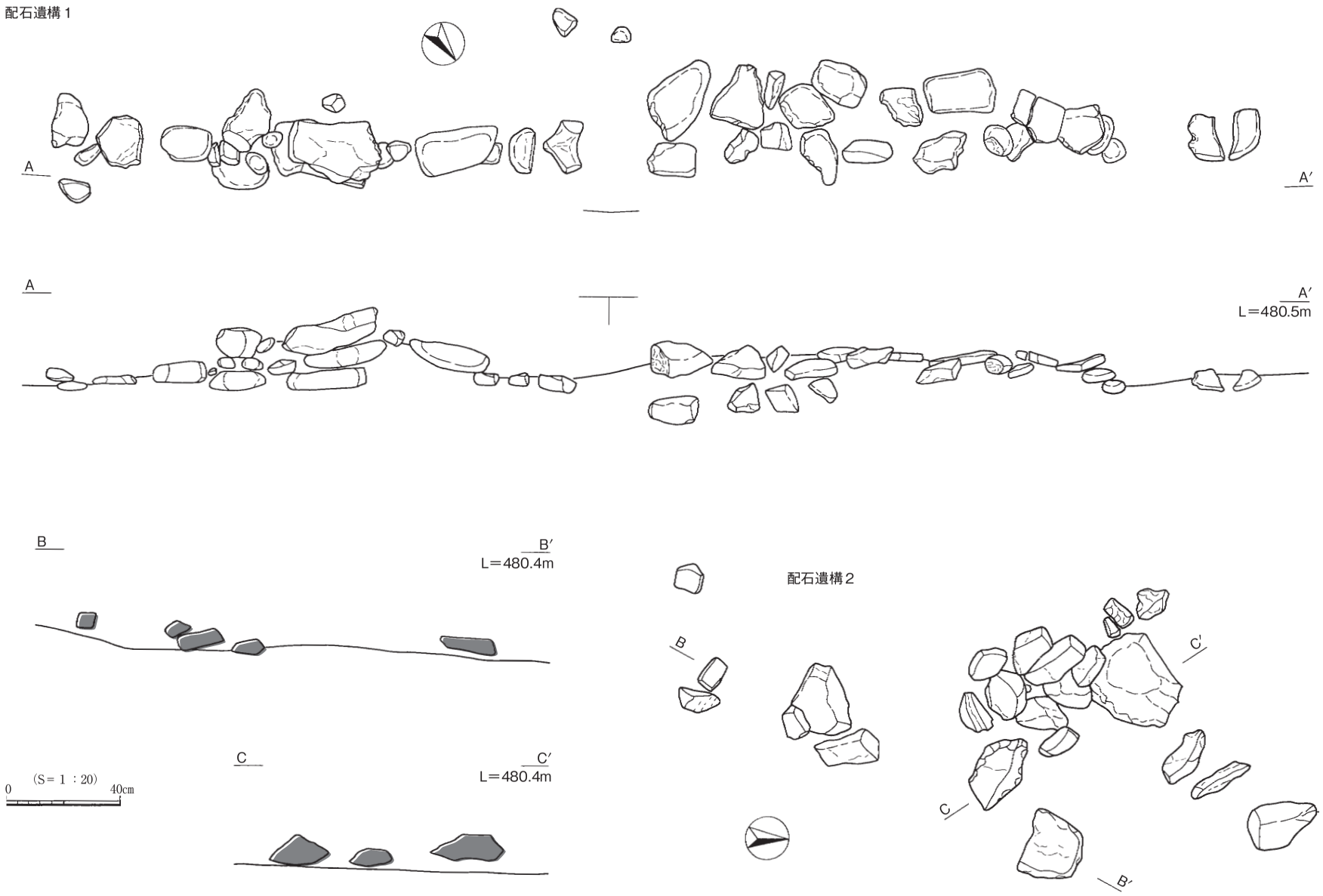
K−６区の標高480.5m付近で検出した、４個の礫を直線状に並べた遺構である。礫の範囲は、長さ1.3m、幅60cm、高さ40cmを測る。この遺構には明瞭な掘形はなく、地面にそのまま礫を置いたものと考えられる。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

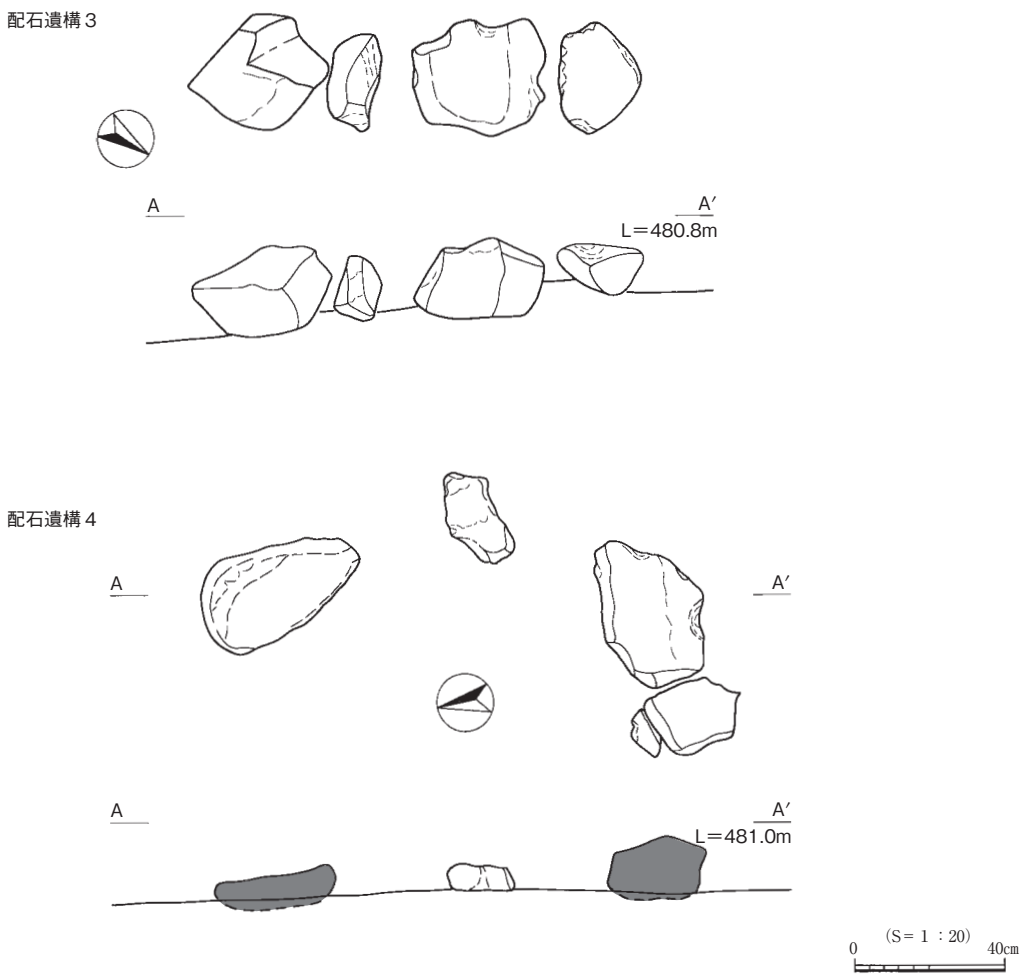
配石遺構４（第７図）

K−６区の標高480.7m付近で検出した。４個の石材を半円形に配置する遺構である。石材は、大きなもので長さ40cm、幅50cm、厚さ20cmのものが使用されている。

この遺構の周囲には掘形は無く、遺物も確認することはできなかった。



第６図　配石遺構１・２　遺構図



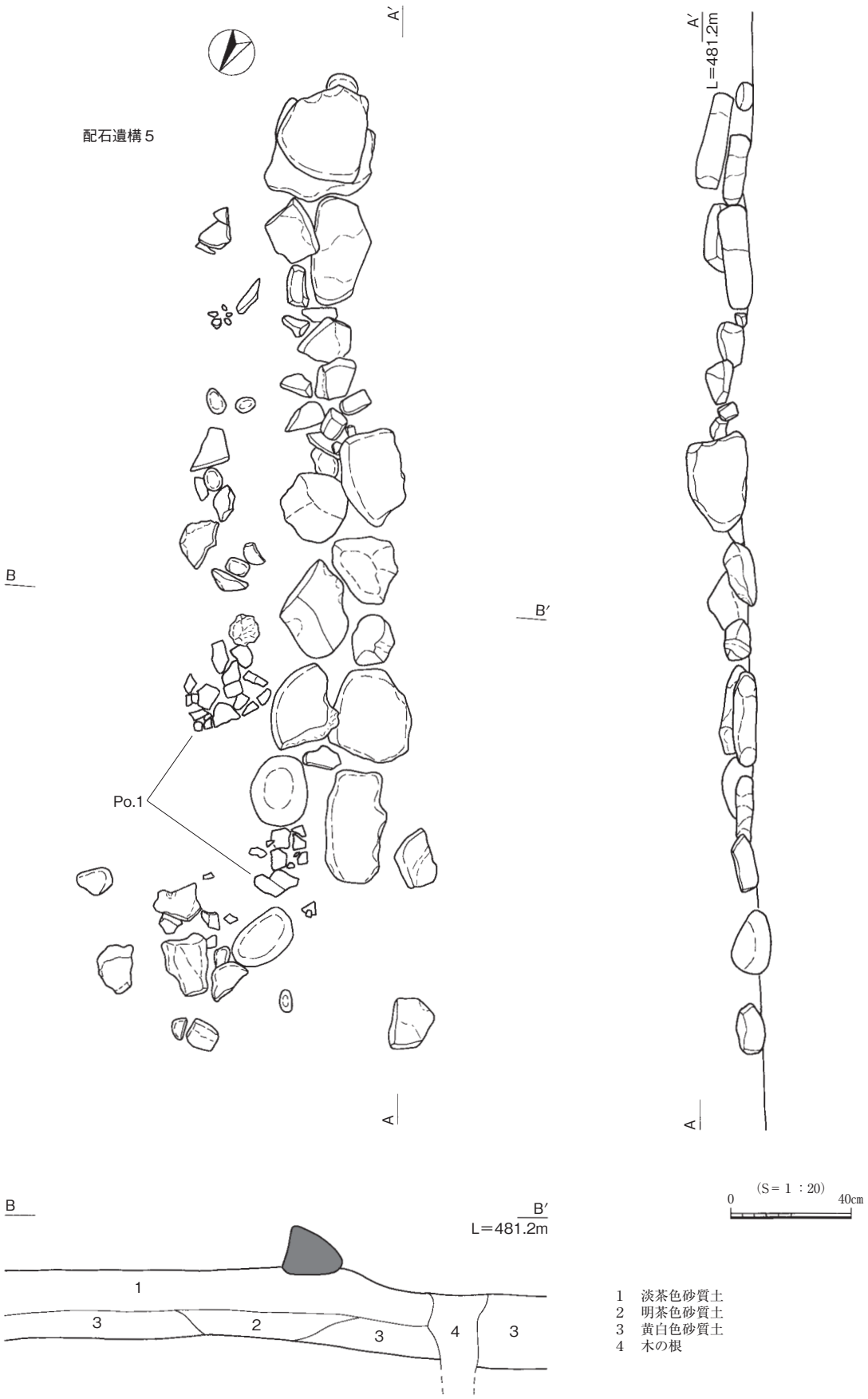
第７図　配石遺構３・４　遺構図

配石遺構５（第８・９図）

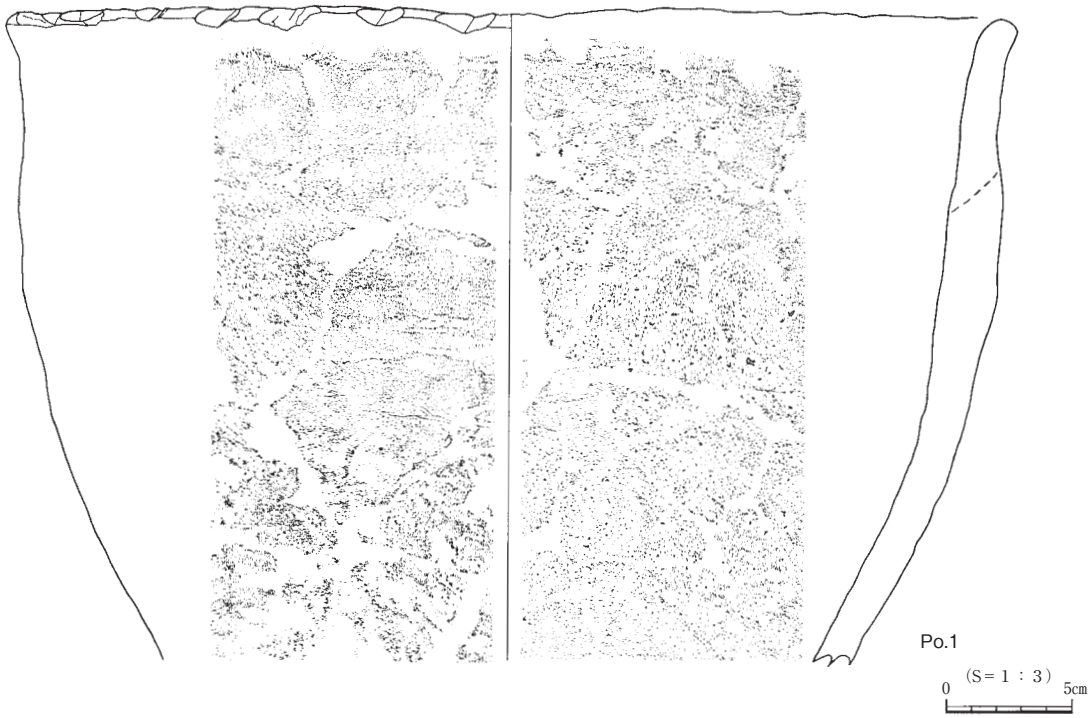
神社遺構のすぐ南側、標高481m付近で検出した、礫を直線状に配置する遺構である。石材は、長さ3.4m、幅1.2mほどの範囲に広がっており、一部では礫を二段に積み上げたり、二列に並列させる部分も見られるなど、意図的に配置された様子が窺える。

この遺構に伴う遺物は、礫の検出面と同じレベルで大型の無文土器の破片（Po.1）が出土した。土器は、口縁部の破片３分の１周程度が残存しているが、底部の破片は見つからなかった。

Po.1は、褐色を呈する大型の無文土器である。口縁部はやや外反し、口唇部には刺突文が施されている。器壁は厚く作られており、最大で２cm以上の厚みがある。口径39.0cm、高さ26cm程が残存している。



第８図　配石遺構５　遺構図



第９図　配石遺構５　遺物図

集石１（第10図）

K−15区の第２遺構面、標高484m付近で検出した、礫の集中である。およそ長さ３m、幅１mの範囲に広がっている。ここからは、花崗岩製の敲石（S.1）と黒曜石の石鏃（S.2）が出土した。

集石２（第11図）

K−16区の第２遺構面、標高484.5m付近で検出した、直径70cmほどの範囲に広がる礫集中。この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

集石３（第11図）

J−16区の第２遺構面、標高484.7m付近で検出した集石である。礫は直径80cmほどの範囲に広がっており、その直下に、長さ1.3m、幅1.1m、深さ20cmの土坑を確認した。

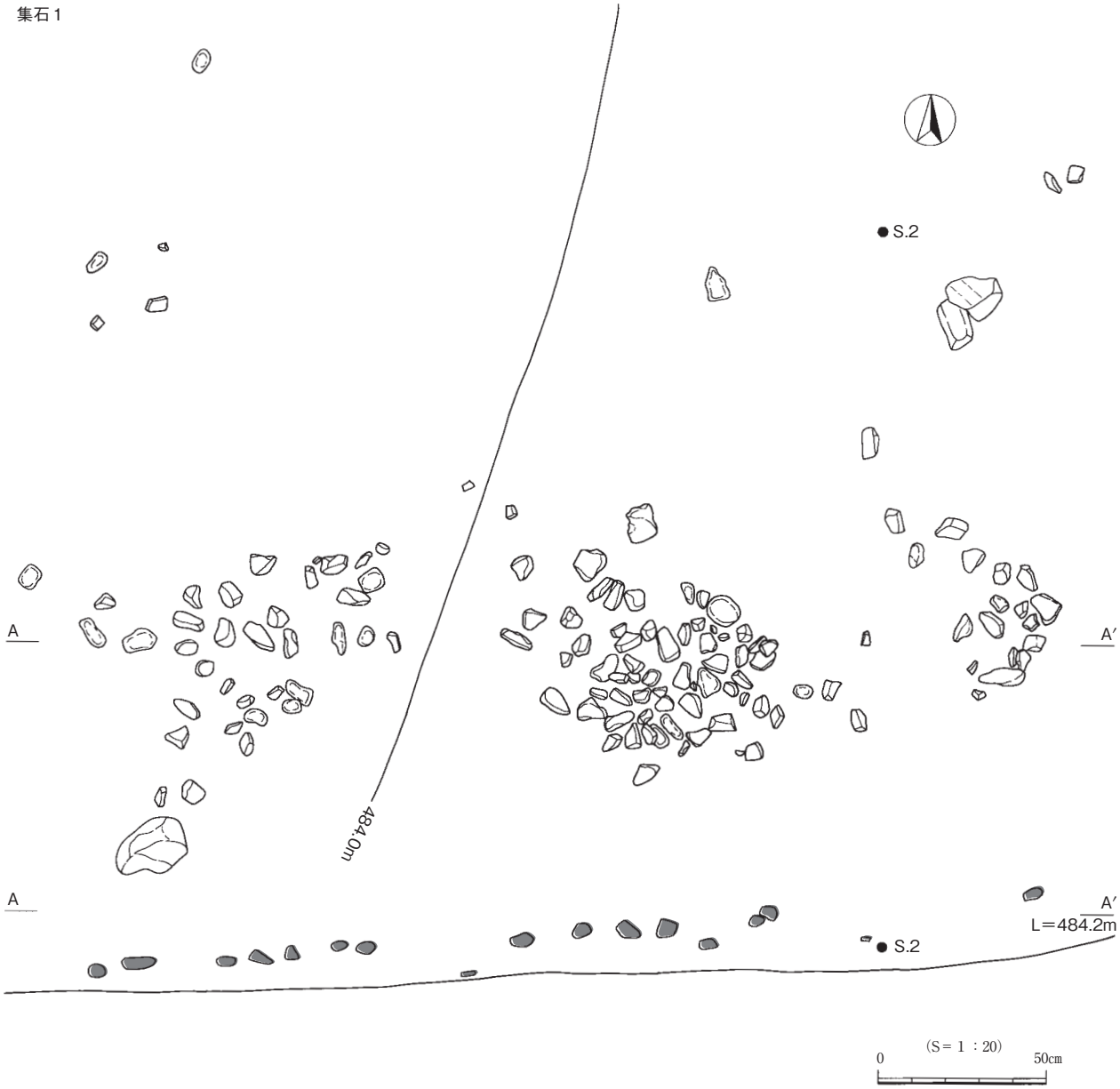
この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

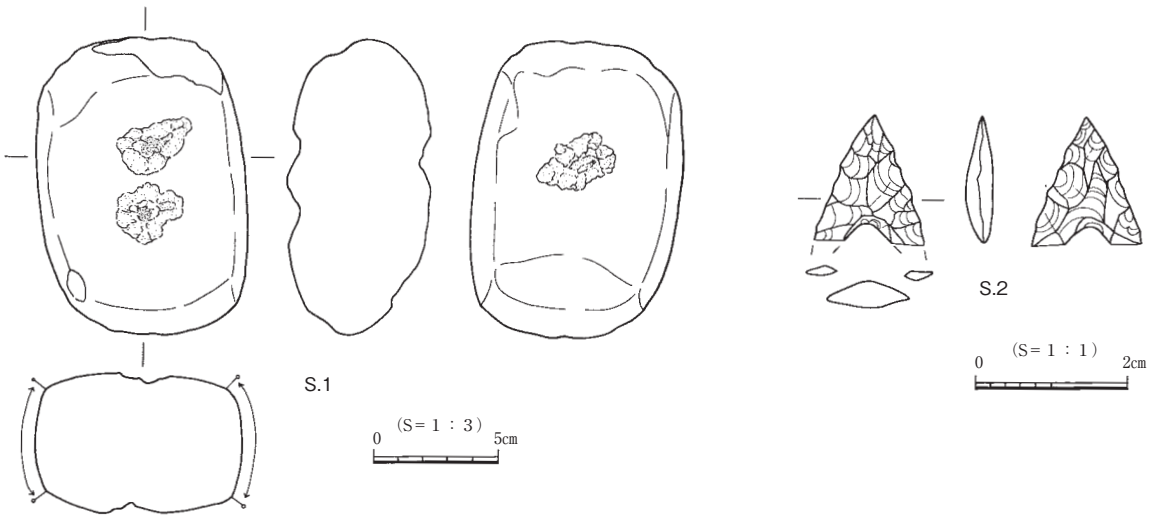
集石４（第11図）

J−18区の標高486m付近で検出した、直径80cmほどの範囲に広がる集石である。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

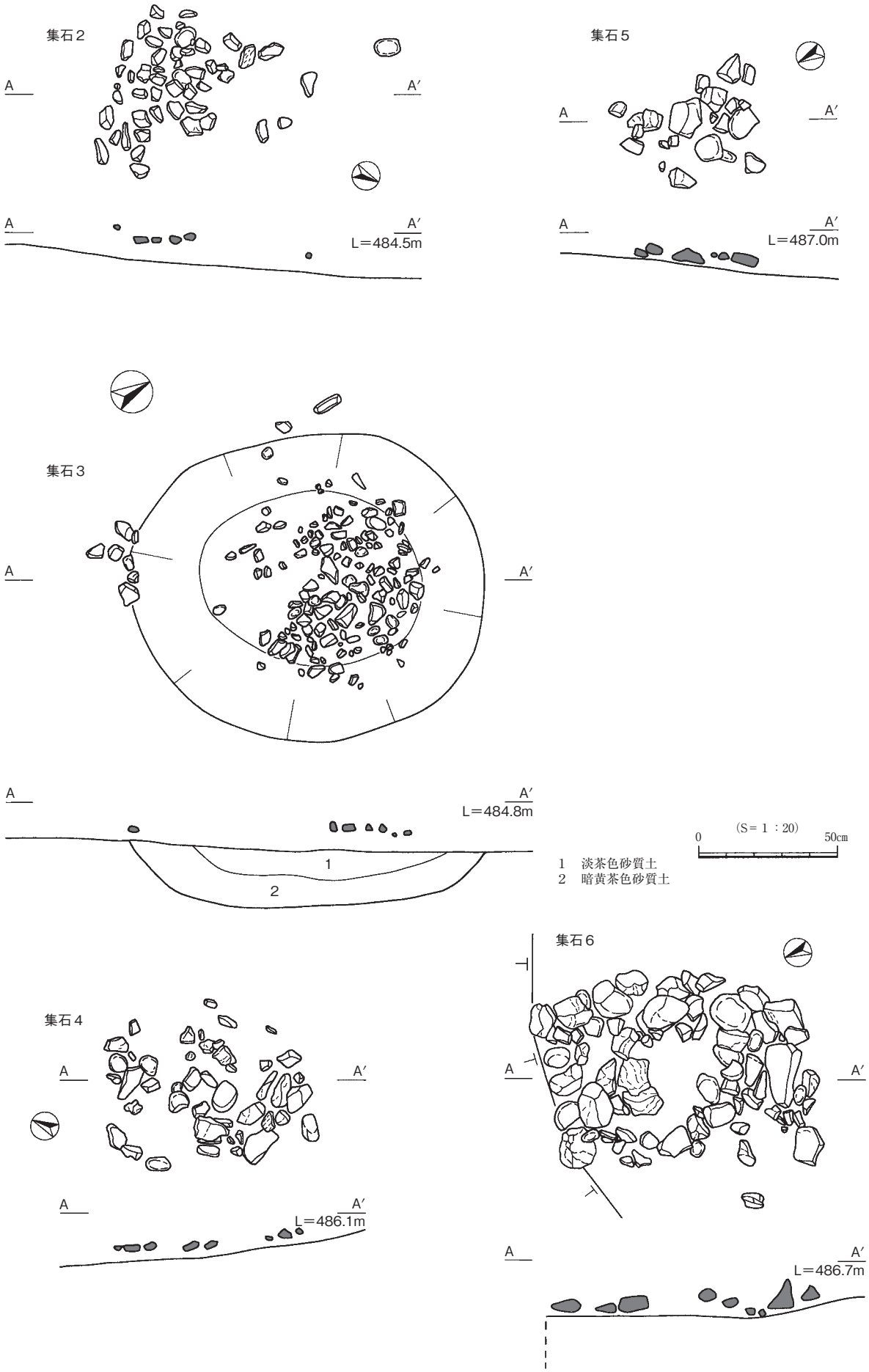
集石５（第11図）

I−19区の標高487m付近で検出した、直径50cmほどの範囲広がる集石である。石材の一部には、被熱の痕跡が認められる。





第10図　集石１　遺構・遺物図



第11図　集石２～６　遺構・遺物図

集石６（第11図）

J-19区の標高487.6m付近で検出した、長さ１m、幅70cmほどの範囲に広がる集石である。使用される礫が他の地点で確認された集石よりも大型のものが用いられている。また、一部に表面が赤化した礫が認められることから、被熱しているものと考えられる。この遺構には掘形が認められなかったことから、埋葬施設ではなく焚火などを行った痕跡か。

この遺構からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴１（第12図）

K-７区の第２遺構面、標高480.8m付近で検出した土坑である。土坑の形態は、底面が広がるフラスコ状を呈する。土坑の規模は、検出面が直径1.3m、底面が直径1.5m前後で、残存する深さは80cmである。土坑内からは、ネガティブ楕円押型文土器の破片（Po.2）が出土している。

貯蔵穴２（第12図）

L-６区の第２遺構面、標高481m付近で検出した土坑である。検出面が直径1.2m。底面が1.4mで、残存する深さは60cm程度である。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴３（第12図）

K-６区の第２遺構面、標高481m付近で検出した土坑である。検出面が1.6m、底面が1.8mで、深さは１mを測る。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴４（第13図）

K-６区の第２遺構面、標高480.8mで検出した土坑である。段面が三角フラスコ形を呈し、上面が直径１m、底面の直径が1.6m、深さ１mを測る。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴５（第13図）

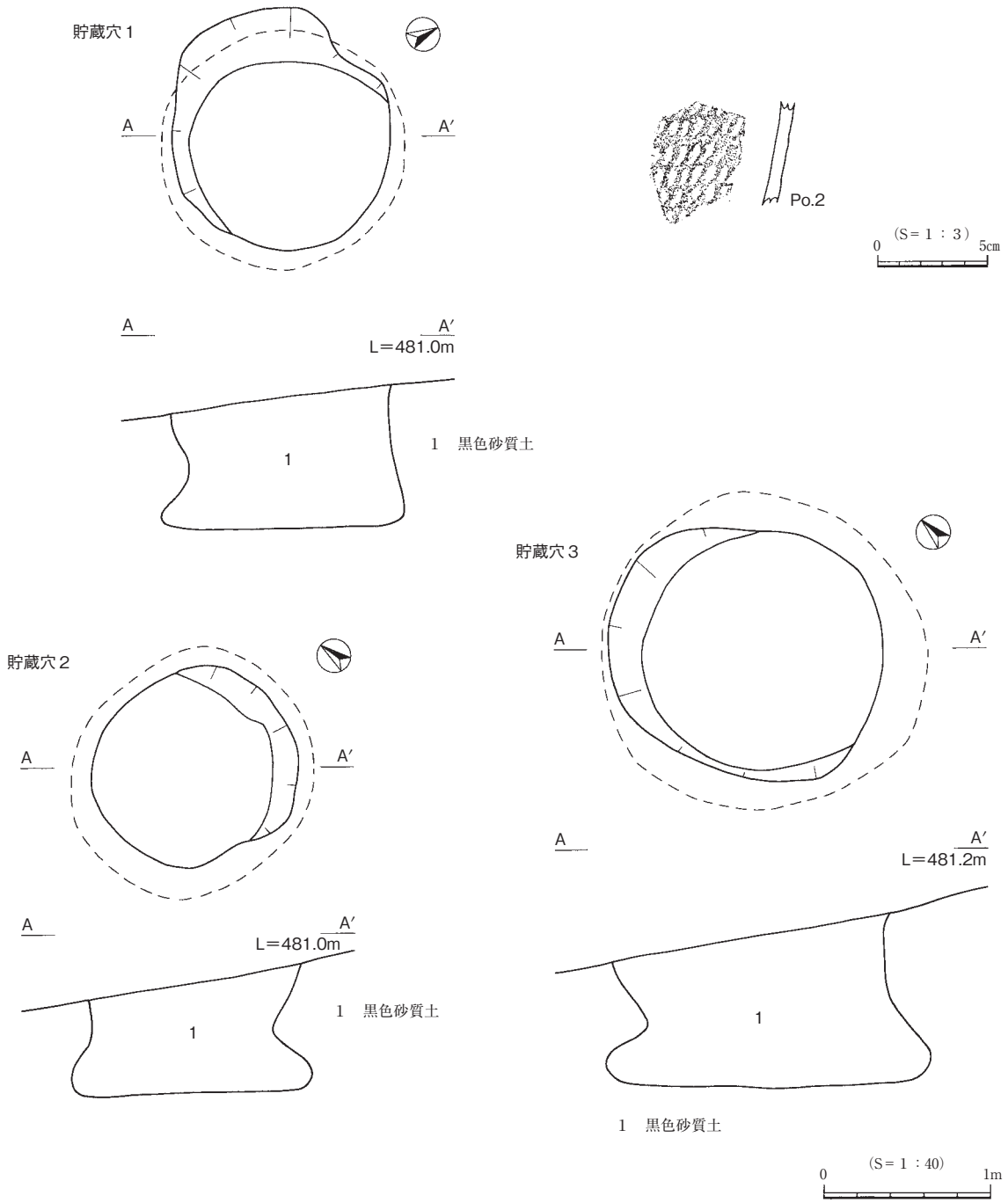
K-６区の第２遺構面、標高480.8mで検出した土坑である。検出面は長さ1.4m、幅１mの長方形を呈し、50cmほど下がった所から、フラスコ形の土坑が掘りこまれている。底面の直径は1.1mで、土坑全体の深さは1.1mである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴６（第13図）

K-７区の第２遺構面、標高480.5m付近で検出した土坑である。検出面の直径1.5m、底面の直径1.6mで、深さは１mである。この遺構に伴う遺物は、埋土中から玉髄製の石鏃（S.３）が出土した。

貯蔵穴７（第13図）

K-６区の第２遺構面、標高480.5mで検出した円形の土坑である。直径１m、深さ50cmで、真っ直ぐ掘りこまれており、底部はフラスコ状にはならないが、隣接地で検出した陥穴１よりも掘り込みが浅いことから、貯蔵穴と推測した。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



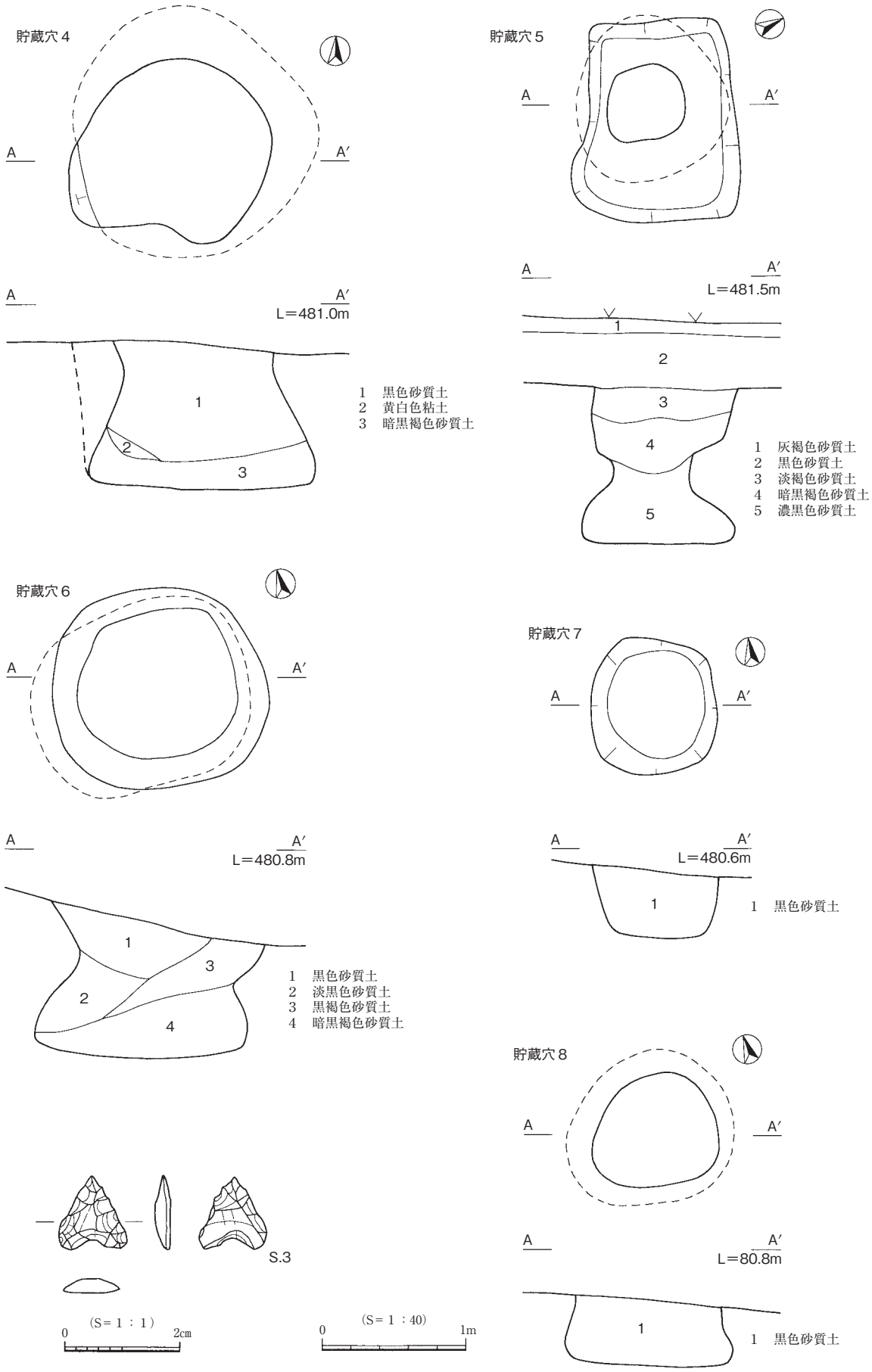
第12図　貯蔵穴１～３　遺構・遺物図

貯蔵穴８（第13図）

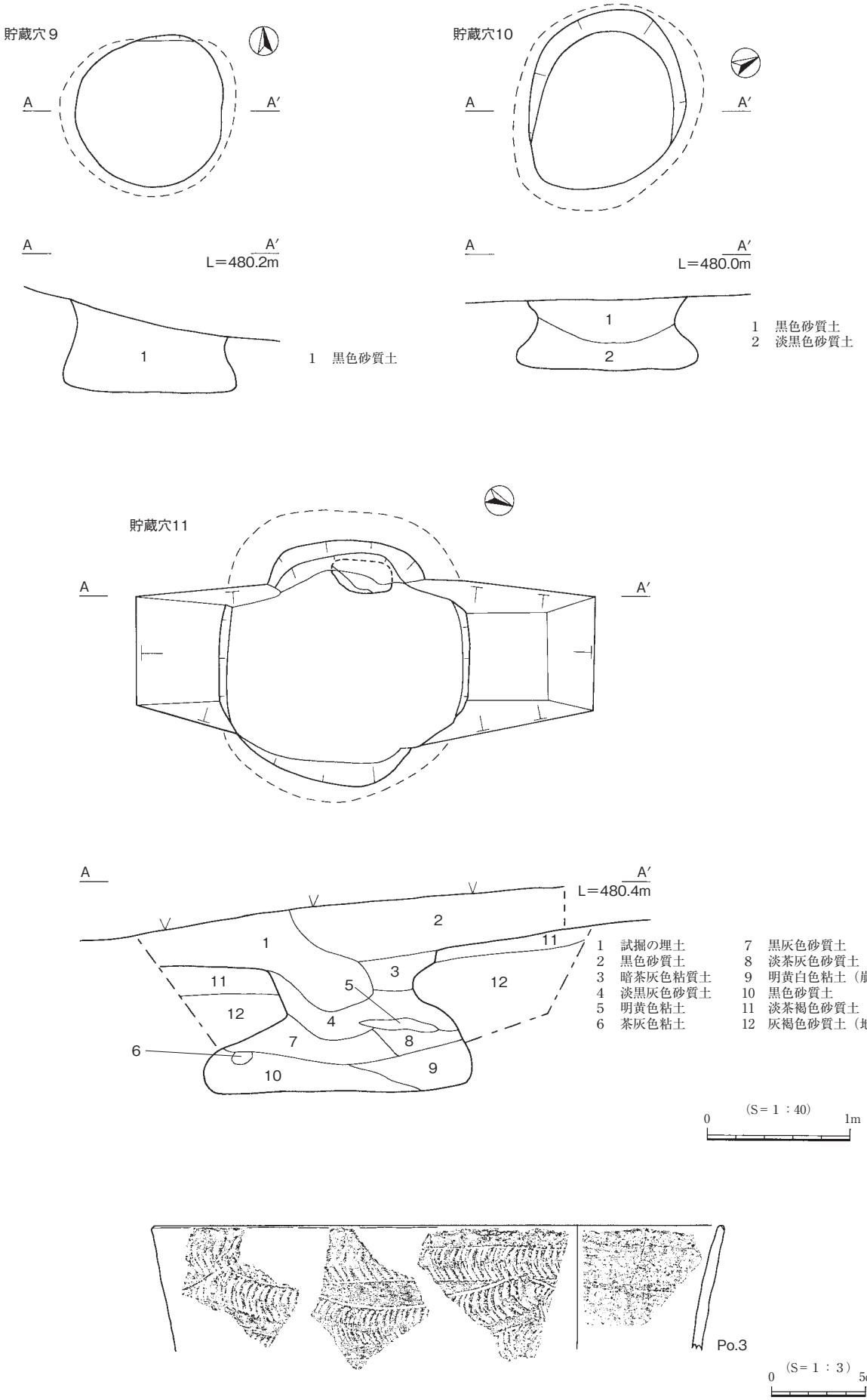
K−６区の第２遺構面、標高480.5mで検出した土坑である。検出面の直径80cm、底面の直径1.2mで、深さは50cmである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴９（第14図）

J・K−７区の第２遺構面、標高480m付近で検出した土坑である。検出面の直径１m、底面の直径1.2mで、深さは50cmほどが残存している。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第13図　貯蔵穴４～８　遺構・遺物図



第14図　貯蔵穴９～11　遺構・遺物図

貯蔵穴10（第14図）

J−７区の第２遺構面、標高479.7mで検出した土坑である。検出面の直径1.2m、底面の直径1.3m、深さ50cmである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴11（第14図）

J−６区の第２遺構面、標高480m付近で検出した土坑である。調査前の試掘では古墳の周溝とされていたが、底面の落ち込みがさらに下層へ広がることから断割りを行い、フラスコ形の土坑であることを確認した。

検出面の直径は１m、底面の直径が1.9m、深さ90cmの大型土坑で、西側の底面には長さ40cm、幅30cm、厚さ15cmの石が傾いた状態で置かれていた。石の表面はやや平滑であったが、明瞭な擦痕が認められないことから、磨石などに使用されたものではないと見られる。また、埋土中から磯ノ森式土器と見られる器壁の薄いC字形の爪形文土器の破片（Po.3）が出土したことから、この遺構が埋没した年代は、縄文時代前期末以降と推測される。

貯蔵穴12（第15図）

J−６区の第２遺構面、標高479.5m付近で検出した土坑である。検出面の直径1.6m、底面の直径1.9m、深さ60cmである。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴13（第15図）

J−８区の第２遺構面、標高479.5m付近の北向きの緩斜面で検出した土坑である。直径1.2m、深さ30cmで、土坑の内部には淡黒色の砂質土が堆積していたが、出土遺物は見られなかった。

貯蔵穴14（第15図）

貯蔵穴13から東側へ1.2m離れた地点で検出した、直径１m程度の円形土坑である。深さは40cmで、遺物は出土しなかった。

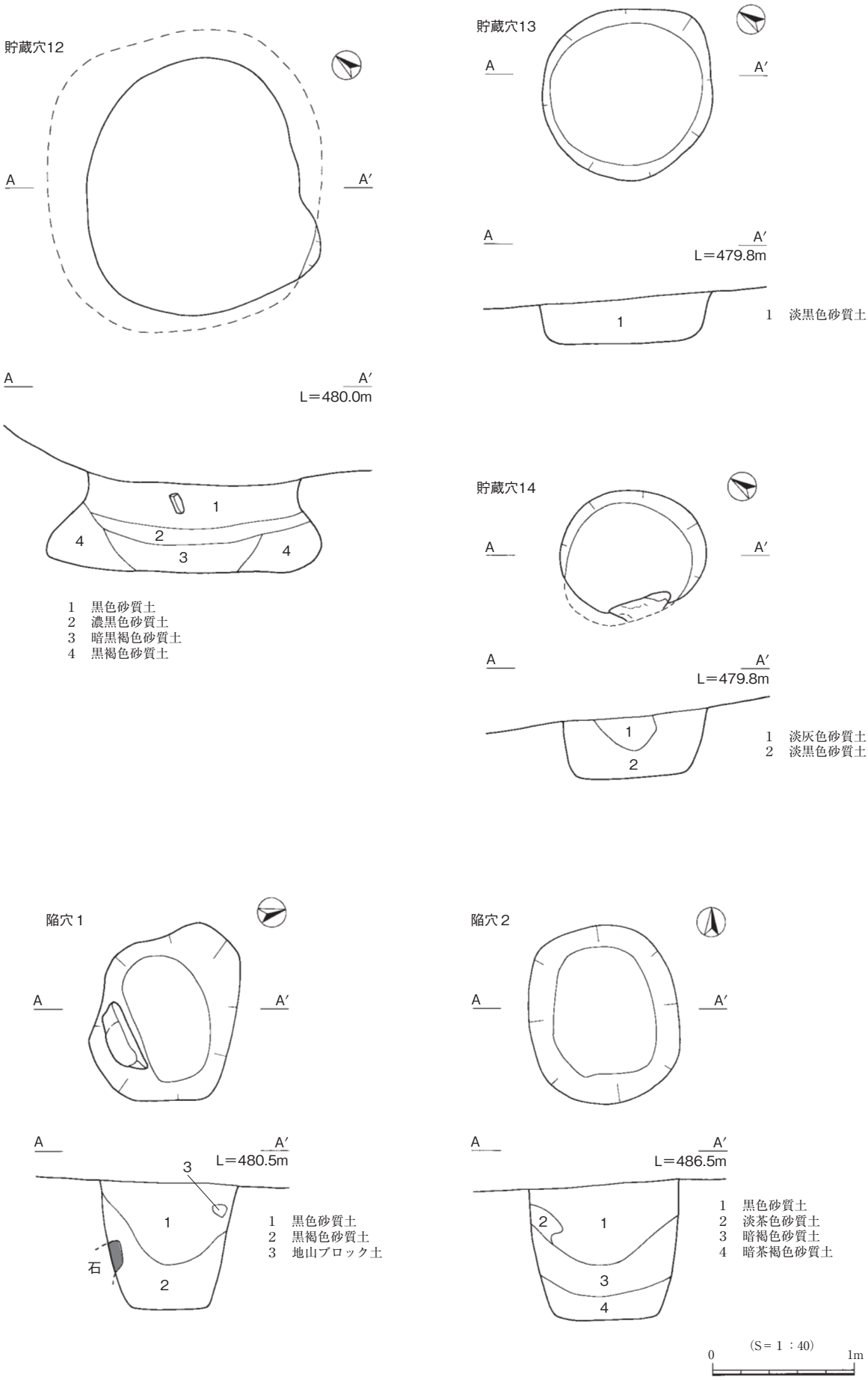
陥穴１（第15図）

J−６区の第２遺構面、標高480.3mで検出した土坑である。長さ1.2m、幅1.1m、深さ90cmの楕円形で、底面にはピットは見られなかった。

この遺構の周囲には配石遺構や貯蔵穴が分布しているが、掘形が直線的であることから陥穴と推測した。

陥穴２（第15図）

J−19区の第２遺構面、標高486.3mで検出した土坑である。平面は楕円形を呈し、長さ1.26m、幅1.05m、深さ96cmを測る。底面にピットは見られないが、陥穴と推測した。



第15図　貯蔵穴12～14、陥穴１・２　遺構図

出土遺物（第16～28図）

縄文土器

１．早期

神宮寺式（第16図Po. 4）　いわゆるネガティブの押型文で、 紡錘形の沈文が斜行して施文されている。器壁は薄く、比較的丁寧な調整が施されている。

黄島式（第16図Po. 5～第18図Po. 64）　口縁部内面に柵状文が施されるものを基準として、それに類似する土器も含めた。直口器形（Po. 7）などのほか、口縁部が外反するもの（Po. 32など）がある。

Po. 5～Po. 15は山形押型文で、 山形文の波長は１㎝前後と短い。 Po. 5～Po. 7は口縁内面に柵状文、その直下に山形文が横位に施文されている。山形文施文後に柵状文が施文されているものが多い。

Po. 5の内面には部分的に２段に柵状文が施されている。Po. 8～Po. 11は口縁内面に山形文のみが施文されるもので、Po. 9のように口縁部のかなり下まで施文されるものがある。Po. 10の外面上部には斜位の二枚貝条痕がみられる。Po. 12は口縁内面が無文のものである。山形文の間隔が他に比べてやや広く、波高がやや低い。これらは口縁に近い部位は横位に施文されているが、下部までわかるPo. 6・Po. 7・Po. 9は口縁部が横位に、それ以下がやや斜行して施文されている。

同図Po. 13～Po. 15は間隔を空けて山形文が施文される、いわゆる帯状施文の土器である。いずれも横位に施文されている。Po. 13・Po. 14は３段以上、Po. 15は２段以上施文されていることがわかる。Po. 13の内面上部には山形文がみられ、口縁内面にも施文されたものがあることを示す。

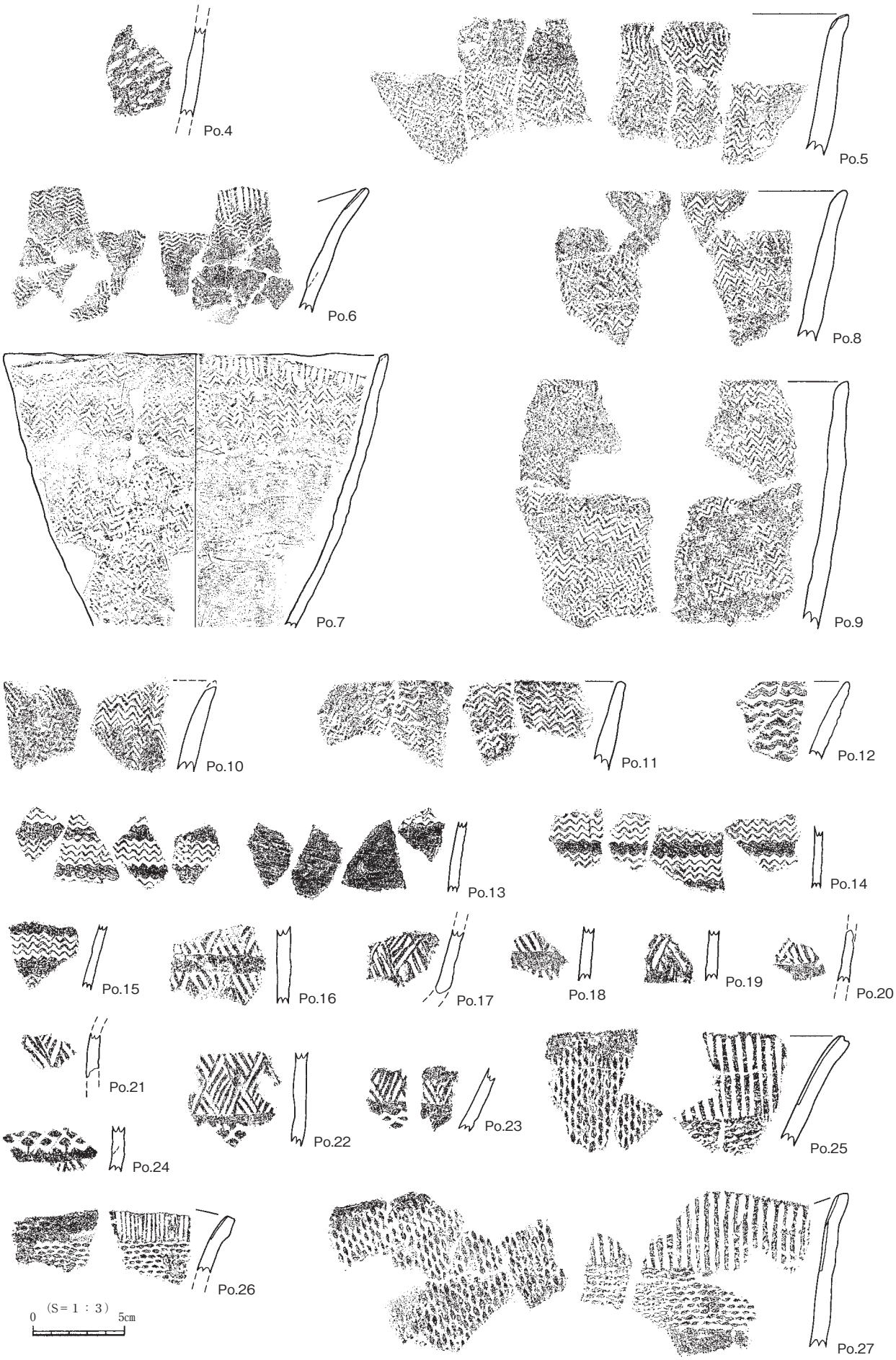
Po. 16～Po. 24は、複合鋸歯状の押型文である。Po. 22は単位文様の外形が菱形になっている。Po. 22・Po. 24は複合鋸歯文と楕円文が併用された例である。Po. 23は内面にも同様な押型文が施されていることから、口縁部に近い破片と思われる。

Po. 25～Po. 45は楕円押型文である。Po. 26は内面に１段の柵状文とその直下に楕円文が横走、外面に小型の楕円文が横走している。柵状文は長さ1. 5㎝程度と、他に比べて短い。Po. 25・Po. 27～Po. 32は内面に２段の柵状文と楕円文、外面に縦位または斜位に楕円文が施文されている。Po. 29・Po. 31は外面の楕円文は斜行気味で、 楕円文の大きさがやや大きい。Po. 30の楕円文は非常に小型で、上半が縦位、下半が斜位に施文されている。いずれも柵状文は長く、原体長がうかがえるPo. 32の下段柵状文は５㎝以上の長さである。

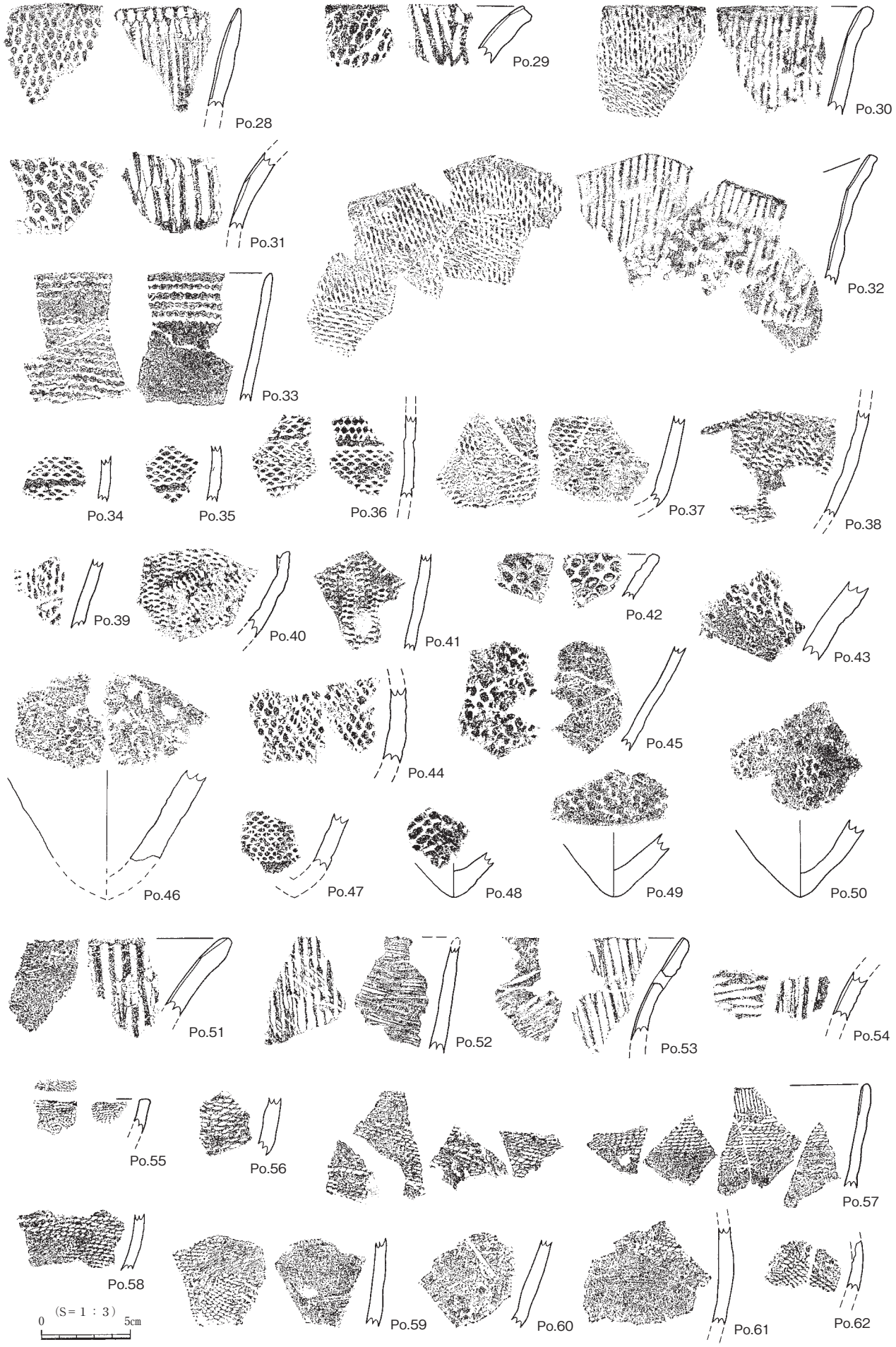
Po. 33・Po36・Po. 37・Po. 42は、内外面に楕円文が施文された土器である。Po. 33・Po. 42は口縁部で、Po. 33は内外ともに横位、Po. 42はやや大きな楕円文で外面斜位、内面横位に施文されている。Po. 36は施文境界が明瞭な土器で、外面に３回以上、内面に２回以上施文されたことがわかる。Po. 37は下端が強く湾曲した器形で、底部に近い部位と考えた。上部が斜位に、下部が横位に施文されている。内面は全面横位に施文されている。これが底部に近い部位だとすれば浅い器形に復元される。

第17図Po.　34・Po. 35、Po. 38～Po. 45は楕円文が施された胴部片である。いずれも縦位に施文されている。器壁が比較的薄く、調整がていねいなことから黄島式と判断したが、一部は高山寺式の可能性がある。Po. 34・Po. 35は施文の間隔が空き、横位に施文されている。Po. 38・Po. 40・Po. 41は非常に小型の楕円文、Po. 45はやや大きな楕円文である。

第17図Po. 46～Po. 50は底部である。Po. 48～Po. 50は明らかな尖底である。Po. 46・Po. 47は底部付


Po.4
Po.5
Po.6
Po.8
Po.7
Po.9
Po.10
Po.11
Po.12
Po.13
Po.14
Po.15
Po.16
Po.17
Po.18
Po.19
Po.20
Po.21
Po.22
Po.23
Po.25
Po.24
Po.26
Po.27
0
(S＝1：3)
5cm

第16図　縄文土器図①


Po.28
Po.29
Po.30
Po.31
Po.32
Po.33
Po.34
Po.35
Po.36
Po.37
Po.38
Po.39
Po.40
Po.41
Po.42
Po.43
Po.44
Po.45
Po.46
Po.47
Po.48
Po.49
Po.50
Po.51
Po.52
Po.53
Po.54
Po.55
Po.56
Po.57
Po.58
Po.59
Po.60
Po.61
Po.62
0
(S＝1：3)
5cm

第17図　縄文土器図②

近の破片で、これも尖底と考えた。いずれも楕円文が施され、Po. 46～Po. 48が横位施文、Po. 49・Po. 50が縦位施文である。

第17図Po. 51～Po. 54は外面に押型文が施されないが、 柵状文が施されることから黄島式と考えた。外面はPo. 51が無文、Po. 53は二枚貝条痕である。Po. 52は外面に横位施文の柵状文が、内面に二枚貝条痕がみられる。Po. 54は外面に縦位施文の柵状文、内面に横位施文の柵状文が施されている。

撚糸文土器（第17図Po. 55～第18図Po. 64） 口縁内面に柵状文や撚糸文が施されること、器壁や器面の状態が黄島式の押型文と同等であることなどから、黄島式に属すると考えた。

Po. 55・Po. 57は口縁部で、Po. 55は内面と口唇にも撚糸文が、Po. 57の内面には柵状文と撚糸文が施されている。外面の撚糸文は横位・斜位に施文されるものが多い。内面はナデ調整が多いが、Po. 59には二枚貝条痕がみられる。

高山寺式（第18図Po. 65～第19図Po. 89） 口縁内面に斜行沈線文が施される土器をまとめた。直口器形（Po. 68）のほか、口縁部が大きく外反し胴部が強く張る器形（Po. 67）がある。口径が復元できたPo. 68は、口径38. 4cmを測る。黄島式に比べて器壁の厚さ１cm超と、かなり厚い。内面の調整は粗いものが多く、器面の凹凸が著しい。

Po. 65～Po. 81は楕円押型文である。Po. 65～Po. 67、Po. 69の内面には斜行沈線文が施されているが、Po. 68は内面無文である。Po. 66の斜行沈線文は上部に1. 7cm程度、その下に５cm程度の２段に引かれている。Po. 67は断面形が波トタン状の斜行沈線文である。

Po. 70～Po. 79は楕円押型文の胴部片である。器壁の厚さ、内面調整などから高山寺式と判断した。

楕円文は、黄島式に近いやや小型のもの（Po. 70～Po. 73・Po. 75）、大型のもの（Po. 65～Po. 69、Po. 74・Po. 76～Po. 79）、粗大楕円文（Po. 80・Po. 81）がある。

Po. 65・Po. 66・Po. 73・Po. 80・Po. 81はナデ調整が加えられ、楕円文が見えにくい。とくにPo. 80は不明瞭で、無文土器の可能性もある。

Po. 82・Po. 83は外面文様を撚糸文と判断した。縦位施文である。二枚貝条痕の可能性もある。ともに内面に細い斜行沈線文が施されている。

Po. 84～Po. 89は外面に二枚貝条痕が施されている。Po. 85が縦位に施文されるほかは、横位施文である。Po. 84～Po. 88の内面に細い斜行沈線文が描かれている。Po. 85はPo. 66同様、口縁に接して短い沈線文が引かれ、その下に長い沈線文が描かれている。

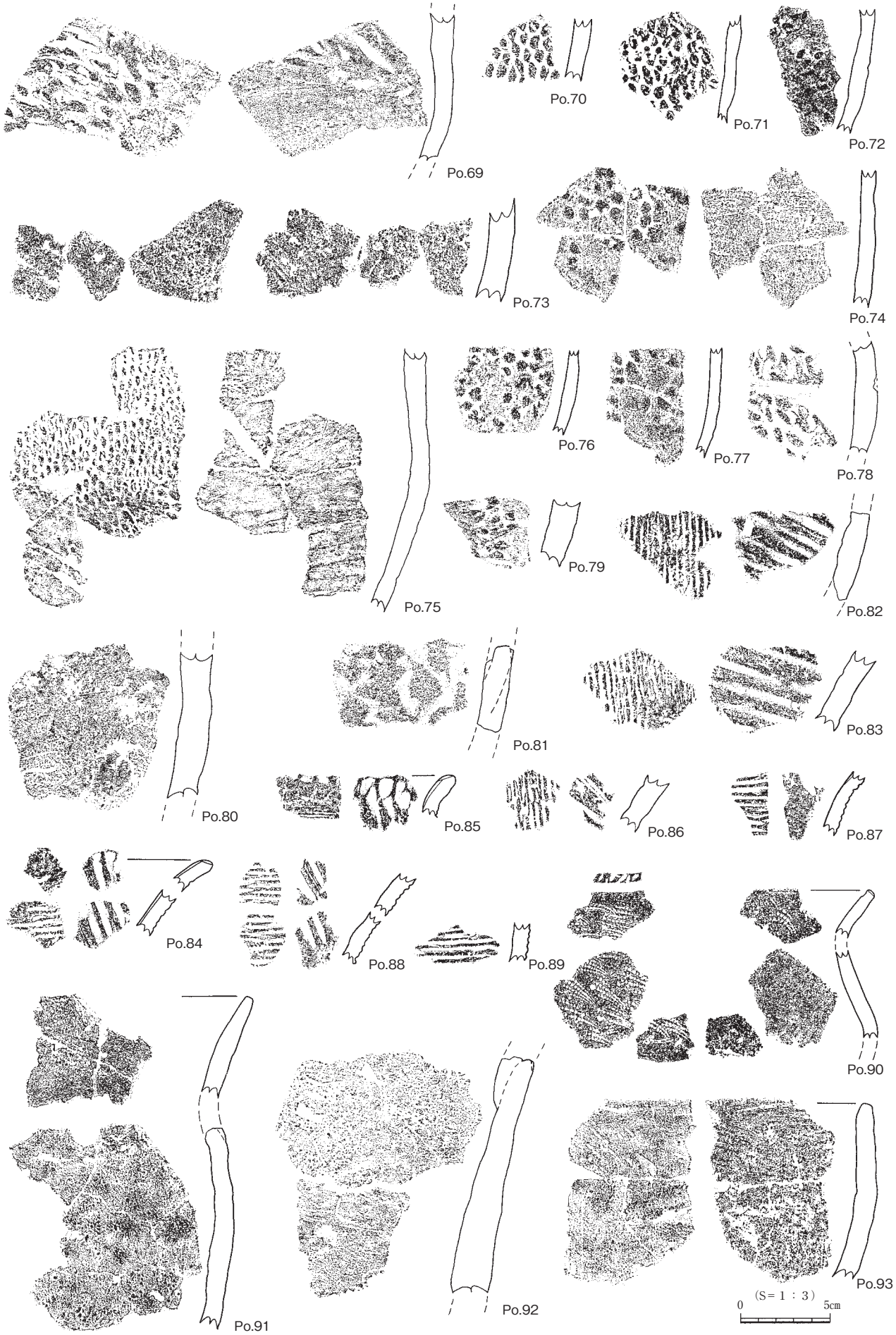
二枚貝押圧文土器（第19図Po. 90） 外面全面と口縁部内面に二枚貝背面による押圧文が施された土器である。口唇部には二枚貝腹縁による刺突文がある。破片は直接接合ができないが、口縁部が大きく外反し、胴部が強く張る器形と考えた。器壁は比較的薄く、器面は平滑に整えられている。

口縁部内面に外面と同じ文様を施文するのは黄島式に一般的であり、器面の状況などは黄島式に近いので、これは黄島式に属するかもしれない。

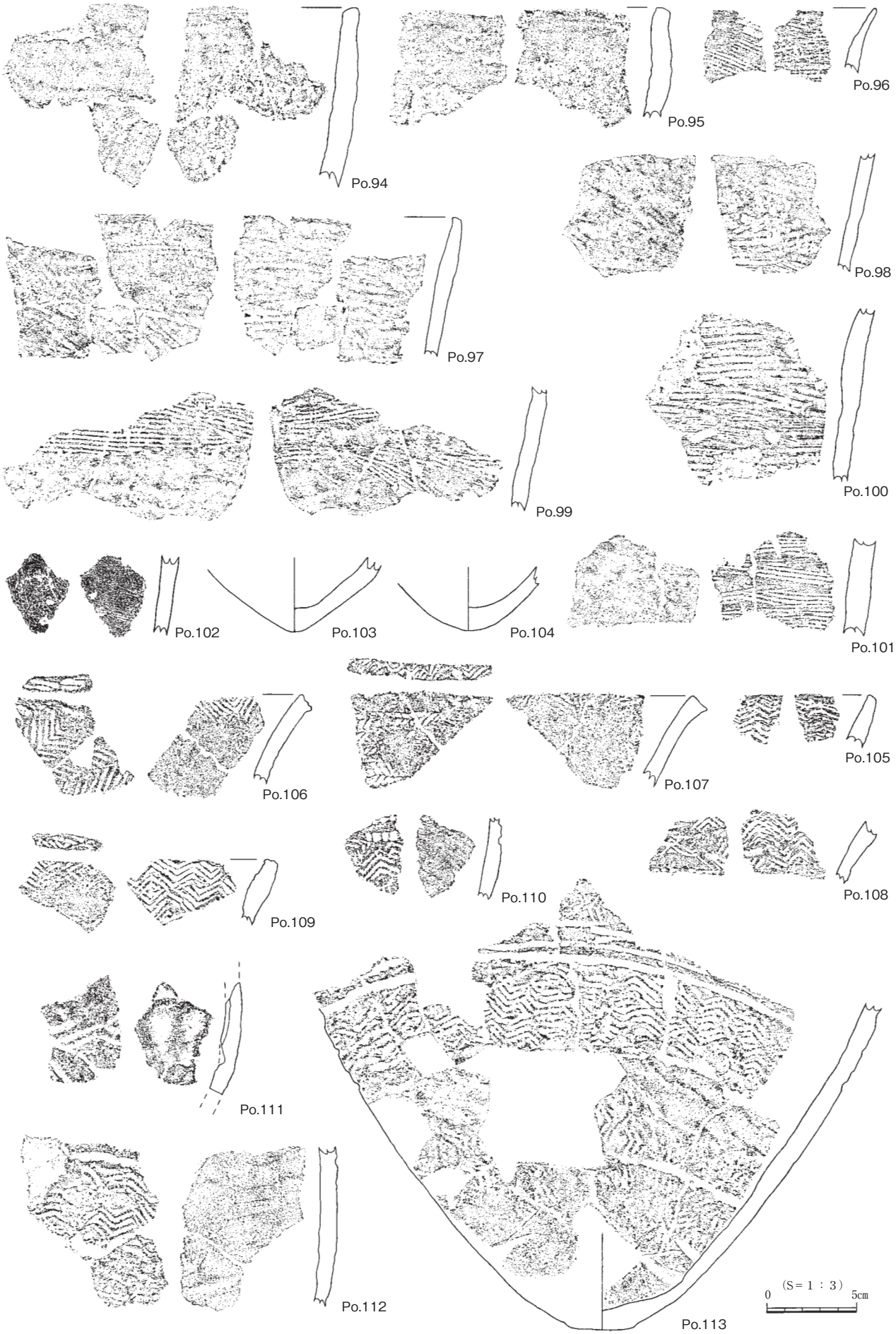
無文土器（第19図Po. 91～第20図Po. 104） 器壁が１cm超の厚く器面の凹凸が著しいものが多いが、Po. 96は厚さ0. 7cmと薄い。口縁部が外反する器形（Po. 91）、口縁部が内湾気味の器形（Po. 93・Po. 95）、直口の器形（Po. 97）がある。器面はナデ（Po. 91～Po. 95）、二枚貝条痕（Po. 96～Po. 101）によって調整されている。繊維が混入されているものがあり、Po. 99やPo. 104などは顕著である。Po. 103・Po. 104は尖底の底部で、無文土器の底部と思われる。

穂谷式（第20図Po. 105～第21図Po. 120・Po. 122） 間延びした山形押型文が施された土器である。Po.

第18図　縄文土器図③


Po.69
Po.70
Po.71
Po.72
Po.73
Po.74
Po.75
Po.76
Po.77
Po.78
Po.79
Po.80
Po.81
Po.82
Po.83
Po.84
Po.85
Po.86
Po.87
Po.88
Po.89
Po.90
Po.91
Po.92
Po.93
(S=1：3)
0
5cm

第19図　縄文土器図④


Po.94
Po.95
Po.96
Po.97
Po.98
Po.99
Po.100
Po.101
Po.102
Po.103
Po.104
Po.105
Po.106
Po.107
Po.108
Po.109
Po.110
Po.111
Po.112
Po.113
(S=1：3)
0
5cm

第20図　縄文土器図⑤

112・Po. 113のように押引文が併用されるものがある。押型文は波長が２～2.5cm程度のものが多いが、Po. 111は波長が3.7cm超と、とくに長い山形文である。繊維は基本的に混入されていないが、Po. 119は少量が観察された。これは、誤認の可能性もある。

口縁部は４点を確認している（Po. 105～Po. 107・Po. 109）。これらは口唇部、口縁内面にも山形文が施されている。このうち第20図Po. 106・Po. 107は外反する器形と思われる。Po. 108・Po. 109は横位に、Po. 105・Po. 106は斜位に施文されている。

Po. 111・Po. 112・Po. 114～Po. 120・Po. 122は、胴部片である。Po. 119は、底辺を向き合わせた山形文の間に楕円文が加えられている。Po. 111・Po. 120は横位に、Po. 115～Po. 119は縦位に施文されている。Po. 114は横位・縦位の併用である。Po. 111・Po. 114の内面は、指押圧による凹凸が顕著である。

Po. 108・Po. 110・Po. 112・Po. 113・Po. 122は、押型文と押引文・沈線文が併用された土器である。胴部の状況がよくわかるPo. 113は、押引文を挟んで上下に山形文が横位に、胴部下半には山形文が間隔を開けて縦位に施文されている。Po. 122は縦位の山形文に接して上部に横位の押引文が、下部に斜行する押引文が施されている。Po. 113は底部が小さな平底である。

押型文＋地文縄文土器（第21図Po. 121）　地文にRL縄文が施され、さらに山形押型文が施される土器である。山形文は穂谷式と同様な間延びした押型文である。繊維は混入されていない。

宮の平式類似土器（第21図Po. 123～Po. 130）　口縁部、胴部に刻目隆帯文を巡らせ、押引文・沈線文で文様が描かれる土器である。口縁が外反する器形である。

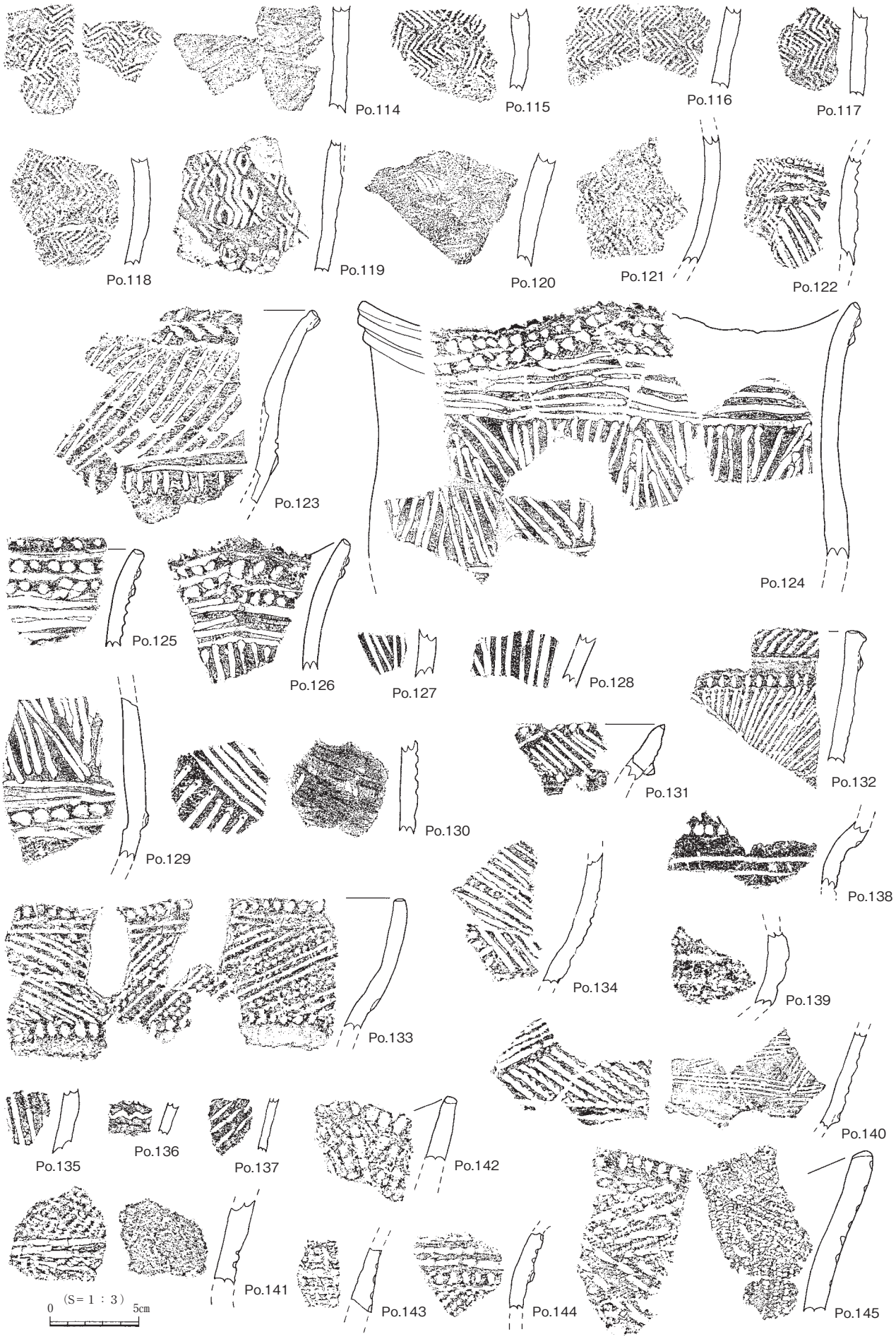
Po. 124～Po. 126は口唇からやや下がった位置に２条、Po. 129が胴部屈曲部に１条付刻目隆帯文が付されている。隆帯文下には押引文（Po. 124）や沈線文（Po. 125・Po. 126）が横走し、頸部には複合鋸歯状意匠が描かれている。沈線文の上端は末端刺突となっている。Po. 124・Po. 129は複合鋸歯状意匠の下に横位の沈線文が描かれ、Po. 129はさらに刻目隆帯文が付されている。Po. 130の内面には二枚貝条痕が観察できる。Po. 123の口唇部は肥厚し羽状の刺突文が、頸部には斜行沈線文、その下には横走沈線文・垂下短沈線文が描かれる。

妙見・天道ヶ尾式類似土器（第21図Po. 132・第22図Po. 146）　隆帯文が口唇に接して付されている。口唇と隆帯文は一体化しており、口唇・隆帯文上に羽状の刻目が施されている。その下にはPo. 132に１条、第22図Po. 146に２条の横走刻目隆帯文が付され、Po. 146はさらに胴部最大径付近から２条一単位の隆帯文が垂下している。Po. 132は細い沈線文によって複合鋸歯状意匠が描かれており、下端に横走押引文が施されている。

Po. 146は全形がかなりうかがえる土器で、寸胴に近い器形である。頸部には細い原体による波状意匠の押引文、胴部最大径付近にはやや太い原体による横走押引文、下部には複合鋸歯文状意匠を複数の沈線文で埋めている。垂下隆帯文は二条１単位で４か所に付されると思われる。下部に部分的にLR縄文が観察される。

平栫式類似土器（第21図Po. 131・Po. 133～Po. 140）　文様・器形から平栫式に類似すると考えた。いずれも繊維は含まれていない。

Po. 131、133、134、138～140は口頸部境界に段または屈曲する土器である。Po. 133・Po. 134は細沈線文で山形意匠を描き、沈線間に円形刺突文が施されている。Po. 140は下端に横走する押引文、その上に斜行押引文が施されている。鋸歯状の意匠かもしれない。内面には二枚貝条痕が観察され


Po.114
Po.115
Po.116
Po.117
Po.118
Po.119
Po.120
Po.121
Po.122
Po.123
Po.124
Po.125
Po.126
Po.127
Po.128
Po.129
Po.130
Po.131
Po.132
Po.133
Po.134
Po.135
Po.136
Po.137
Po.138
Po.139
Po.140
Po.141
Po.142
Po.143
Po.144
Po.145
0
(S=1：3)
5cm

第21図　縄文土器図⑥

る。Po. 138は屈曲部に刺突文、頸部に横走する沈線文が、Po. 139は横走押引文が描かれている。Po. 138・Po. 139は内湾する口縁部や口頸部境界に段がつくことから平栫式類似としたが、代表的な平栫式にはこのような文様が見当たらないため、別型式の可能性もある。

Po. 136は波状文、Po. 137は短沈線文が斜行している。ともに平栫式に存在する文様だが、小片のため断定しづらい。

地文縄文＋押引文土器（第21図Po. 141～Po. 145）　いずれも器壁が厚く、繊維を多量に含んでいるものが多い。Po. 142・Po. 145は口縁部で、内湾気味に外傾する口縁部、Po. 144・Po. 145は頸部がわずかにくびれる器形である。口唇部には大きな刻目が施され、外面には押引文で複合鋸歯意匠が描かれている。押引文の間隔はやや広く、施文に粗雑感がある。地文はPo. 143がRL縄文、Po. 145がLR縄文で、Po. 145の内面にもRL縄文が施されている。Po. 141・Po. 144は横走する押引文が描かれている。Po. 144にはさらに刻目隆帯文が加えられている。地文はLR縄文で、Po. 141は施文方向を変えて羽状縄文に見せている。

地文縄文＋沈線文土器（第23図Po. 147・Po. 148・Po. 151～Po. 153・Po. 156）　いずれも器壁が厚く、繊維を多量に含んでいるものが多い。文様は、縄文地文に細い沈線文が引かれている。Po. 153・Po. 156は、頸部がわずかにくびれる器形である。沈線文はPo. 147が斜行、Po. 156が縦走するほかは横走する沈線文である。地文はPo. 153がLR縄文、Po. 156はLR・RL併用の羽状縄文、Po. 152が不明であるほかはRL縄文である。

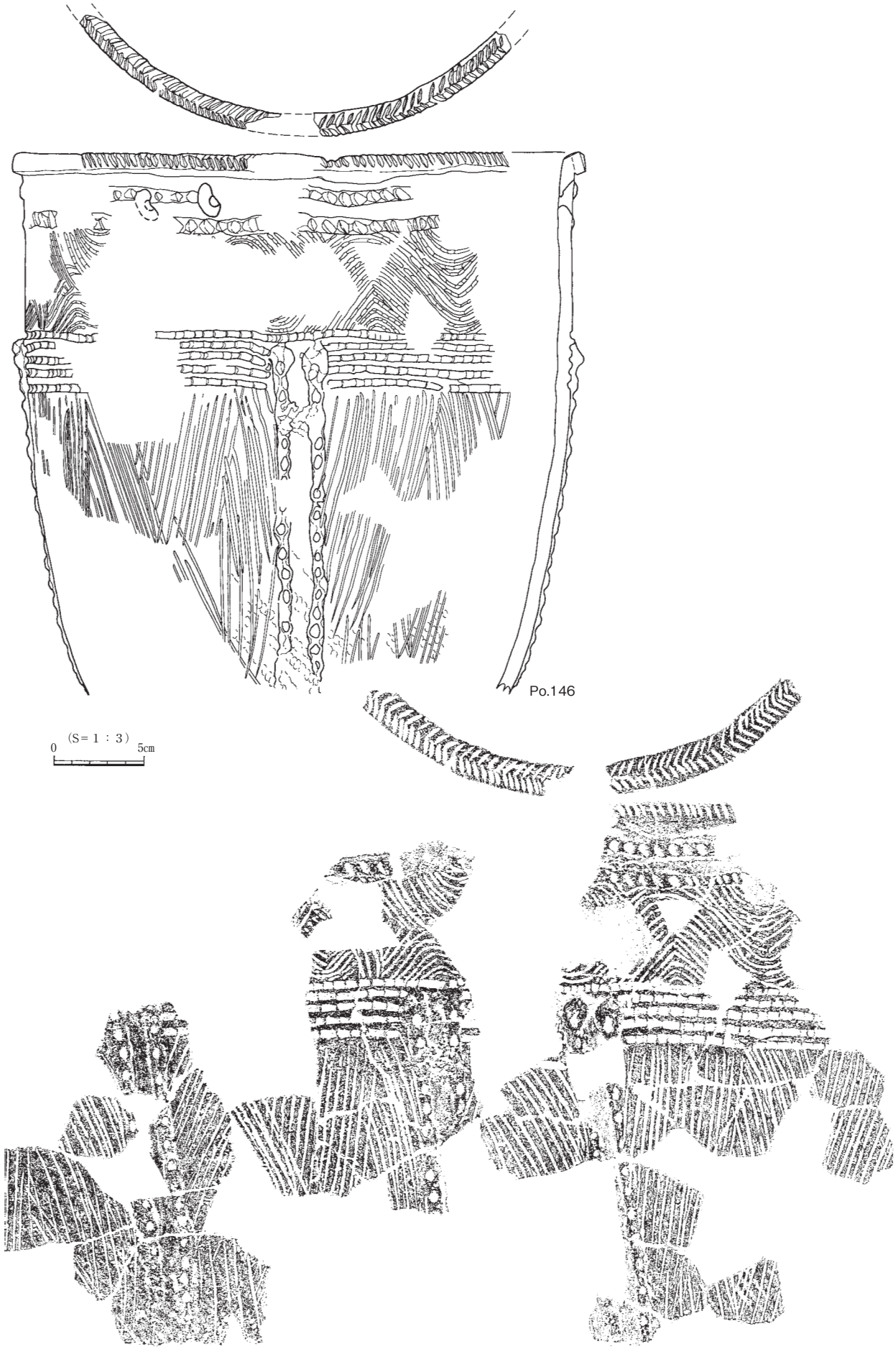
地文縄文＋隆帯文土器（第23図Po. 149・Po. 150・Po. 154・Po. 155）　繊維を含む厚手の土器である。地文に縄文が施され、横走する隆帯文が付されている。Po. 154は隆帯文の剥脱痕がみられる。Po. 153は口縁部下端が段状に作られ、Po. 140などに似た器形である。隆帯文ではないが、この類に含めた。地文はいずれもLR縄文である。

縄文施文土器（第23図Po. 157～第24図Po. 186）　繊維を含む厚手の縄文施文土器である。一般的には菱根式と呼ばれる土器だが、押引文土器・沈線文土器・隆帯文土器の無文部分の可能性があることから、菱根式と断定することを避けた。器壁は厚さ１㎝を超えるものと、１㎝未満のやや薄いものがある。小片のため全形がうかがえるものはないが、平板な破片が多いことから寸胴の器形が多いと思われる。

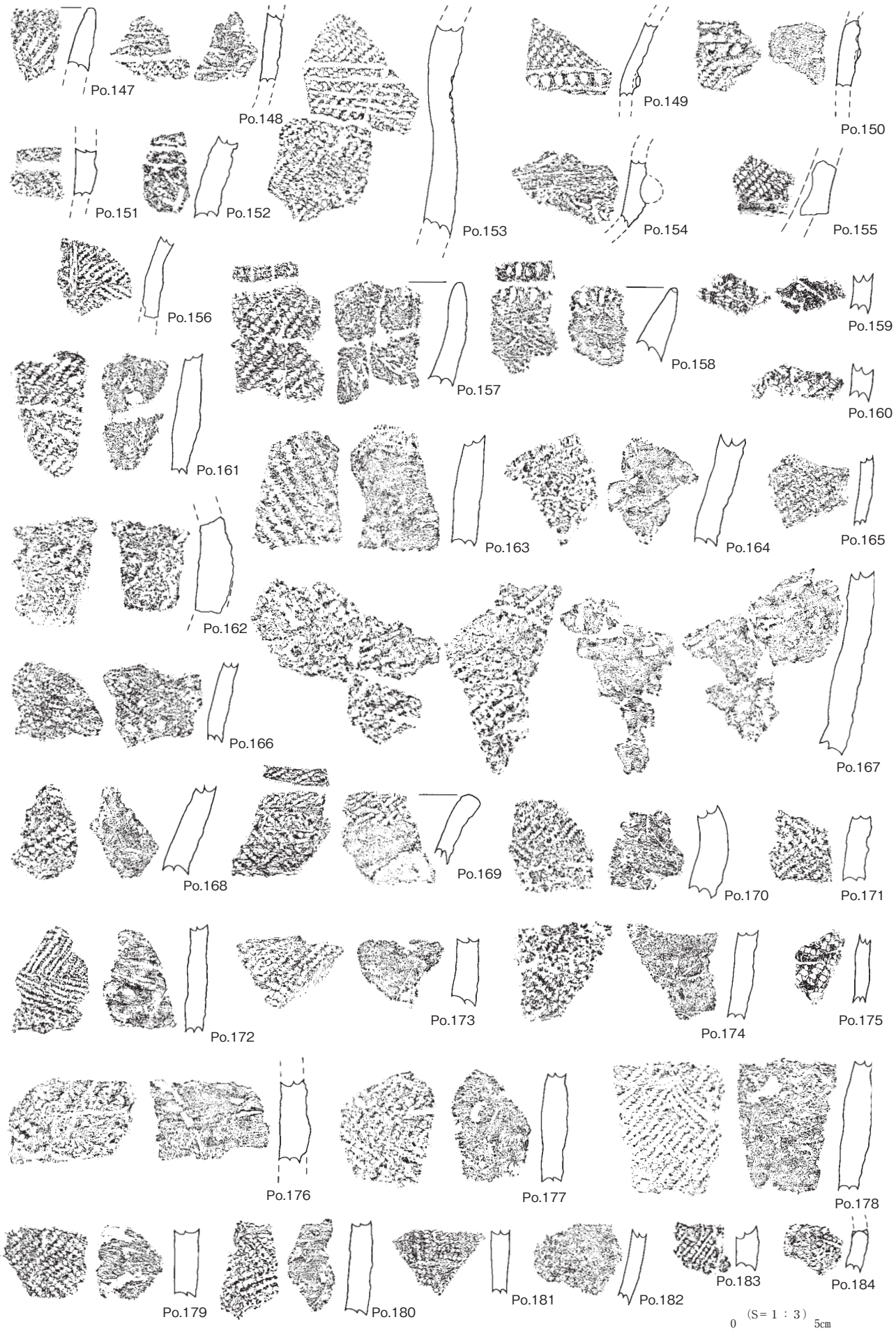
Po. 157・Po. 162・Po. 170は内湾する器形である。とくにPo. 170は湾曲が著しい。内面は凹凸の著しいものが多く、雑な仕上げのものが多い。Po. 185・Po. 186は底部である。ともに平底で、胎土に繊維を含んでいる。菱根式の底部と思われる。Po. 186は無文だが、Po. 185の外面にはLR縄文が施されている。

縄文はRL、LRともにあり、RLを７点、LRを11点図示した。外面のみに施文されるものが多いが、Po. 166は口縁内面、Po. 169は口唇部・口縁内面にも縄文が施されている。Po. 169～Po. 172・Po. 174・Po. 175・Po. 179・Po. 180はLR・RL併用の羽状縄文、Po. 173・Po. 177・Po. 178・Po. 181・Po. 182は施文方向を変えて羽状縄文に見せている。

Po. 163・Po. 167・Po. 176は傾斜が弱く長方形に近い節の縄文、Po. 183・Po. 184は細い条と太い条が交互にみられる、特殊な縄文である。前者は前々段多条、後者は縄巻縄文の可能性がある。



第22図　縄文土器図⑦


Po.147
Po.148
Po.149
Po.150
Po.151
Po.152
Po.153
Po.154
Po.155
Po.156
Po.157
Po.158
Po.159
Po.160
Po.161
Po.162
Po.163
Po.164
Po.165
Po.166
Po.167
Po.168
Po.169
Po.170
Po.171
Po.172
Po.173
Po.174
Po.175
Po.176
Po.177
Po.178
Po.179
Po.180
Po.181
Po.182
Po.183
Po.184
(S=1：3)
0
5cm

第23図　縄文土器図⑧

２．前期

長山馬籠式（第24図Po. 187～Po. 191）　Po. 187は典型的な長山馬籠式で、口縁部に沿って隆帯文が付されている。地文は二枚貝条痕で、隆帯上とそのやや下に二枚貝を加工したと思われる原体によって刺突文が横走している。 Po. 188は口唇部のやや下に貼り付けられた隆帯文が下方から押し付けられ、口唇・隆帯が同時に刺突されている。Po. 189・Po. 191は胴部片で、Po. 187と同様な文様が施されていることからこの類とした。Po. 189は刺突文が上位に二枚貝腹縁による刺突文、下位に非常に小さな爪形文が、Po. 191はPo. 187と同様な原体による刺突文が横走している。

Po. 190もPo. 187などと同様な刺突文が施されるためこの類としたが、口縁部が内湾する器形である。長山馬籠式に含めないほうが良いかもしれない。拓影右下にはこぶ状の突起が付されている。

羽島下層Ⅰ式（第24図Po. 192～Po. 195）　口縁部に隆帯文を貼り付け、隆帯文の上下に刺突文が加えられる土器である。隆帯文の下にはさらに刺突文列が１段みられる。刺突文は半截竹管状工具によるD字爪形文である。Po. 192・Po. 194・Po. 195の口唇部には、刻目文が施されている。いずれも二枚貝条痕を地文としている。

西川津式（第24図Po. 196～第25図Po. 240）　Po. 196～Po. 233は折り返し口縁と刺突文・押引文が特徴の西川津A式、Po. 237～Po. 240は細隆線文が特徴の西川津B式である。Po. 234～Po. 236はそれらに伴う短頸で胴部が球形に張る壺形の土器である。いずれも地文は二枚貝条痕が目立ち、内面上半には指による押圧痕が顕著なもの（Po. 222・Po. 230など）がある。

Po. 196～Po. 203は、折り返し口縁とその下に二枚貝腹縁による刺突文が施されている。Po. 200は折り返し口縁が幅広である。

Po. 205～Po. 210・Po. 212・Po. 213は棒状工具による刺突文・押引文が施された土器である。Po. 212は方形に近い刺突文で、側辺がわずかに湾曲しているので半截竹管をさらに分割した工具かもしれない。基本的に横走意匠が施され、押引文は上部に限定されている。Po. 209はその下に重弧状の意匠が付加されている。器形は寸胴器形が多いと思われるが、Po. 212は頸部がややくびれ、屈曲器形に近くなっている。

Po. 211・Po. 216は斜行あるいは鋸歯状の意匠を描く、直口器形の土器である。Po. 211は折り返し口縁上に斜行、その下に２段の横走押引文が施されている。Po. 216は幅広の折り返し口縁上に、左側が横走、右側に斜行する刺突文が施されている。斜行する刺突文は、「V」字意匠を部分的に配置する単位文かもしれない。

Po. 214～Po. 221は押引文・刺突文で複合鋸歯意匠を描く、屈曲器形の土器である。Po. 214・Po. 215・Po. 221は折り返し口縁上にも押引き文・刺突文が施される。Po. 217・Po. 218・Po. 219の折り返し口縁上は無文である。

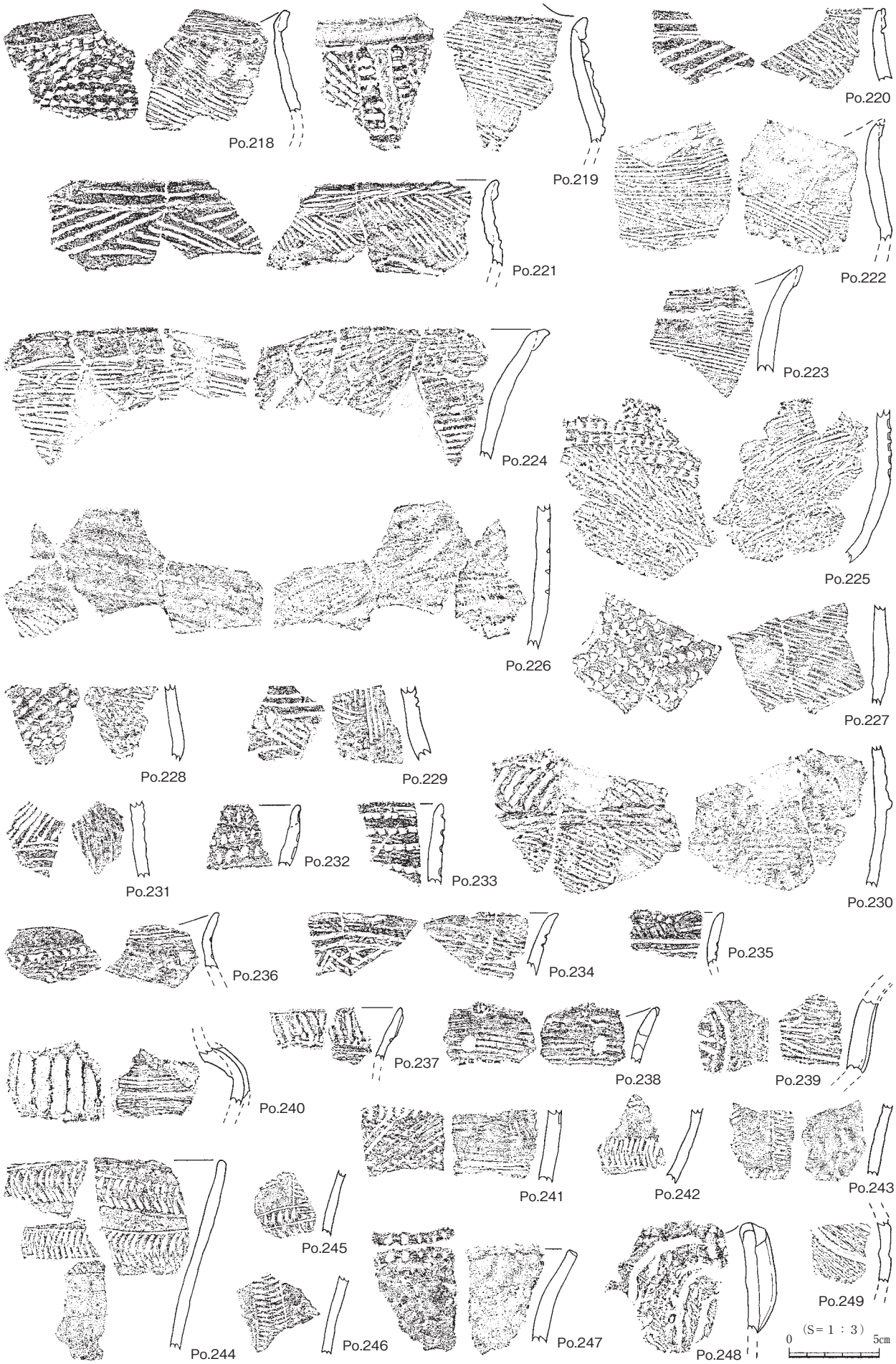
Po. 223～Po. 224は押引文・刺突文が施されない、地文が二枚貝条痕文の土器である。いずれも屈曲器形である。これらは折り返し口縁上にも二枚貝条痕文がみられる。

Po. 225～Po. 231は押引文・刺突文が施される屈曲器形の頸・胴部片である。Po. 225は胴部が強く内湾している。Po. 230は胴部最大径の位置に段を有し、その上部を文様帯としている。Po. 231は沈線文によって複合鋸歯意匠が描かれている。

Po. 232・Po. 233は単純口縁の土器である。押引文・刺突文の様子から西川津式と判断した。Po. 232はやや内湾外傾、Po. 233は直口する器形に思われた。ともに横走する意匠である。

Po.185
Po.186
Po.187
Po.188
Po.189
Po.190
Po.191
Po.192
Po.193
Po.194
Po.195
Po.196
Po.197
Po.198
Po.199
Po.200
Po.201
Po.202
Po.203
Po.204
Po.205
Po.206
Po.207
Po.208
Po.209
Po.210
Po.211
Po.212
Po.213
Po.214
Po.215
Po.216
Po.217
(S=1：3)
0
5cm

第24図　縄文土器図⑨


Po.218
Po.219
Po.220
Po.221
Po.222
Po.223
Po.224
Po.225
Po.226
Po.227
Po.228
Po.229
Po.230
Po.231
Po.232
Po.233
Po.234
Po.235
Po.236
Po.237
Po.238
Po.239
Po.240
Po.241
Po.242
Po.243
Po.244
Po.245
Po.246
Po.247
Po.248
Po.249
(S＝1：3)
0
5cm

第25図　縄文土器図⑩

Po. 234～Po. 236は外反する口縁部で、刺突文・沈線文で意匠が描かれている。短頸で壺形を呈する器形を想定した。

Po. 237～Po. 240は、西川津B式である。Po. 237は口縁部に、Po. 240は胴部に多条の垂下隆帯文が張り付けられている。Po. 239は弧状の隆帯の左に押引文がみられる。Po. 238は隆帯文がみられないが、洗面器形の器形を想定した。口縁部に小突起が付されている。

羽島下層３式・磯ノ森式（第25図Po. 241～Po. 246） Po. 241は半截竹管状工具によるD字爪形文列が施文され、内外に二枚貝条痕が施されている。羽島下層３式古に相当する。

Po. 242～Po. 246はC字爪形文がロッキング手法により施文される土器である。Po. 243～Po. 246は爪形文端部に沈線文が加えられている。Po. 244は２段の爪形文列が横走している。Po. 243・Po. 245は横走・垂下爪形文を併用、Po. 246は垂下爪形文がみられる。これらは内外面に丁寧なナデ調整が施されている。Po. 242～Po. 246は縄文が施されていないが、垂下する爪形文列などは磯ノ森式とすべきかもしれない。

無文土器（第25図Po. 247） 内外面ナデ調整の無文土器である。口唇部に刻目文がみられる。前期の土器と思われるが、どの型式に属するのか、判断できない。

３．中期末（第25図Po. 248・249）

Po. 248は口縁部に楕円形の太い隆帯文が付され、その中に沈線文がみられる。また、口縁部から隆帯文にかけて弧状に垂下する沈線文がある。やや内湾する口縁部である。北白川C式に類似すると思われる。

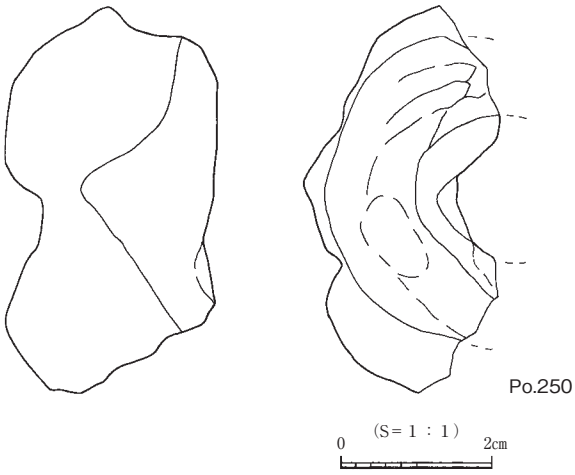
Po. 249は沈線文で弧状の意匠を描く土器で、器面は巻貝条痕がみられる。北白川C式に類似すると考えたが、後期・中津式の可能性もある。

４．不明土製品（第26図Po. 250）

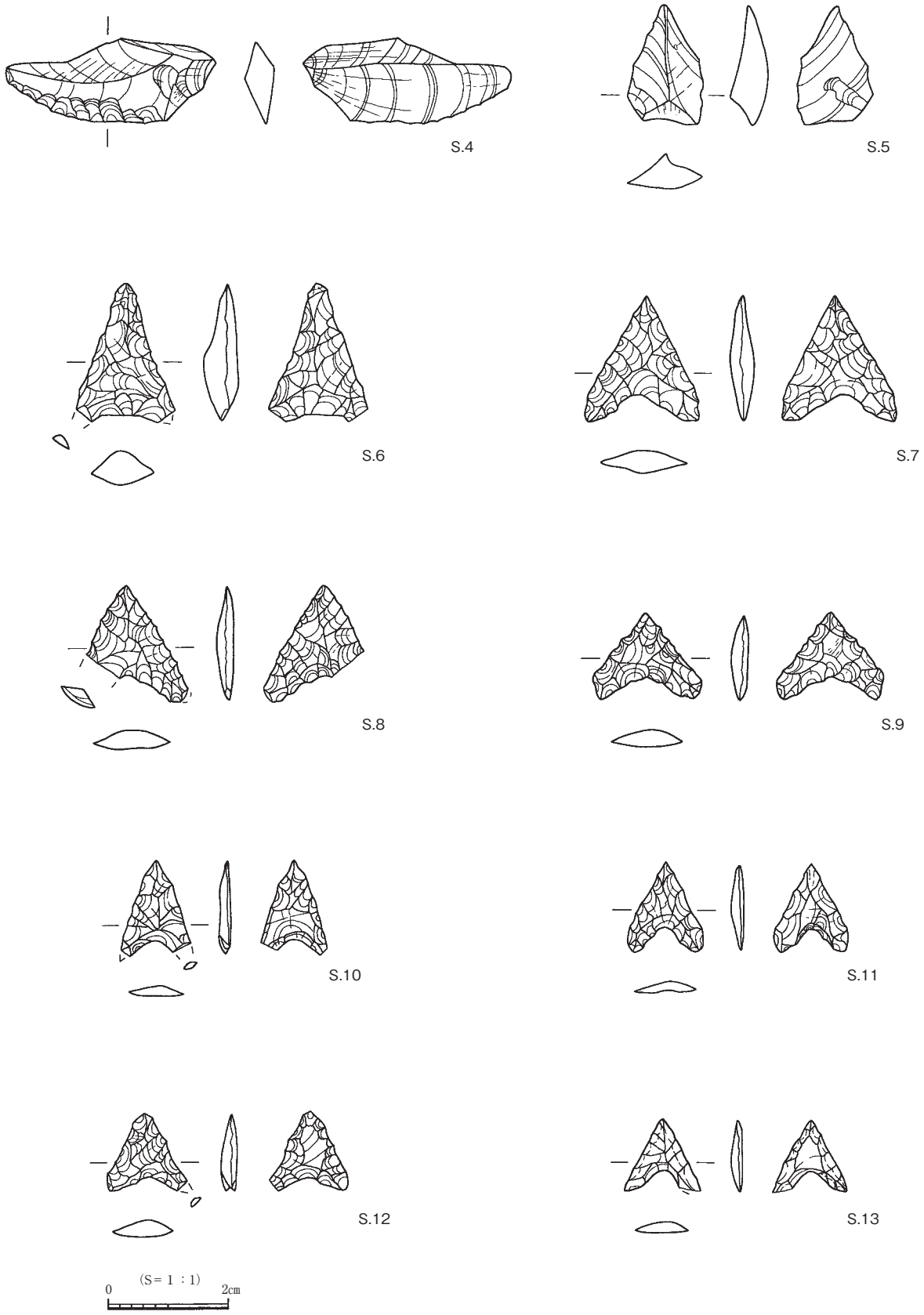
Po. 250は、縄文土器装飾の破片か、土製品の破片と見られる土器片である。胎土は淡褐色を呈し、石英粒を多く含んでいる。

５．石器（第27図S. 4～第28図S. 21）

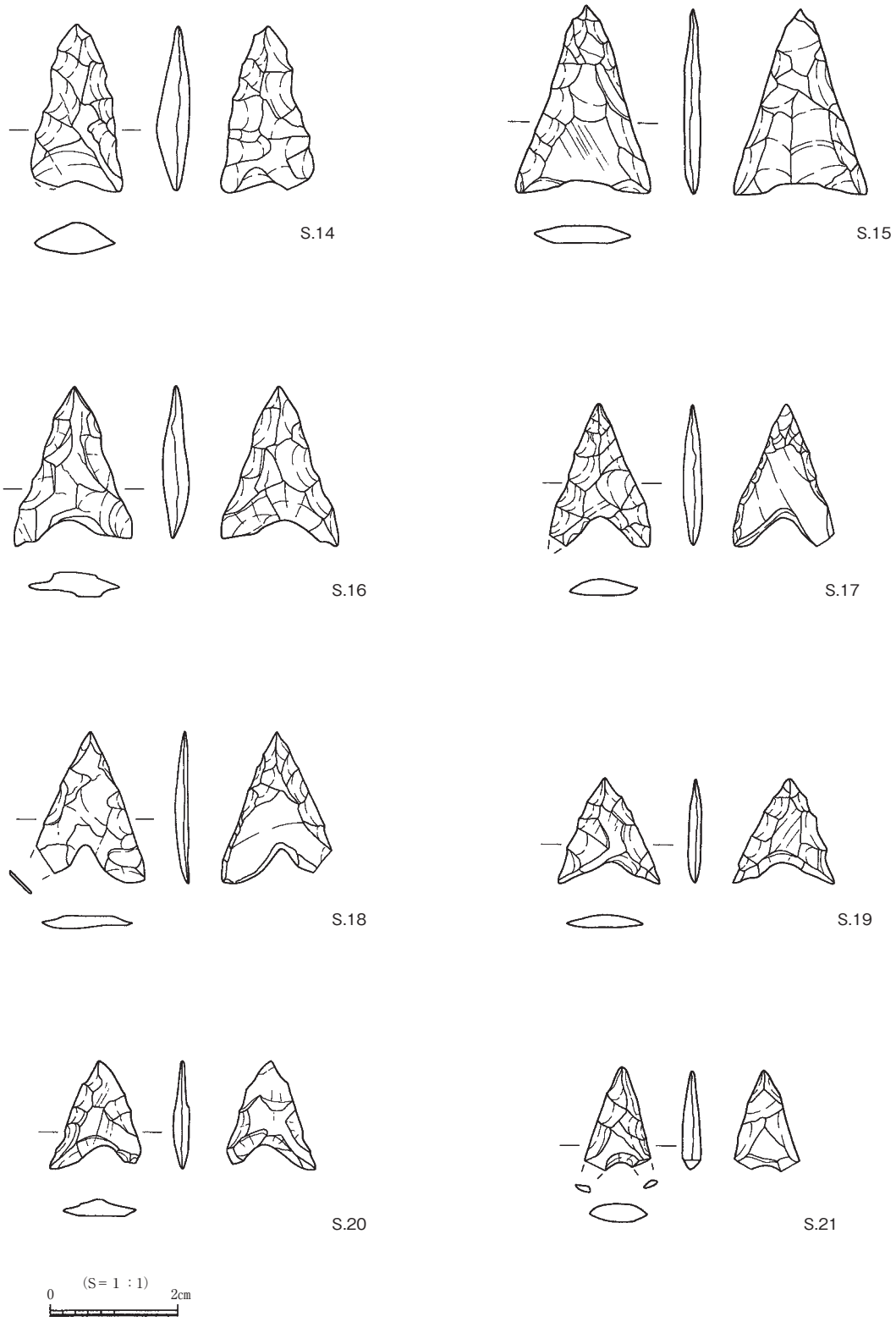
第27図S. 4は、黒曜石製のスクレイパー。S. 5は黒曜石の剥片。S. 6～S. 12は、黒曜石製の打製石鏃。第27図S. 13は、頁岩製の打製石鏃。第28図S. 14～S. 21は、サヌカイト製の打製石鏃である。



第26図　土製品

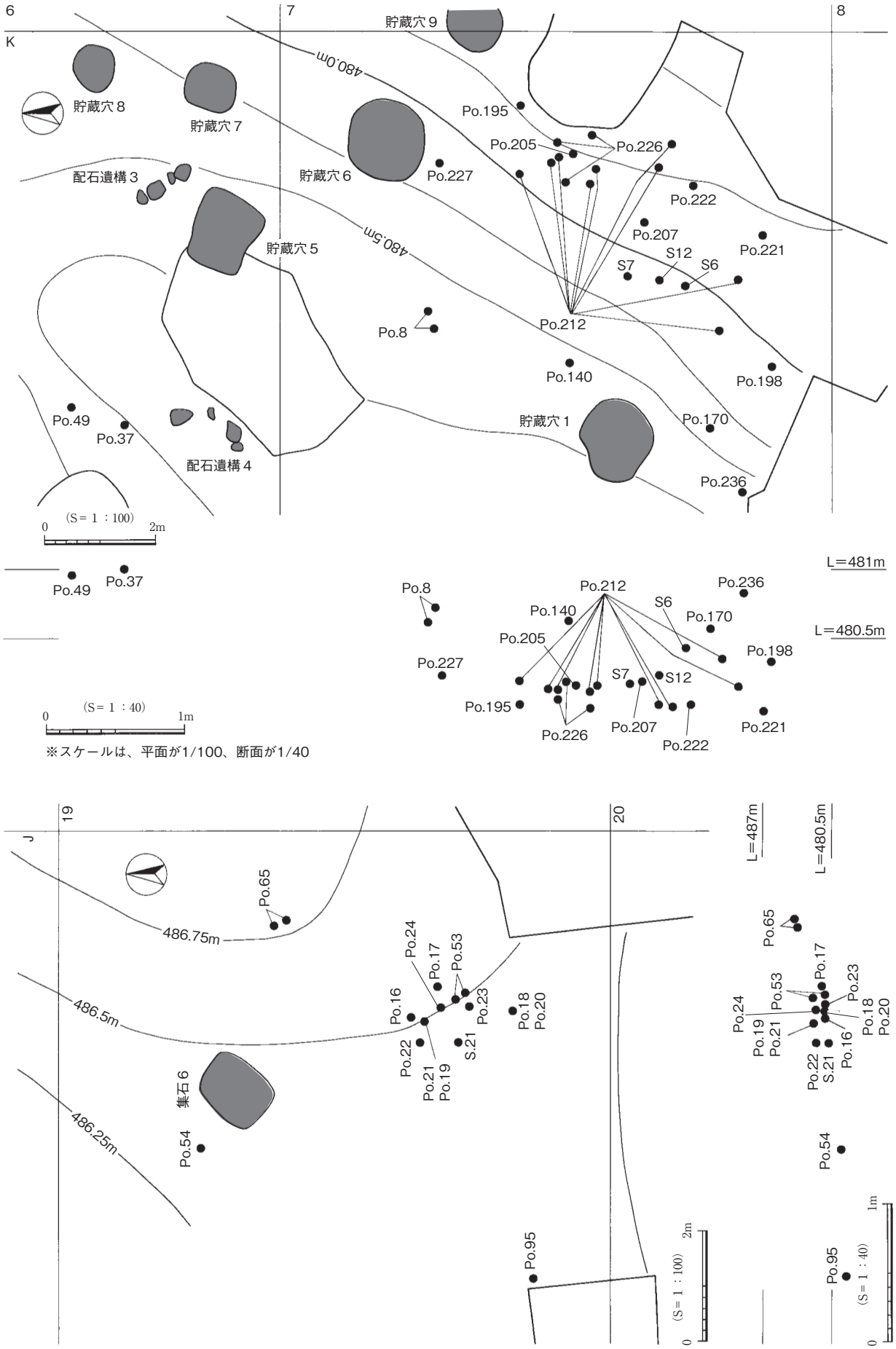


第27図　石器図①

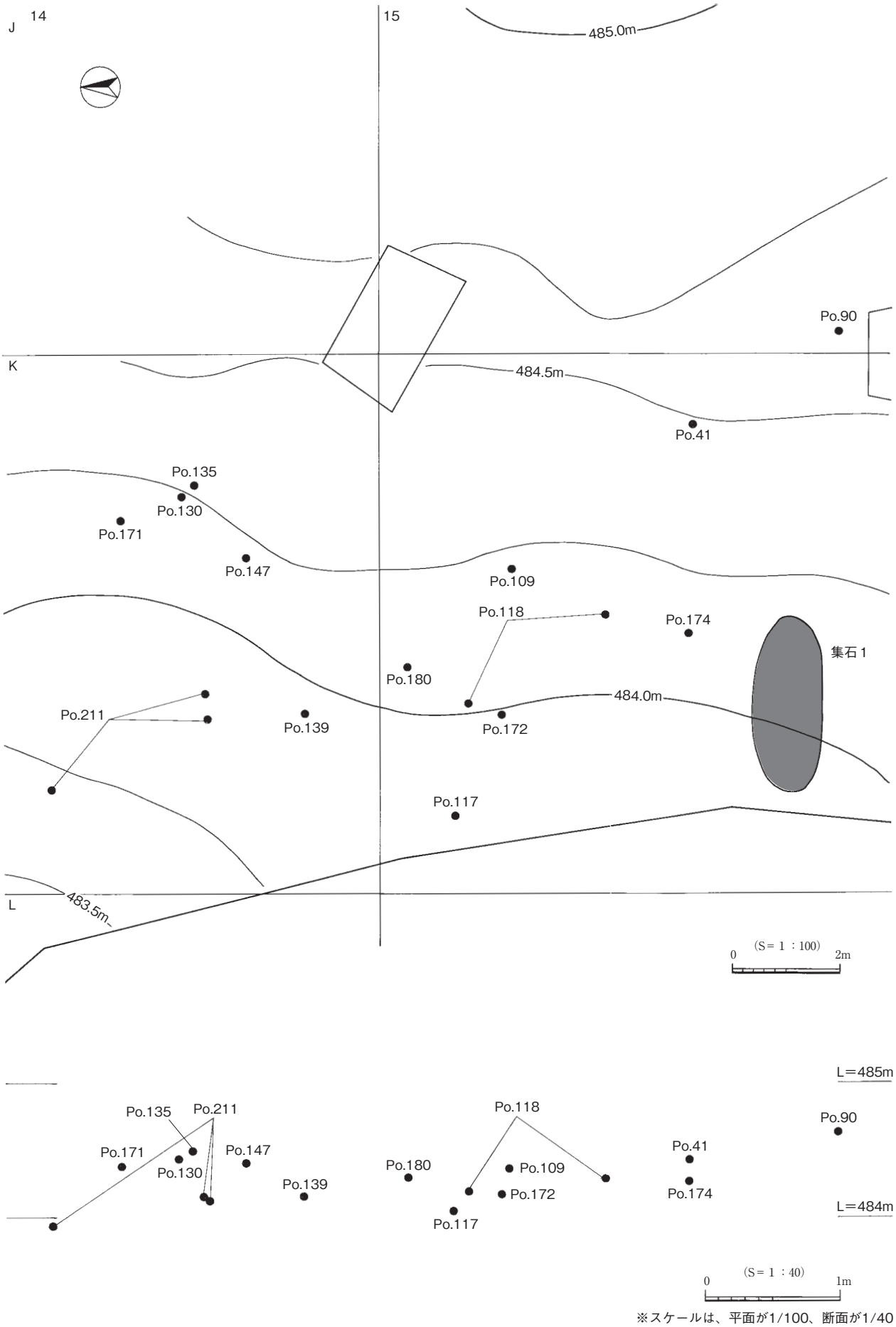


第28図　石器図②

第29図　縄文時代の遺構図（６・７区）

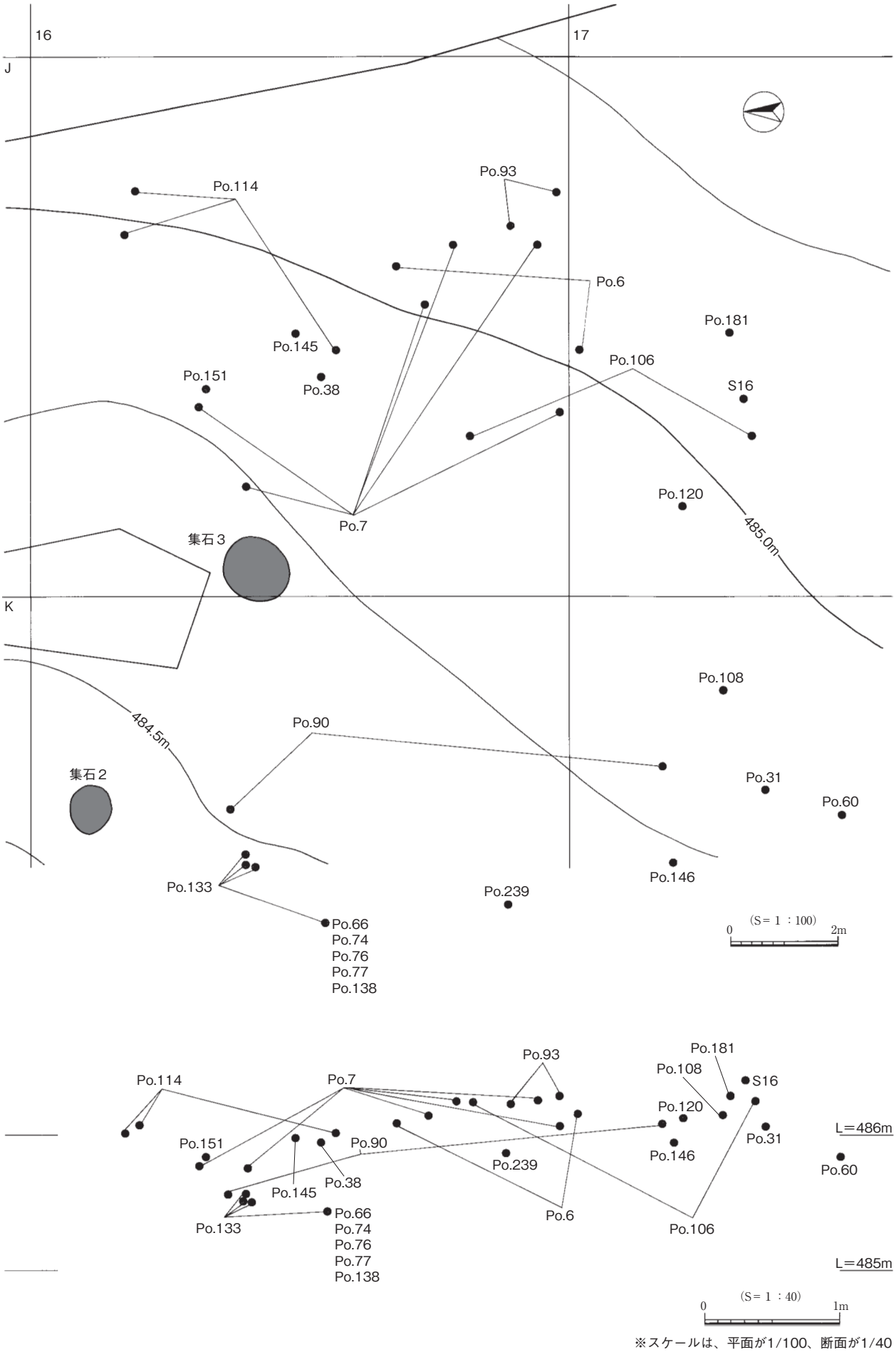


第30図　縄文土器出土位置図（６・７区、19・20区）



※スケールは、平面が1/100、断面が1/40

第31図　縄文土器出土位置図（14・15区）

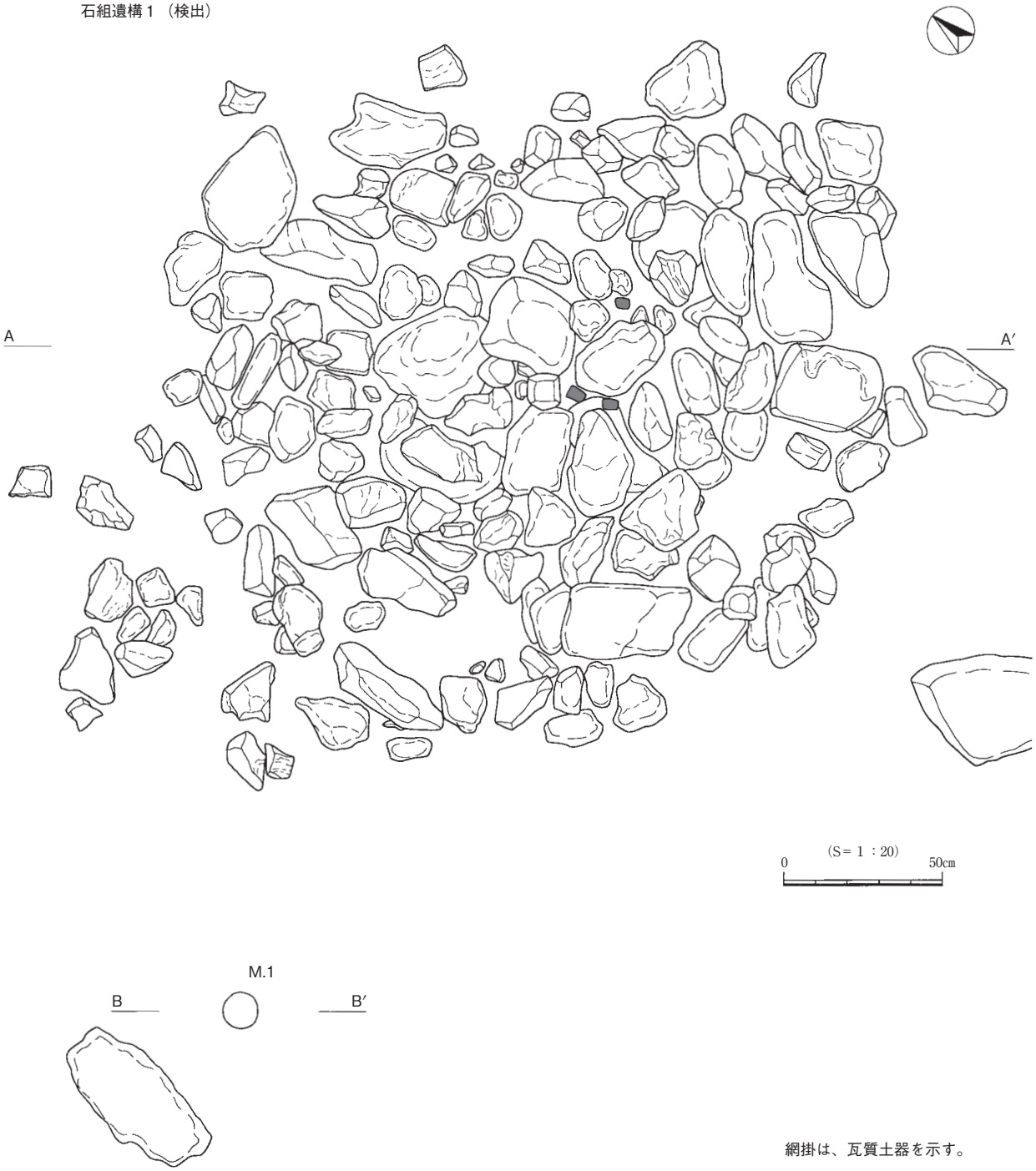


※スケールは、平面が1/100、断面が1/40

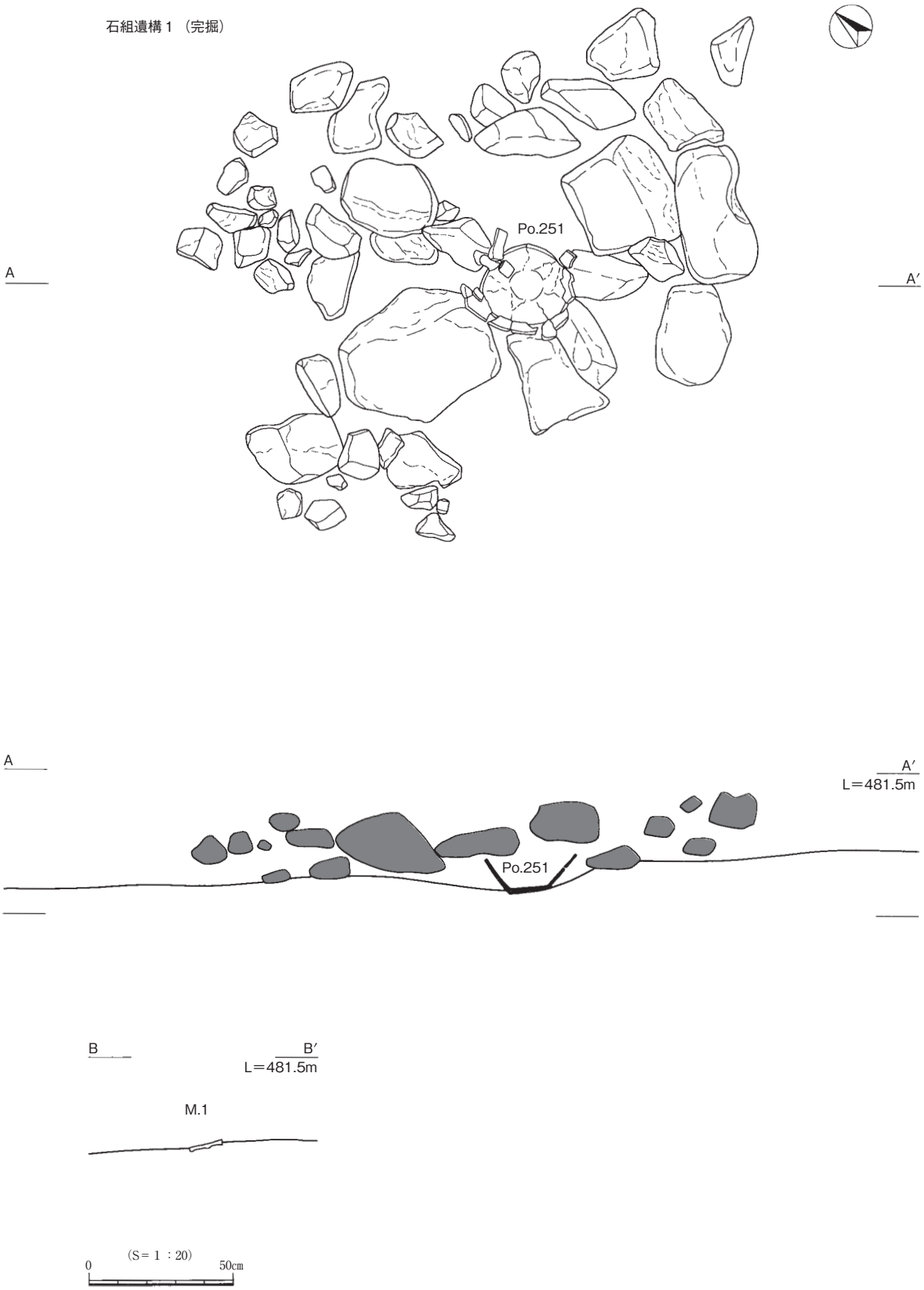
第32図　縄文土器出土位置図（15・16区）

第３節　中・近世の調査

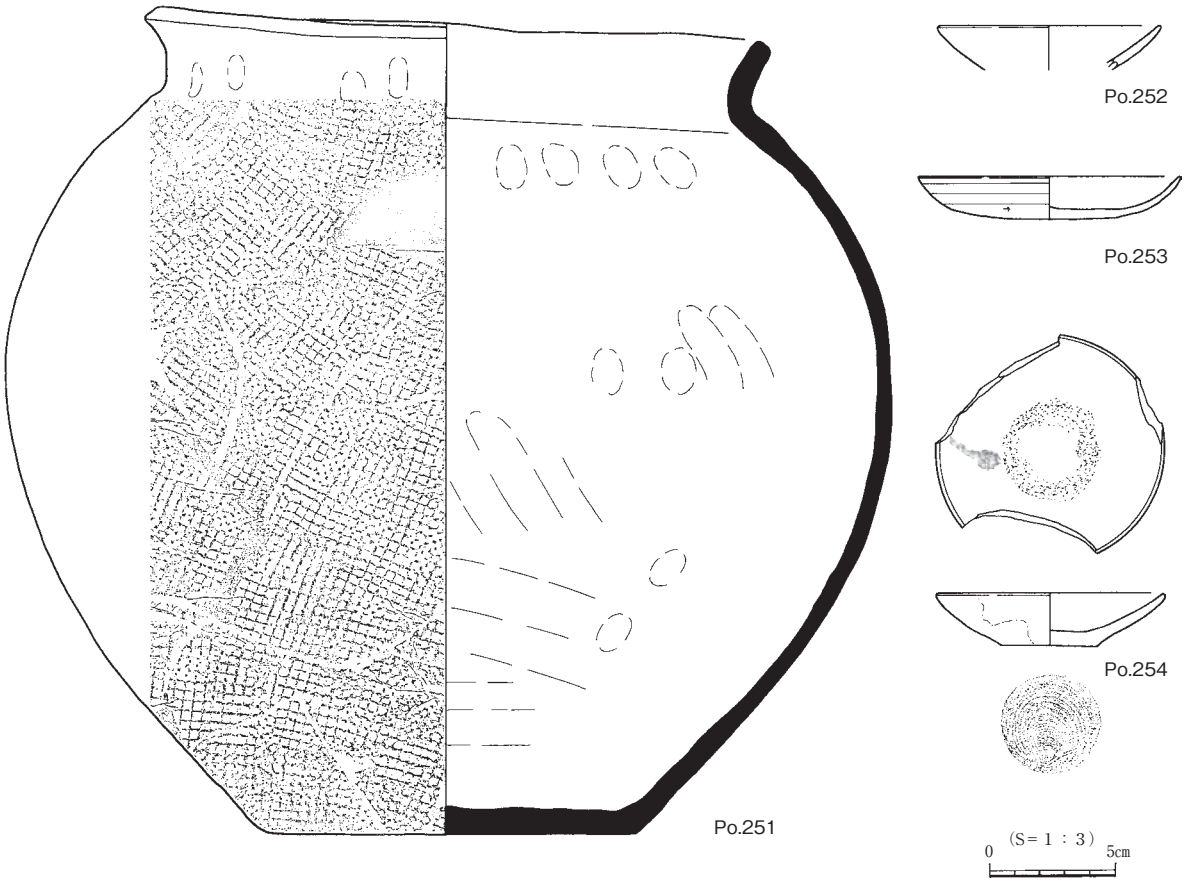
中・近世の調査は、16区～17区の第１遺構面で建物群、J-20区で覆屋を持つ精錬鍛冶炉を検出したほか、調査区の北側で大正４年まで存続した青瀧神社の付属建物と、前身建物と見られる柱穴群を確認した。また、神社建物の周辺には、石組遺構１や銭集中があり、ここからは和鏡も出土していることから、この場所は中世から祭祀的な場として利用されてきたことが窺える。



第33図　石組遺構１（検出）



第34図　石組遺構１（完掘）



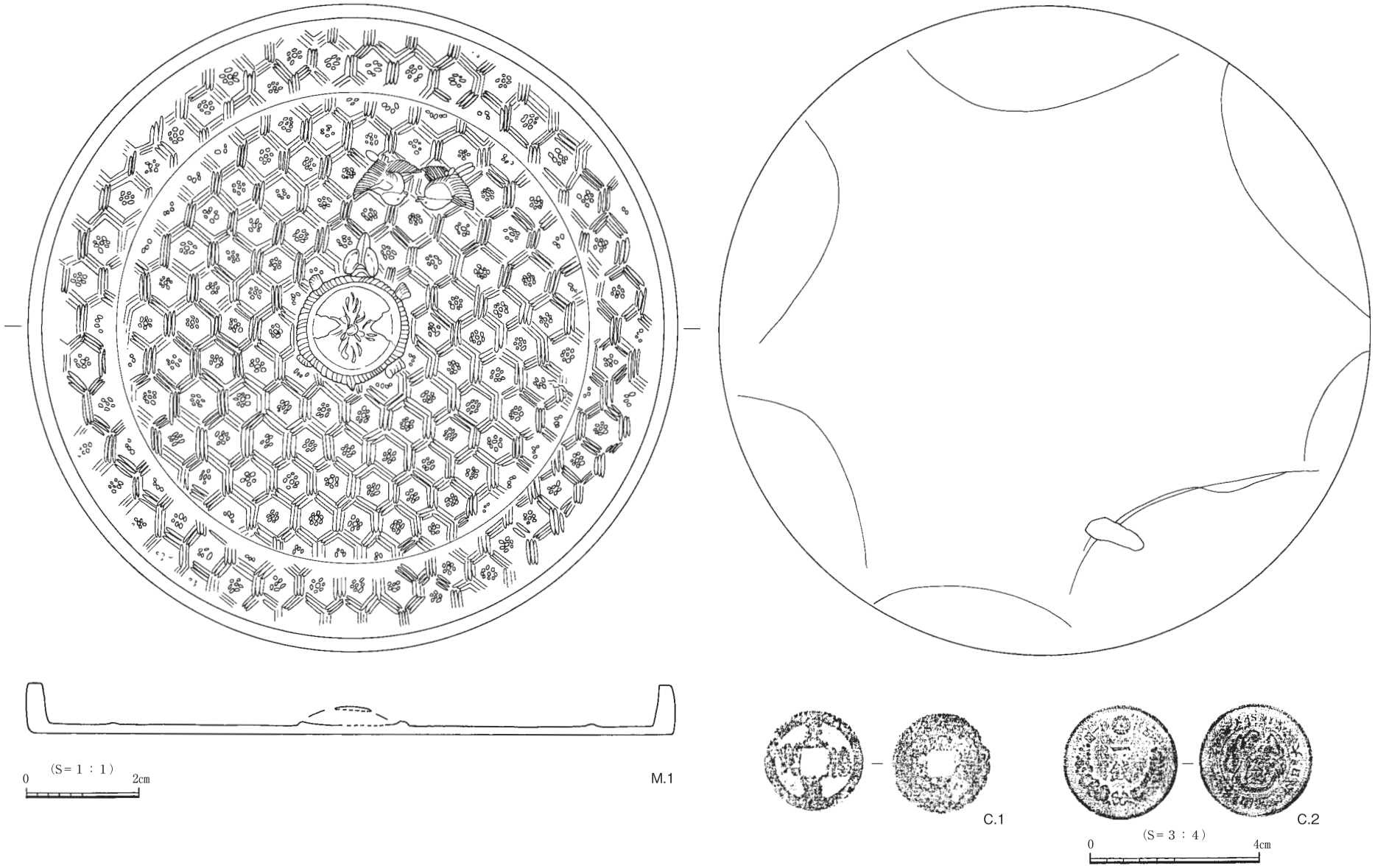
第35図　石組遺構１　出土遺物①

石組遺構１（第33図～第36図）

石組遺構は、青瀧神社の北側、K−６区の標高481mに位置している。現地では、調査前から礫の散布が確認できる状況であったことから、何らかの遺構があると推測された。表土を除去すると２m四方の範囲に礫が広がっており、礫の隙間に瓦質土器の破片が散らばっていた。上面の礫を少しずつ除去していくと、中心部に瓦質土器の壺（Po. 251）が置かれており、周囲には大型の石が放射状に配置されていた。瓦質土器の内部は暗褐色の砂質土が詰まっていたが、リン分析を行うため壺の中の土を残したまま土器を取り上げた。また、西に１mほど離れた場所から、和鏡が１面出土した。

この遺構の性格については、化学分析の結果から人骨を収めた納骨器の可能性が低いことと、瓦質土器の上面にまで石が落ち込んでいたことから、盗掘によって経塚の内容物が抜き取られた後、外容器がそのまま石組の中に残されたものと推測する。近くから出土した和鏡もこの遺構に伴う遺物と考えられなくもないが、瓦質土器の年代が鎌倉時代頃と推測されることから、鏡の年代については慎重に検討する必要がある。

この遺構に伴う遺物は、瓦質土器が石組遺構から出土したほかには、検出中に表土から出土した灯明皿が３点と銭貨が２点ある。Po. 251は、口径23. 6㎝、高さ32. 5㎝の瓦質土器で、表面にはタタキ整形の跡が残る。M. 1の和鏡は、表土を除去した第１遺構面で鏡面を上にした状態で出土した。和鏡は直径11. 6㎝あり、亀甲地紋に双鳥（雀か）を配する亀甲地双鳥鏡である。鈕は亀形で、背面は全体に緑青が見られるが、鋳上りは良好で紋様は鮮明である。鏡面には、７本の「)」状の線刻がある。C. 1は北宋銭の天禧通宝で、1017年初鋳。C. 2は、明治10（1877）年発行の一銭銅貨である。



第36図　石組遺構１　出土遺物②

銭集中（第37図～第47図）

神社建物１から南東へ８mほど離れた、標高480.7m付近の緩やかな斜面で検出した銭の集中区である。調査開始当初に断ち割りを入れたところ、表土から10cmほど掘り下げた地点で和鏡が１面出土した。その後、拡張を行い銭の集中を確認したものである。

銭は全部で179枚分の銭が出土したが、銭の出土状況は表土から５cm程掘り下げた３m四方の範囲に散らばっており、意図的に銭を埋めたような痕跡は認められなかった。また、初花と見られる流出滓とともに土師器の鍋と皿の破片が出土している。出土した銭貨の詳細については、分類を行った高橋章司氏の考察を第４章第１節に掲載している。

ここから出土した銭以外の遺物は、土製の鍋（Po. 255）、土師器の皿（Po. 256～Po. 266）、土師器の坏（Po. 267）、陶器の皿（Po. 268・269）、青花の碗（Po. 270）、和鏡（M. 2）である。

Po. 255は、口縁部が大きく外反する土製の鍋で、内外面ともハケ調整される。外面にはススが付着し、底部内面にはコゲの痕が残ることから、実際の煮炊きに使用されたものと考えられる。土師器の皿は、口径が大小に分かれており、底部を糸切するものが多い。土師器の坏（Po. 267）は、復元口径14cmの中型品で、古代のものと推測される。陶器の皿（Po. 268・Po. 269）は、茶褐色の釉薬を掛けるもので、同様の製品は神社の周辺からもたくさん見つかっている。青花の碗（Po. 270）は、やや足高の高台を持つもので、内外面に文様が描かれている。

和鏡（M. 2）は、直径8.9cmで、鈕は亀形、文様は双鳥を配した亀甲地双鳥紋である。外区には幅線紋帯を施し、さらに中間を５から６個の珠紋帯で区画する擬漢式鏡である。

土坑１（第48図）

神社建物１の北側で検出した、石を詰めた小土坑である。神社の建物を作る際に、土坑の南側が削り取られている。土坑の規模は、幅75cm以上、検出面からの深さ25cmを測る。調査では３回に分けて石を取り上げたが、石材の大きさは揃っておらず、石を組んで埋めたような痕跡は認められなかった。

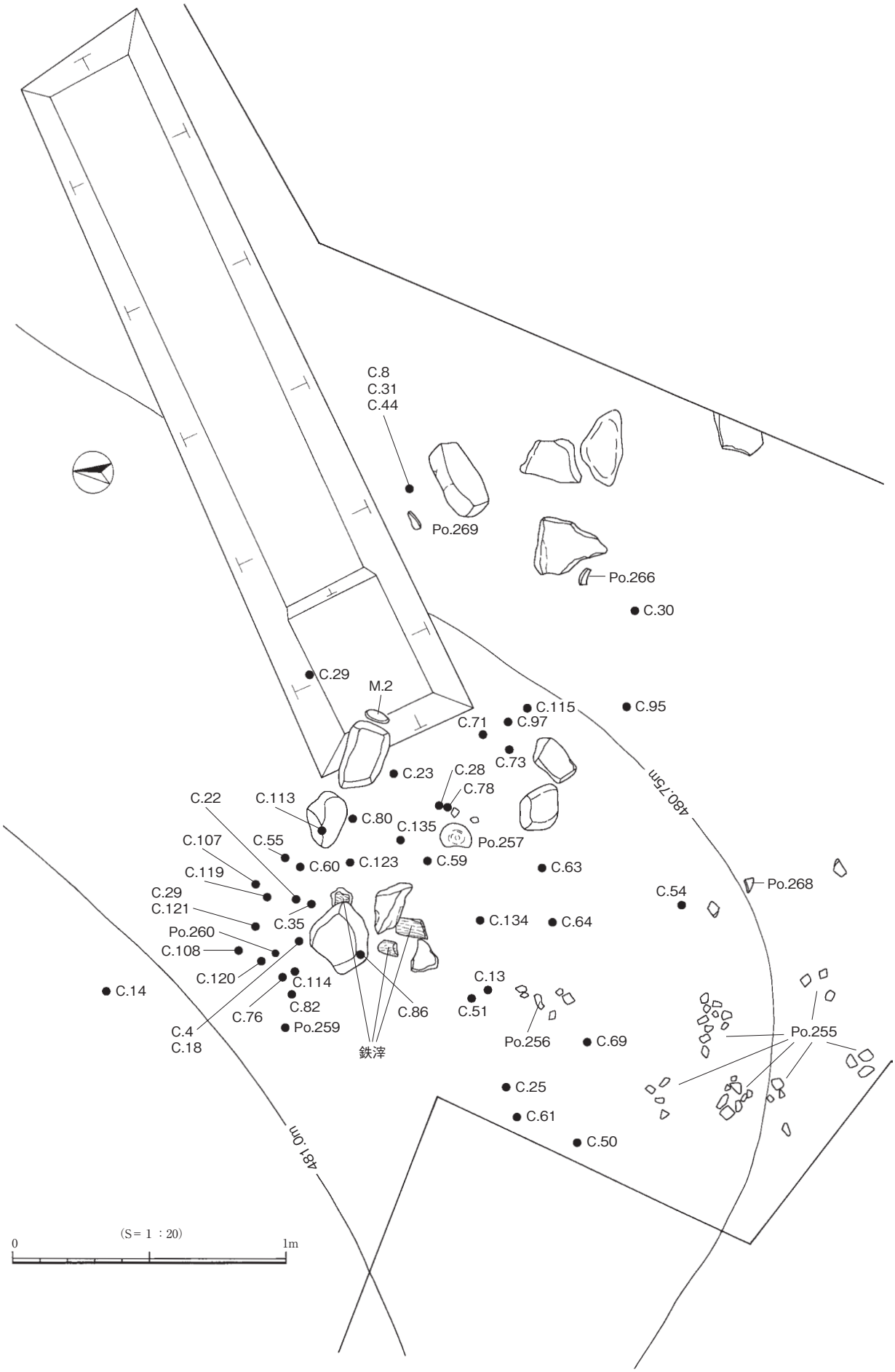
この土坑からは遺物が出土しなかったため、遺構の性格、年代とも不明である。

神社建物１（第49図～第51図）

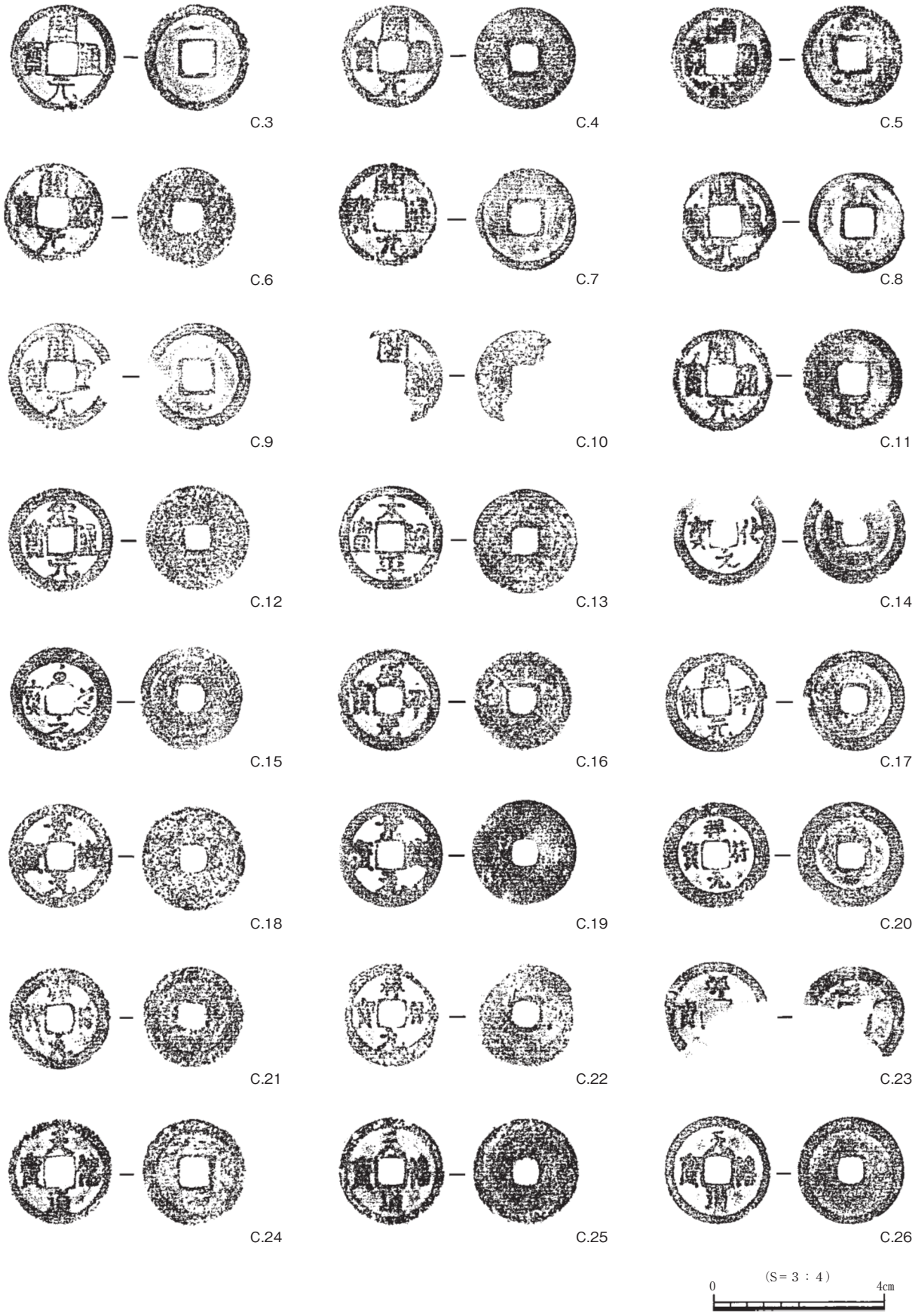
L-14区で検出した、石材を「ロ」字形に並べた建物の基礎遺構である。丘陵を削り取って、７m×５mほどの平坦地を作り建物を建てている。平坦地の南角部からは、礫を詰めた土坑２が検出された。

建物の規模は4.2m×2.4mで、建物の範囲に平石を並べて基礎としている。また、建物の西側には10cm下がった所に5.2m×60cmの張り出しがある。建物の内部には礎石が見られないことと、床面に締まりが無かったことから、基礎石の上に根太を載せてそこから柱を建てていたと考えられる。建物の床面には、陶器の小壺（Po. 293）が埋められていたが、壺の内部は空であった。また、建物の北西側には石灯籠の基礎と見られる平石が置かれている。

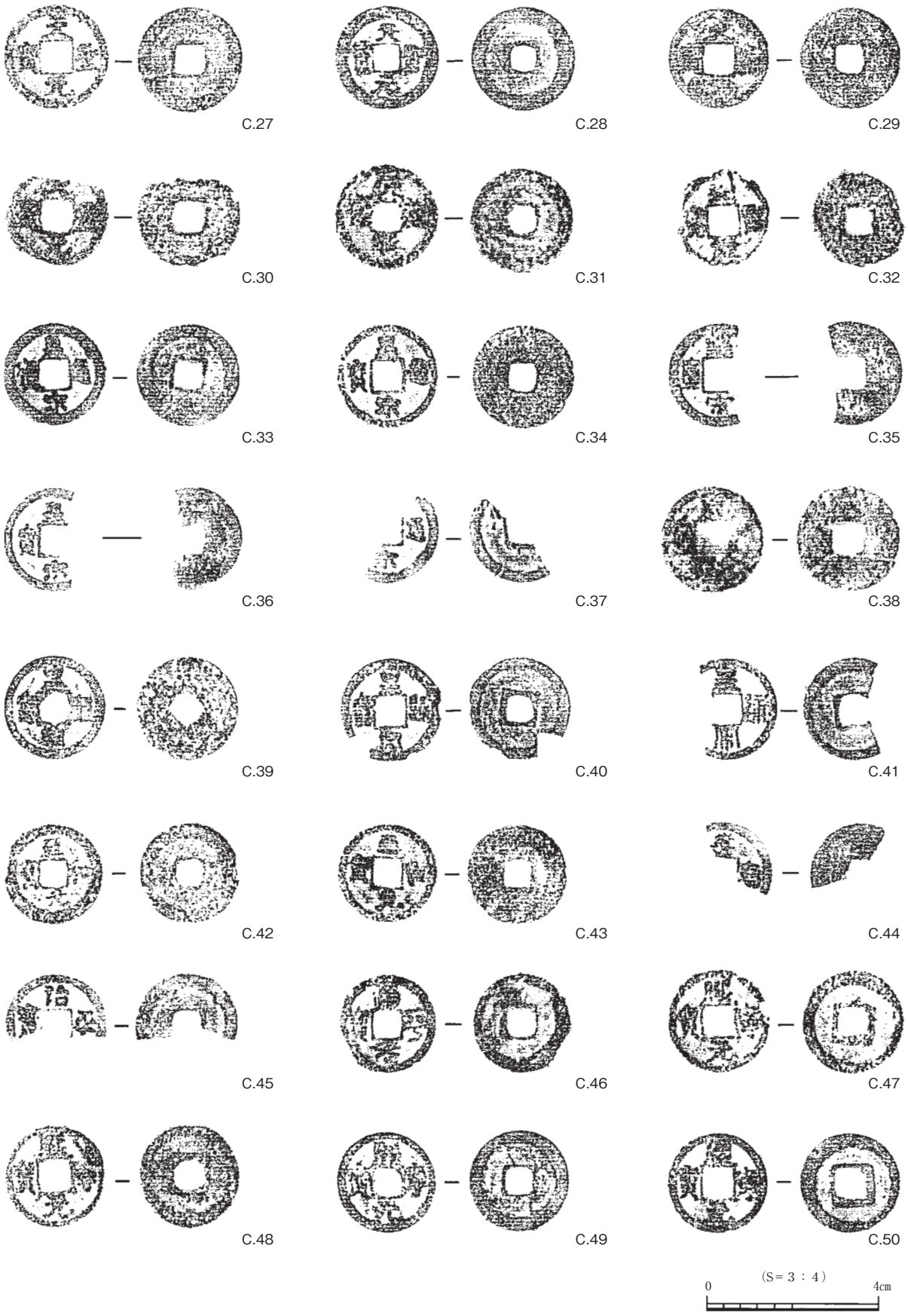
この建物については、『明治の多里郷』に記載された「社寺什物品調帳」（明治11年）の青瀧神社の項目に、「本社　壱棟（梁行三尺、桁行四尺）」と「附属建物」があったと書かれているが、本社の規模は小さく、祠のようなものが想定されることから、今回検出した遺構は青瀧神社の付属建物の基礎


C.8
C.31
C.44
Po.269
Po.266
C.30
C.29
M.2
C.115
C.95
C.71
C.97
C.73
C.23
C.28
C.78
480.75m
C.22
C.113
C.80
C.135
Po.257
C.107
C.55
C.60
C.123
C.59
C.63
C.119
C.29
C.121
C.35
C.134
C.64
C.54
Po.268
Po.260
C.108
C.120
C.114
C.82
C.76
C.4
C.18
Po.259
C.14
C.86
C.51
C.13
Po.256
C.69
Po.255
鉄滓
C.25
C.61
C.50
481.0m
(S=1：20)
0
1m

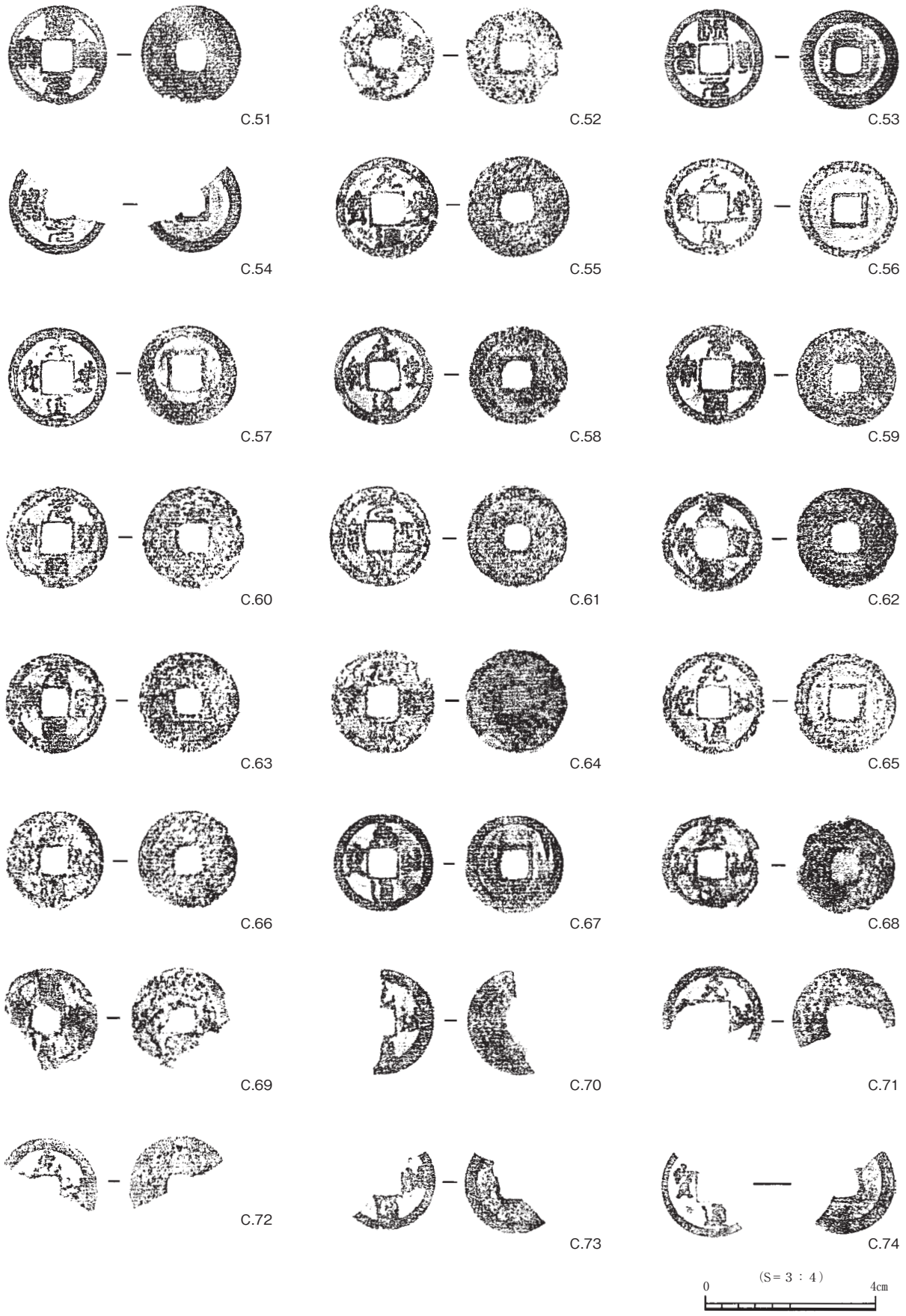
第37図　銭集中　遺構図


C.3
C.4
C.5
C.6
C.7
C.8
C.9
C.10
C.11
C.12
C.13
C.14
C.15
C.16
C.17
C.18
C.19
C.20
C.21
C.22
C.23
C.24
C.25
C.26
(S＝3：4)
0
4cm

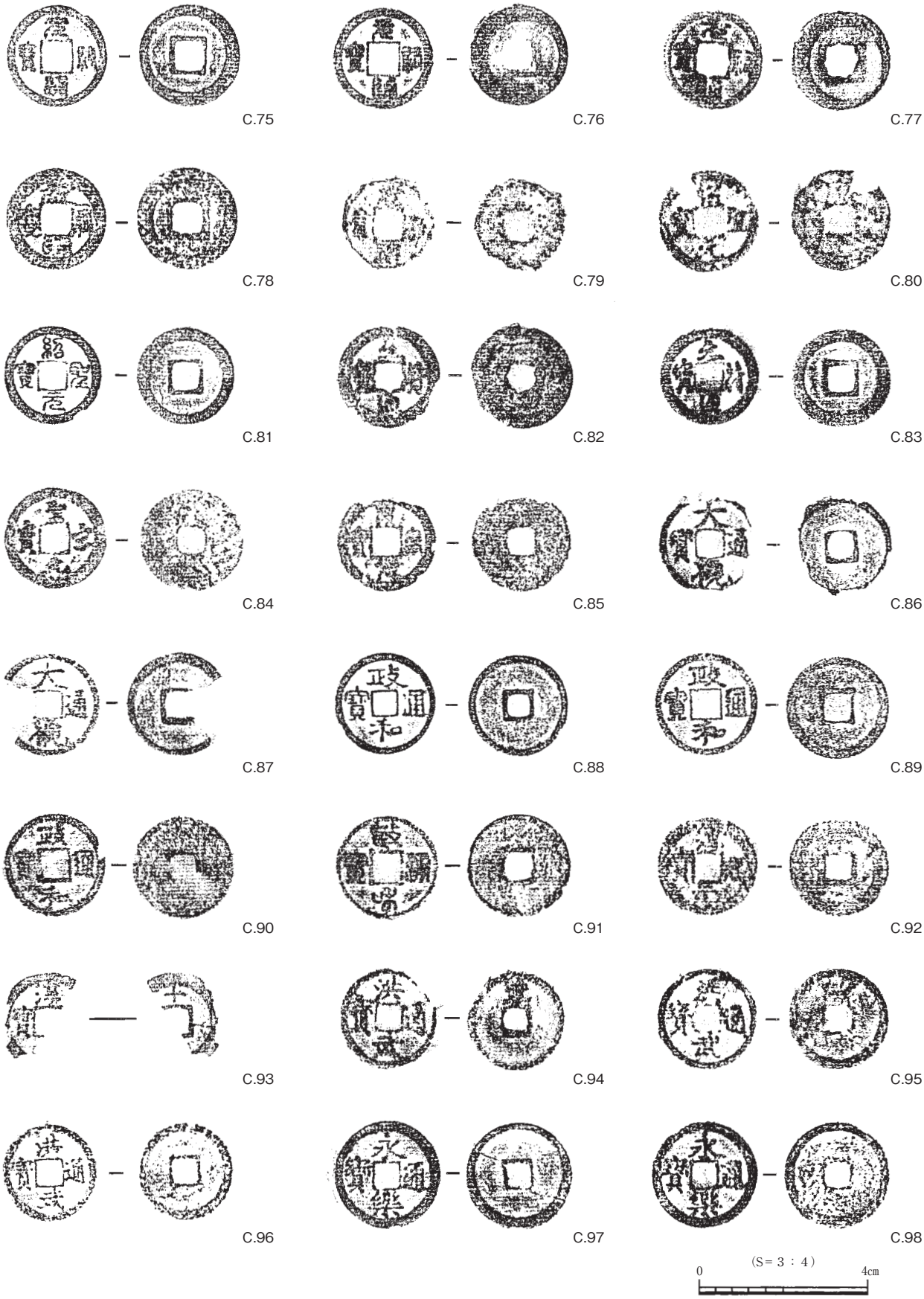
第38図　出土銭貨①


C.27
C.28
C.29
C.30
C.31
C.32
C.33
C.34
C.35
C.36
C.37
C.38
C.39
C.40
C.41
C.42
C.43
C.44
C.45
C.46
C.47
C.48
C.49
C.50
(S＝3：4)
0
4cm

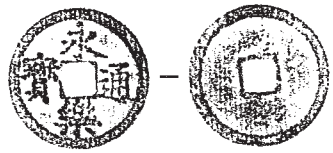
第39図　出土銭貨②


C.51
C.52
C.53
C.54
C.55
C.56
C.57
C.58
C.59
C.60
C.61
C.62
C.63
C.64
C.65
C.66
C.67
C.68
C.69
C.70
C.71
C.72
C.73
C.74
(S＝3：4)
0
4cm

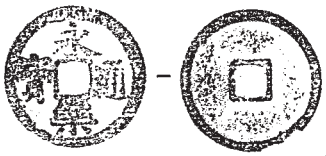
第40図　出土銭貨③

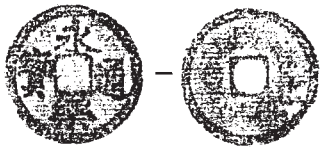

C.75
C.76
C.77
C.78
C.79
C.80
C.81
C.82
C.83
C.84
C.85
C.86
C.87
C.88
C.89
C.90
C.91
C.92
C.93
C.94
C.95
C.96
C.97
C.98
(S＝3：4)
0
4cm

第41図　出土銭貨④


C.99

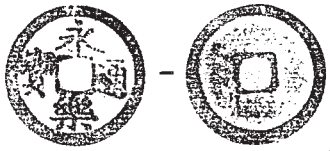
C.100


C.101

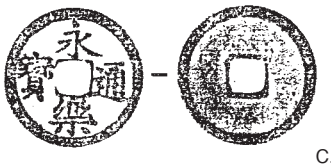

C.102

C.103

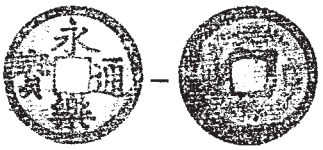
C.104


C.105

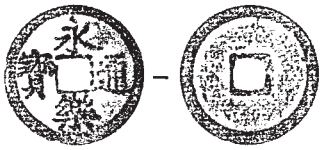
C.106


C.107

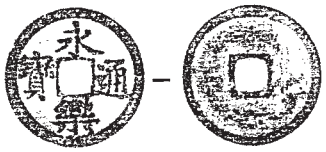
C.108

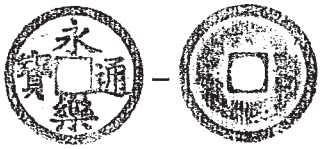

C.109

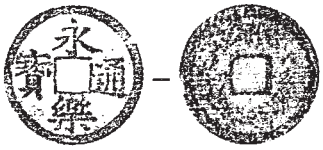
C.110

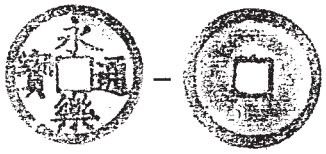

C.111

C.112

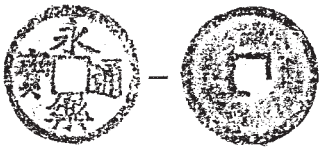

C.113

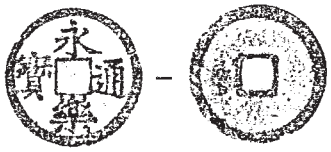

C.114

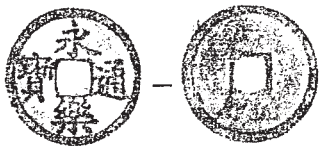

C.115

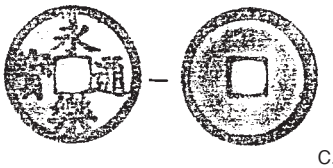

C.116

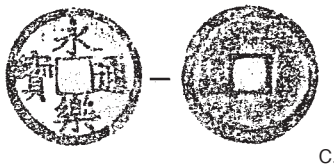
C.117

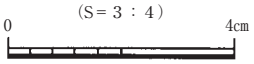

C.118


C.119


C.120


C.121

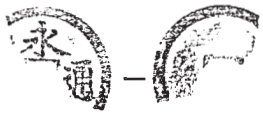

C.122



第42図　出土銭貨⑤

C.123

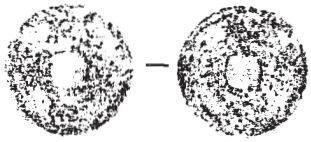
C.124

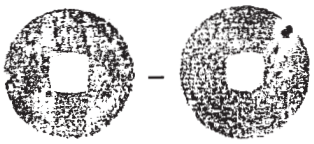

C.125

C.126

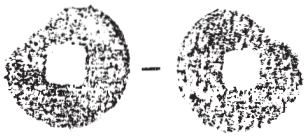
C.127

C.128

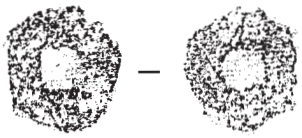

C.129


C.130

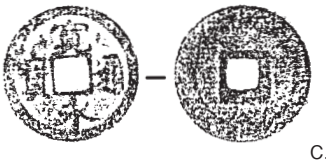
C.131


C.132

C.133

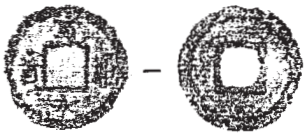

C.134

C.135

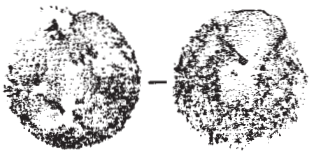

C.136

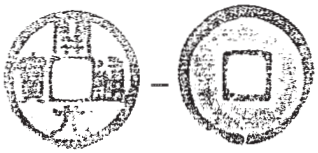
C.137

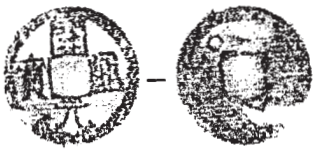
C.138

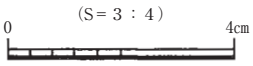

C.139

C.140

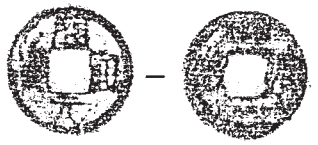

C.141

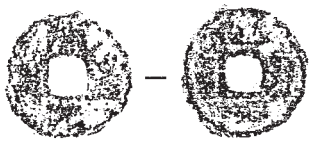

C.142

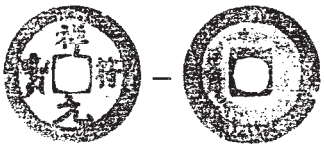

C.143

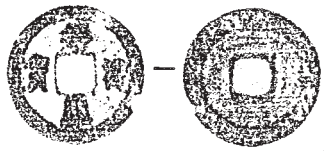


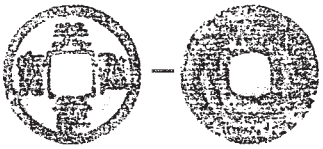
第43図　出土銭貨⑥

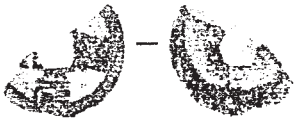

C.144

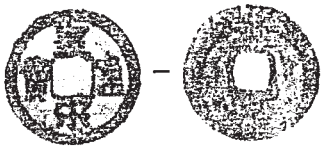

C.145

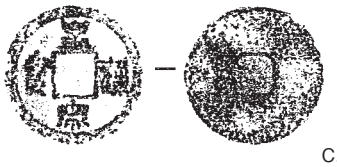

C.146

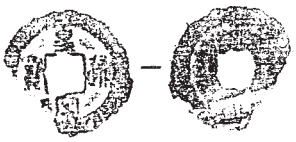

C.147


C.148

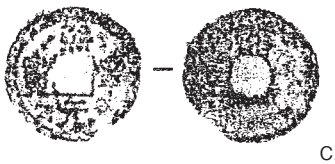

C.149

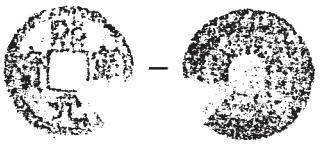

C.150

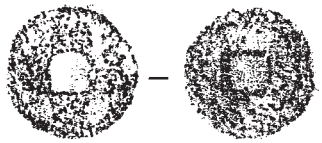

C.151

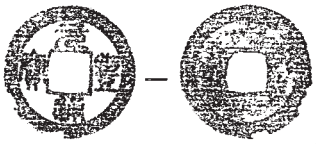

C.152

C.153

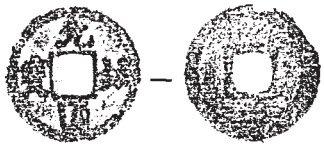

C.154

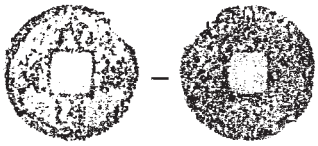

C.155

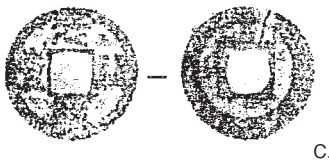

C.156

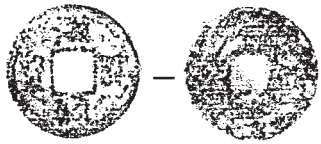

C.157

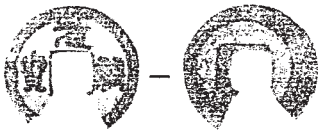
C.158

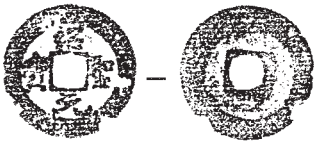

C.159

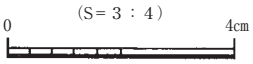

C.160


C.161

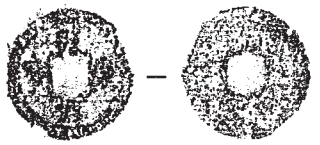

C.162

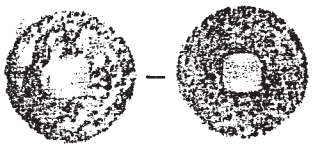

C.163

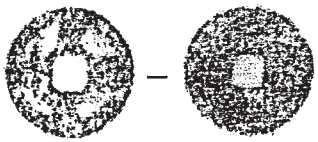

C.164

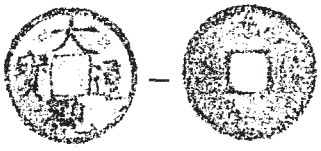


第44図　出土銭貨⑦


C.165


C.166

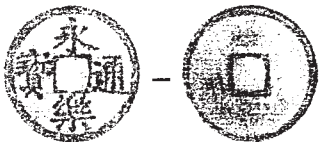

C.167

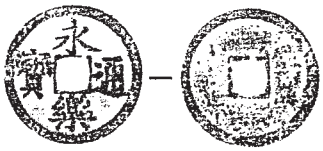

C.168

C.169

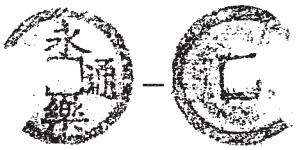
C.170

C.171


C.172

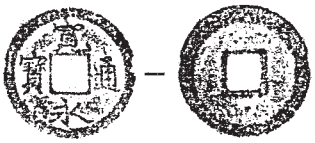

C.173

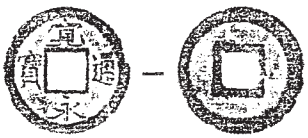
C.174

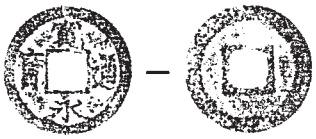

C.175

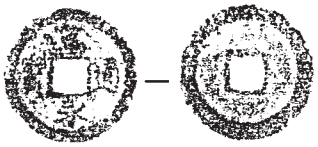
C.176

C.177


C.178


C.179

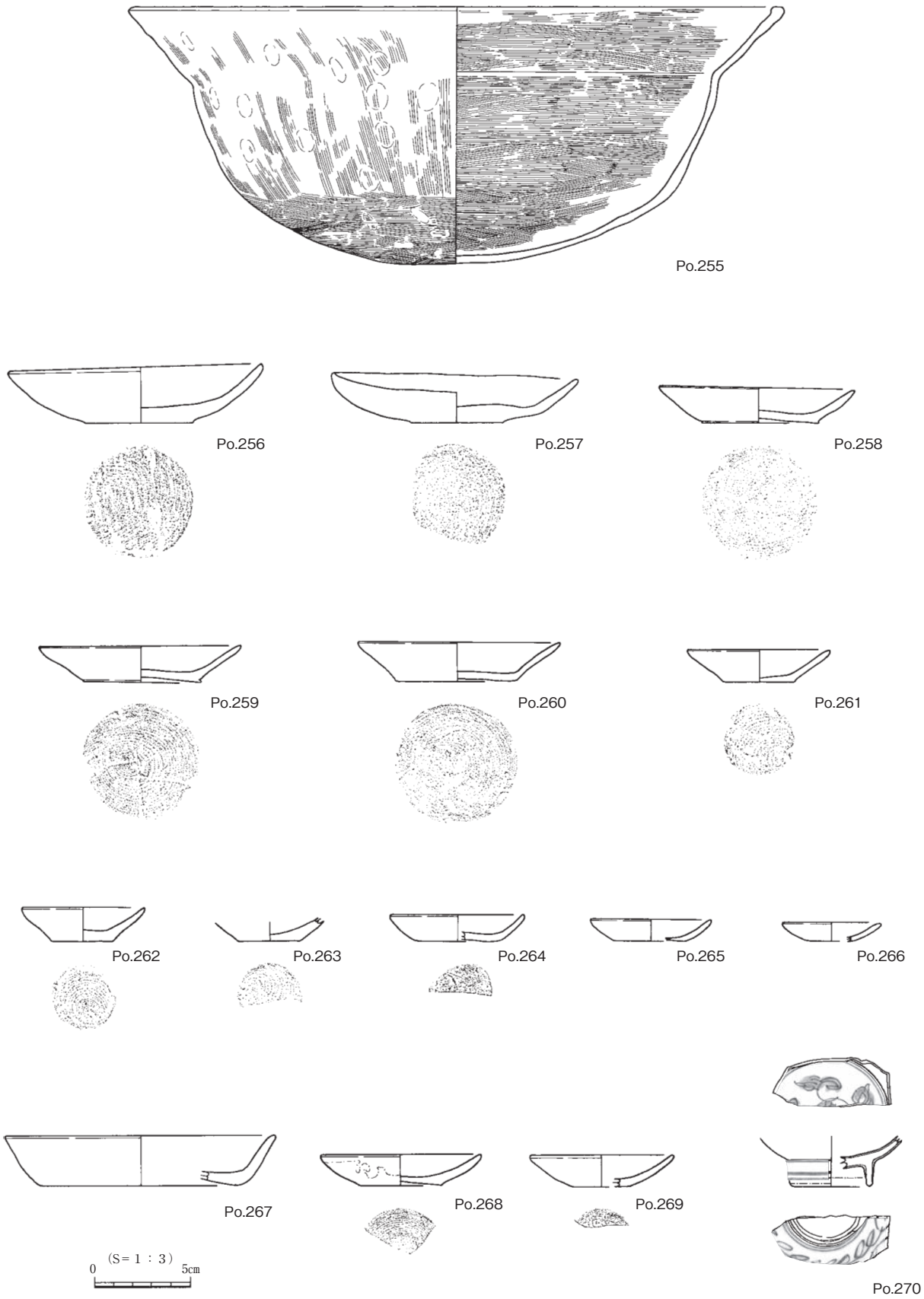

C.180


C.181

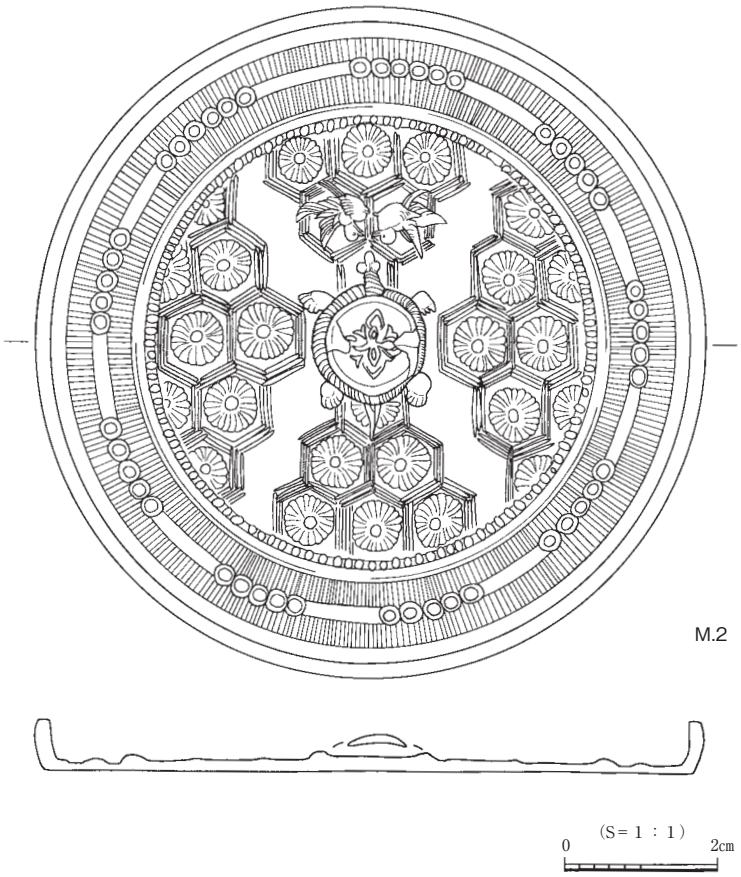
C.182

(S＝3：4)
0 4cm

第45図　出土銭貨⑧



第46図　銭集中　出土遺物①



第47図　銭集中　出土遺物②

と推測される。

附属建物がどのような機能を持っていたのか定かではないが、前書には青瀧神社の什物として太鼓や木綿幟などの物品が書かれていることから､こうした物品を収納する倉庫的な役割の建物であろう。

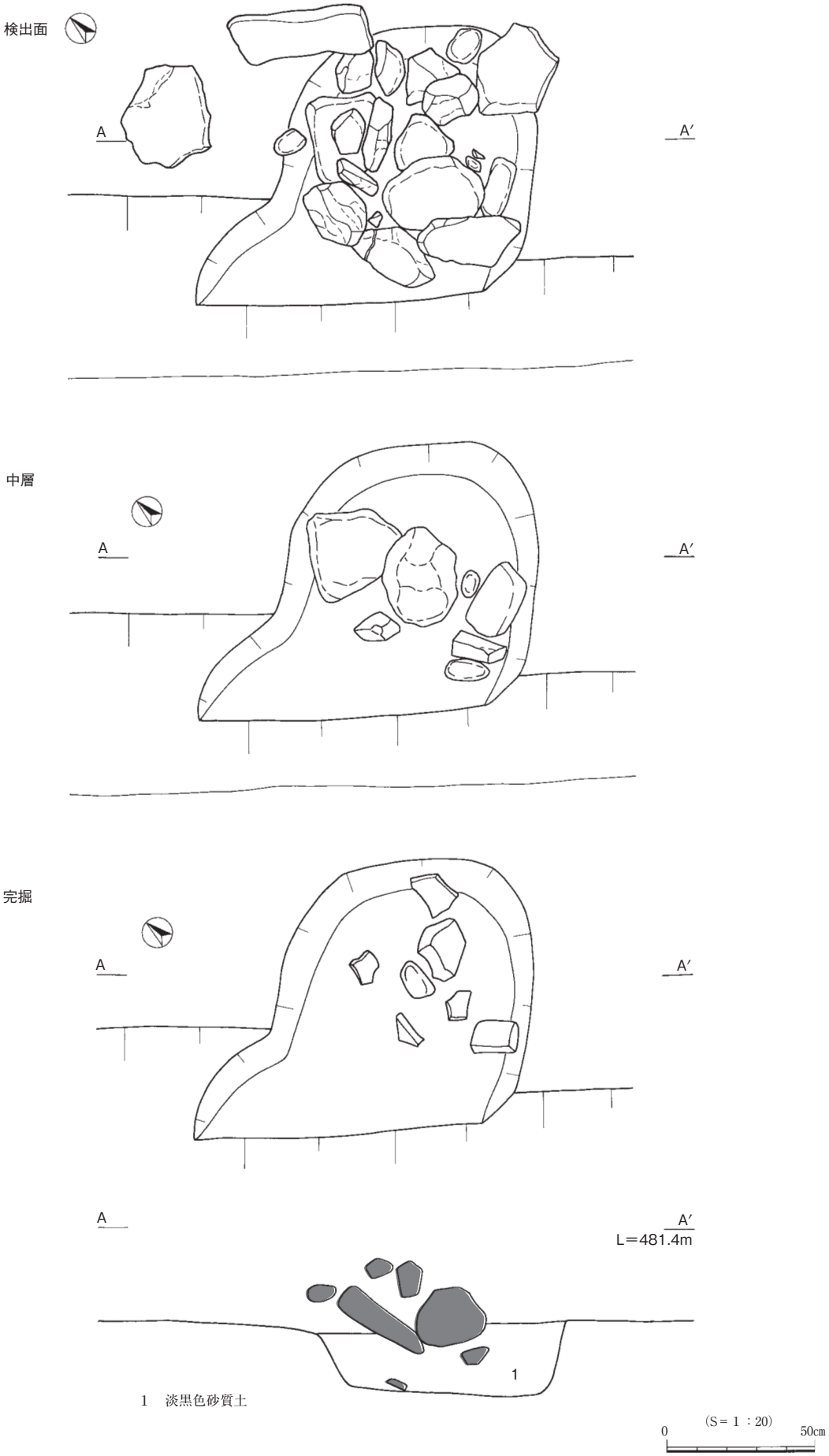
青瀧神社の本社がどこにあったのかは、今回の調査では明らかにすることが出来なかったが、調査前には大型の円礫がこの建物跡の中心部に寄せ集められていたことから、遷宮後に神社の基礎石を完全に破壊して附属建物の跡地に残った石を置いたものと考えられる。

建物内から出土した陶器の小壺（Po. 293）は、口径5. 3cm、高さ4. 1cmの小型品で、外面には赤い釉薬が塗布されている。蓋は摘みが付けられているが、つまみにくく、茶壺のような実用品とは考えにくい。この小壺とよく似た製品は瀬戸内地方で散見されるようであり、地鎮などの特殊な用途に用いるために、備前焼の影響を受けた窯で作られたものではないかと推測する。

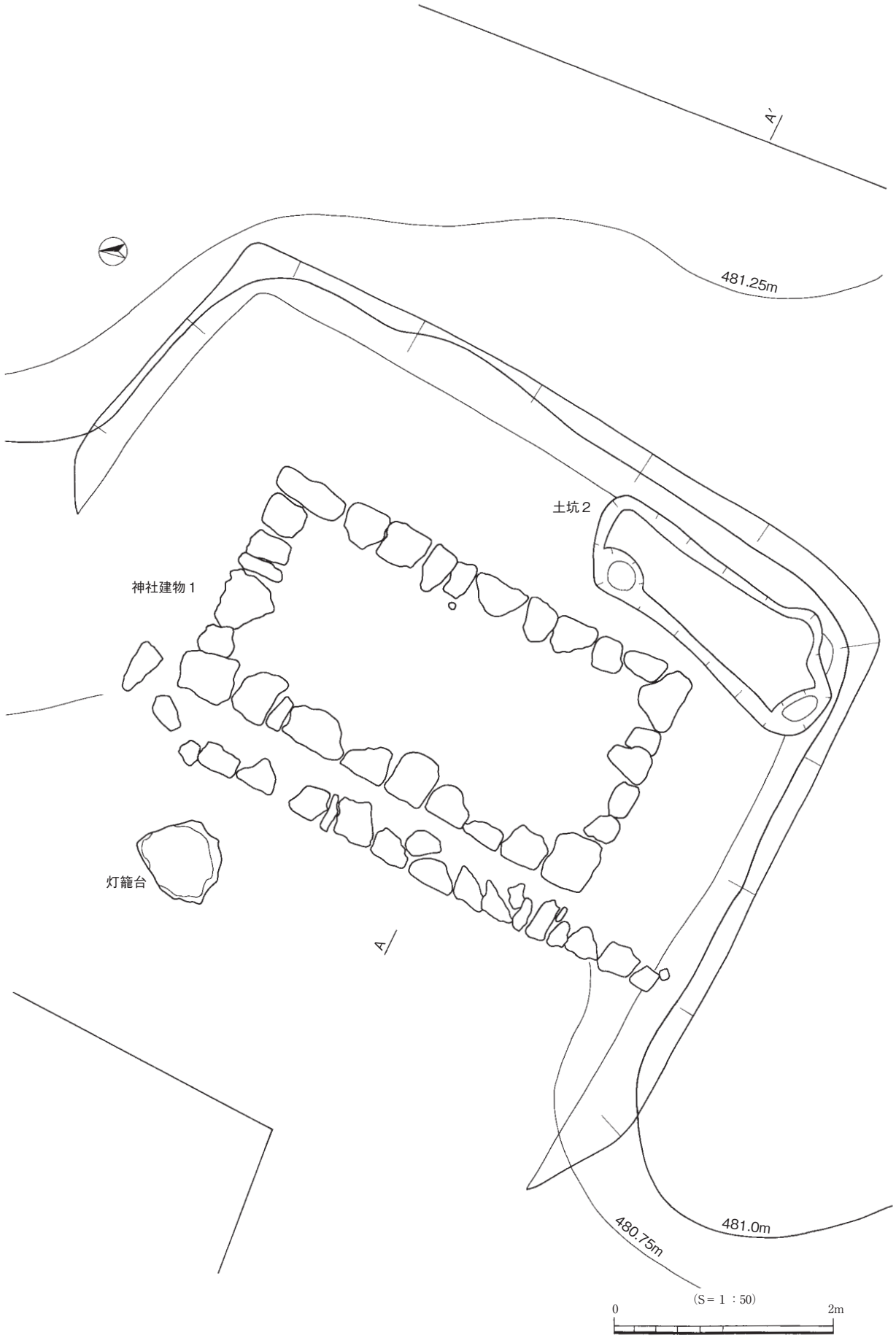
土坑２（第49図）

神社建物１の南東部で検出した、細長い土坑である。内部には礫がぎっしりと詰められており、一部は地上に露出している状態であった。土坑の規模は、長さ2. 7m、幅80cm、深さ40cmを測る。神社に先行する下層建物の掘形を壊していると考えられることから、神社建物１を建築する際に生じた不要な石を埋めたものか。

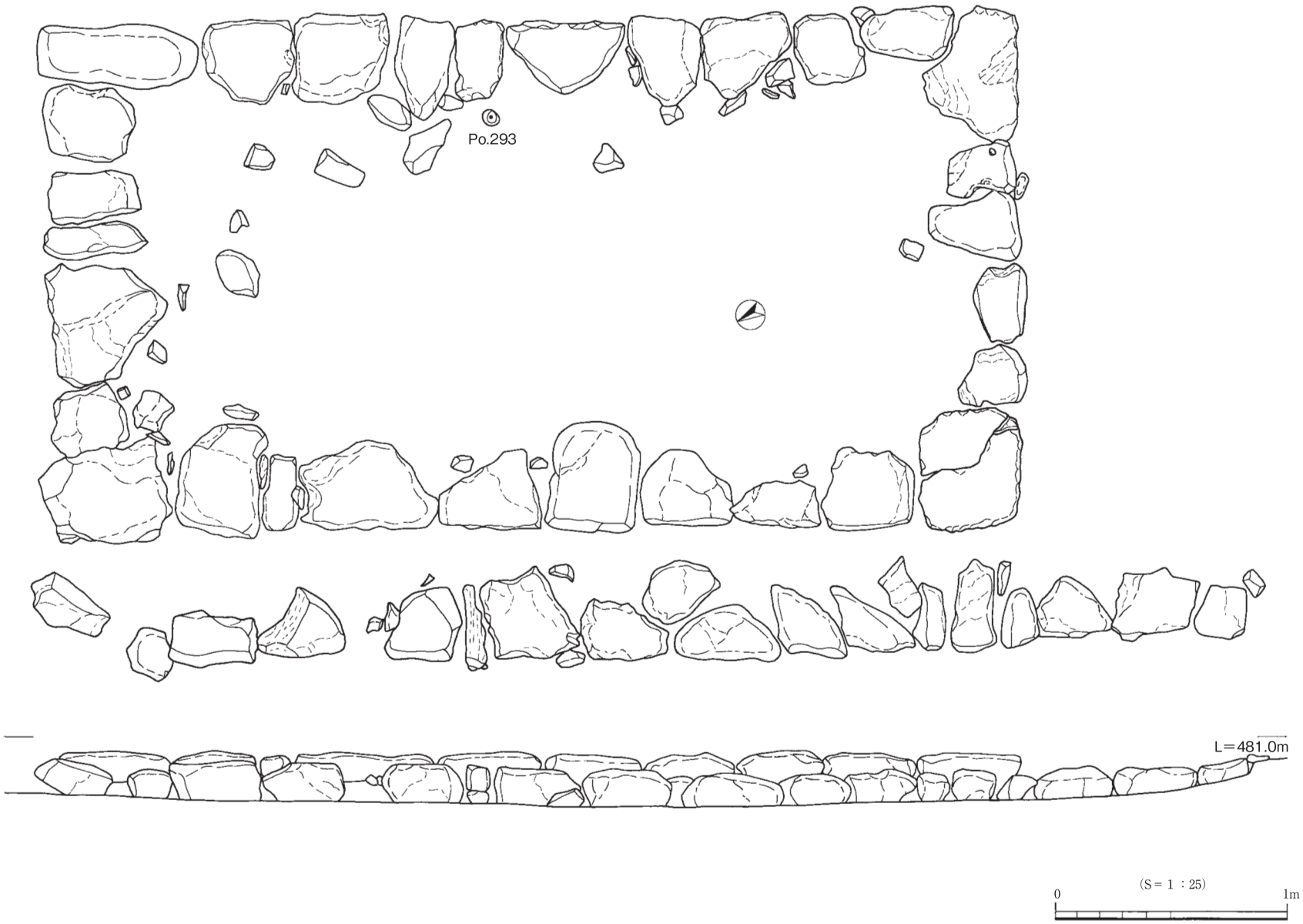
この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



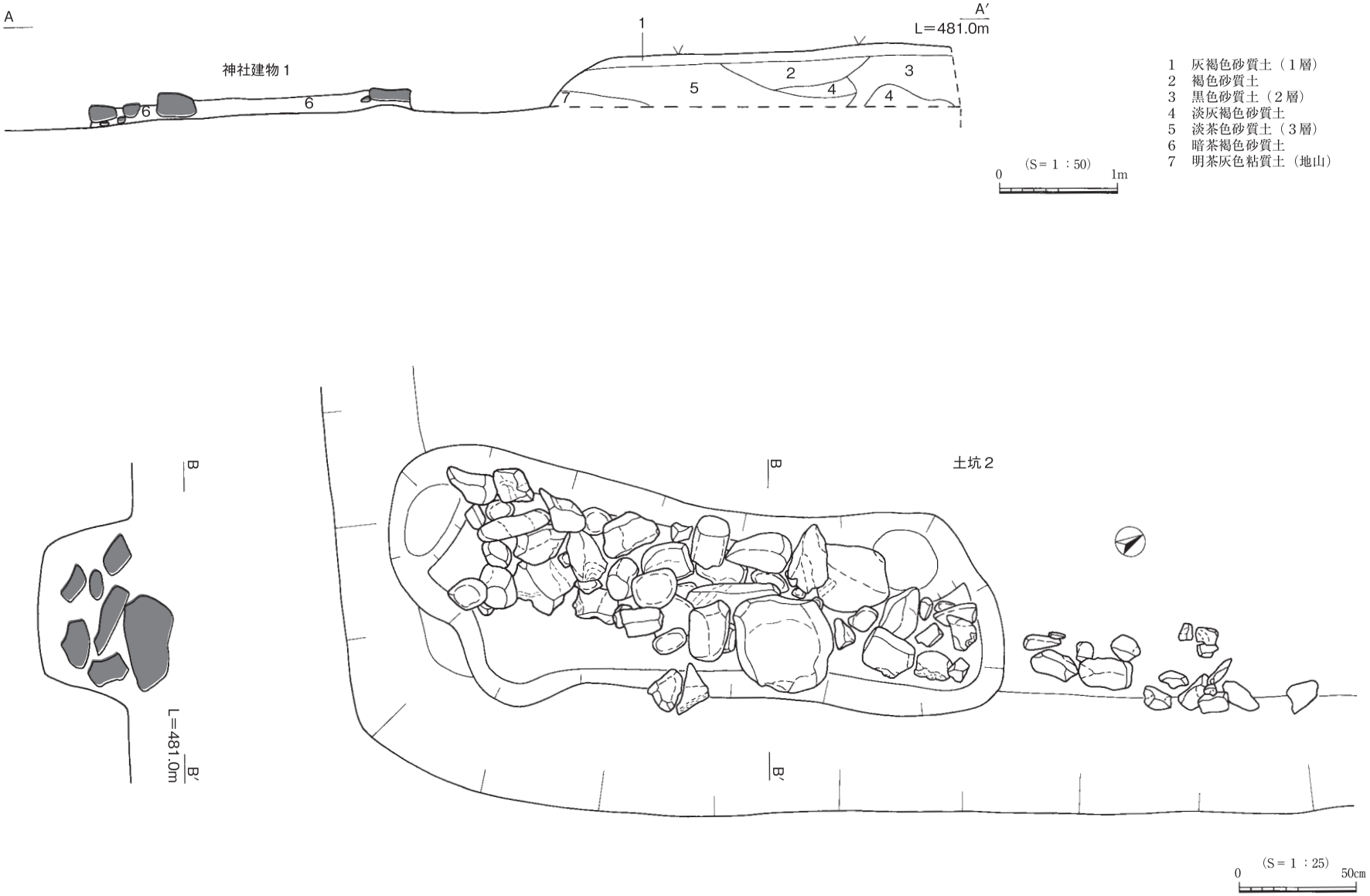
第48図　土坑１　平・断面図



第49図　神社建物１・土坑２　平面図



第50図　神社建物１　平・立面図

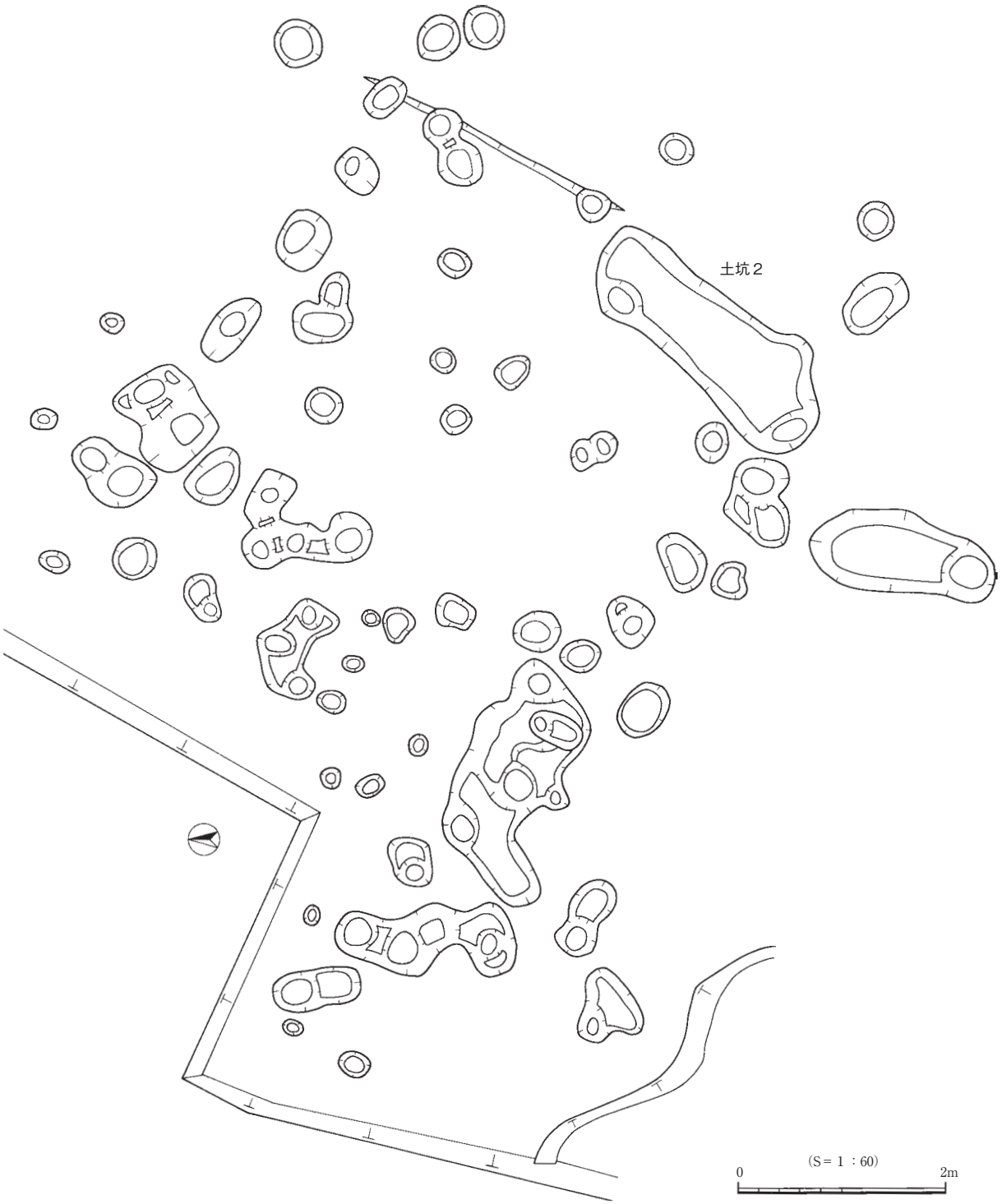


第51図　神社建物１・土坑２　平・断面図

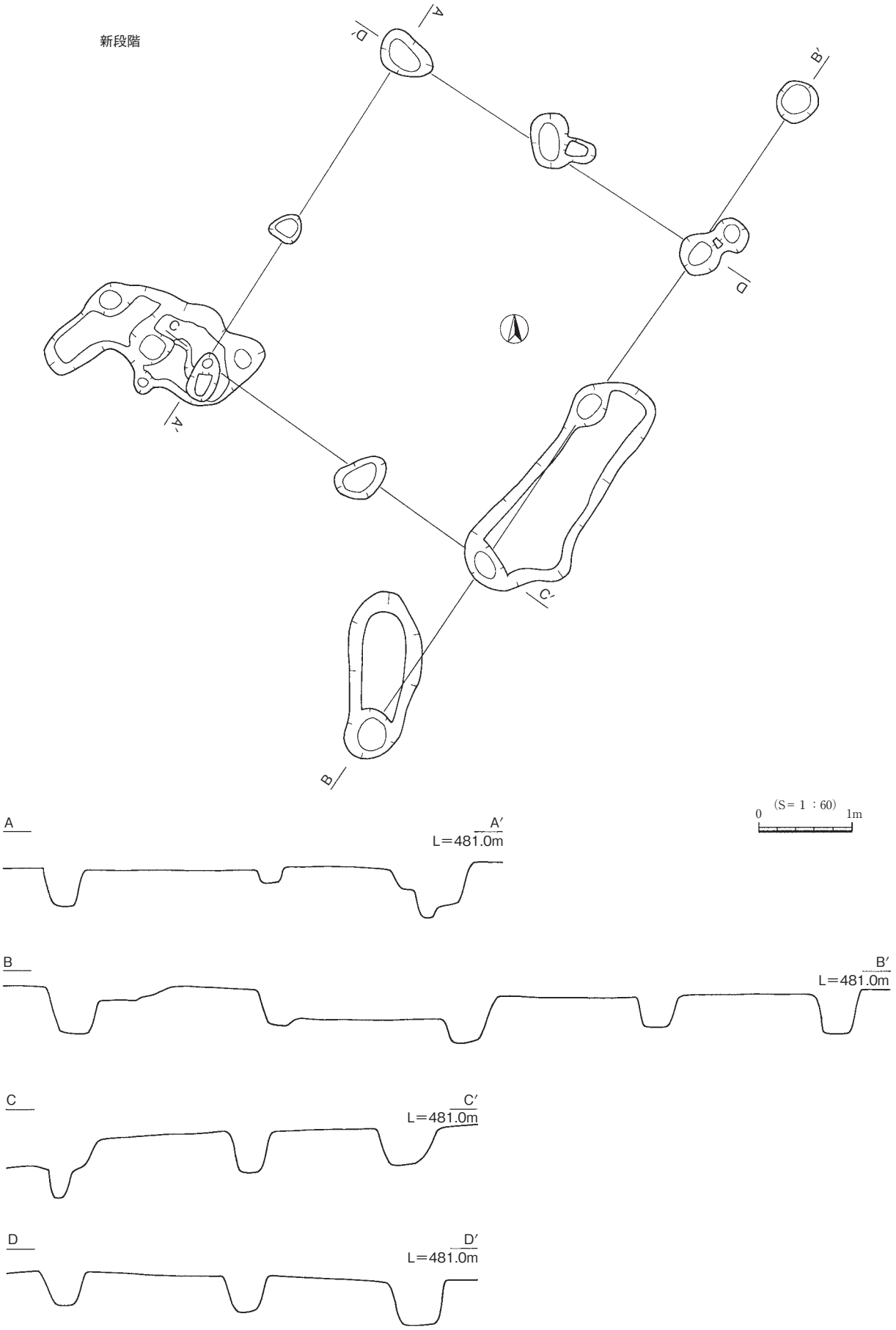
神社下層建物群（第52図～第55図）

神社建物１の石材を除去した後に下層から確認した、掘立柱建物の柱穴と見られるピットの群集である。柱穴の切り合い関係から、少なくとも３時期にわたって建て替えられていると考えられる。

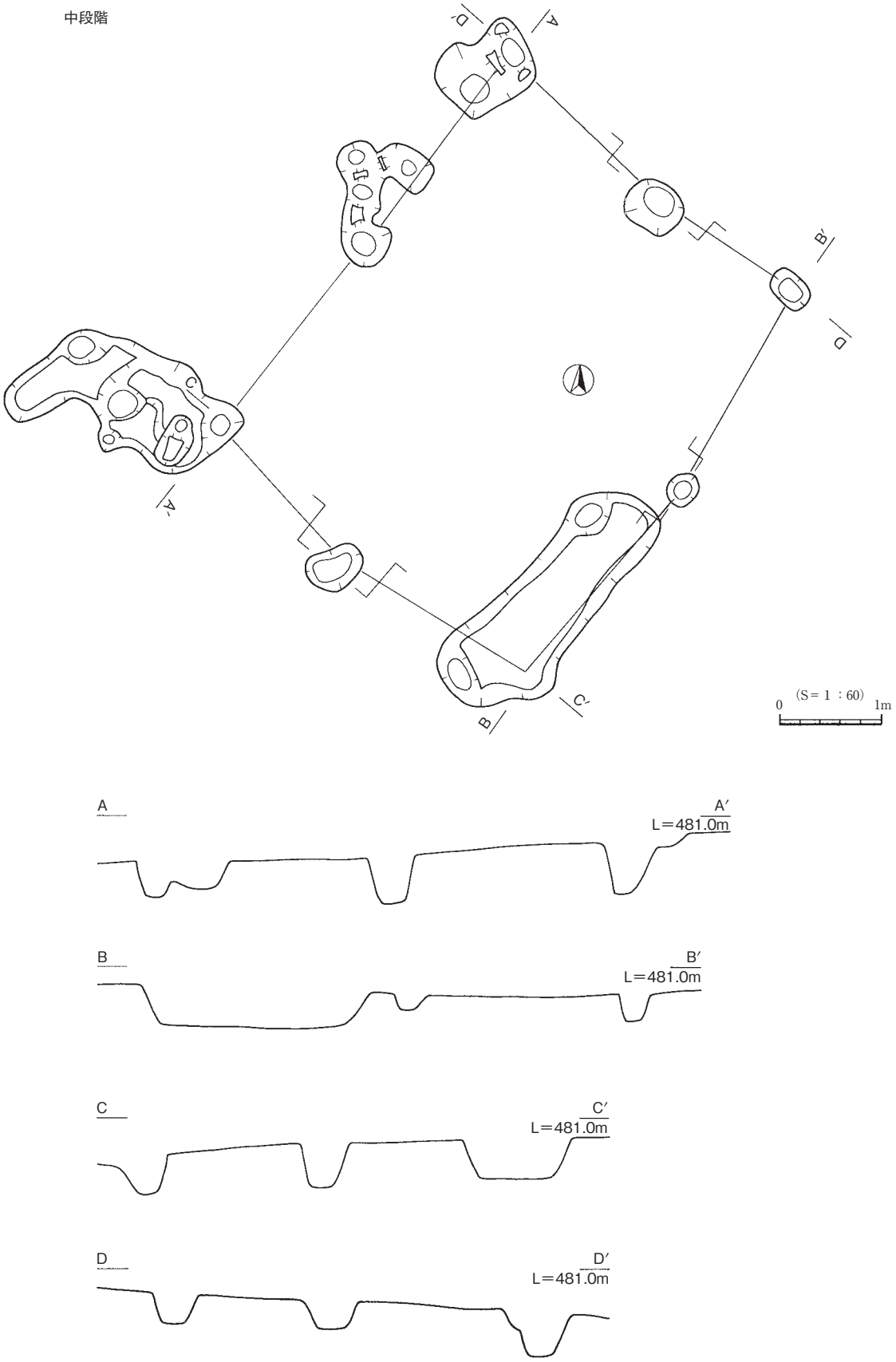
この建物に直接伴う遺物は見つからなかったが、青瀧神社の棟札の記録から、享保二（1717）年から数回は建て替えられている可能性が高いと判断されるため、この建物群も近世に建てられた青瀧神社の建物跡と推測される。



第52図　神社下層建物群　平面図

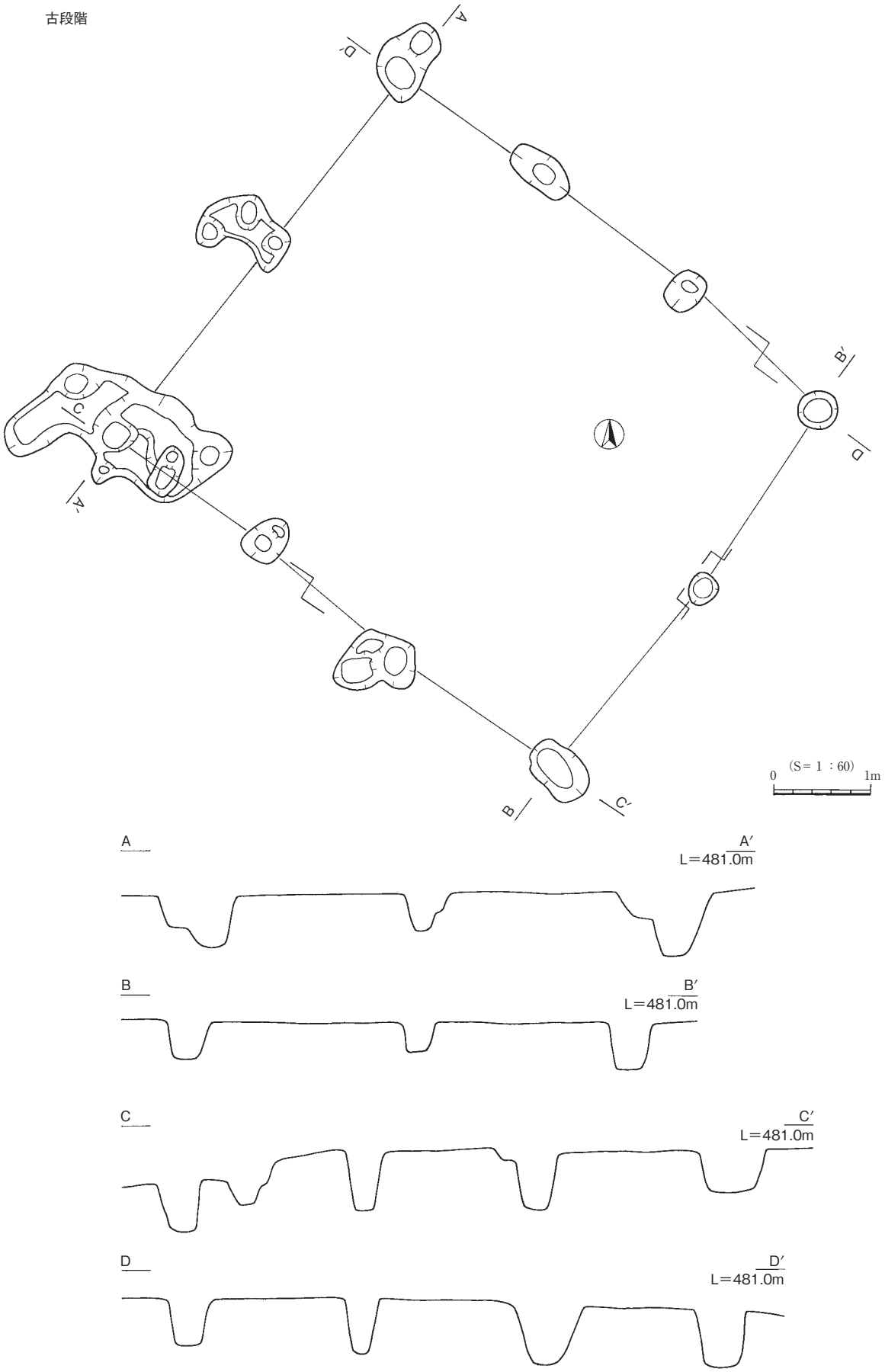


第53図　神社下層建物（新）　平・断面図

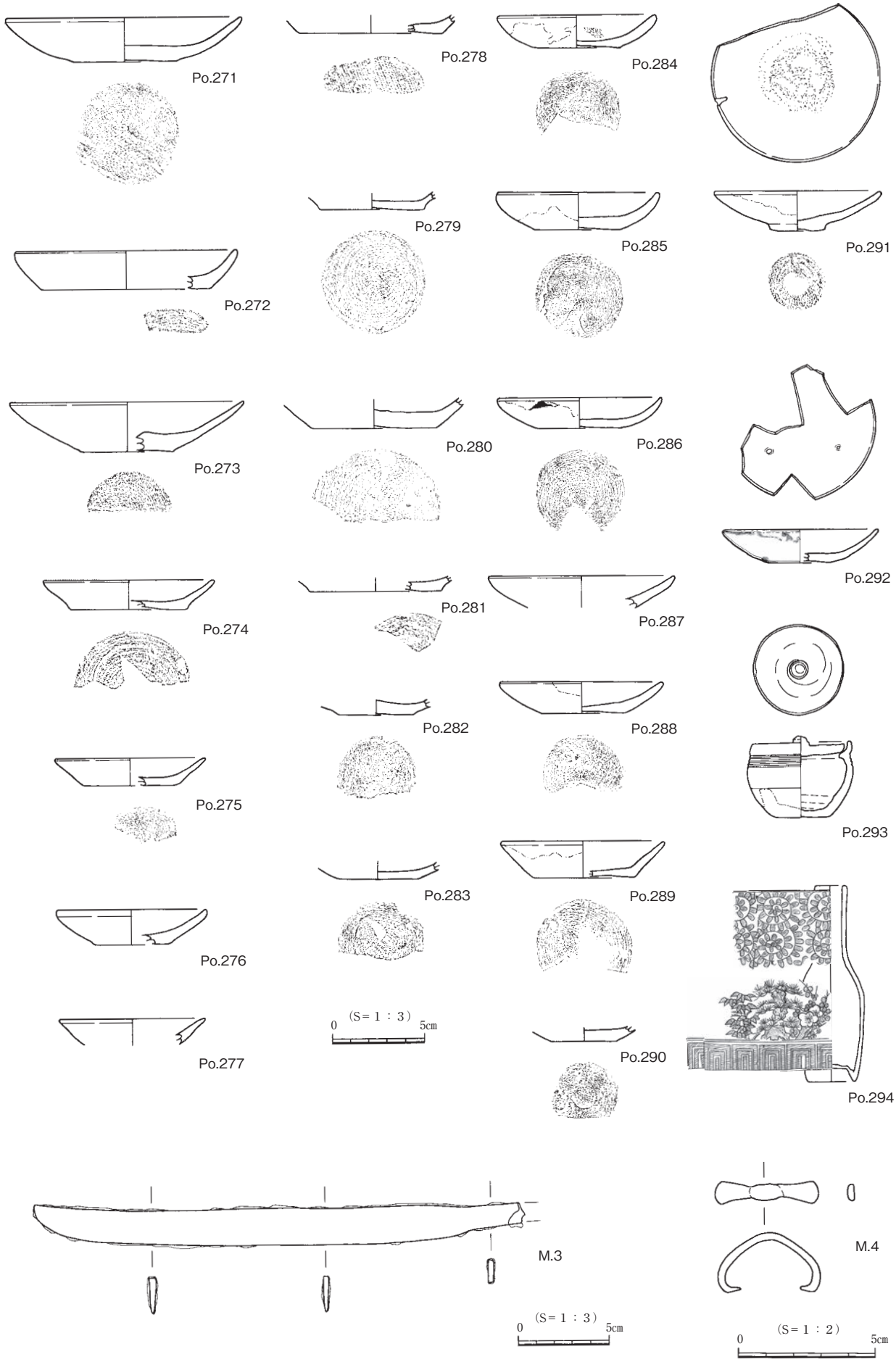


第54図　神社下層建物（中）　平・断面図

古段階



第55図　神社下層建物（古）　平・断面図



第56図　神社建物１周辺出土遺物

神社下層建物・新段階（第53図）

２間×２間と推測される掘立柱建物で、柱筋の通りは悪いが、南東側に同じ間隔で柱穴が張り出している。建物としては異質だが、等間隔で柱穴が配置されることから建物に伴う柱として図化した。

建物の規模は、3.9m×４mで、張り出しの間隔は約２mである。

神社下層建物・中段階（第54図）

２間×２間の掘立柱建物である。柱筋の通りが悪く、建物は歪んでいるが、4.8m×４m程の建物が想定できる。

神社下層建物・古段階（第55図）

３間×２間の掘立柱建物である。建物の規模は、5.8m×4.8mと推測される。

神社建物１周辺出土遺物（第56図）

神社跡の周辺から出土した遺物は、土製や陶器製の灯明皿、磁器製の小壺、短刀と見られる鉄製の刀、刀装具の一部と見られる青銅製品がある。この中で、灯明皿の出土量の多さは、神社遺構に特有の現象と考えられる。これらは表土掘削中に出土したものが多く、直接遺構には伴わないが、鉄製の刀と刀装具以外は近世から明治時代のものと考えられる。

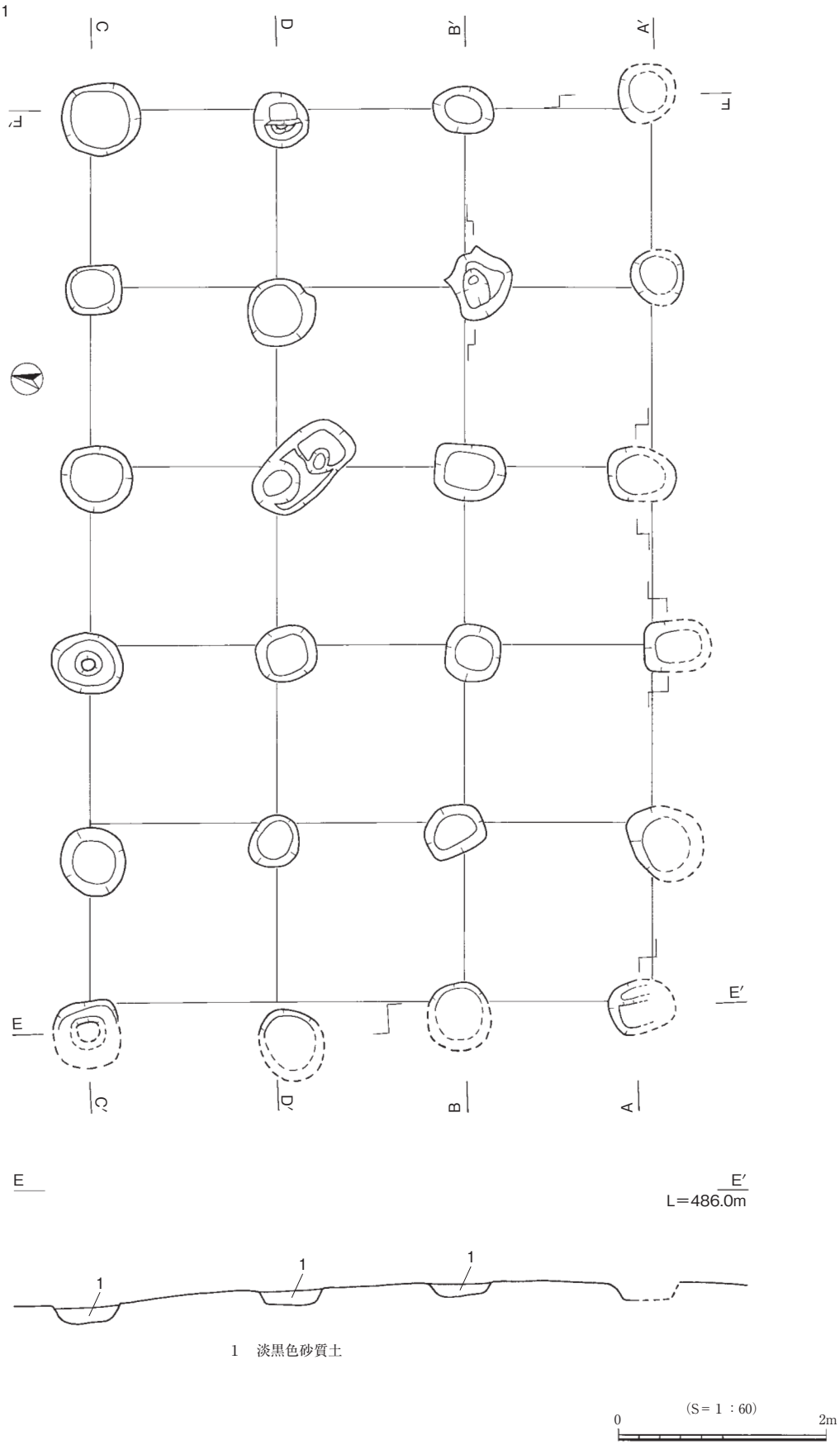
灯明皿は、土製のものと陶器製のものがあるが、いずれも底部は糸切である。土製の灯明皿は、口縁部が緩やかに外反するものや、短く真っ直ぐ立ちあがるものなどバリエーションがある。直径も12㎝前後のものと、８～９㎝前後のものがあり、ある程度の企画性が窺える。Po. 271とPo. 273は、口縁が大きく外反するもので、内面にはナデ調整の痕が残る。Po. 272は、口縁部が短く立ち上がるもので、底部の径が大きくなる。陶器の灯明皿は、口径９㎝程度の小型品が中心で、茶褐色の釉薬が内面にのみ掛けられている。Po. 290は、光沢の無い薄い鉄釉が掛けられた製品で、底部を糸切する。Po. 291は、内面に鉄釉が掛けられた製品で、見込みには重ね焼きの痕跡が残る。高台は直径３㎝で、糸切後に少し窪みを付けている。鳥取県内ではあまり見かけない製品である。Po. 292は、復元口径8.2㎝の小型品で、釉薬は淡い茶灰色を呈する。内面には目跡が残る。磁器の小壺（Po. 294）は、徳利のミニチュアと考えられるもので、型紙刷りの製品である。

鉄製の刀（M. 3）は、神社の東側斜面の表土掘削中に出土したもので、刀身は緩い反りがある。長さ26.8㎝の鍛造品で、X線写真でも目釘穴は認められなかった。M. 4の刀装具と見られる青銅製品は、長さ2.2㎝、幅3.7㎝の「C」字形の製品で、端部が尖っていることから、鞘の装飾に用いられたものか。いずれも神社の周辺から出土していることから、青瀧神社や石組遺構１、銭集中に伴うものではないか。

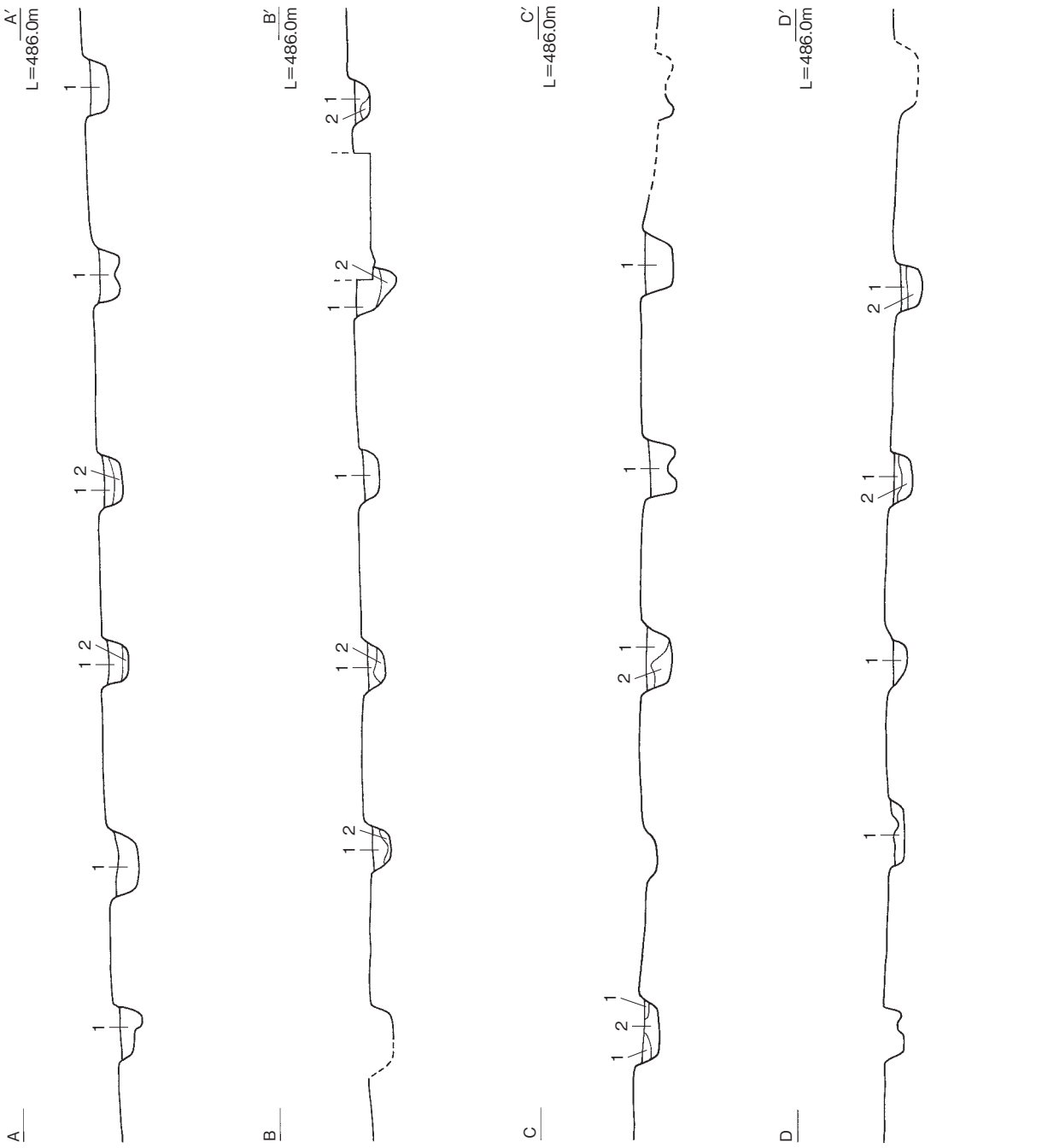
建物跡１～５（第57図～第61図）

16区～17区で検出した建物跡群である。柱穴内から鉄滓以外の遺物が出土しなかったため、建物の建築時期を特定することができないが、周辺の遺物包含層から出土した陶器から、中世末から近世初頭頃までに建てられたものと考えられる。

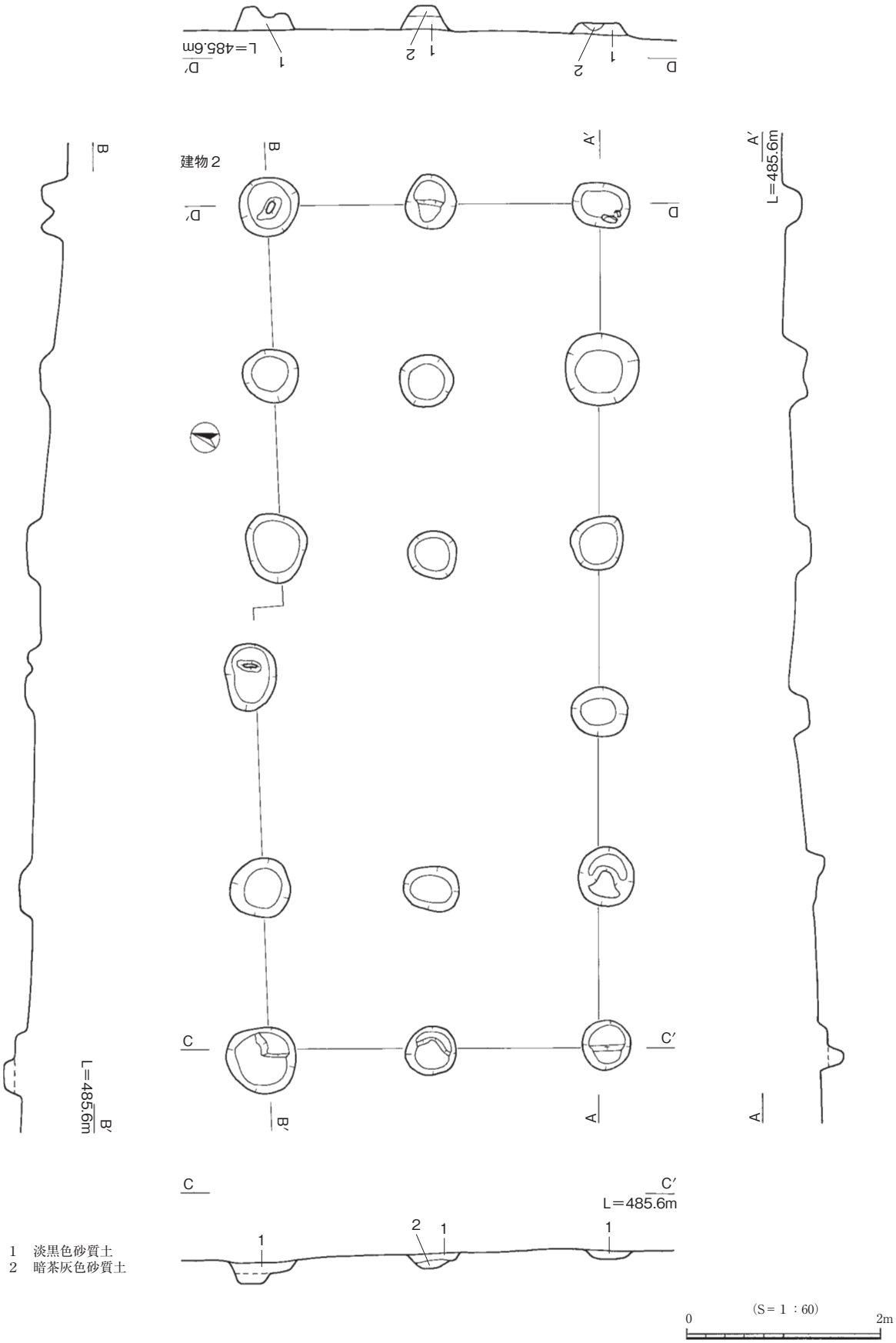
建物１



第57図　建物１　平面図

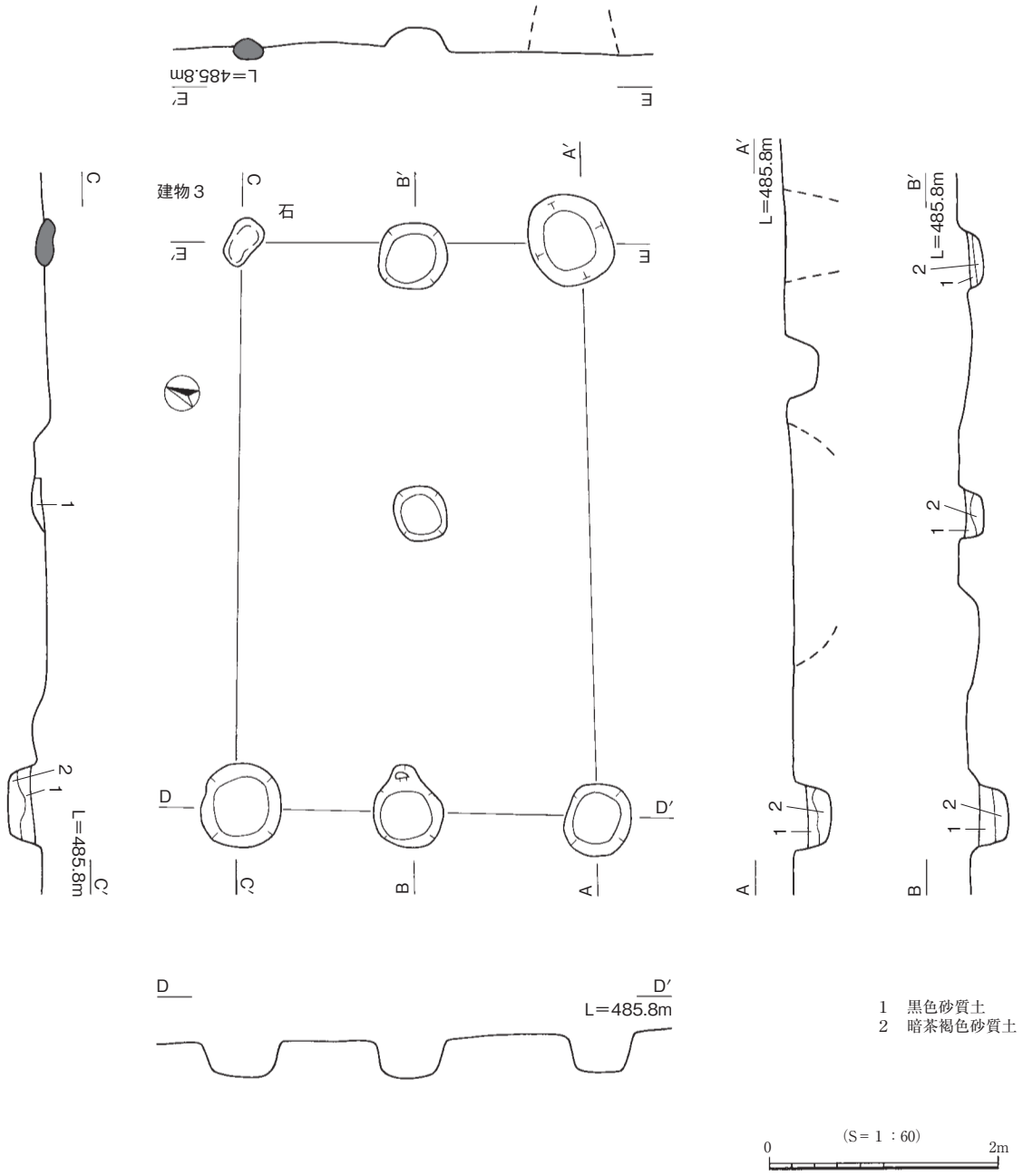

A
A′
L=486.0m
B
B′
L=486.0m
C
C′
L=486.0m
D
D′
L=486.0m
建物１
F
F′
L=486.0m
1　黒色砂質土
2　明茶色砂質土（硬く締まる）
(S=１：60)
0
2m

第58図　建物１　断面図



1　淡黒色砂質土
2　暗茶灰色砂質土

第59図　建物２　平・断面図

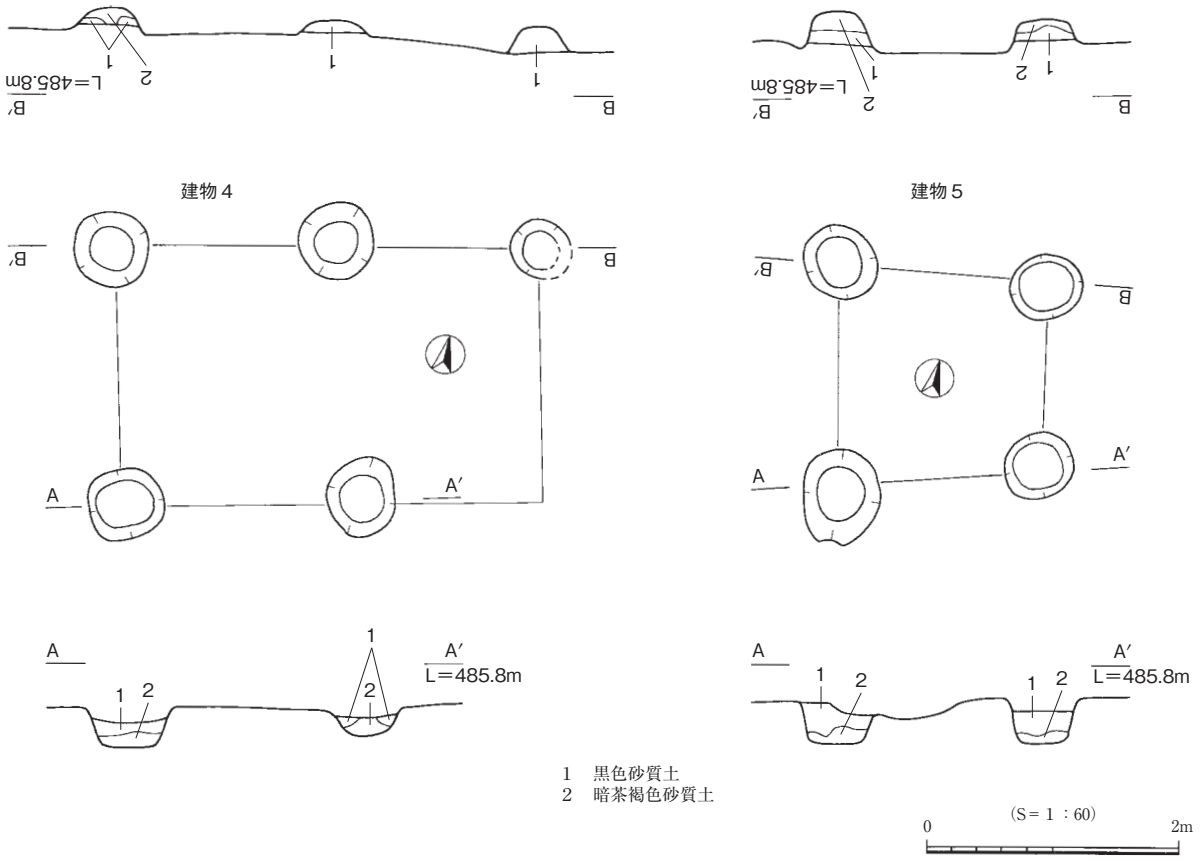


第60図　建物３　平・断面図

建物跡１（第57・58図）

K-17区で検出した、長さ９m、幅5.6m、５間×３間の規模を持つ大型の総柱建物である。建物の南側の柱列は柱筋の通りが悪く、検出した柱穴の掘形も、円形や楕円形で整っていない。柱穴の直径は50～70cm、深さは10～30cm程度と浅いものが多い。かなりいい加減な造りの建物という印象を受ける。柱穴の検出面では柱痕が確認できなかったが、柱穴の底面中央部に堅く締まった土があることから、この建物は一般的な掘立柱建物では無く、浅い穴に石や床束となる木材を置き、その上に根太を渡して上屋を建てる床束の建物を想定した。

この建物の性格については、建物の周囲から陶磁器などの遺物がほとんど出土しなかったことから、一般的な生活を営む住居ではなく、倉庫など特殊な用途に使用された建物と推測される。



第61図　建物４・５　平・断面図

建物跡２（第59図）

J-16区で検出した、長さ8.8m、幅3.5m、５間×２間の総柱建物である。この建物も建物跡１と同様に柱穴の掘り込みが浅く、柱筋の通りも悪い。建物１とほぼ同じ方位に建てられていることから、同時期に建てられたものと考えられる。

建物跡３（第60図）

J-17区で検出した、１間×２間の建物である。建物の規模は、長さ５m、幅３m程度で、切妻の建物と推測される。北東の角部は柱穴の掘形が無く、石を置いて礎石としている。また、南東の角部は攪乱により掘形が消滅している。

建物跡４（第61図）

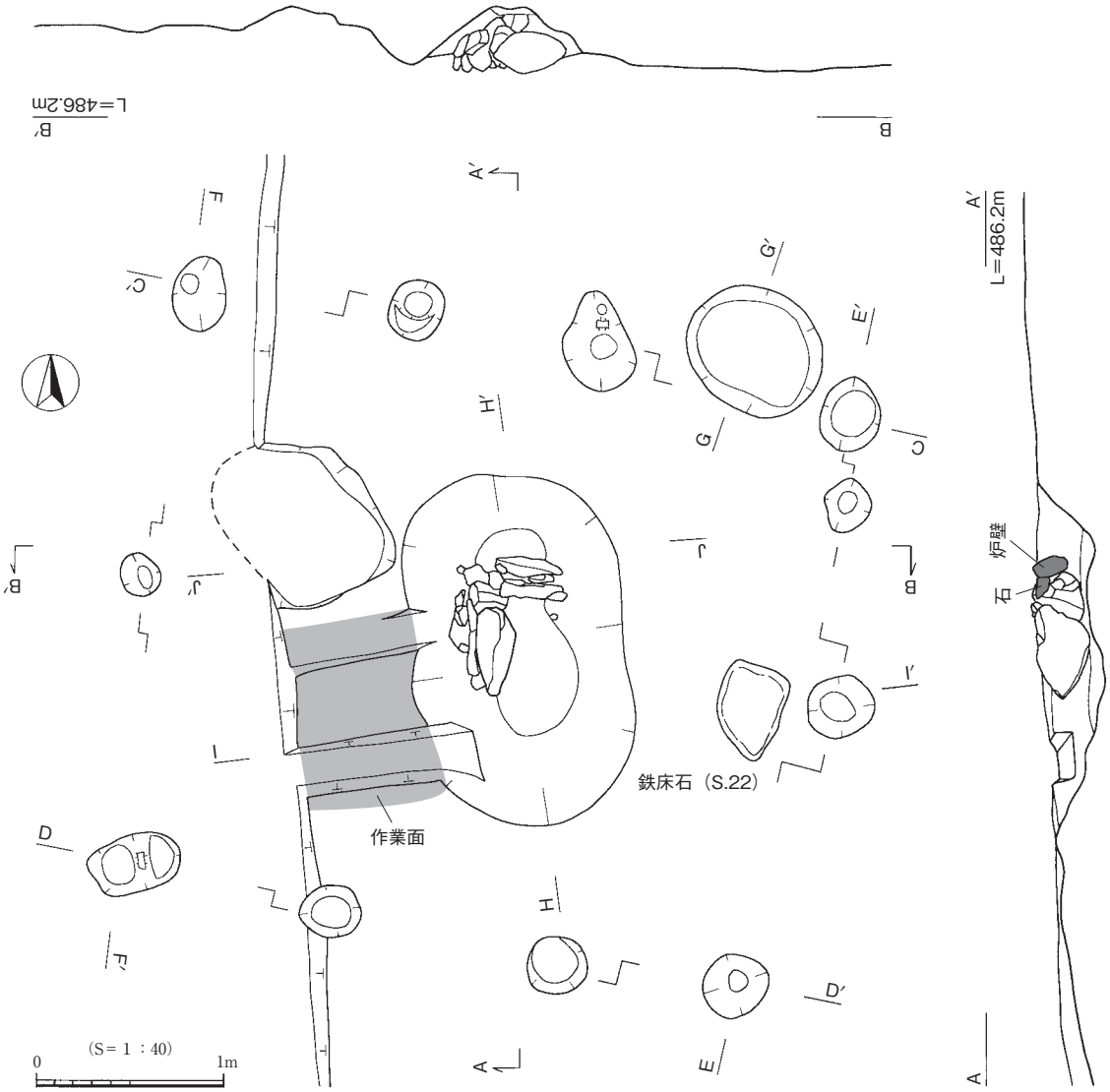
J-16区で検出した２間×１間の建物跡である。建物の規模は、3.4m、幅２mと推測される。

建物跡５（第61図）

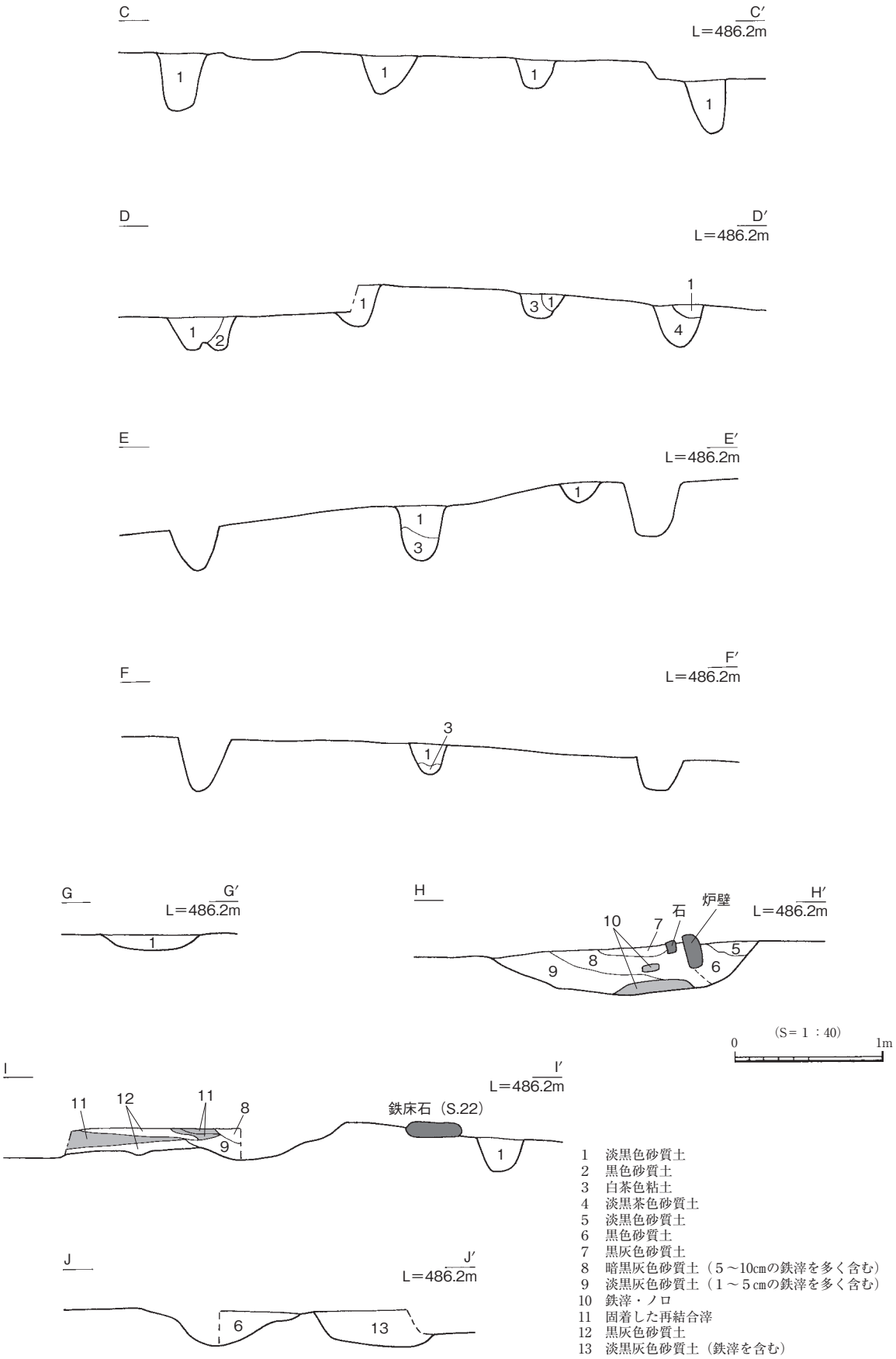
建物跡３の内部に重複している、１間×１間の建物である。柱穴の切り合いが無いため建物３との前後関係が分からないが、建物の方位が揃っていることから、建替の時期が大きく離れることは無いと見られる。

鍛冶炉１（第62図～第69図）

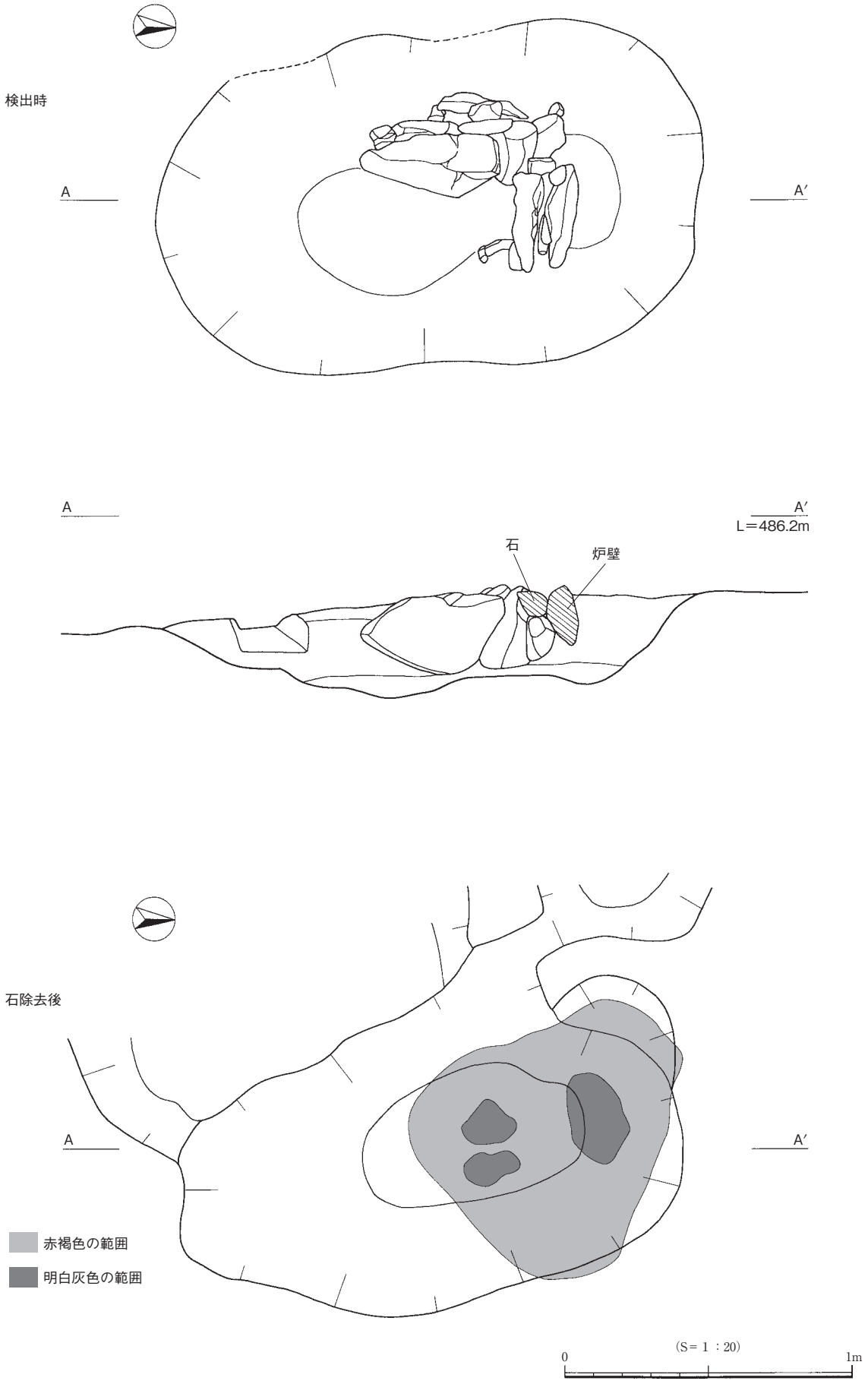
J-20区で検出した、鍛冶炉である。現地では、表土直下から礫の集積があったため、これを除去したところ、礫の下層にあった平石（S. 22）の西側に焼土の詰まった土坑と、土坑の西側に面的に固結した鉄滓の広がりが認められた。この土坑は、焼けた石を挟んで繋がっており、一連の遺構と判断された。土坑の底面は北側が最も被熱しており、そこから南側の石の下はトンネル状となり連結している。石は土坑内に「L」字形に配置されているが、北側のトンネル部分の石が最も強く被熱している。土坑内に堆積している焼土は鉄滓を大量に含んでおり、西側には鉄滓が固まってできた鉄床面（作業面）が形成されている。この土坑内と作業面の土は、全量を持ち帰り、水洗選別を行った。また、土坑を取り囲むように柱穴が巡っていることから、この遺構は上屋を持つ鍛冶炉と推測された。



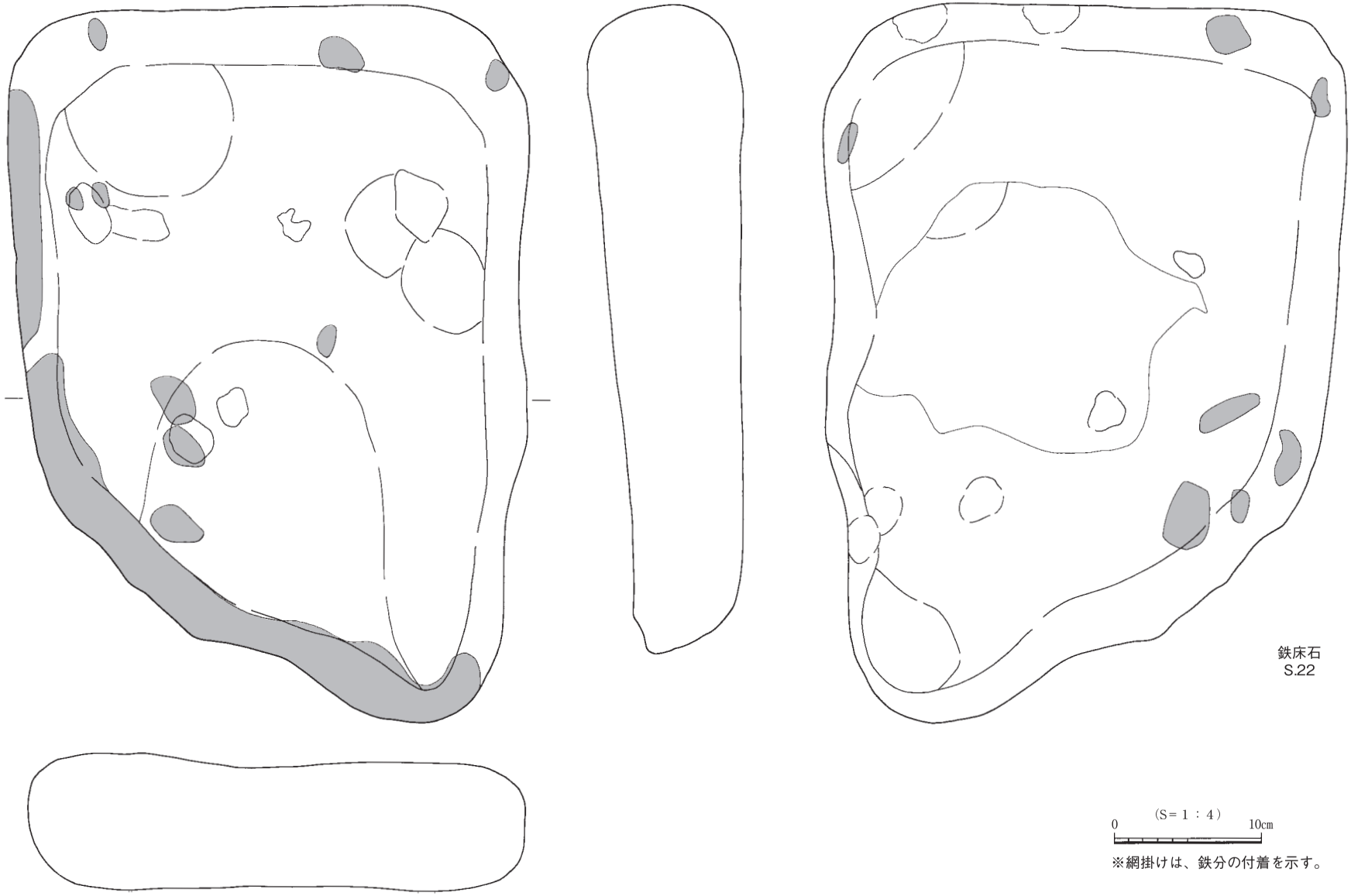
第62図　鍛冶炉１　平・断面図



第63図　鍛冶炉１　断面図

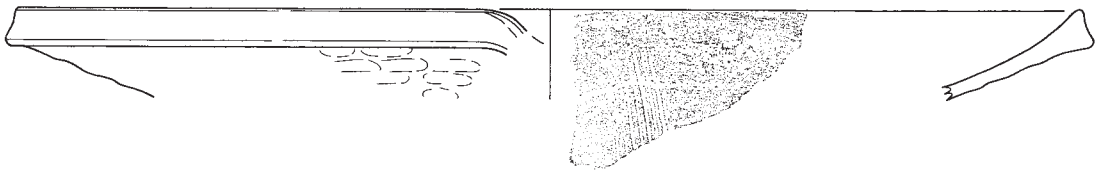


第64図　鍛冶炉１　底面の被熱状況図

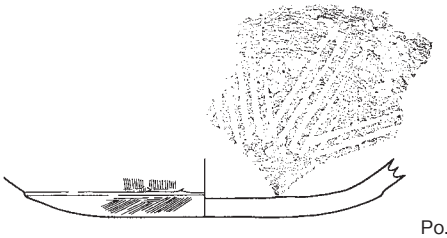


※網掛けは、鉄分の付着を示す。

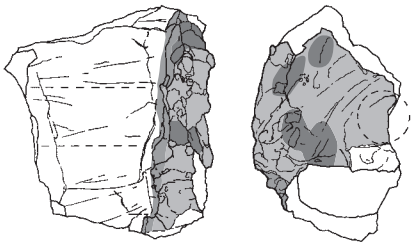
第65図　鉄関係遺物図①



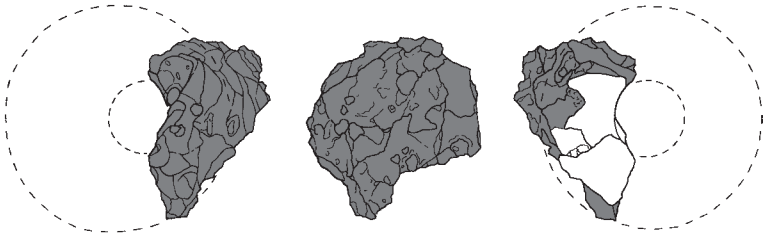
Po.295



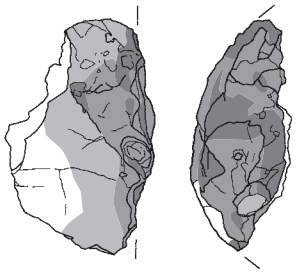
Po.296



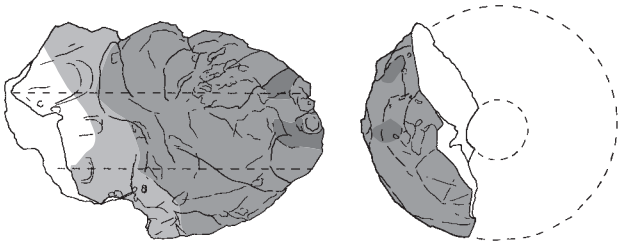
Po.297



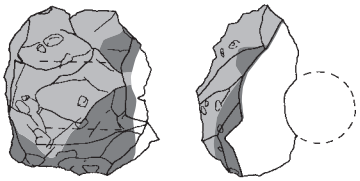
Po.298



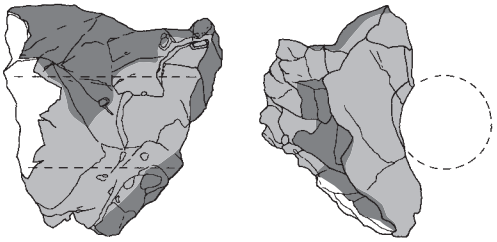
Po.299



Po.300



Po.301



Po.302

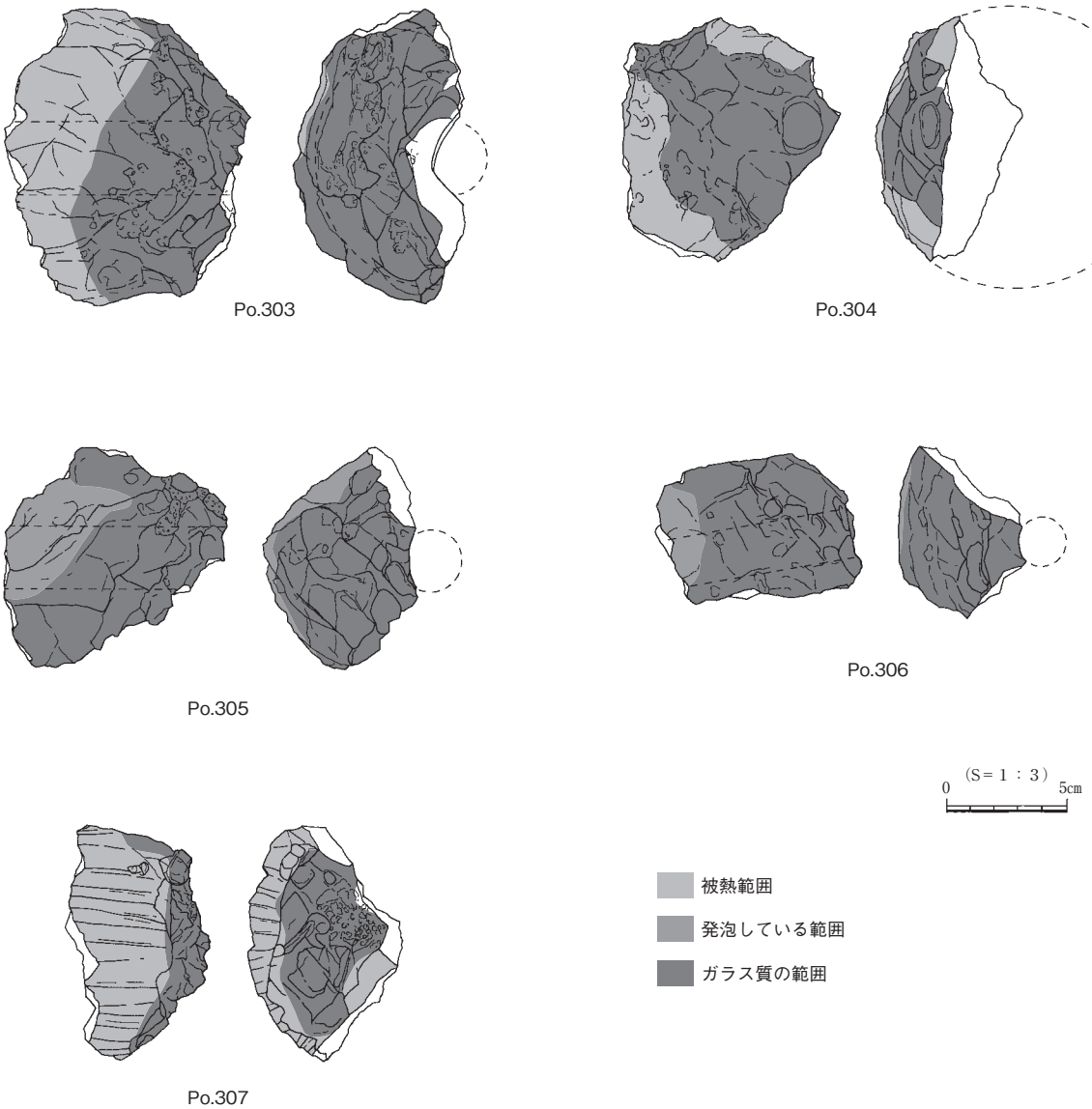
被熱範囲

発泡している範囲

ガラス質の範囲

0 (S=1：3) 5cm

第66図　鉄関係遺物図②

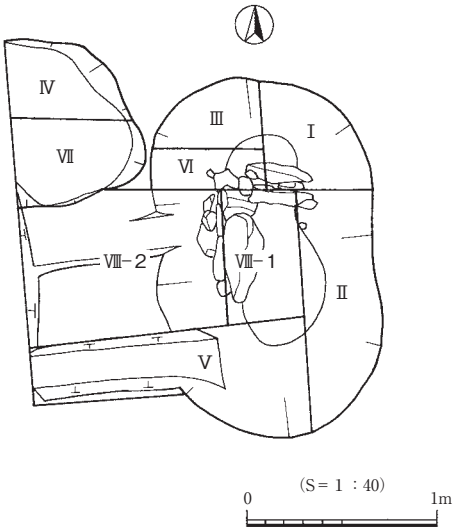


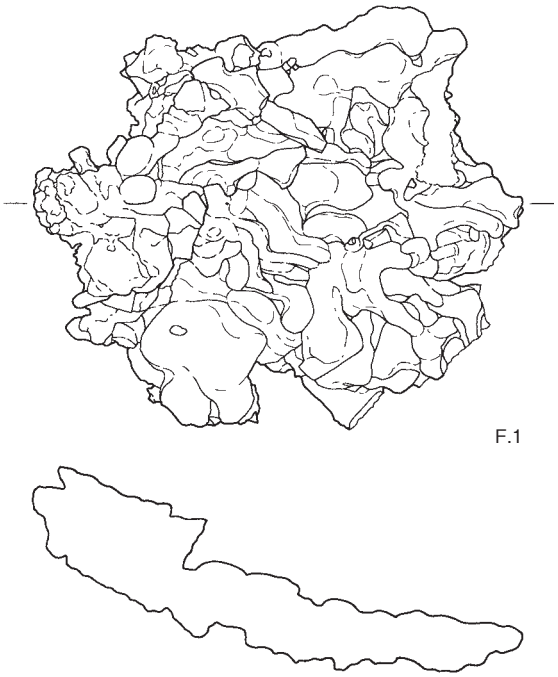
第67図　鉄関係遺物図③

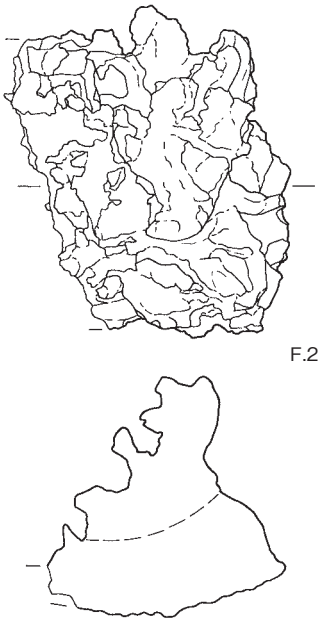
鍛冶炉の規模は、長さ1.9m、幅1.1mの楕円形で、底部は北側が深さ30cm、南側が深さ35cmで、南側の方が深い。鍛冶炉を南北に分ける石は、長さ35cm、幅10cmで、表面は赤く変色している。この石の北側には、表面に鉄滓が付着して一部が溶解した炉壁がそのまま残されている。このことから、土坑の北側で強く加熱されて生じた排滓が、石の下のトンネルを通って南側へと流れ込む構造と判断された。同様の事例は、鳥取県倉吉市関金町の大河原遺跡や島根県飯南町の板屋Ⅲ遺跡でも確認されている製錬鍛冶炉と同様のものと推測される。

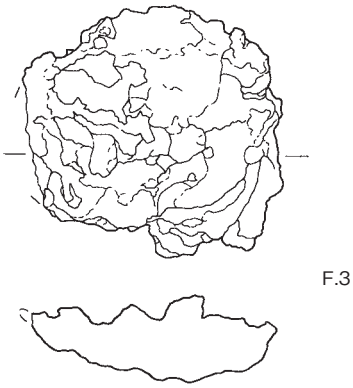
鍛冶炉の西側に広がる鉄床面は、一部断割りによって消滅しているが、東西1.4m、南北１mの範囲に広がっている。鍛冶炉の検出面の北西側には鞴座と見られる、一辺が１m、深さ25cmの長方形の土坑がある。鍛冶炉を覆う上屋は、２間×３間の切妻の建物である。各柱穴の規模は、直径20～40cm、深さ20～40cmで、北西側に長さ80cm、幅65cm、深さ５cmの楕円形の土坑と、直径25cm、深さ７cmの小ピットが掘られているが、ここからは鉄滓以外の遺物は出土しなかった。また、この建物の高さや壁の有無に関する情報は得られなかった。

鍛冶炉のサンプル採取地点



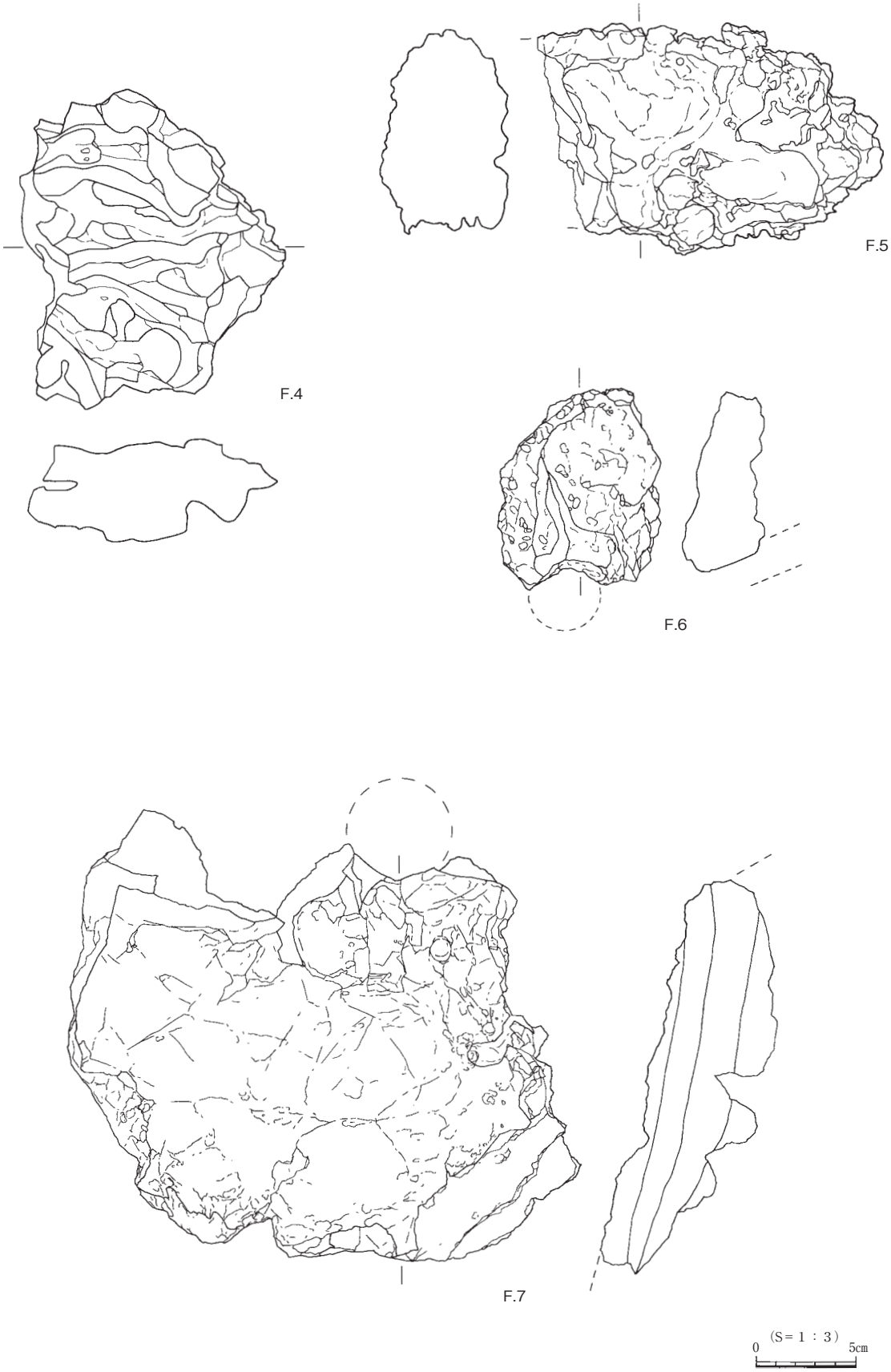






0 (S＝1：3) 5cm

第68図　鉄関係遺物図④



第69図　鉄関係遺物図⑤

この遺構の周辺から出土した遺物は、鉄床石と見られる平石、土製の擂鉢、鞴の羽口、鉄滓である。この他には、鍛冶炉の周辺から鞴の羽口や鉄滓が出土した。

鍛冶炉１に直接伴う遺物は、鉄床石（S. 22）と鞴の羽口（Po. 297）、鉄滓（F. 1～F. 3）である。鉄床石は、長さ49. 1cm、幅35. 6cm、厚さ10. 6cmの閃緑岩製で、重量は30kgを超える。表面は鍛打により磨滅しており、表面には鉄分が付着している。鍛冶炉の検出作業中に出土した土製の擂鉢（Po. 295・Po. 296）は、破片のため器高は不明だが、口径40cmを超える大型品で、底部の見込みには放射状に５条の擂目が施されている。また、底部の外面は黒化しており、ミガキ調整がなされている。鞴の羽口は11点出土した。鍛冶炉の中から出土したPo. 297は羽口の先端部の破片で、外面は灰白色に変色しており先端には鉄滓が付着している。直径が10cm程度の大型品と推測される。Po. 298～Po. 306は、18区から19区にかけて出土したもので、この鍛冶炉１と直接関わるものか断定できないが、口径の大きなものが主体となっている。Po. 307は、鍛冶炉の検出作業中に出土した羽口で、外面に簾状の工具を巻きつけて整形した痕跡が残る。

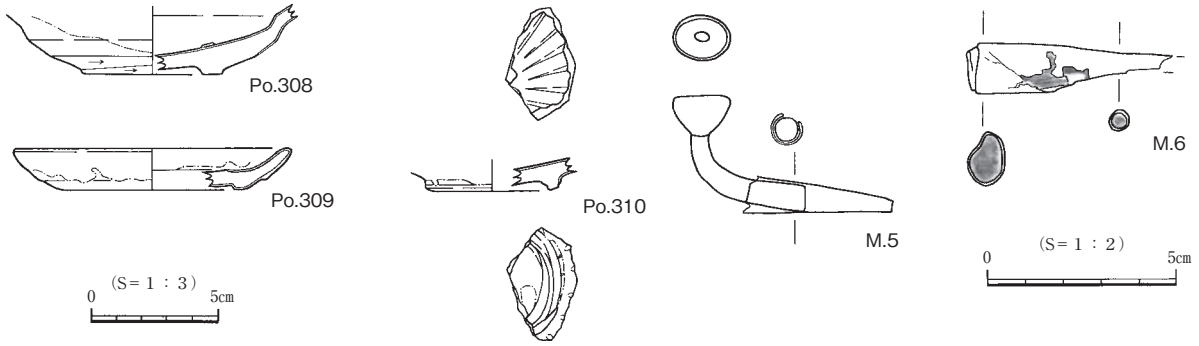
鉄滓は、F. 1～F. 3が鍛冶炉の中から出土したもので、F. 4～F. 6は鍛冶炉の北側から出土したものである。F. 1は、鍛冶炉の流出孔の出口に残っていた流動滓である。F. 2とF. 3は椀形鍛冶滓。F. 4は流出溝滓。F. 5は流出孔滓。F. 6は、青瀧神社の周辺から出土した炉壁で、下部に通風孔がある。F. 7は17区から出土した鍛冶炉の炉壁で、上部に通風孔がある。断面を見ると、被熱した炉壁が３層に分かれていることから補修しながら使用したものと考えられる。

この遺構の年代は、出土した擂鉢から16世紀後半から17世紀前半のものと推測される。

中近世の遺物（第70図）

中近世の遺物のうち遺構に伴わないものは陶磁器、キセルなどが９区～13区の第１層から出土している。この付近は顕著な遺構が認められなかったことから、近世以降に畑などに利用されていた場所と考えられる。

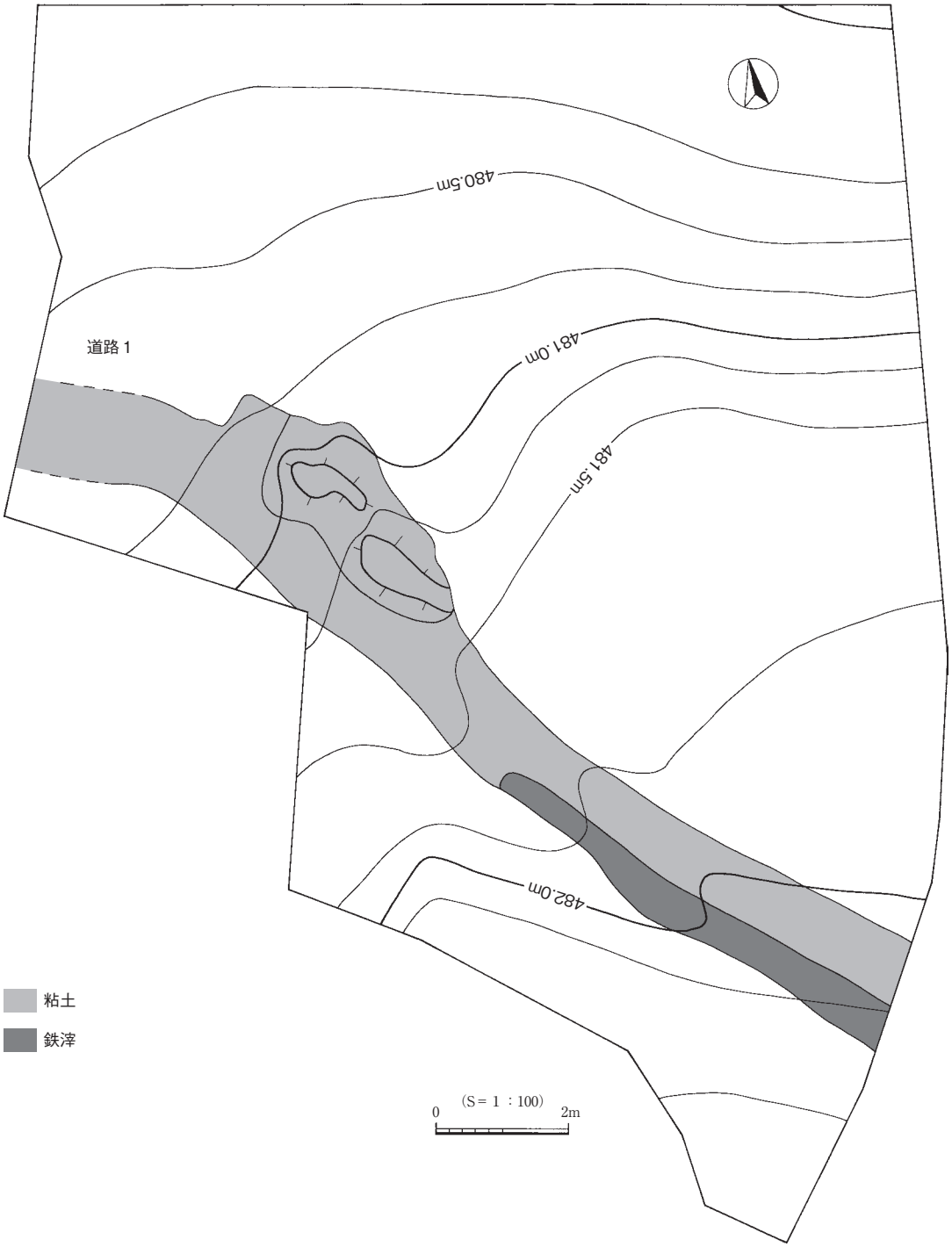
Po. 308は、唐津焼の皿である。見込みに胎土目積の跡が残る。Po. 309は、瀬戸美濃系の皿。Po. 310は瀬戸美濃系の菊皿。いずれも16世紀後半のものと考えられる。M. 5は、キセルの雁首に吸口が刺さったものである。M. 6は煙管の吸口で、内部には羅宇が残存している。



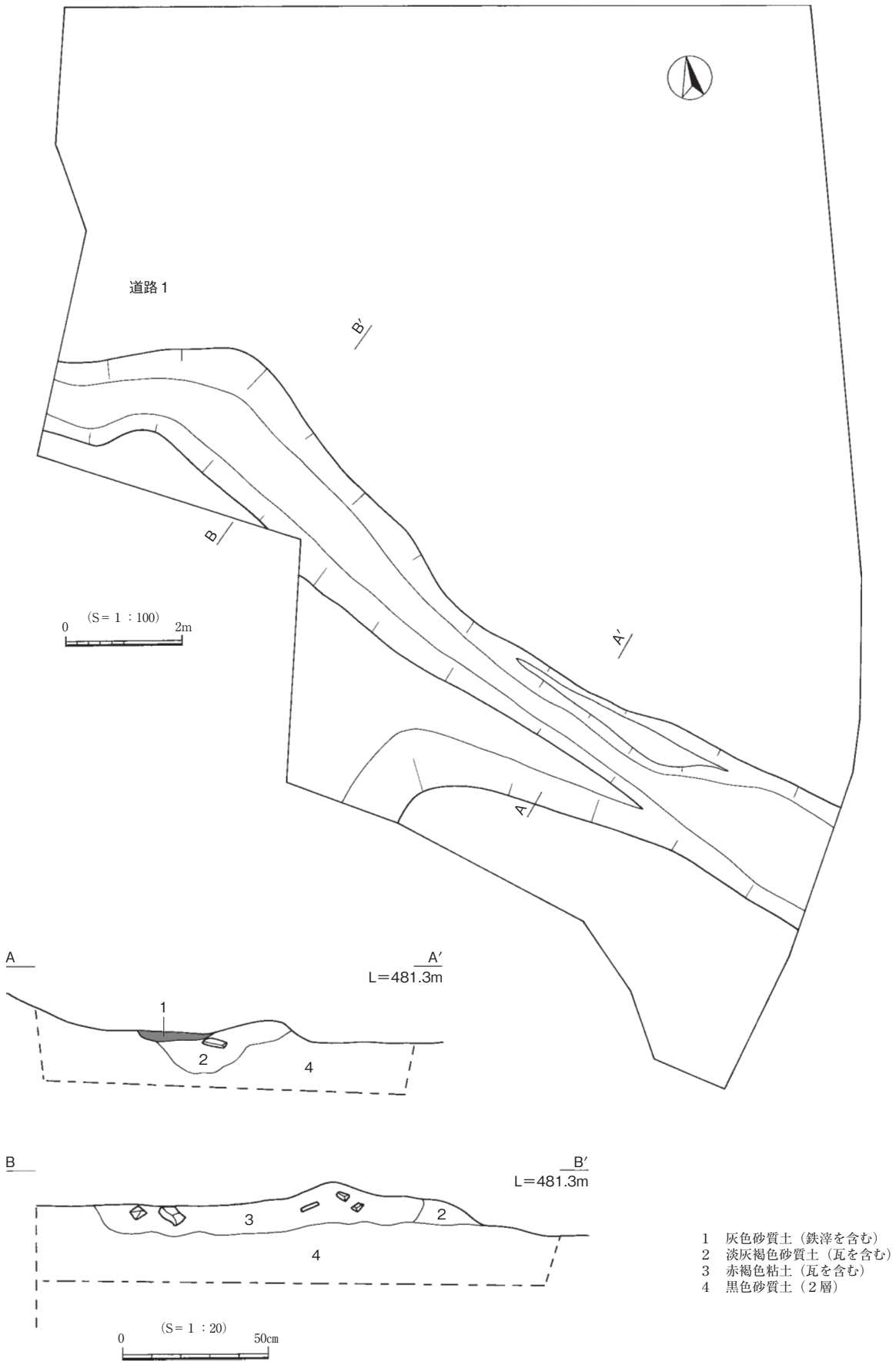
第70図　中近世の遺物

第４節　近代の調査

近代の遺構は、J−９区の表土直下で検出した道路１、その下層の第１遺構面で検出した３基の土取穴と性格不明の石積遺構２である。また、道路１の埋土からは解体された達磨窯の部材と、焼成に失敗した瓦の破片が大量に見つかったことから、調査地のすぐ近くで燻瓦が生産されていたと考えられる。



第71図　道路１（検出面）　平面図



１　灰色砂質土（鉄滓を含む）
２　淡灰褐色砂質土（瓦を含む）
３　赤褐色粘土（瓦を含む）
４　黒色砂質土（２層）

第72図　道路１（完掘）　平・断面図

道路１（第71・72図）

J−９区の表土直下で検出した道路１は、神社へ登る道の一部と考えられ、そこから東側の畑などへ通じていたと考えられる。表土を除去した際に、焼け歪んだ瓦や瓦窯の部材、堅く焼けた粘土隗と土に還りかけている粘土が線状に延びている状況を確認したため、丘陵を東西に横切る道路と推測した。

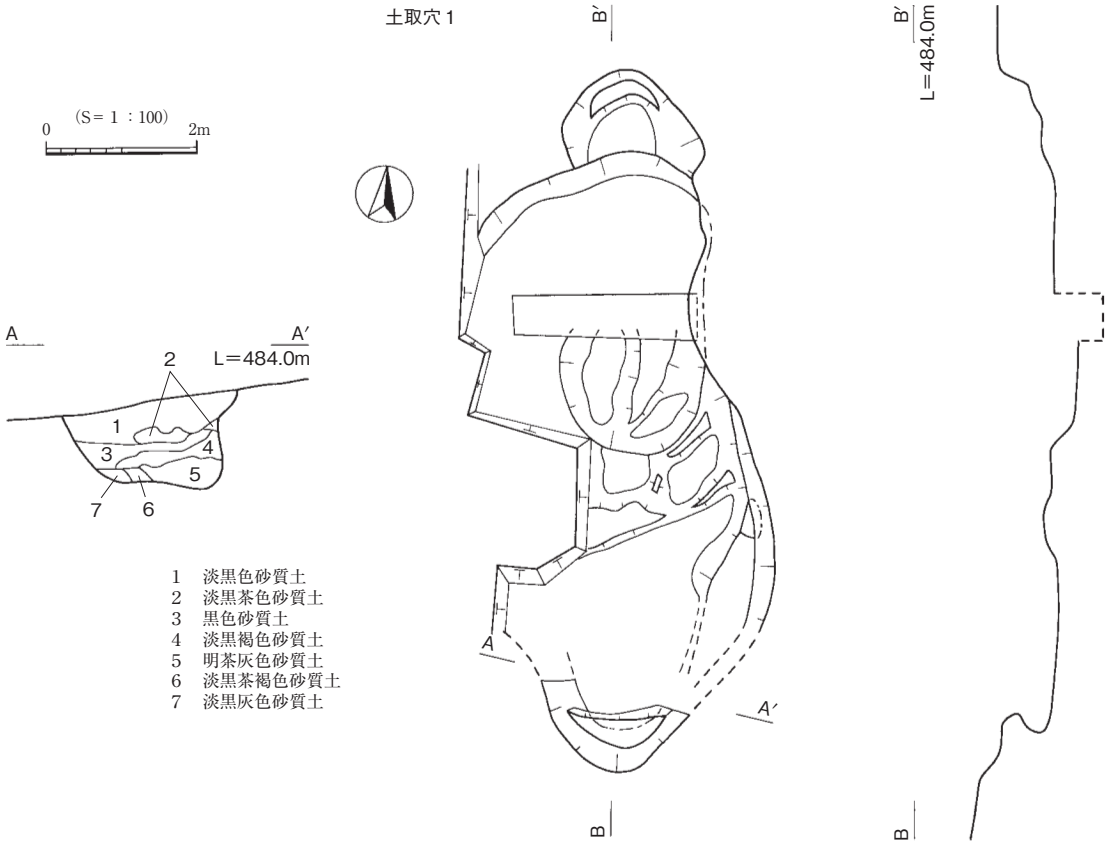
道路の規模は、検出面の長さ16m、幅１～３mあり、北西から南東に向かって上り坂となっている。道路面は、瓦の失敗品や窯の部材等を粘土で突き固めた三和土状を呈しており、かなり硬化している。道路面上には、部分的に鉄滓や礫が充填される窪みが所々に見られたため、道路面に凹凸が出来た際には窪みに鉄滓や礫を充填するなどして補修しながら使用されていたことが窺える。また、道路面の粘土を除去すると、下層が幅１～２m、深さ20㎝程の断面「U」字形の溝状になっていることから、道路を作る際に溝を掘ってから瓦窯の部材を敷き詰めて道路を造成したと考えられる。

この道路が作られた年代については、達磨窯廃絶後の明治時代後期以降と推測される。

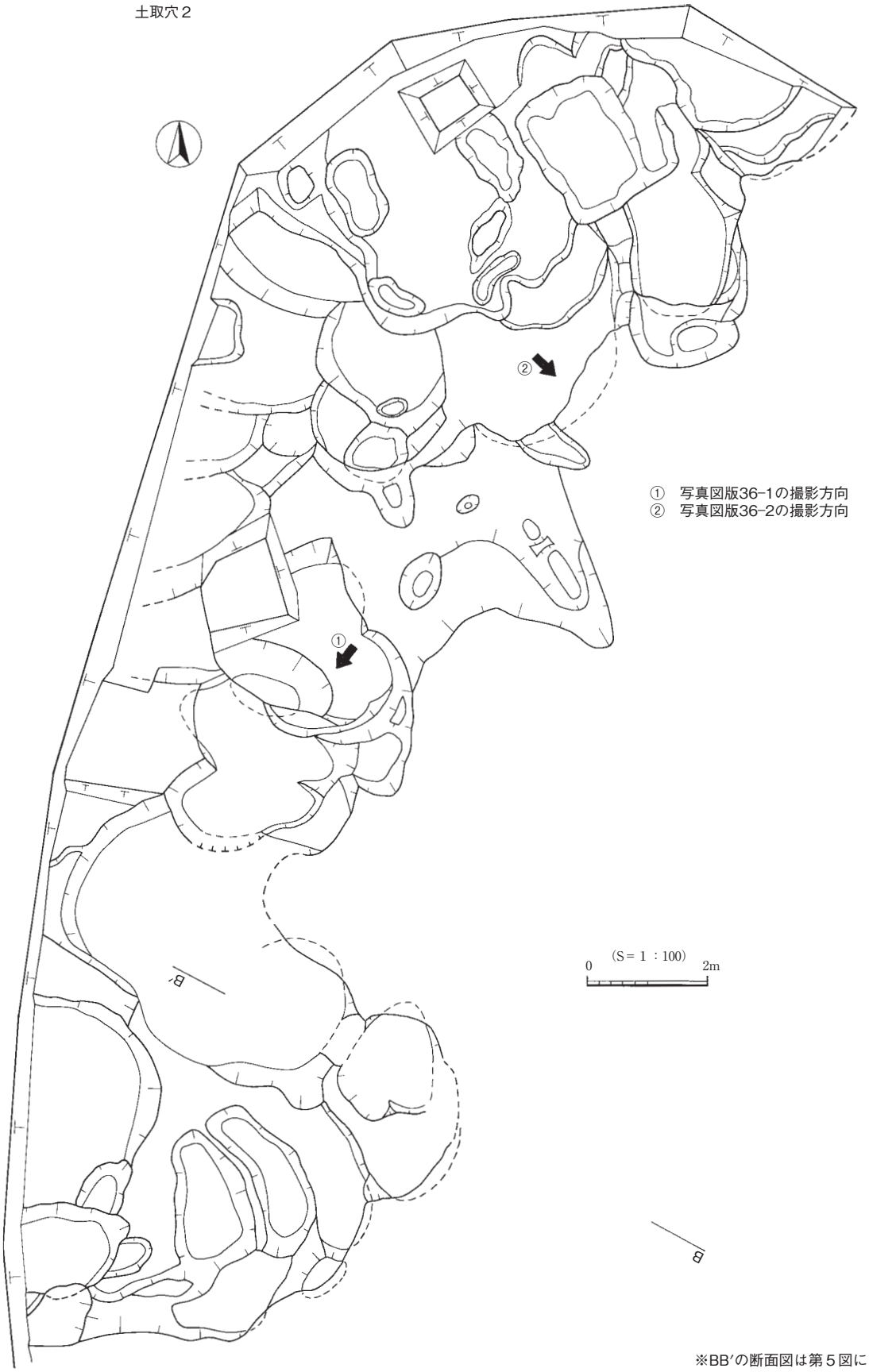
土取穴１（第73図）

L−13区で検出した、土取穴と考えられる遺構である。遺構の規模は、長さ9.2m、幅3.5m以上、深さ1.3mを測る。土坑の北側は階段状になっており、北から南へ向かって掘り進めていったと考えられる。

遺構内から時期を特定できる遺物が出土しなかったため、この遺構が掘削された年代を明らかにすることが出来なかったが、後述する土取穴２と同じく粘土採掘坑と推測される。

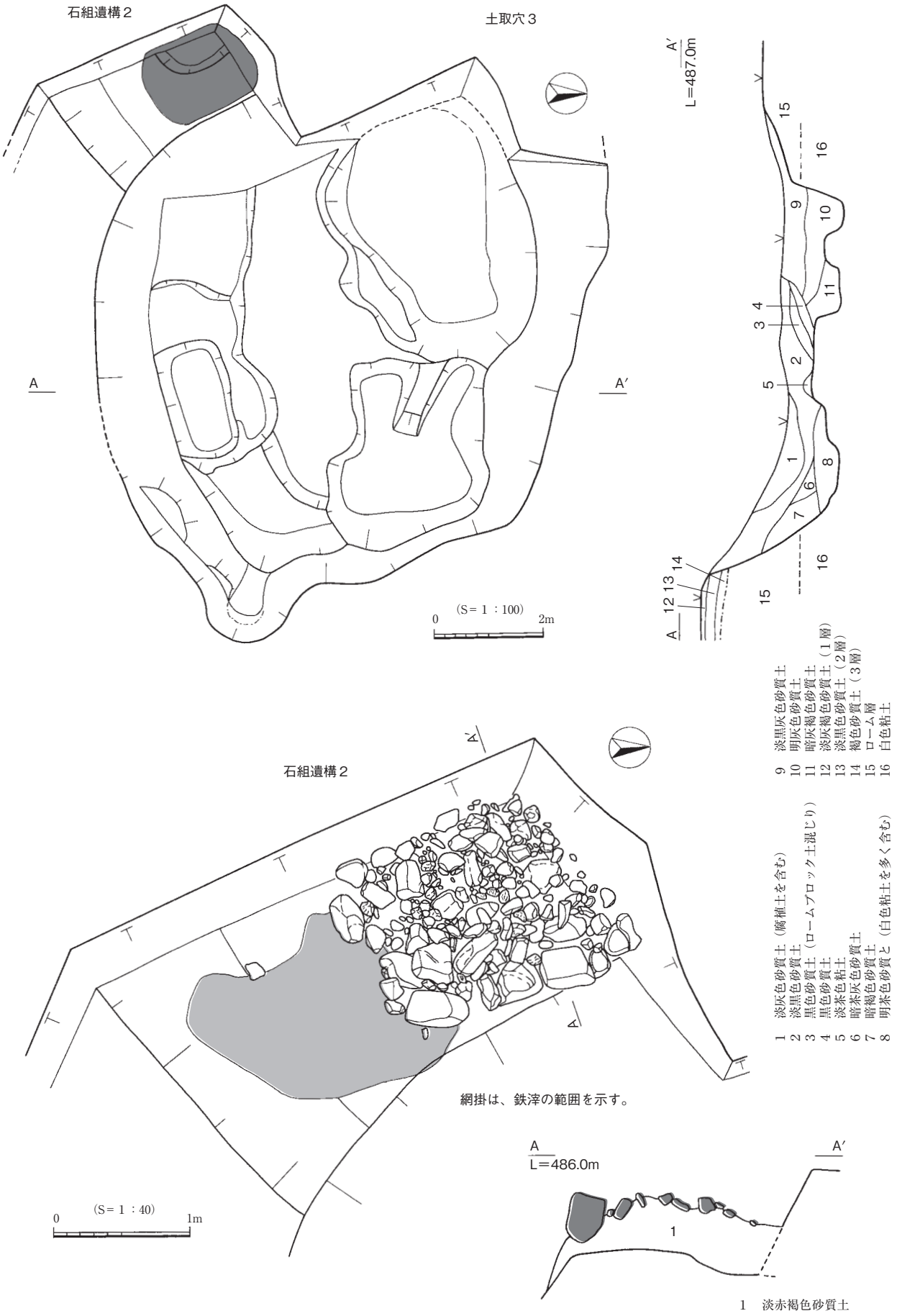


第73図　土取穴１　平・断面図



※BB′の断面図は第５図にあり。

第74図　土取穴２　平面図



第75図　土取穴３・石組遺構２　平・断面図

土取穴２（第74図）

９区から10区の西側で検出した、大型の土坑である。長さ23m以上、幅７m以上の規模があり、深さも地表面から1.2m以上を測る。土坑の底面は、礫を含む白色粘土層で掘削を止めていることから、ローム層中に堆積している粘土を採取する目的で掘られた粘土採掘坑と推測される。周辺では瓦製作に関わる資料が数多く出土していることから、瓦製作に伴って掘削されたものであろう。

土坑の底面は凹凸が激しく、複雑な切り合いが想定されることから、粘土採集を行うための掘削は長期に亘って複数回行われたものと考えられる。また、壁面には写真図版36−２のような掘削痕が所々に見られることから、鋤状の工具で少しずつ壁面を削りながら掘削したことが分かる。

この遺構の年代については、瓦製作に関わる粘土採掘坑と考えられることから、明治時代前半から後半にかけて掘削され、埋没したものと推測される。

土取穴３（第75図）

J−18区で検出した、長さ９m、幅10m以上、深さ１〜2.5mを測る大型の土坑である。この土坑の西側には、石組遺構２がある。調査前には、たたら製鉄に関わる鉄池のような遺構を想定していたが、底面がフラットになっていないことから、粘土採掘の跡と推測した。

この遺構の年代については、遺構に伴う遺物が無いため時期を特定することが出来ないが、近世以降のものと推測される。

石組遺構２（第75図）

K−18区の土取穴３の西側で検出した石組遺構である。検出した範囲は1.5m四方だが、西側と北側はすぐに崖となっていることから一辺２m四方の規模と考えられる。石の組み形は、土取穴３のある東側に大きな石を列状に並べて土を盛り、その上に小さな石を敷き並べている。遺構の南側には鉄滓と焼土が堆積していることから、製鉄に関連する何らかの遺構であろう。

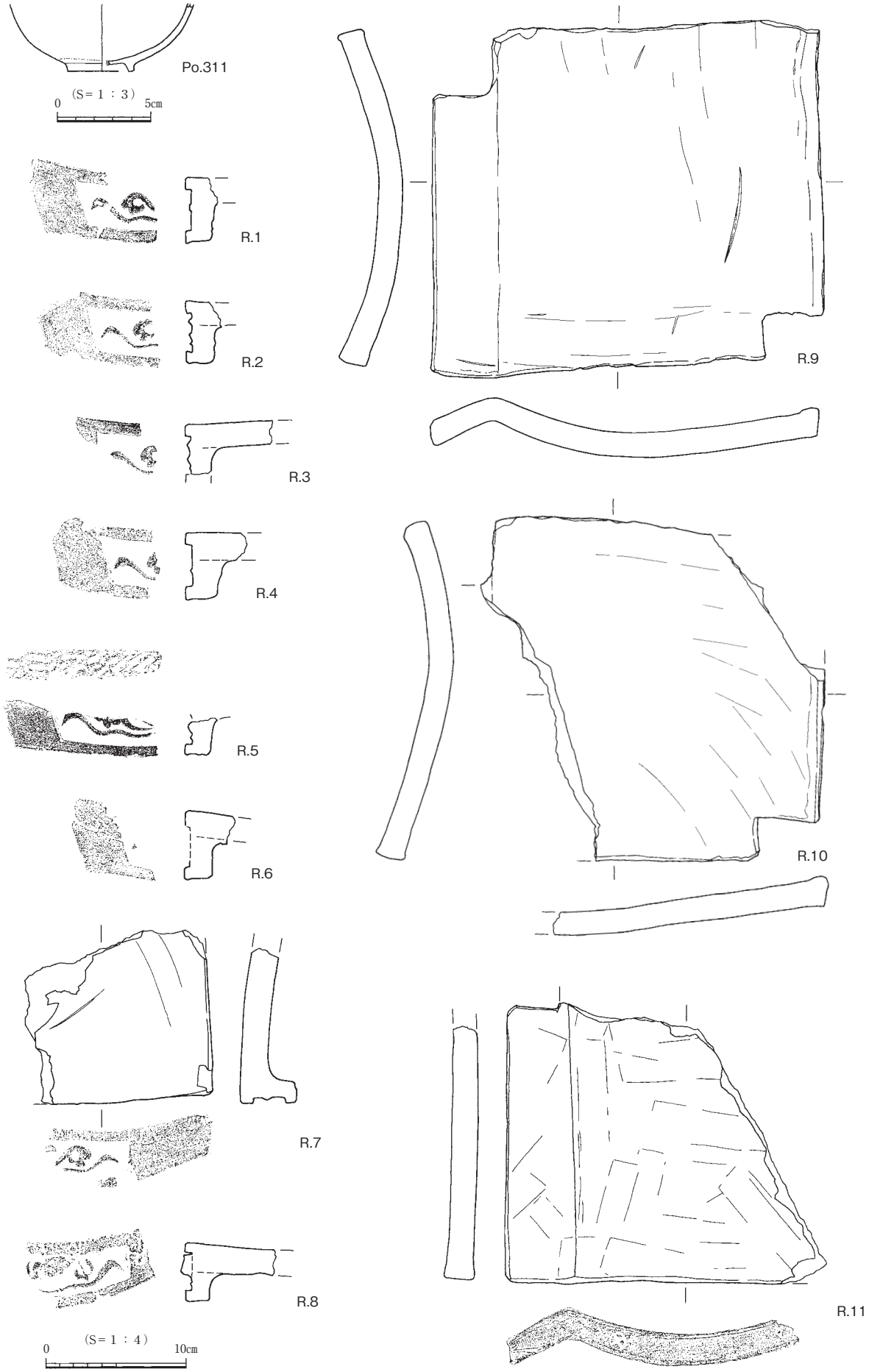
この遺構の年代については、土取穴３との前後関係がはっきりしないため時期は不明だが、近世以降のものと考えられる。

瓦窯関係遺物（第76図〜第87図）

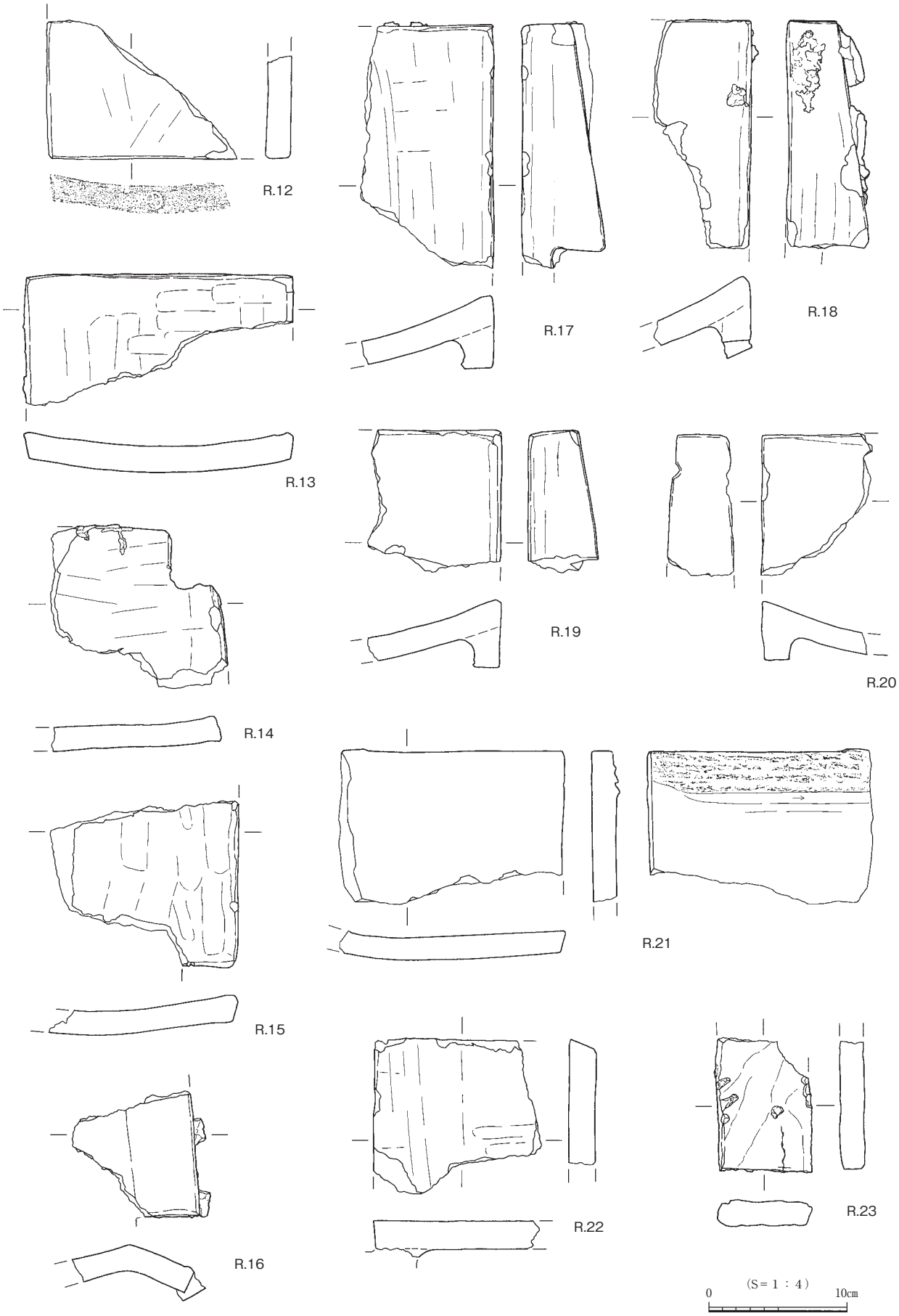
瓦窯に関係する遺物は、道路１の基礎に埋め込まれていたものと、丘陵上で表採した遺物に分かれる。Po. 311は、道路の埋土中から出土した、近世後期のものと見られる京焼系の陶器碗である。

R. 1〜R. 8は、唐草紋様の軒桟瓦の破片である。R. 9〜R. 16は桟瓦で、R. 9は逆「へ」字形、R. 10・11は「へ」字形を呈する。また、R. 11とR. 12の端面には「⊕」のスタンプが押されている。桟瓦の寸法については、横28㎝、奥行き25㎝、厚さ1.8㎝程度のものが主体と考えられる。R. 17〜R. 20は、屋根瓦の端に使用される袖瓦。R. 21とR. 22は板状の瓦で、片面に剥離した痕跡が残る。R. 23は、幅７㎝、厚さ２㎝の長方形の瓦である。R. 24とR. 25は、建物の棟や塀に使用された雁振瓦である。長さ24〜25㎝で、接続部の上面には一条の沈線が施される。R. 26〜R. 32は、表面にカキ目を残す瓦である。R. 33は、表面に糸切の痕跡を残す。

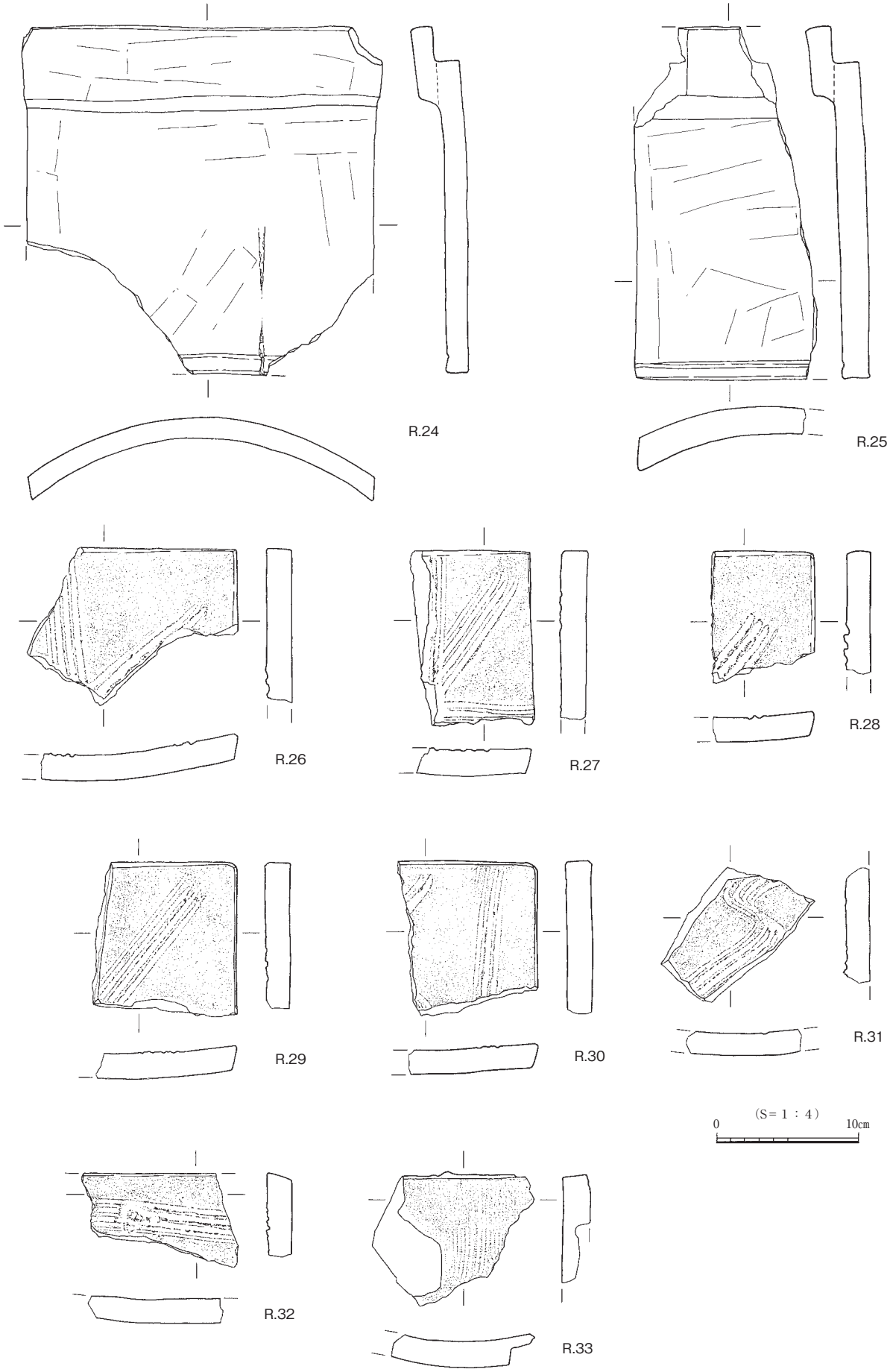
R. 34は、鯱瓦のミニチュアである。つくりは稚拙で、尾部には上から棒状の工具を刺した痕がある。製品として流通したものとは思えないことから、瓦職人の子供が親の仕事を真似て作ったものだ



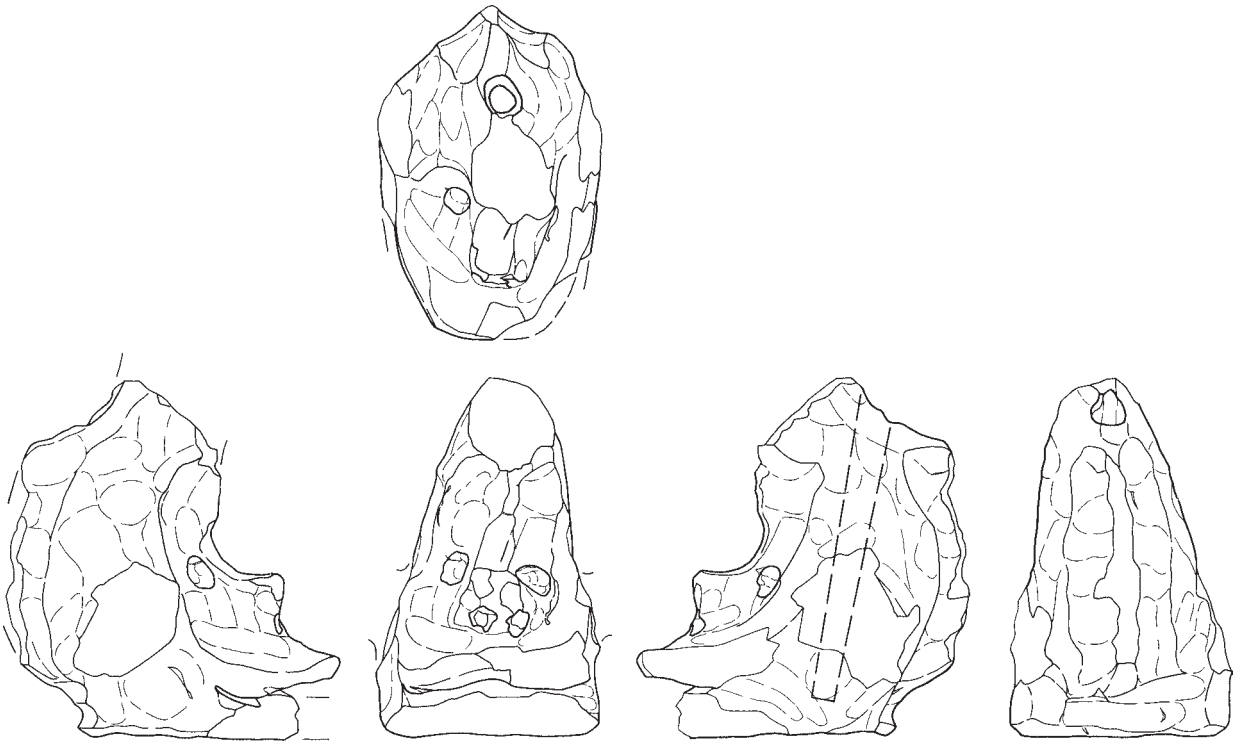
第76図　瓦窯関係遺物①

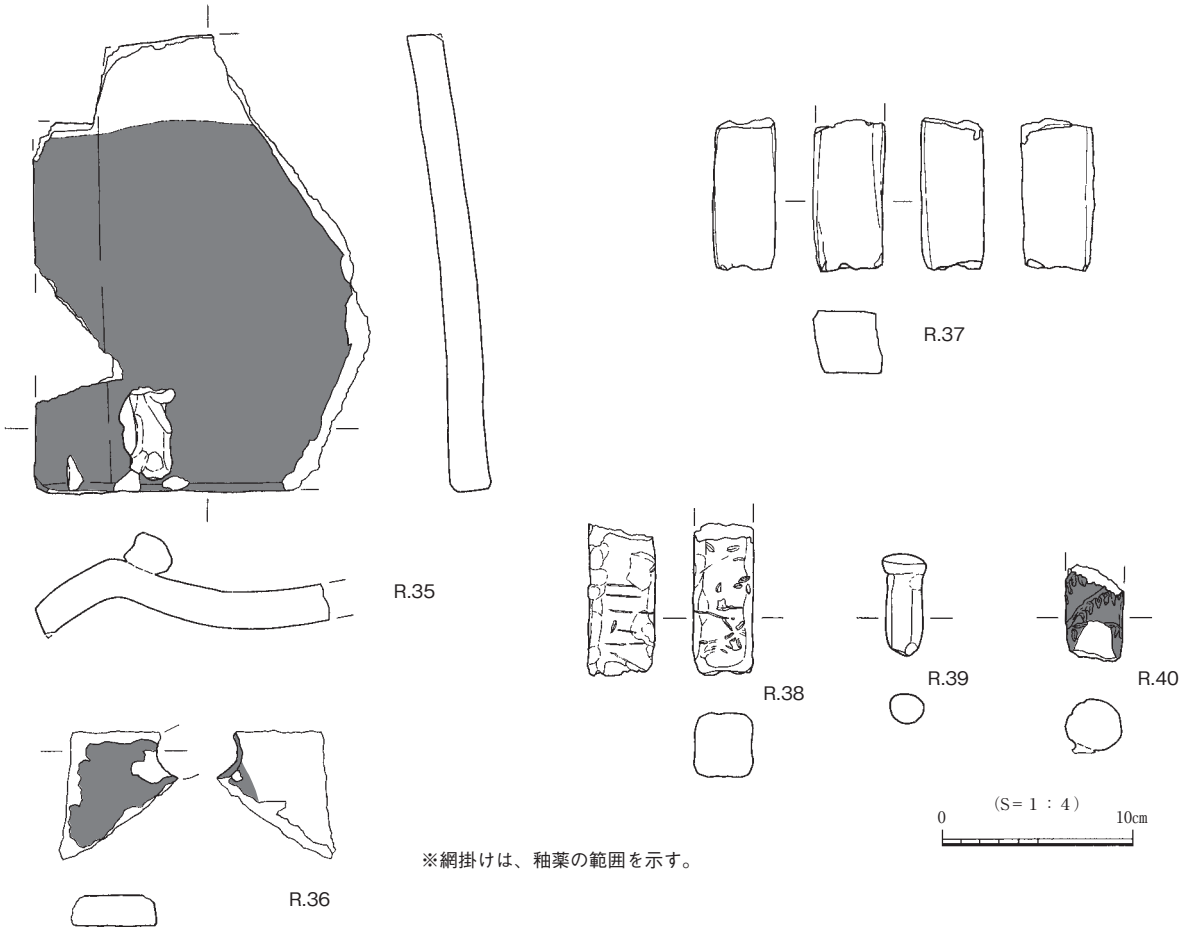


第77図　瓦窯関係遺物②



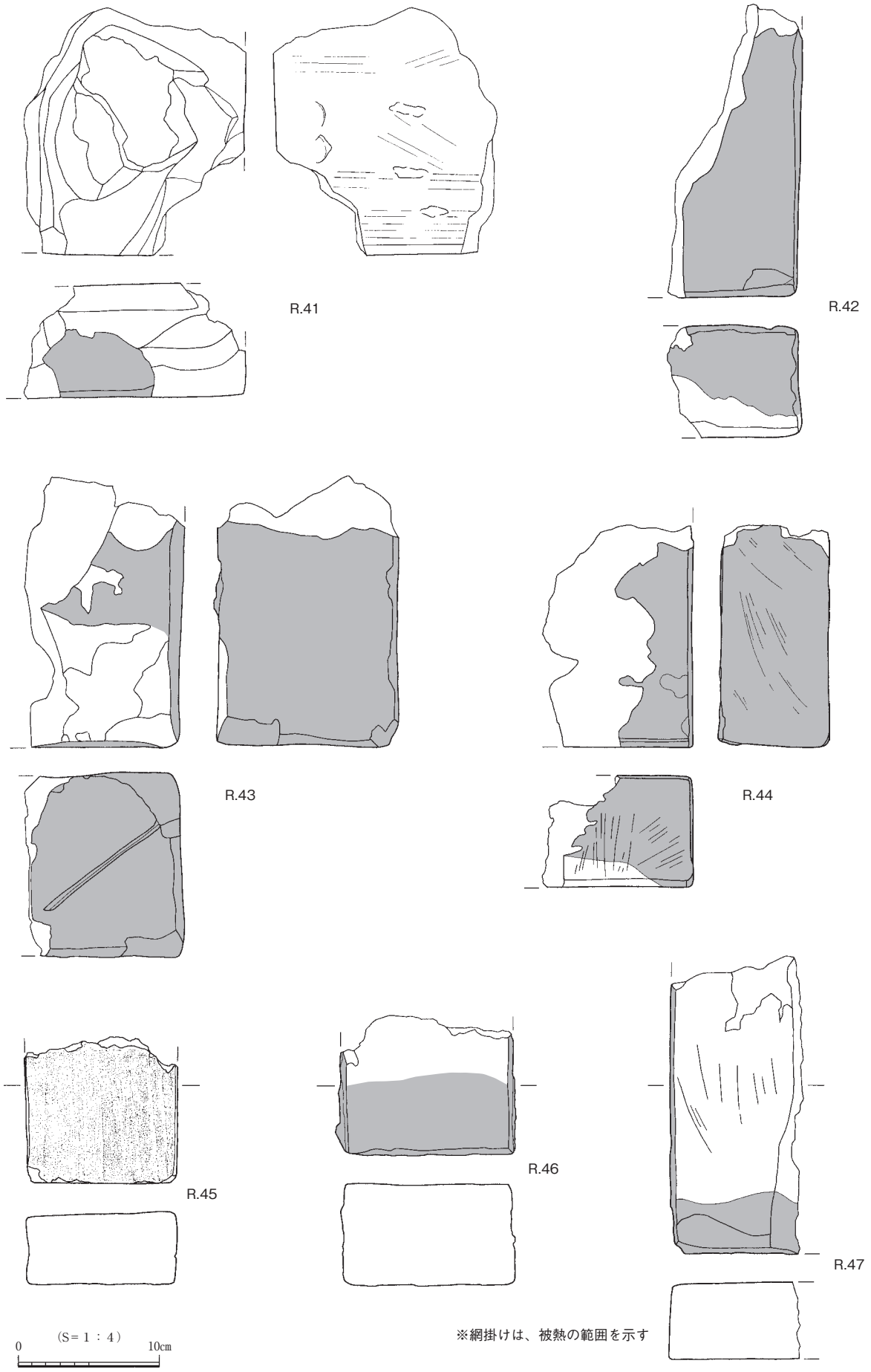
第78図　瓦窯関係遺物③



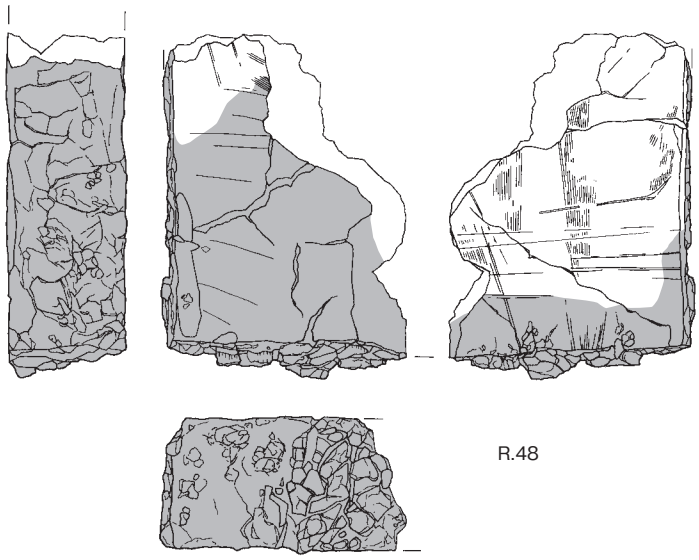


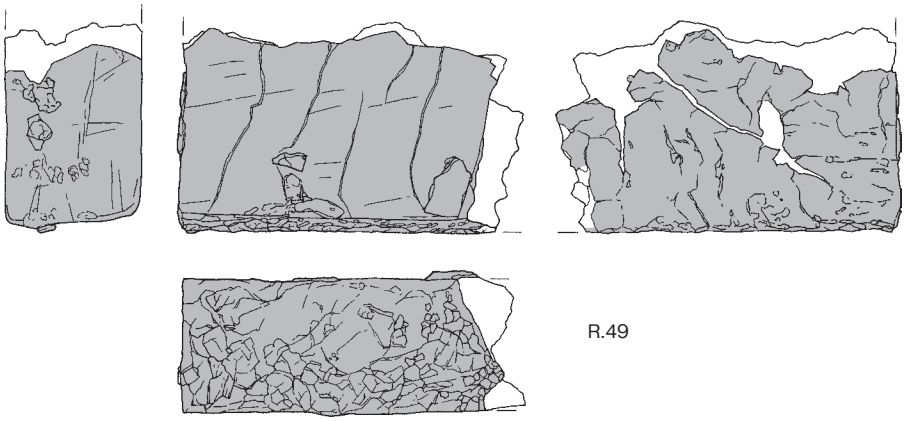
※網掛けは、釉薬の範囲を示す。

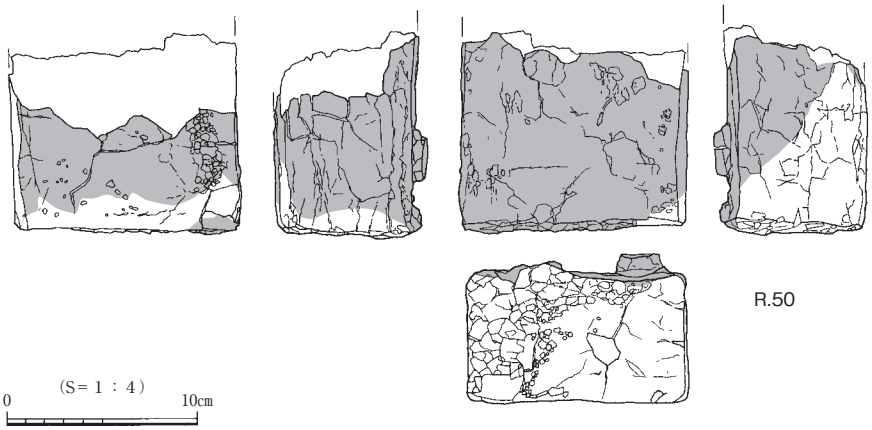
第79図　瓦窯関係遺物④



第80図　瓦窯関係遺物⑤

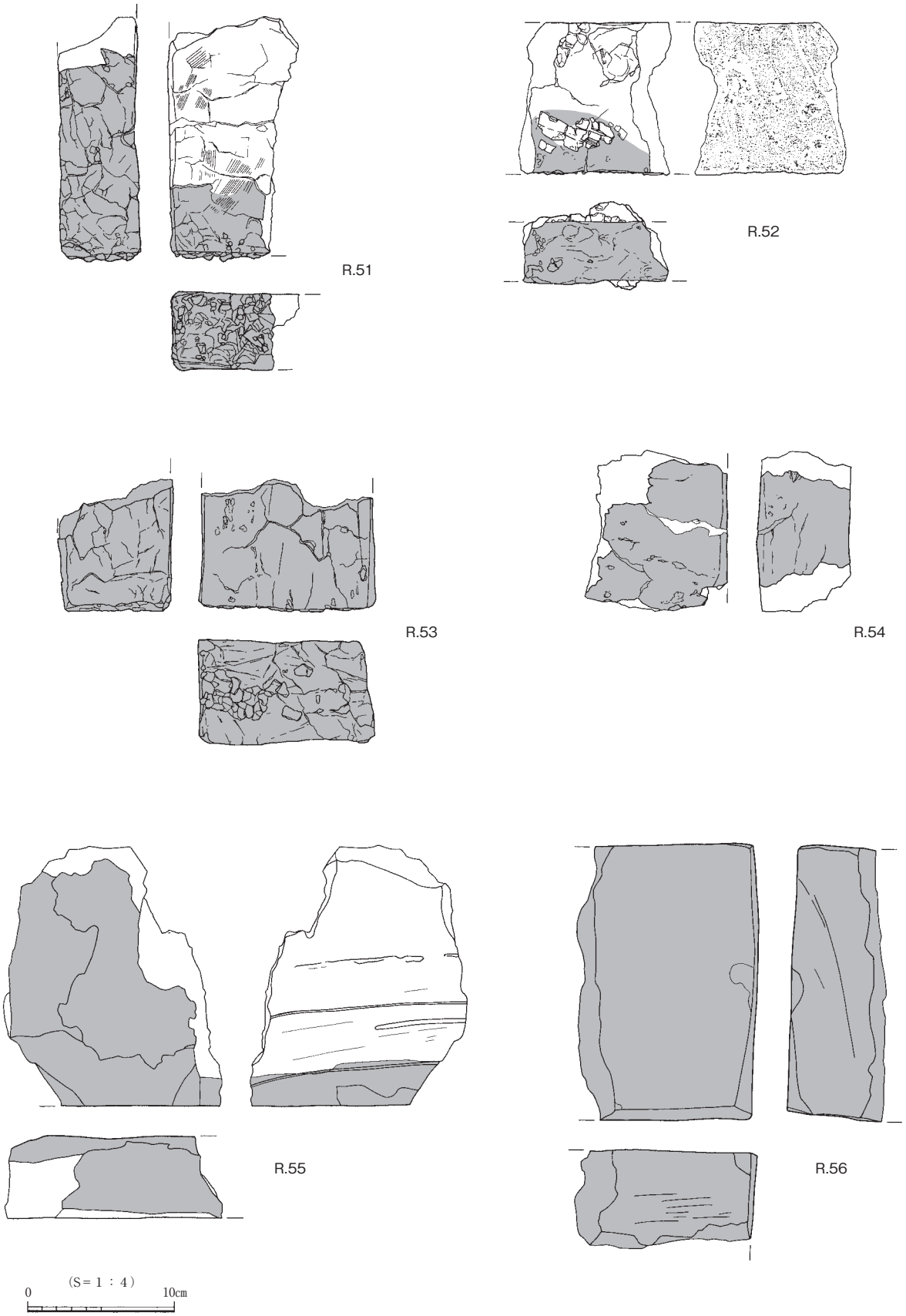






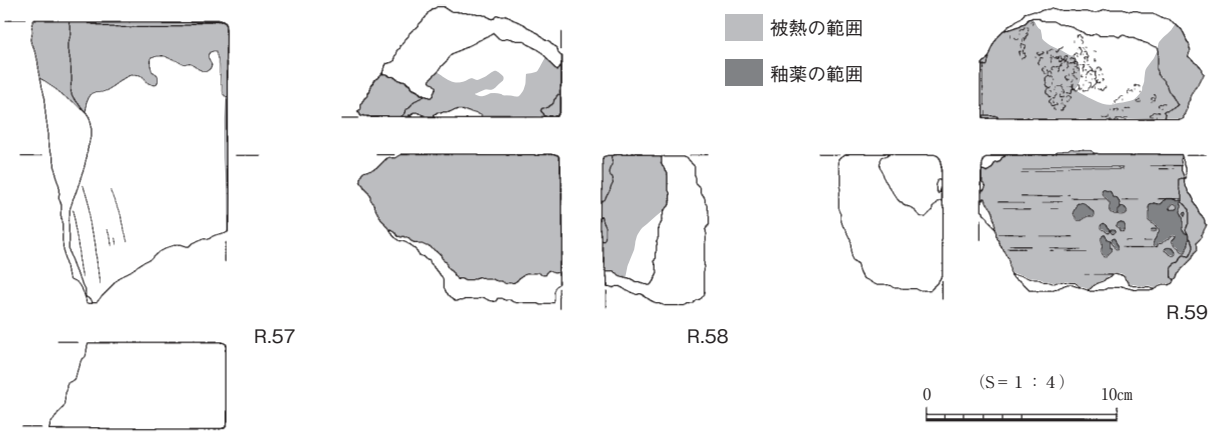
※網掛けは、被熱の範囲を示す

第81図　瓦窯関係遺物⑥



※網掛けは、被熱の範囲を示す

第82図　瓦窯関係遺物⑦



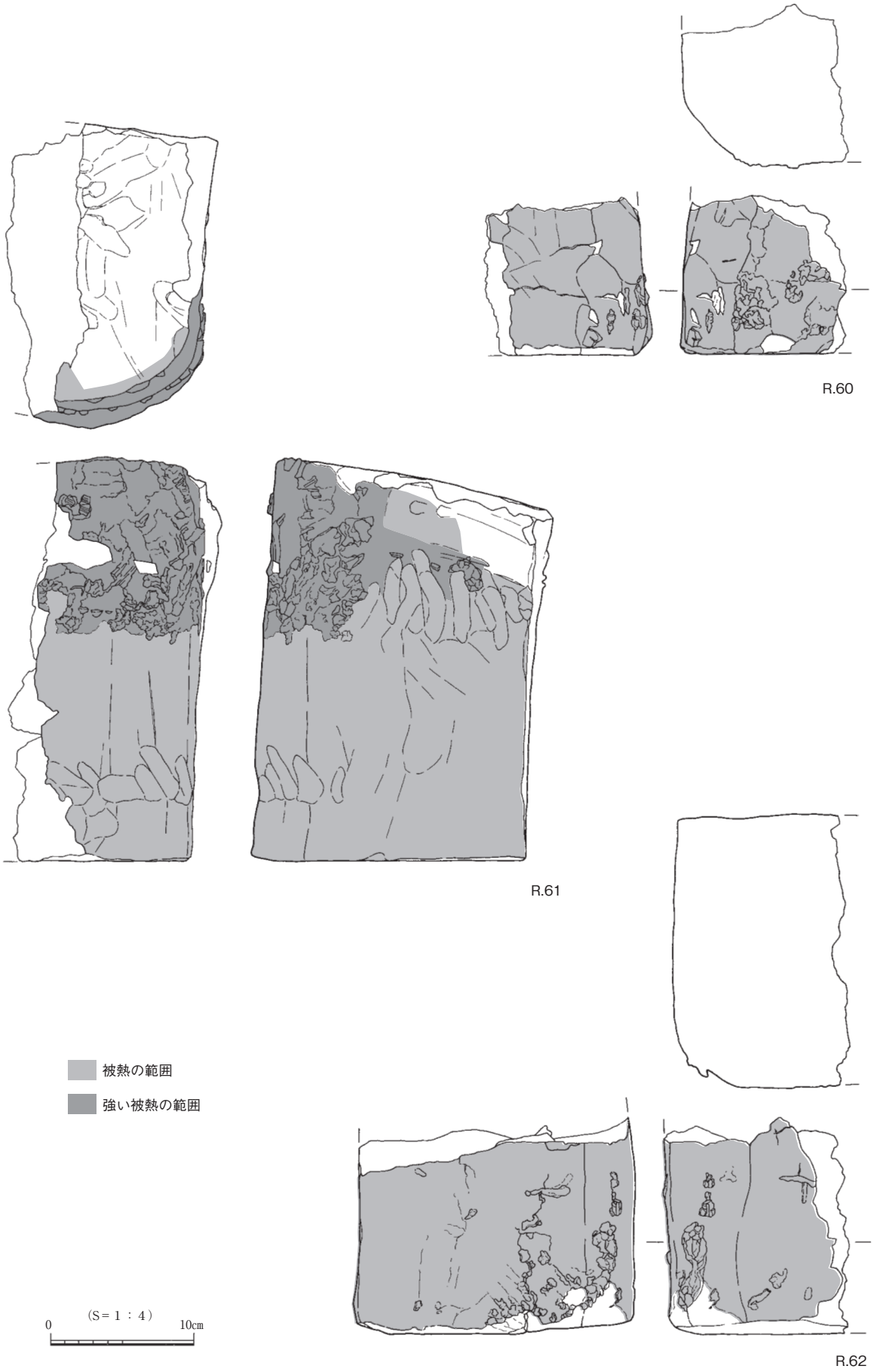
第83図　瓦窯関係遺物⑧

ろうか。R. 35は、「へ」字形の施釉された桟瓦である。釉薬は、光沢を持つ明茶褐色を呈しており、いわゆる石州瓦と考えられる。上面には瓦同士の融着を防ぐためのハセが付着したままである。R. 36は、穴を開けた施釉瓦の部材である。R. 37とR. 38は、しまりのないボソボソの粘土で作られた棒状の製品で、モミツチと呼ばれる施釉瓦の製作に用いられる窯道具である。R. 39は、長さ5. 4cmのハセ。R. 40は、全体に光沢のある茶褐色の釉薬が付着したハセと見られる破片で、表面にはらせん状に刺突痕が残る。

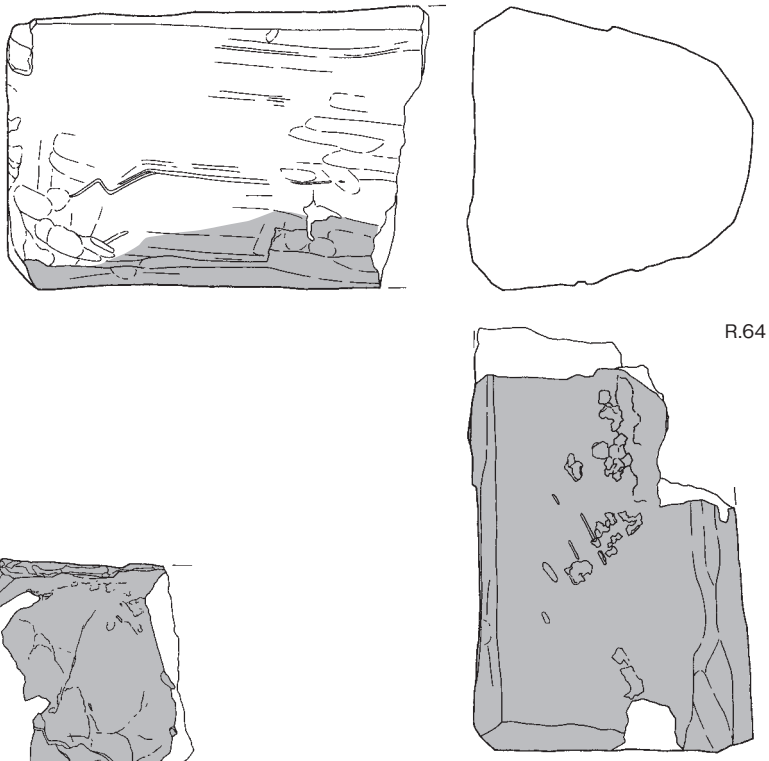
R. 41～R. 59は、瓦窯を構築する際に使用された煉瓦状の部材である。サイズが各種あることから、型造りではなく、粘土塊から直接切り出して製作したものと考えられる。被熱している面が複数面あり、被熱の状況も煤の付着のみならず、表面が激しく発泡したものも見られることから、何度か部材を入れ替えて窯を補修しながら操業していたと推測される。

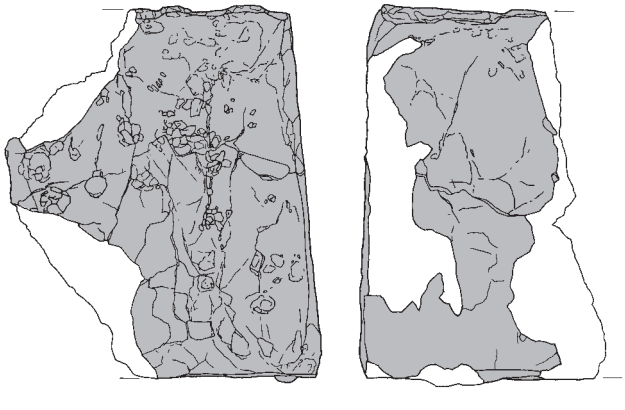
R. 60～R. 65は、達磨窯の底面にある火床溝の先端に置かれていた火柱である。火に接する先端部が、円弧状のものと面取りするものがある。完形品ではないため寸法は不明だが、横幅は20cm、高さは25～28cm程度と推測される。達磨窯の底面に置かれている火柱が出土していることから、元の達磨窯は底面まで完全に破壊されていると考えられる。

R. 66～R. 75は、達磨窯の窯壁部分の破片で、いずれも被熱によって表面が溶けて発泡している。瓦と粘土が層状に重ねられて出来ており、窯を構築する際に失敗品の瓦と粘土を交互に積み重ねながら窯壁を積み上げていった様子が窺える。R. 69とR. 70は、瓦が脱落して粘土塊のみとなっている。R. 71は、窯壁に転用された桟瓦で、端面は被熱しているが、表面に釉薬が垂れた痕跡が残る。達磨窯では施釉瓦を焼成していないと考えられるため、どのような理由で釉薬が付着したかは不明である。



第84図　瓦窯関係遺物⑨

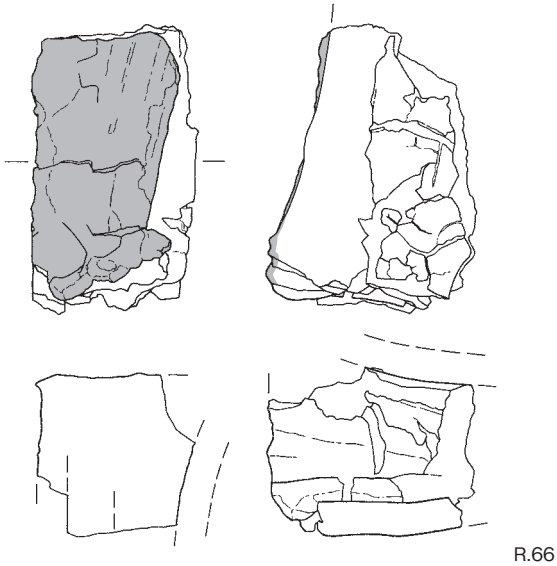




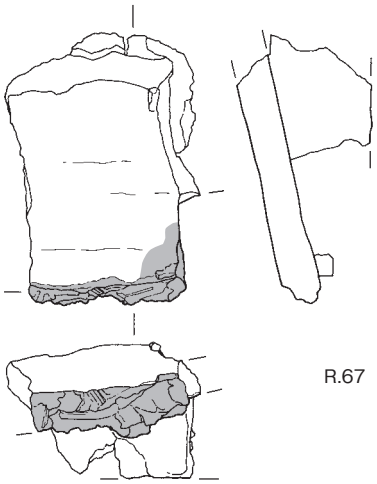
（S＝１：４）
0　10cm

※網掛けは、被熱の範囲を示す

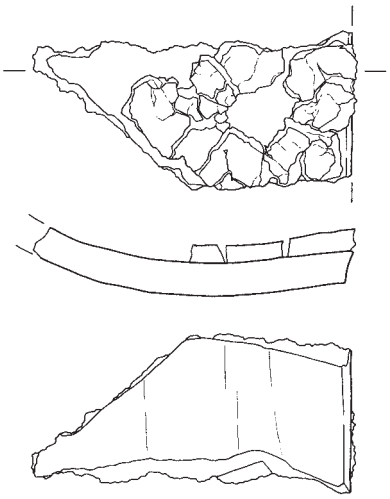
第85図　瓦窯関係遺物⑩



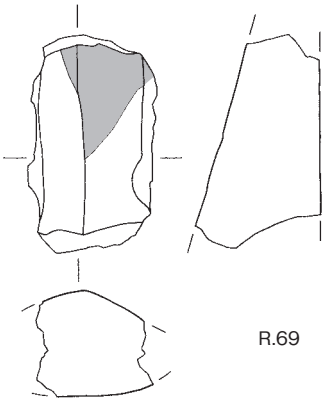
R.66



R.67



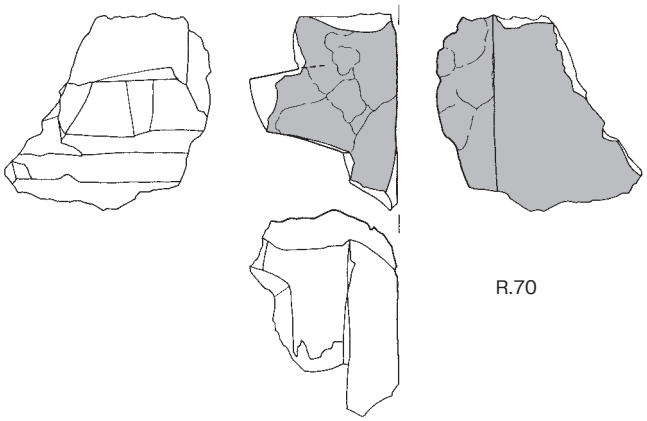
R.68



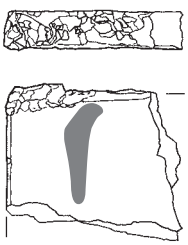
R.69

被熱の範囲

釉薬の範囲



R.70



R.71

(S＝1：4)

0　10cm

第86図　瓦窯関係遺物⑪

第87図　瓦窯関係遺物⑫

第３章　自然科学分析

第１節　火山灰分析の結果（火山灰考古学研究所）

１．はじめに

中国地方に位置する鳥取県西部には、大山火山や三瓶火山のほか、九州地方さらには日本海域の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井、1992、2003、2011）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行ってテフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古学的な遺物や遺構の層位や年代に関する火山灰編年学的研究ができるようになっている。

日南町新屋宮ノ段遺跡における発掘調査でも、層位や年代が不明な遺物包含層やテフラ層が認められたことから、地質調査を実施して土層の層序やテフラ層の記載を行うとともに、高純度で分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラス比分析・屈折率測定）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出・同定を行うことになった。調査分析の対象は、トレンチ６南壁の東西２地点と、トレンチ７の３地点で、さらに時代の遺構の一部あるいはそれに由来する可能性のあるK-14区の扁平な礫（平石）直下の土壌（試料１）についても分析を行った。

２．調査地点の土層柱状図

⑴　トレンチ６南壁東地点

トレンチ６南壁では、赤土（ローム層）の上部から、その上位の黒土（黒ボク土）にかけての火山灰土ををよく観察できた（図１）。上位の黒ボク土を良く観察できたトレンチ６南壁東地点では、下位より砂を多く含む黄色土（層厚８cm以上、4-2層）、砂混じり黄灰色土（層厚12cm、4-1層）、砂混じりでやや暗い灰褐色土（層厚11cm、3-3層）、灰褐色土（層厚10cm、3-2層）、砂混じり暗灰褐色土（層厚７cm、3-1層）、黒色土（層厚15cm、2-2層）、黒灰褐色土（層厚22cm、2-1層）、暗灰褐色土（層厚26cm、1-2層）、暗灰褐色リター層（層厚６cm、落葉・落枝堆積物、1-1層）が認められる。

発掘調査では、これらのうち、３層から縄文時代早期～前期前半の土器が、また２層の上層から中近世の遺物が検出されている。

⑵　トレンチ６南壁西深掘地点

トレンチ６南壁西深掘地点では、赤土（ローム層）上部の層相を観察できた（図２）。ここでは、下位より黄色粘質土（層厚25cm以上、6-2層）、やや桃色をおびた黄色粘質土（層厚14cm、6-1層）、細粒の軽石質降下テフラ層（層厚34cm、５層）、やや褐色がかった黄色砂質土（層厚９cm）、砂を多く含む黄色土（層厚16cm、以上4-2層）、黄灰色土（層厚11cm、4-1層）、やや暗い灰褐色土（層厚12cm、3-3層）、灰褐色土（層厚８cm、3-2層）、暗灰褐色土（層厚６cm、3-1層）、黒灰褐色土（層厚15cm、2-2層）、暗灰褐色表土（層厚21cm、1-1層）が認められる。

これらのうち、細粒の軽石質降下テフラ層は、下位より風化が進んだ黄色軽石層（層厚４cm、軽石

の最大径３㎜、石質岩片の最大径２㎜)、黄色軽石層（層厚14cm、軽石の最大径４㎜、石質岩片の最大径２㎜)、黄灰色粗粒火山灰層（層厚２㎝)、黄色軽石層（層厚14cm、軽石の最大径３㎜、石質岩片の最大径２㎜）からなる。

⑶　トレンチ７

トレンチ７では、ローム層の中の複数の層準にテフラ層を認めることができた(図３)。ここでは、下位より灰色粘土層(層厚11cm以上)、黄灰色粘土層(層厚10cm)、灰色粘土層(層厚８㎝、以上７層)、風化が進んだ黄～黄灰色砂質テフラ層（層厚19cm、6-5～6-3層下部)、黄灰色砂質土（層厚４㎝、6-3層上部)、黄色土（層厚29cm、6-2層)、やや黄色がかった桃褐色土（層厚14cm、6-1層)、成層した細粒の軽石質降下テフラ層（層厚22cm、５層)、黄色粘質土（層厚23cm、4-2層）が認められ、その上位にさらに黒灰褐色土（層厚23cm)、暗灰褐色土（層厚13cm）が形成されている。

このうち、下位のテフラ層は、下位より鉄分を多く含む黄褐色砂質風化火山灰層（層厚５㎝、6-5層)、黄色風化砂質火山灰層（層厚９㎝)、黄灰色風化砂質火山灰層（層厚３㎝、以上6-4層)、灰白色砂質細粒火山灰層（ブロック状、最大層厚２㎝、6-3層下部）からなる。一方、上位の成層した細粒の軽石質テフラ層は、下位より黄色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径３㎜、石質岩片の最大径２㎜)、若干固結した黄灰色粗粒火山灰層（層厚１㎝)、黄色軽石層（層厚10cm、軽石の最大径７㎜)、石質岩片の最大径２㎜）からなる。

３．テフラ検出分析

⑴　分析試料と分析方法

テフラ層に含まれるテフラ粒子の特徴と、肉眼で確認できないいわゆるクリプト・テフラ（cryptotephra）の降灰層準を求めるために、定量的分析である火山ガラス比分析の実施にさきだって、テフラ粒子の特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。分析対象試料は、火山灰土から基本的に厚さ５㎝ごとに、またテフラ層については降下単層（fall-unit）ごとに設定・採取した試料のうちの17点である。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

１）試料12gを秤量。

２）超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

⑵　分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。トレンチ６南壁東地点では、いずれの試料からも火山ガラスを認めることができた。試料16より上位の試料には、淡褐色、褐色、無色透明のバブル型ガラスが含まれている。磁鉄鉱などの不透明鉱物以外の重鉱物としては、角閃石や少量の黒雲母が認められる。また、試料12からは、発泡が良くない細粒の灰色軽石（最大径2.1㎜）を検出できた。この軽石の細粒物である発泡が良くない灰色あるいは白色のスポンジ状軽石型ガラスは、試料８にかけて比較的多く含まれている。

トレンチ６南壁西深掘地点において成層したテフラ層から採取された試料のうち、試料11では火山ガラスは風化のために認められないものの、試料７に白色スポンジ状軽石型ガラスが少量含まれている。磁鉄鉱などの不透明鉱物以外の重鉱物としては、角閃石や少量の黒雲母が認められる。

トレンチ７では、試料11をのぞいて火山ガラスを検出できた。風化したテフラ層から採取された試料のうち、試料14では無色透明の繊維束状あるい中間型ガラスが少量認められた。磁鉄鉱などの不透明鉱物以外重鉱物としては、角閃石や少量の黒雲母が認められる。試料９より上位では、無色透明のバブル型や繊維束状軽石型ガラスが検出され、それはとくに試料５で多い。これらの試料の中には、重鉱物として角閃石や黒雲母のほかに斜方輝石が認められるものがある。

K-14区の扁平な礫（平石）の直下から採取された試料１には、淡褐色や無色透明のバブル型や繊維束状軽石型ガラスが少量含まれている。磁鉄鉱などの不透明鉱物以外の重鉱物としては、角閃石が含まれている。

４．火山ガラス比分析

⑴　分析試料と分析方法

火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準を定量的に検討するために、火山ガラスの形態色調別含有率、さらに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の対象は、テフラ検出分析試料からトレンチ６南壁東地点の試料11とトレンチ６南壁西深掘地点の試料11を除く15点である。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

１）テフラ検出分析済みの試料から、2～3ϕ(1/4～1/8㎜)および3～4ϕ(1/8～1/16㎜)の粒子を篩別。

２）偏光顕微鏡下で、2～3ϕ（1/4～1/8㎜）の500粒子に含まれる火山ガラスの形態色調別含有率を求める。あわせて、軽鉱物および重鉱物の含有率も明らかにする。

なお、形態分類については、町田・新井（1992、2003、2011）に基本的に従い、平板状のいわゆるバブル型、塊状または破片状で分厚い中間型、スポンジ状または繊維束状の軽石型に区分した。色調分類はバブル型ガラスを対象に行い、無色透明、淡褐色、褐色に区分した。

⑵　分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図４に、その内訳を表２に示す。トレンチ６南壁東地点では、試料16より上位に、淡褐色や褐色の平板状のバブル型ガラスを認めることができた。試料16におけるバブル型ガラスの含有率は4.8％で、有色のものは1.6％を占める。より上位の試料では、試料12でスポンジ状軽石型ガラスの含有率がもっとも高い（8.8％）。本地点では、軽鉱物の含有率が低下する傾向にある。

トレンチ６南壁西深掘地点の試料２には、分厚い中間型の火山ガラスが2.8％、無色透明のバブル型ガラスが0.4％含まれている。軽鉱物と重鉱物の含有率は、各々76.4％と12.0％である。

トレンチ７では、試料５でバブル型ガラスの含有率がもっとも高い（27.6％）。この試料に含まれるバブル型ガラスの色調は無色透明である。また、この試料には、無色透明の繊維束状軽石型ガラスも多く含まれている（10.8％）。軽鉱物の含有率はテフラ層から採取された試料11で（83.6％）、また重鉱物のそれは同じテフラ層の可能性が高い層準から採取された試料14でもっとも高い（18.8％）。これらのテフラ層あるいはテフラ層の可能性が高い堆積物からは、スポンジ状軽石型や繊維束状軽石型ガラスがわずかに検出された（0.4～0.8％）。

K-14区の扁平な礫の直下から採取された試料１には、バブル型ガラスが2.4％含まれており、無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスの含有率は、順に1.6％、0.4％、0.4％である。

５．屈折率測定（火山ガラス）

⑴　測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、トレンチ６南壁東地点において有色のバブル型ガラスが出現し始める試料16、無色透明のバブル型ガラスの出現ピークであるトレンチ６南壁西深掘トレンチ地点の試料５、そして成層したテフラ層から採取されたトレンチ７の試料14の３試料に含まれる火山ガラスの屈折率測定を実施した。測定は、温度変化型屈折率測定法（壇原、1993）に従った。測定対象の粒子は、3～4ϕ（1/8～1/16㎜）粒子中の火山ガラスである。

⑵　測定結果

屈折率測定の結果を表３に示す。トレンチ６南壁東地点に試料16に含まれる火山ガラス（32粒子）の屈折率(n)は、1.495-1.512である。この値はtrimodal組成で、低い順にn：1.495-1.496(２粒子)、n：1.498-1.502（19粒子）、n：1.506-1.512（11粒子）の値からなる。

トレンチ６南壁西深掘トレンチ地点の試料５に含まれる火山ガラス（33粒子）の屈折率（n）は、1.498-1.500である。また、トレンチ７の試料14に含まれる火山ガラス（14粒子）の屈折率（n）は、1.497-1.501である。

６．考　察

⑴　テフラ層・テフラ粒子と指標テフラとの同定

トレンチ６南壁東地点の試料16（3-2層）に含まれる火山ガラスのうち、もっとも屈折率が高いもの（n：1.506-1.512は、色調から有色のバブル型ガラスに対応すると考えられる。この火山ガラスは、形態、色調、屈折率特性から、約7,300年前に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978、2011など）に由来する。このK-Ahの降灰層準については、産出状況から試料16（3-2層）付近にあると考えられる。

したがって、その上位の試料12（2-2層）に出現ピークをもつる、発泡のさほどよくない灰～白色の軽石質テフラは、本遺跡に近い霞牛ノ尾遺跡A地区で検出されているらしい、約5,500～5,600年前に三瓶火山から噴出した三瓶角井降下火山灰（松井・福岡、1996、中村・松井、2001、小林・角田、2006など。略称をSTnとする）に由来する可能性が高い。このことから、試料12（2-2層）付近にSTnの降灰層準のある可能性が指摘されよう。

また、トレンチ６南壁東地点の試料16（3-2層）に含まれる、中程度の屈折率特性をもつ火山ガラス（n：1.498-1.500）は、試料中に無色透明のバブル型ガラスが含まれていることから、トレンチ６南壁西深掘トレンチ地点の試料５（6-2層上部）に出現ピークのある火山ガラスと同じテフラに由来すると考えられる。このテフラは、火山ガラスの形態、色調、屈折率特性から、約2.8～３万年前に九州地方南部の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、2003、2011）に同定できる。試料７にも比較的多くのATに由来する火山ガラスが含まれていることから、6-2層上部にATの降灰層準があると考えられる。

このことから、AT降灰層準より上位にあるトレンチ６南壁西深掘地点の成層した細粒の軽石質テフラ層（５層）は、その層位や層相から、約２～2.1万年前に三瓶火山から噴出した三瓶浮布テフラ層（SUk、林・三浦、1987、三浦・林、1991）に同定される。

一方、７トレンチにおいてATの下位に認められたテフラ層（6-5～6-3層下部）については、火山

ガラスの屈折率特性だけをみると、該当するテフラはテフラ・カタログに掲載されていない。しかしながら、約５万年前に三瓶火山から噴出した三瓶池田テフラ（SI、約５万年前、松井・井上、1971、三浦・林、1991、町田・新井、1992、2011）については、最近、テフラ・カタログの値（n：1.502–1.505）より低い火山ガラスの屈折率特性のあることが認められるようになっている（早田、2008、古環境研究所、2008など）。また、SIの上部には、主体部の明色の軽石層とは色調を異にする細粒火山灰層の存在も知られている（早田、2008など）。したがって、７トレンチで認められたテフラ層については、SIの可能性が高いと考えられよう。

⑵　遺物包含層の層位について

本遺跡の発掘調査で検出された縄文時代早期～前期前半の遺物包含層の中位に、K-Ahの降灰層準がある可能性が高いことから、この遺物包含層の層位は、少なくともSTnより下位で、K-Ah降灰層準の直下付近より上位にあると推定される。なお、同時期の遺構の一部あるいはそれに関係する可能性のある、K–14区の扁平な礫（平石）の直下から採取された試料１には、K-Ahに由来する可能性が高い褐色や淡褐色のバブル型ガラスが含まれている。したがって、この礫の層位はK-Ahより上位と考えられる。また、実際には３層を構成する土層のうち、3–1層から検出される遺物の量は多くないことから、遺物の多くの層位もK-Ahより上位の可能性が高い。ただし、この層位は、実際には遺構が廃棄された年代を示唆するかも知れないことから、土層による遺物の出方の違いなどに関する詳細な検討をお願いしたい。今回のような遺物や遺物包含層とK-Ahの一次堆積層との層位関係の把握の試みが継続されることが必要である。

７．まとめ

日南町新屋宮ノ段遺跡において、地質調査とテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラス比分析・屈折率測定）を実施した。その結果、下位より姶良Tn火山灰（AT、約2.8～３万年前）、三瓶浮布テフラ（SUk、約２～2.1万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）、三瓶角井降下火山灰（STn、約5,500～5,600年前）のテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。また、三瓶池田テフラ（SI、約５万年前）の可能性が高いテフラ層も認めることができた。新家宮ノ段遺跡の発掘調査で検出された時代早期～前期前半の遺物の層位は、K-Ah降灰層準付近より上位で、STnより下位にあり、その多くはK-Ahより上位の可能性が高い。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、p. 254–269。

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」、東京大学出版会、p. 138–149。

壇原　徹（1993）温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」、東京大学出版会、p. 149–158。

林　正久・三浦　清（1987）三瓶火山のテフラ層序とその分布。島根大山陰地域研究（自然環境）、３、p. 43–66。

小林謙一・角田徳幸（2006）三瓶火山の噴出物と時代のAMS炭素14年代測定。島根考古学会誌、23、p. 43–55。

古環境研究所（2008）原田遺跡の土層とテフラ。島根県埋蔵文化財センター編「原田遺跡（４）第２分冊」、p. 173–179。

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学、46、p. 339–347。

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰。第四紀研究、17、p.

143-163。
町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス―日本列島とその周辺」、東京大学出版会、276p。
町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス―日本列島とその周辺」、東京大学出版会、336p。
町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス―日本列島とその周辺（第２刷）」、東京大学出版会、336p。
松井整司・井上多津男（1971）三瓶火山の噴出物と層序。地球科学、25、p. 147-163。
松井整司・福岡　孝（1996）三瓶火山の浮布黒色土以後の火砕物の層序（その１）―東方に分布するものについて。島根県地学会誌、11、p. 41-47。
三浦　清・林　正久（1991）中国・四国地方の第四紀テフラ研究―広域テフラを中心として―。第四紀研究、30、p. 339-351。
中村唯史・松井整司（2001）霞牛ノ尾遺跡Ａ地区の火山灰層。鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター編「霞遺跡群：霞牛ノ尾遺跡Ａ地区・霞牛ノ尾Ｂ地区・霞寺ヶ宇根遺跡・霞の要害遺跡・霞17号墳」、278p。
早田　勉（2008）島根県奥出雲町原田遺跡で検出されたテフラと指標テフラとの同定の試み。島根県埋蔵文化財センター編「原田遺跡（４）第２分冊」、p. 162-169。

表１　新屋宮ノ段遺跡テフラ分析試料の火山ガラス比分析結果

地　　点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重 鉱 物
		量	色調	最大径	量	形　態	色　　調	
トレンチ６南壁東地点	2				＊	pm（sp）＞bw	gr～wh、pb、br、cl	am、(bi)
	8				＊＊	pm（sp）＞bw	gr～wh、pb、br、cl	am、(bi)
	11				＊＊	pm（sp）＞bw	gr～wh、pb、br、cl	am、(bi)
	12	＊	gr	2.1㎜	＊＊	pm（sp）＞bw	gr～wh、pb、br、cl	am、(bi)
	14				＊	pm（sp）、bw	gr～wh、pb、br、cl	am、(bi)
	16				＊	bw	pb、br、cl	am、(bi)
	18				(＊)	bw	cl	am、(bi)
トレンチ６南壁西深掘地点	7				＊	pm（sp）	wh	am、bi
	11							am、bi
トレンチ７	1				＊	bw、pm（fb）	cl	am
	3				＊＊	bw、pm（fb）	cl	am、(bi、opx)
	5				＊＊＊	bw、pm（fb）	cl	am、(bi)
	7				＊＊	bw、pm（fb）	cl	am、(bi、opx)
	9				＊	bw、pm（fb）	cl	am、(bi)
	11							am、(bi)
	14				＊	fb、md	cl	am、(bi)
K−14区(礫直下)	1				＊	bw、pm（fb）	p-br、cl	am

＊＊＊＊：とくに多い、＊＊＊：多い、＊＊：中程度、＊：少ない、(＊)：とくに少ない。
bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：無色透明、wh：白色、gr：灰色、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。
ol：カンラン石、opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、am：角閃石、bi：黒雲母。重鉱物の（　）：量が少ないことを示す。

表２　新屋宮ノ段遺跡テフラ分析試料の火山ガラス比分析結果

地　点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
トレンチ６南壁東地点	2	4	2	0	0	6	2	129	22	85	250
	8	6	2	0	0	17	1	143	21	60	250
	12	2	1	0	1	22	3	152	25	44	250
	14	8	1	2	0	11	5	161	17	45	250
	16	8	4	0	0	4	0	178	25	31	250
	18	2	0	0	2	4	1	182	34	25	250
トレンチ６南壁西深掘地点	7	1	0	0	7	0	0	191	30	21	250
トレンチ７	1	23	0	0	6	1	13	157	19	31	250
	3	58	0	0	10	1	30	113	4	34	250
	5	69	0	0	4	0	27	102	9	39	250
	7	58	0	0	2	0	22	119	10	39	250
	9	18	0	0	3	1	7	165	15	41	250
	11	0	0	0	0	1	0	209	12	28	250
	14	0	0	0	0	1	2	193	47	7	250
K−14区・試料１(礫直下)	1	4	1	1	0	10	3	177	26	28	250

bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：無色透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。数字：粒子数。

表３　屈折率測定結果

地点・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率（n）	測定点数	
日南町新屋宮ノ段遺跡			
トレンチ６南壁東地点・試料16	1.495–1.512 (1.495–1.496) (1.498–1.502) (1.506–1.512)	32 (２) (19) (11)	(1)
トレンチ７・試料５	1.498–1.500	33	(1)
トレンチ７・試料14	1.497–1.501	14	(1)
鳥取県西部の代表的指標テフラ（後期更新世以降）			
鬼界アカホヤ（K-Ah、約7,300年前）	1.504–1.512		(2)
三瓶浮布（SUk、約２～2.1万年前）	1.505–1.507		(2)
姶良Tn（AT、約2.8～３万年前）	1.498–1.501		(2)
三瓶池田（SI、約５万年前？）	1.502–1.505 1.500–1.504 1.496–1.500		(2) (3) (4)
九重第１（Kj-P1、約５万年前）	1.503–1.506		(2)
三瓶大田（SOd、約５万年前以前）・三瓶雲南（SUn）	1.496–1.498		(2)
阿蘇４（Aso-4、約8.5～９万年前）	(1.509)		(2)
鬼界葛原（K-Tz、約9.5万年前）	1.496–1.499		(2)
阿多（Ata、約10.5万年前）	1.508–1.510		(2)
三瓶木次（SK、約10.5万年前）	1.494–1.498		(2)
大山松江（DMP、約13万年前以降）	（未詳）		(2)

＊１：放射性炭素（^{14}C）年代。(1)：本報告、(2)：町田・新井（2011）、(3)：早田（2008）、(4)：古環境研究所（2008）。以上の測定：温度変化型屈折率測定法（壇原、1993）。町田・新井（2011）：温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）。

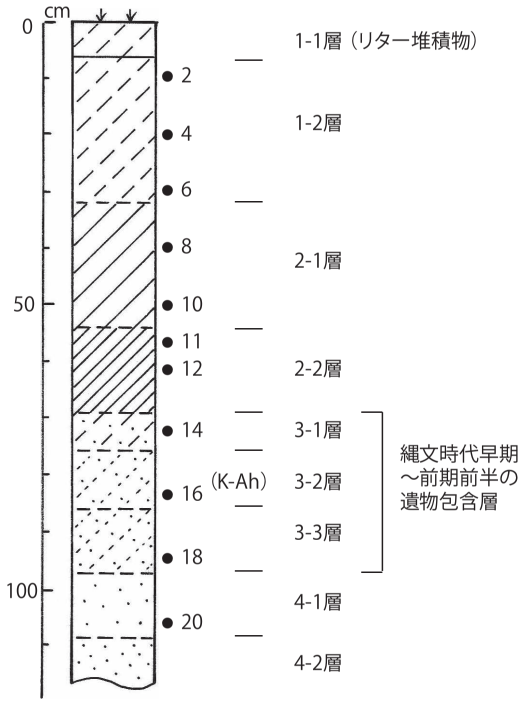


図１　トレンチ６南壁東地点の土層柱状図

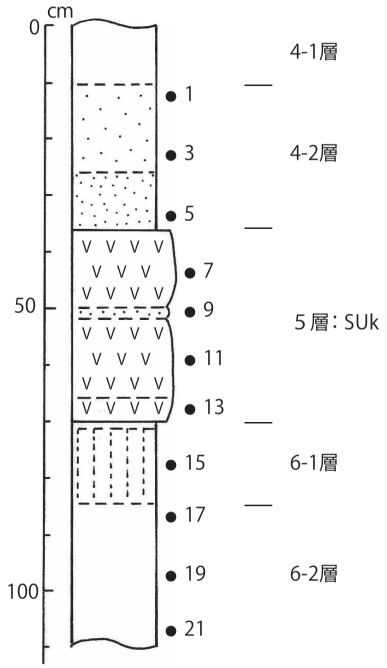


図２　トレンチ６西深掘地点の土層柱状図

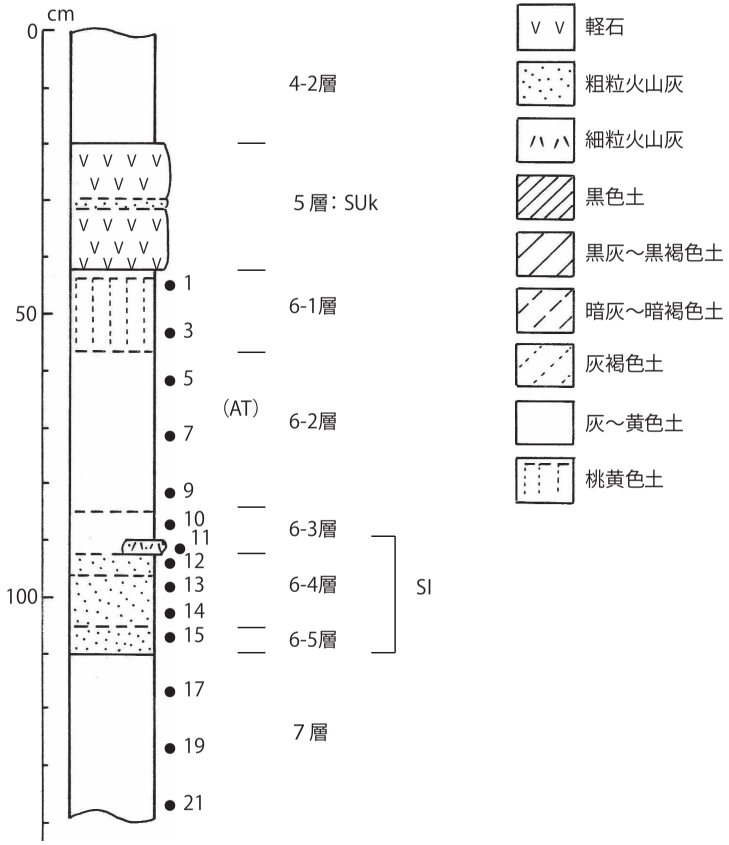


図３　トレンチ７の土層柱状図

●：テフラ分析試料の層位。数字：テフラ分析の試料番号。

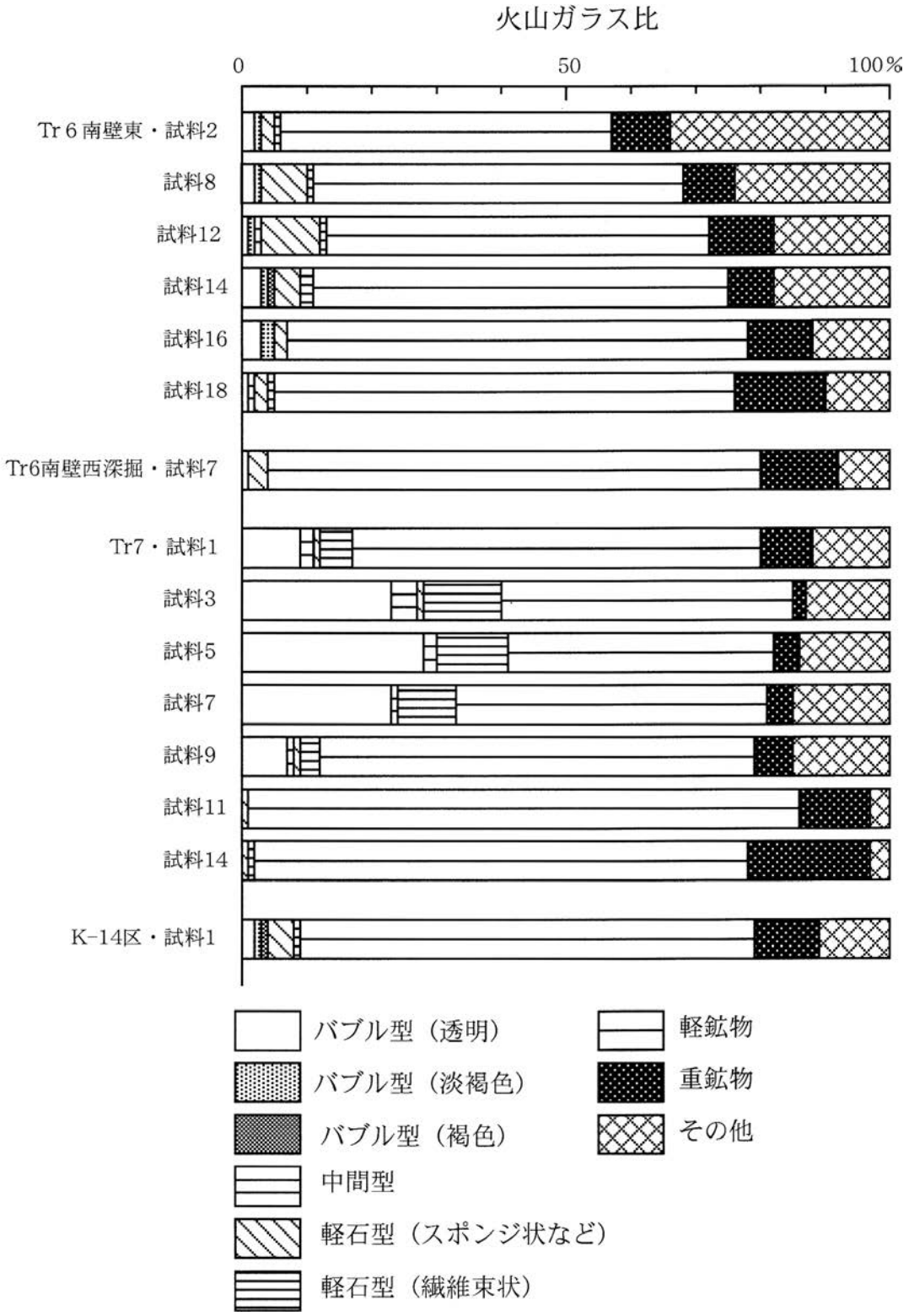


図４　新屋宮ノ段遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム

第２節　石組遺構から出土した土壌の化学分析（文化財調査コンサルタント株式会社）

１．試料採取について

日南町新屋に所在する新屋宮ノ段遺跡から、中世のものと考えられる石組遺構が検出され、内部からほぼ完形に復元できる瓦質土器の壺が出土した。発掘調査を行った米子市文化財団では、壺の性格が埋葬施設に関わるものか否かを確認するために、文化財調査コンサルタントへ土器内外の土壌と土器胎土のリン分析、CN分析を依頼した。

分析試料の採取については、米子市文化財団が土壌ごと取り上げた未洗浄の土器片から、文化財調査コンサルタントが削り取って採取した。

２．分析方法

⑴　原理

堆積物中には、主にプランクトンと陸上植物（又は維管束水生生物）を起源とする炭素と窒素が含まれる。一方、墓や廃棄物土坑など人為的な遺構では一般的な堆積物と異なり、動物（遺骸）由来の炭素、窒素が局所的に多量に含まれ、残存している。生物を構成する炭素濃度（TOC）と窒素濃度（TN）には、人間を含む動物と植物では濃度に大きな差が認められる。更に人間に付いてみると、その部位ごとに差があることが知られている（表１）。これらの炭素濃度（TOC）と窒素濃度（TN）の量は、一般にはC/N値として表される。

このことから、土壌中の有機物の由来を推測することが可能である。更に全リン濃度分布と組み合わせることによって、動物、植物の判定がより緩やかになり、考古学的な成果を併せることによって人間の頭部の所在を判定することも可能である。

⑵　分析方法

以下の手順によって、各試料のCN濃度を測定した。

１）試料を60℃で一日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉砕する。

２）約15mgをひょう量し、銀コンテナに入れる。貝殻起源等の無機態炭素を取り除くために、1M-HC1添加後100℃で加熱乾燥する。

３）更に銀コンテナで包む。

４）元素分析機EA-1108により測定する。標準試料にはBBOTを用いる。

５）乾燥試料に対する重量百分率で有機炭素濃度（TOC）と全窒素濃度（TN）を測定し、C/Nを算出する。

３．全リン分析方法

⑴　原理

土壌中にはP（リン）が多少ともふくまれ、その起源は多岐にわたる。耕作土壌では「施肥」により人為的に付加され、P（リン）が高濃度を示す。これに対し、森林土壌では耕作土壌に比べ、P（リン）濃度は低い。一方、人為的な遺構では、しばしば「動物遺体（人間を含む）」が埋められ、周囲の土壌に比べP（リン）濃度が特に高いことがある。このことから、土壌中のP（リン）濃度を調べることにより、「耕作土の可能性の可否」、あるいは「遺骸埋納の可能性」などを論じることができる

表１　動物（人間）、土壌中の元素の割合（渡辺、2012）

		リン（P）	P/C	炭素（C）	窒素（N）	C/N	カルシウム（Ca）
人間	全体	1.1%	0.049	22.9%	2.6%	8.9	1.4%
	骨	6.7%	0.185	36.0%	4.3%	8.4	17.0%
	筋肉	0.58%	0.009	67.0%	7.2%	9.3	0.04%
	毛	0.01%	0.000	54.0%	16.0%	3.4	0.17%
	肝臓	0.94%	0.014	67.0%	7.2%	9.3	0.02%
動物	哺乳類	—	—	48.4%	12.8%	3.8	—
	魚類	—	—	47.5%	11.4%	4.2	—
植物	バクテリア	3.0%	0.56	54.0%	9.6%	5.6	0.51%
	菌類	0.50%	—	—	3.4%	0.0	0.09%
	蘚苔類	0.17%	—	—	1.2%	0.0	5.1%
	シダ類	0.20%	0.004	45.0%	2.0%	22.5	0.37%
	裸子植物	0.20%	0.004	45.0%	3.2%	14.1	0.85%
	被子植物	0.11%	0.002	45.0%	2.5%	18.0	0.85%
	野菜類	0.51%	0.011	45.0%	5.3%	8.6	2.5%
土壌・岩石	平均的土壌	0.08%	0.040	2.00%	0.20%	10.0	1.5%
	堆積物の平均	0.067%	0.023	2.94%	0.047%	62.6	6.60%
	頁岩の平均	0.070%	0.044	1.60%	0.060%	26.7	3.10%
	花崗岩の平均	0.070%	1.9	0.036%	0.0021%	17.1	1.6%
	玄武岩の平均	0.14%	2.3	0.061%	0.0030%	20.3	6.7%

Bowen（1979）によって編集された、Iyengar et al.（1978）、Koons and Helmke（1978）、Tjell and Hovm and（1978）、Casagrands and Erchall（1977）、Hanawalt and Whittaker（1977）、Valkovic（1977）、Wakatsuki et al.（1977）、Chester and Aston（1976）、Connor and Shacklette（1975）、Synnder（1975）、Golley et al.（1969）、Scharrer and Linser（1969）、Wedepohl（1969–1974）、Haller et al.（1968）、Wedepohl（1968）、Bowen（1966）、Chapman（1966）、Gorham and Swaine（1965）、Taylor（1964）、Hanna and Grant（1962）、Vinogradov（1959）、Vinogradov（1953）、Rankama and Sahama（1950）のデーターを使用した。ただし、幅を持って示された値については、最高値と最低値の中間の値を用いた。

（当然、必用条件とはなるが、十分条件とはならない。）。

⑵　分析方法

全リン分析の方法は、以下の通りである。

１）試料を60℃で一日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉砕。

２）フッ化水素酸分解法（土壌環境分析法編集委員編、1997）による試料調整。

３）モリブデン酸による定量（日本薬学会編、2010）に従い、紫外可視近赤外分光光度計（日本分光社：V-670）による濃度測定。

４．CN分析及び全リン分析結果

CN濃度測定結果及び全リン分析結果を表２に示す。（表２には、C/N、P/Cも示した。）

リン（Phosphorus）濃度は壺胎土が最も高く、壺に付着した堆積物では内外の差がほとんどなかった。

壺内外の堆積物では窒素（Nitrogen）、炭素（Carbon）濃度の差が少なく、C/Nはいずれも15程度を示した。壺胎土の窒素（Nitrogen）、炭素（Carbon）濃度は堆積物中の10％程度で、C/Nは12.49と堆積物に比べやや低い値を示した。

５．壺内に人骨が納められていた可能性

表１に示したように、人骨のC/Nは8.4である。これに対し、壺内堆積物のC/Nは14.78と高い値を示した。更に壺外堆積物は15.64、土器胎土は12.49と1.5～２倍近い値を示した。

リン濃度は土器付着堆積物で911、771ppm（0.0911、0.0771％）と、平均的土壌：0.08％（あるいは堆積物の平均：0.067％）よりやや高い程度である。また、土器胎土のリンの濃度が2,022ppm（0.2022％）とやや高いことを踏まえると、付着堆積物を採取する際に、ここから混入したか可能性も指摘できる。

以上の事柄をまとめると、壺内に人骨が含まれていた可能性は低いと考えられる。

文献

日本薬学会編（2010）12）総リン　⑴モリブデン酸による定量。衛生試験法・注解　2010、947-948

土壌環境分析法編集委員会編（1997）。28全量分析分会方法　Bフッ化水素酸分会法。土壌環境分析法、171-174

渡辺正巳（2012）中村１号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布。中村１号墳本文編（第１分冊）出雲市文化財報告、15、177-182

表２　PCN測定結果一覧表

	Nitrogen（％）	Carbon（％）	Hydrogen（％）	Sulphur（％）	C/N	C/S	Phosphorus ppm（mg/kg）
壺内堆積物	1.064	15.727	0	0.11	14.78	143.32	911
壺外堆積物	0.901	14.085	0	0.093	15.64	152.19	771
壺　胎　土	0.144	1.801	0	0.028	12.49	63.94	2,022

第４章　総括

第１節　銭集中及び神社跡周辺出土銭貨の評価について

K-7区の神社跡の南東部で検出した銭集中からは、179枚分の銭貨が出土した。そのうち、完形のもの106枚、４分の３以上残存するもの18枚、半分前後のもの24枚分、４分の１以下の破片32枚分を数える。欠損品や破片が多いのは埋蔵環境に起因するとみられ、本来存在した数はもう少し多かったであろう。素材は鉄製の新寛永２点を除きすべてが青銅製で、肉眼で観察する限りは赤銅や白銅などの特徴的な質のものは認められない。

銭種の構成を表１に掲げる。最古銭は初鋳年621年の開元通宝である。最新銭は元文期の新寛永で1730年代のものであるが、渡来銭としては1433年初鋳の宣徳通宝が最も新しい。

渡来銭は155点で、86.6％を占める。唐銭は開元通宝10点（5.6％）を数える。北宋銭が最も多く、104点（58.1％）ある。銭種としては元祐通宝、皇宋通宝、元豊通宝の順に多く、北宋銭の構成としてはごく一般的である。南宋銭は淳熙元宝２点が出土した。製作上の特徴等から明らかに模鋳銭に分類できるものは含まれていない。

この遺構から出土した銭貨の最大の特徴は、明銭の多さである。37枚（20.7％）のうち33枚が永楽通宝で占められる。いずれも鋳上がりの良い美銭で、日本鋳のものは含まれていないと考えられる。宣徳通宝１点（C126）と、明銭ではないが朝鮮通宝２点（C127・C128）も同様で、新期渡来銭は概して出来が良い。

この銭貨群のもう一つの特徴は、少数ながら模鋳銭（C131～C135）が含まれていることである。外径2.2cm、厚さ1.1cm程度の小ぶりのもので、穿径が大きい。銭文は潰れているか無文で、輪は不鮮明であるが、穿の仕上がりは断面台形で鋭く、表面側に細く隆起する郭が巡るものもある。堺環濠都市遺跡での鋳型の出土例から、16世紀後半のものと考えられる。

寛永通宝は８点（4.5％）が出土している。古寛永は２点で、芝銭と称されるもの（C136）と建仁寺銭と呼ばれるもの（C137）がある。新寛永は銅銭４点と鉄銭２点が含まれる。銅銭は１点を除き元文期鋳造とされるもので、鉄銭も錆が厚く分類不能ながら一文銭としては径が大きいので元文期のものとみられる。

この他に摩滅や破片で銭文不明のため分類できない銅銭が11点（6.2％）あるが、輪や郭などの特徴から、ほとんどは北宋銭であろう。

銭集中以外の銭貨

銭集中以外からは52点の銭貨が出土した。そのうち46枚は銭集中があるK7区や神社跡周辺からの出土であるため、本来は同一の所属であった可能性が高い。以下では、明治43年（1910）発行の十銭銀貨（C182）を除く方孔銭51点について記述する。

完形品31点、４分の３以上６点、半分前後９点、４分の１以下の破片５点で構成され、材質は新寛永鉄銭１点を除きすべて青銅製である。

銭種構成は表１の通りで、最古銭は開元通宝、最新銭は新寛永秋田銭（1738年初鋳）で、渡来銭に

表１　銭種構成

		石組遺構１	銭集中	遺構外	計
唐	開元通寶		10	5	15
北　宋	宋通元寶		1		1
	太平通寶		1		1
	淳化元寶		2		2
	至道元寶		1		1
	咸平元寶		2		2
	景徳元寶		2		2
	祥符元寶		4	1	5
	祥符通寶		2	1	3
	天禧通寶	1	3		4
	天聖元寶		6	1	7
	明道元寶			1	1
	皇宋通寶		13	3	16
	至和元寶		2		2
	嘉祐通寶		3		3
	治平元寶		2		2
	熙寧元寶		9	4	13
	元豊通寶		12	2	14
	元祐通寶		17	5	22
	紹聖元寶		2	2	4
	元符通寶		2		2
	聖宋元寶		2	2	4
	大観通寶		2	1	3
	政和通寶		5		5
	不　明		9	5	14
南　宋	淳熙元寶		2		2
明	洪武通寶		3		3
	永楽通寶		33	9	42
	宣徳通寶		1		1
李氏朝鮮	朝鮮通寶		2		2
中世日本	模 鋳 銭		5	2	7
近世日本	古 寛 永		2		2
近世日本	新 寛 永		4	5	9
近世日本	寛永鉄銭		2	1	3
近代日本	近 代 貨	1		1	2
不　明	不　明		11	1	12
計		2	179	52	233

限れば永楽通宝（1408年初鋳）が最新である。唐銭５点（9.8％）、北宋銭28点（54.9％）、明銭９点（17.7％）、寛永通宝６点（11.8％）などで構成され、銭集中と比較すると寛永通宝の比率が高い。しかし、K7区から出土した寛永通宝が鉄銭１点のみであることを考慮すると、寛永通宝の多くは銭集中銭貨群には本来所属していなかった可能性があり、そうであれば銭種構成は銭集中とほぼ同様となる。永楽通宝がいずれも中国鋳の美銭であることや、２点の模鋳銭が含まれていることなど、その特徴も銭集中とよく似ている。

特筆すべきものとして２点をあげる。C143は開元通宝で、郭外の対角線上の２ヶ所に小さな円孔を穿つ。大陸でかつてボタンとして用いられたものが日本では銭として流通していたことになる。C176は模鋳銭で欠損しているが、無文でありながらシャープな穿と細かく隆起する郭をもつ点で典型的なものである。

考　察

銭集中とその周辺から出土した銭貨がどのような性格をもつものであるかを考える手掛かりは、各個体の属性と出土状況にある。

銭集中出土銭の摩滅度を５段階に分類した。摩滅がほとんど見られないものを１、文字の一部が摩滅するものを２、全体に摩滅が認められるが文字の窪みの部分がはっきりしているものを３、文字の窪みまで摩滅するものを４、判読不能なほど激しく摩滅するものを５とした。なお、もともと文字が無いか不明瞭な模鋳銭については分類から除外している。結果は表３に示すとおりで、唐銭と宋銭では摩滅度３と４のものがそれぞれ４割以上であるのに対し、明銭は摩滅度１と２のものがそれぞれ４割以上となる。方孔銭は緡にまとめられている場合や甕などに備蓄されている場合は摩滅が進みにくいので、この結果は流通期間というよりは流通形態に起因する部分が大きいと推定される。つまり、銭集中の明銭などの新期渡来銭はもともと緡の状態で流通していたものであったのに対し、唐銭や北宋銭はバラの状態で使われていたのものであったと考えられる。北宋銭に、緡にはしにくい歪みのあるものが５点含まれていることはこれを裏付けるかもしれない。サイズの関係で中国本銭と一緒に緡には通し難い模鋳銭もバラで流通していたものの可能性がある。

この銭貨群は、新期渡来銭を除いては、もともとはバラバラに使われていたものの寄せ集めでできたと考えられる。近くに神社跡があることを考えれば、その性格としてまず浮かぶのは賽銭であり、それも個人が一枚ずつ奉納するような形態である。

永楽通宝などの新期渡来銭についても、銭緡の状態で奉納されたかどうかについては疑問が残る。銭集中出土銭貨には銹着して出土したものも、銹着の痕跡を示すものも１枚も存在しないからである。たとえ緡で奉納されたとしても、埋没直前にはバラバラにほどけていたはずである。銭緡が自然にはほどけにくいことを考え合わせると、永楽通宝等についても、１枚ずつ奉納されたものとするのが妥当であろう。

銭貨群が賽銭として奉納された時期については、２時期に分けて考えることができる。

１期目は16世紀後半頃で、中世の銭貨群として捉えた場合に事実上の最新銭となる模鋳銭がその根拠である。銭集中から一個体分が出土した瓦質鍋（Po. 251）の年代とも合っている。なお、この鍋は賽銭の容器であった可能性がある。個人的な賽銭奉納が盛んであった背景には、戦乱の時代というだけでなく、この場所の性格が関係すると推定される。遺跡内の少し離れた場所には同時期の大鍛冶場が存在していて、神社跡周辺からは初花とみられる流出滓が出土していることから、賽銭の中には大鍛冶場の操業に関係して献納されたものや、労働者たちによって奉げられたものも多く含まれているのでなかろうか。

いずれにせよ、ごく一般的な銭種比率のややくたびれた唐銭や宋銭と、多くの美しい永楽銭に、少数の模鋳銭が加わる構成は、この時期にこの地域で日常生活の中で流通した貨幣の姿を表すものとして重要である。

２期目は18世紀中頃で、新寛永銭の大半が元文期のものであることを根拠とする。17世紀代に大量に鋳造された古寛永や新寛永文銭の類がほとんど含まれないことは、16世紀後半には盛んだった賽銭を納める行為が途絶していたことを物語るだろう。この時期の賽銭奉納も零細で一時的なものである。社殿の建て替えなどに伴って付近の斜面に１期の古い賽銭を合わせて撒くことが行われたか、社殿が倒壊して中にあった賽銭が斜面に散らばってしまった可能性が考えられる。銭集中では銭貨群と

ともに和鏡が出土していることと、先述の瓦質鍋が賽銭容器だった可能性を考えると、後者の蓋然性が高いと思われる。（高橋章司）

表２　銭籍構成

	石組遺構１		銭　集　中		そ　の　他		合　　計	
	点　数	%	点　数	%	点　数	%	点　数	%
唐			10	5.59	5	9.62	15	6.44
北　宋	1	50.00	104	58.10	28	53.85	133	57.08
南　宋			2	1.12	0	0.00	2	0.86
明			37	20.67	9	17.31	46	19.74
朝　鮮			2	1.12	0	0.00	2	0.86
中世日本			5	2.79	2	3.85	7	3.00
近世日本			8	4.47	6	11.54	14	6.01
近代日本	1	50.00		0.00	1	1.92	2	0.86
不　明			11	6.15	1	1.92	12	5.15
計	2	100.00	179	100.00	52	100.00	233	100.00

表３　磨滅度（銭集中）

	摩滅度１（ほぼ無）	摩滅度２（部分的）	摩滅度３（全体的）	摩滅度４（重度）	摩滅度５（極度）
唐　銭	0	1	4	4	1
		10.0%	40.0%	40.0%	10.0%
北宋銭	0	8	48	48	0
		7.7%	46.2%	46.2%	
南宋銭	0	0	2	0	0
			100.0%		
明　銭	15	18	4	0	0
	40.5%	48.6%	10.8%		
朝鮮銭	1	1	0	0	0
	50.0%	50.0%			
寛永通寶	0	4	2	1	0
		57.1%	28.6%	14.3%	
計	16	32	60	53	1
	9.9%	19.8%	37.0%	32.7%	0.6%

第２節　精錬鍛冶炉の調査成果

J-20区で検出した鍛冶炉は、特殊な構造から精錬鍛冶炉と推測される。精錬鍛冶の内容は、製錬で生産された鉄塊を鍛冶炉の内部で加熱した後に鍛打し、脱炭することで鍛錬鍛冶加工しやすい鉄素材に加工するものである。こうした作業は、近世のたたら製鉄では「大鍛冶場」で行われていた「下げ」と「本場」の工程に相当する。

精錬鍛冶炉の構造は、燃焼部の土坑で鉄を加熱して溶解し、不要なノロを連結する排滓土坑へと流す構造となっており、島根県の板屋Ⅲ遺跡で見つかった製錬鍛冶炉と同じものと推測される。こうした精錬鍛冶炉は、鳥取県内では倉吉市関金町の大河原遺跡で確認されているが、日南町内では初めての検出例である。

今回見つかった精錬鍛冶炉については、土坑内と作業面に堆積した鉄滓を大量に含む土砂を９つの

地区に分けて全量持ち帰り、水洗選別を行った。その結果得られた鉄滓の総重量は195kgにも及ぶ。

採取された鉄滓の割合を見てみると、再結合滓が90％で大半を占めており、流動滓が９％、粒状滓と鍛造剥片が合わせて１％となっている。粒状滓と鍛造剥片が含まれていることから、排滓坑の脇に鍛造剥片や粒状滓、再結合滓が固まって出来た作業面や鉄床石の上で、加熱した鉄を鍛打して脱炭や成形作業を行っていたと考えられる。

この鍛冶炉での操業を想定すると、二つの土坑の中間に石を置いて排滓孔を設け、片側の石に粘土を貼り付けて炉壁を作り燃焼部としていた。燃焼部には土製の長い羽口を挿入し、鞴で送風していたと考えられ、鞴座は燃焼部の西側にある窪みと想定される。ここで使用されていた羽口の外径は、10～12㎝程度のものが中心で、板屋Ⅲ遺跡で出土しているものと比べると小型である。鍛冶炉の上部構造は不明だが、鞴が燃えないよう粘土で土手を築くか、石を置くなどの措置が取られていたのではないだろうか。

鍛冶炉と作業場を覆う上屋は、桁行３間（3.6m）、梁行２間（3.1m）の規模で、柱は10㎝程度の太さのものを使用していたと想定されるが、作業面から屋根までの高さは分からない。また、壁の有無についても明らかにすることが出来なかったが、燃焼部の土坑から壁までの距離が１mにも満たないことから、土壁でなければ火災の恐れもある。もしくは、風雨を避ける可動式の扉があった可能性はあろう。いずれにせよ、近世の大鍛冶場と比べると建物の規模がかなり小さいことから、操業内容もそれに見合った小規模なものであったと推測される。

最後に、17区で見つかった建物群については、梁行が９mもある大型の建物であり、一般的な住居とは考えにくいことから、製鉄を専門に行う集落である「山内（さんない）」の施設に繋がるものではないかと想像される。こうした山内集落の成立時期は、これまでは近世以降と考えられていたが、今回見つかった精錬鍛冶炉と建物群の時期が中世末期から近世初頭頃と推測されることから、山内集落が成立する直前期の様相を示す資料として評価することが出来るのではないか。

表４　新屋宮ノ段遺跡　鍛冶炉出土鉄滓集計表

	網のサイズ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ-1	Ⅷ-2	Ⅸ	合計(g)
流動滓	３㎜以上	240.0	16.7	700.0	4,350.0	479.7	600.0	5,060.0	6,135.5	200.0	17,781.9
再結合滓	３㎜以上	2,320.0	1,530.0	8,740.0	14,690.0	5,700.0	4,275.0	10,121.0	47,890.0	1,590.0	96,856.0
	３㎜網	1,080.0	848.1	3,320.0	25,210.0	4,191.6	3,140.0	3,870.0	18,700.0	290.0	60,649.7
	１㎜網	460.0	380.9	1,280.0	2,900.0	1,438.2	749.9	1,460.0	9,096.4	218.1	17,983.5
粒状滓	３㎜網	24.8	7.7	16.9	47.0	32.7	18.1	55.5	176.2	8.5	387.4
	１㎜網	10.5	4.7	10.2	55.9	31.3	9.1	29.6	152.6	4.5	308.4
鍛造剥片	３㎜網	19.7	11.2	26.0	53.2	38.9	26.9	31.4	184.6	13.3	405.2
	１㎜網	7.6	12.9	33.3	108.2	111.1	18.0	17.7	300.8	5.5	615.1
合　計（g）		4,162.6	2,812.2	14,126.4	47,414.3	12,023.5	8,837.0	20,645.2	82,636.1	2,329.9	194,987.2

第３節　新屋宮ノ段遺跡における瓦生産について

新屋宮ノ段遺跡の所在する新屋・多里地区は、近世から近代にかけて製鉄業とクローム鉱山によって栄えた地域であった。昭和35年には多里地区だけでも2,556人もの人口があり、町の通りには映画館やパチンコ店まであったという。平成31年には人口が131人にまで減少して高齢化と過疎化の波が押し寄せ、かつてのにぎわいを想像するのも難しい状況であるが、山間の町から離れた新屋宮ノ段遺跡において、近代の瓦生産に関する資料が出土したことは正直、驚きであった。

今回見つかった近代の瓦窯に関する資料、中でも達磨窯に関するものは鳥取県内では初出である。鳥取県内において、瓦が一般の家庭にまで普及した時期は明らかではないが、明治24（1891）年に発生した淀江大火では、火災によって町の99％の建物が焼失したとされており、その原因の一つが瓦屋根の建物がほとんど無かったためと言われている。山間部に位置する日南町でも瓦の普及は近代以降と考えられることから、この資料は鳥取県内で民間に瓦が普及する最初期のものであろう。

この場所で生産されていた瓦は燻瓦であり、本来は寒冷地には適さない瓦である。出土した燻瓦は、桟瓦、袖瓦、雁振瓦、板瓦が見られる。軒桟瓦の紋様は唐草を用いているが、中心飾りの部分は全て欠損していて紋様が分からなかった。桟瓦は現在の日南町でもよく使われている「へ」字形のもので、端部に「⊕」のスタンプを押すものがある。

窯の構築材は、塼と火柱によって構成され、窯壁部は瓦と粘土を交互に積み上げて形づくられていたと考えられる。塼は粘土隗からレンガ状に四角く切り出したもので、完形品が無いため正確な寸法が分からないが、小型品から大型品まで各種見られる。厚みは５～８㎝のものが多く、ほとんどが被熱している。恐らく、窯の焚口や基礎部の構築に使われたと考えられる。また、畿内や三州系の瓦窯では大型の塼を用いることはまれであり、この資料の特異性を表している。

火柱は、焚口からの炎を効率よく燃焼室へ送りこむために角が面取りされており、上部へ行くほど強く被熱している。

達磨窯の上部は、出土した窯壁の破片から、瓦と粘土を交互に積み上げて窯体を構築していった状況が窺える。丸みを持つ天井部については、どのようにして瓦を積み上げて成形したのか、出土品では判断することが出来なかった。

また、窯の中で瓦同士の融着を防ぐハセが付着したままの石州瓦と、ハセ、モミツチなど施釉瓦に特有の窯道具も出土している。今回出土した資料では、瓦窯の部材に釉薬が付着したものが見つからなかったことから、達磨窯で施釉瓦を焼いていた可能性は低いと思われる。地元の方に伺った話では、瓦を焼いていた窯は調査地点から谷を隔てた北側の山だったという証言もあることから、施釉瓦を焼いた窯もこの近くにあり、同時期に併存したのか、あるいは達磨窯が廃絶したあとに作られたのかのではないかと想像される。

瓦窯の調査指導を頂いた藤原学氏の指摘では、塼を達磨窯で積極的に活用していることは鉄釉瓦の製作技法の影響が考えられることから、施釉瓦の窯技術を職人が経験していた可能性を指摘しておられる。これが鳥取県内の達磨窯の地域的な特徴なのか、あるいは本資料だけが特異例なのか、比較できる資料が皆無の現状では判断が付かない。今後、比較できる良好な資料が現れた際に、改めてこの資料が脚光を浴びるものと考える。

第４節　新屋宮ノ段遺跡の歴史的環境

青瀧神社は見通しの良い丘陵の先端部にあり、新屋の集落を眼下に臨む好立地に建てられている。この青瀧神社の周辺では、縄文時代早期のものと見られる配石遺構や前期の貯蔵穴が密集しており、古くから祭祀の場や食物を貯蔵する場として利用されていたことが判明した。

配石遺構については、鳥取県大山町の門前第２遺跡（菖蒲田地区）において縄文時代早期の事例が見つかっていることから、大山北麓と日野川上流域の二つの場所に配石遺構を作った集団が存在したことになる。この遺構については、掘形を持たないことから墓としての機能は想定しにくく、その他の祭祀的な用途で使用されたものと考えられる。

新屋宮ノ段遺跡から出土した縄文土器は、早期の神宮寺式から黄島式、高山寺式、穂谷式、前期の西川津式まで長期間に亘っており、縄文時代早期にこの場所で人々が活発に活動していたことが窺える。また、穂谷式や宮の平式など押型文土器の終末期の資料がまとまって出土したことは特筆に値する。残念ながら住居を検出することが出来なかったが、集石や土器が見つかっている16区の周辺から東側の丘陵地に集落の中心があったのではないか。

弥生時代から古墳時代の様相は全く不明であるが、青瀧神社の周辺から古代のものと見られる土師器が出土したことから、この頃から再び人々の活動が活発化したことが分かる。新屋宮ノ段遺跡のすぐ北にある新屋小タイ田遺跡の調査では、当該期の集落が検出されており、この丘陵上にも何らかの遺構があったと考えられる。

平安時代末期から鎌倉時代には、石組遺構１が作られている。この遺構は、リン・CN分析の結果から墓ではなく経塚と推測したが、瓦質土器の中には経巻が納められていなかったため、盗掘により内容器は既に持ち去られていると考えた。周辺から出土した和鏡も、この石組遺構に関わる可能性があるが、瓦質土器の年代と和鏡の年代には時期差があると考えられることから、更なる検討が必要である。

瓦質土器を収めた石組は、放射状に石を配置して中心部に土器を置く空間を作っていた。このように石を放射状に配置した経塚の事例は、島根県益田市の丸子山遺跡でも確認されているが、それ以外に山陰地方での類例は見られない。山陽地方の事例を確認していないので、地域的な特徴か判断できないが、石組のみで明確な土盛のマウンドを持たない経塚の事例はかなり限定されるのではないか。

大正４年に多里神社へ合祀された青瀧神社は、棟札の記録から享保２年にはこの場所に建てられていたと推測される。今回検出した建物は、明治時代に建てられた神社の付属建物と推測したが、その下層から見つかった柱穴群は、この場所に古くから神社があったことの証と考えられる。すぐ近くには銭集中もあり、同じ丘陵上では精錬鍛冶が行われていたことから、中世後半期まで神社の起源が遡る可能性もあろう。

そして、近代にはこの場所で燻瓦の生産が行われていた。クローム鉱山によって大いに栄えていた多里の町からもほど近いこの場所は、付近に民家も無く、燃料となる薪や瓦の原料となる粘土も入手しやすい場所だったと考えられる。青瀧神社が合祀された大正４年には、既に瓦窯は廃業していたと思われるが、周辺は畑となり、達磨窯の窯体は解体されて道路の基礎へと転用され、現代の山林が広がる景観へと変化したのであろう。

第５節　結語

平成29年から始まった新屋宮ノ段遺跡の発掘調査は、雪の降る冬季を休止しても足かけ二年半かかりました。広島県との県境に近い新屋の現地は、米子市内から車で片道一時間、近くのコンビニまで片道30分、往復すると一時間もかかるので、移動だけで昼休憩が終わってしまいました。

また、土地勘のない日南町の天気は読めず、急変する天気に右往左往することもしばしばでした。山陰地方では「弁当忘れても傘を忘れるな」と言われていましたが、新屋の調査では「傘も弁当も忘れるな」という教訓を得ました。

しかし、新屋の自然は本当に豊かで、事務所のすぐそばを流れる日野川には国の特別天然記念物のオオサンショウオが泳いでいたり、現場にアナグマが現れたりと驚きの連続でした。調査地のすぐ近くには、県の天然記念物である「多里層ノジュール列」があり、発掘現場でも植物化石が拾える、自然史の宝庫と言える場所でした。歴史分野でも、たたら製鉄の痕跡を示す鉄滓は現地の包含層に大量に含まれていて、とても全量回収できる状況ではありませんでした。今回の発掘調査で判明した事実はごく一部に過ぎず、新屋には手つかずの歴史がまだまだ眠っていると実感しました。

また、整理作業では膨大な数の出土品がありましたが、調査担当者が年度途中で出向となったため、縄文土器の分類整理・実測には柳浦俊一氏のご協力を得ました。本書に掲載した縄文土器の実測図と分類は、柳浦氏の成果によるものです。鉄関連の調査では、角田徳幸氏、坂本嘉和氏に現地へ来て頂き、精錬鍛冶炉の調査方法について指導を得ることが出来ました。銭貨の分類・整理・拓本には高橋章司氏のご協力を頂き、考察も寄稿して頂きました。瓦窯の調査では、藤原学氏よりご指導頂きました。瓦窯を構成する部材の分類では、指導の成果を十分に活かすことが出来ませんでしたが、今後、中国地方の近代瓦生産の実態を示す資料として本書が活用されることを望みます。

最後に、調査にご協力頂いた国土交通省三次河川国道事務所の皆様、日南町の皆様、そして調査に参加して頂いた作業員各位に感謝の意を表して結びとします。

参考文献

1979年　『明治の多里郷』日南町公民館多里支館編

1998年　角田徳幸『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会

2005年　中森　祥ほか『門前第２遺跡（菖蒲田地区）』鳥取県教育文化財団

2010年　大野芳典『丸子山遺跡』益田市教育委員会

2014年　角田徳幸『たたら吹製鉄の例率と展開』清文堂

2020年　日南町史編集委員会『続日南町史（地域編）』日南町

表３　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
9	Po. 1	無文土器	配石遺構５	埋土中	口径（39.0） 厚さ1.3～2.2	褐色	口唇刺突状の大きな刻目文 内外面・ナデ、一部に二枚貝条痕	多	口縁やや外反
12	Po. 2	神宮寺式	貯蔵穴１	埋土中	厚さ0.5	黒褐色	ネガティブ楕円押型文（楕円文長１×幅0.4cm）横位施文 内面ナデ	なし	
14	Po. 3	磯ノ森式	貯蔵穴11	埋土中	口径（29.8） 厚さ0.5	黒褐色	C字爪形文（ロッキング）＋上に沈線文(横位・弧状意匠) 内外面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
16	Po. 4	神宮寺式	K-9	３層	厚さ0.7	暗茶色	ネガティブ楕円文（長0.4～0.5×幅１cm）斜行施文　内面ナデ	なし	
16	Po. 5	黄島式	K-7	１層	厚さ0.8～1.1	褐色	外面山形文（波長0.8×波高0.3cm）内面柵状文（一部２段　0.6～0.8cm）・山形文横位施文	なし	
16	Po. 6	黄島式	K-16	３層	厚さ0.5～0.8	橙色	外面山形文（口縁横位・以下斜位施文）内面柵状文（長1.6cm）・山形文（波長1.3cm　波高0.3cm　横位施文）内面ナデ	なし	波状口縁
16	Po. 7	黄島式	J-16	３層	口径（21.0） 厚さ0.6	灰褐色	外面山形文　内面柵状文（長1.3cm）・山形文（波長1.1cm波高0.7cm　原体長5.8cm？）内面ナデ	なし	
16	Po. 8	黄島式	K-7	３層	厚さ0.6～1.0	黄褐色	内外面・山形文（波長0.9cm波高0.4cm　横位施文）	なし	
16	Po. 9	黄島式	銭集中	検出中	厚さ0.7～1.0	黄褐色	内外面・山形文（波長0.9cm波高0.4cm　原体長３cm？横位施文）	なし	
16	Po. 10	黄島式	K-6	３層	厚さ0.6～1.0	黄褐色	外面上部・二枚貝条痕(斜位)下部・山形文（横位施文）内面・山形文（波長0.7cm　波高0.5cm　横位施文）	なし	
16	Po. 11	黄島式	K-6	２層	厚さ0.5～1.0	黄褐色	内外面・山形文（波長0.9cm波高0.4cm　横位施文）押型文２単位・原体長3.5cm？	なし	
16	Po. 12	黄島式	K-7	２層	厚さ0.7	褐色	外面・山形文（波長１cm　波高0.4cm　横位施文）内面・ナデ	なし	
16	Po. 13	黄島式	K-6	３層	厚さ0.5	黄橙色	内外面・山形文（波長0.6cm波高0.3cm　原体長1.5cm　帯状・横位施文）内面二枚貝条痕＋ナデ	なし	
16	Po. 14	黄島式	K-6	３層	厚さ0.4	黄橙色	外面・山形文（波長0.7cm波高0.3cm　原体長1.5cm　帯状・横位施文）内面ナデ	なし	
16	Po. 15	黄島式	K-6	２層	厚さ0.4	黄褐色	外面・山形文（波長0.6cm・波高0.2cm　押型文２単位？原体長1.5cm　帯状・横位施文）内面ナデ	なし	
16	Po. 16	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.8	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文	少含む？	
16	Po. 17	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.8	橙色	外面・複合鋸歯押型文	なし	内面タール状の煤付着
16	Po. 18	黄島式	J-19	３層	厚さ0.5～0.6	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文　内面・ナデ	なし	
16	Po. 19	黄島式	J-19	３層	厚さ0.5～0.7	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文	少含む？	

表４　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
16	Po. 20	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.7	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文	少含む？	
16	Po. 21	黄島式	J-19	３層	厚さ0.5～0.6	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文	なし	
16	Po. 22	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.8	黄褐色	外面・複合鋸歯押型文＋楕円文	少含む？	楕円文（長0.8×幅0.6cm）２単位
16	Po. 23	黄島式	J-19	３層	厚さ0.5～0.7	黄橙色	外面・複合鋸歯押型文＋楕円文	少含む？	楕円文（長0.7×幅0.4cm）
16	Po. 24	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.7	黄褐色	外面・楕円文＋複合鋸歯押型文　内面ナデ	なし	楕円文（長0.8～0.9×幅0.5～0.6cm）２単位（下端に原体傷）
16	Po. 25	黄島式	K-6	２層	厚さ0.9	橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・柵状文＋楕円文	少？	楕円文（長0.5～0.7×幅0.3cm）　柵状文長4.4cm
16	Po. 26	黄島式	貯蔵穴５の西側	検出面	厚さ0.7～0.8	暗赤褐色	外面・楕円文（縦位施文）内面・柵状文＋楕円文	なし	柵状文長1.4～1.6cm 楕円文長0.5～0.7×幅0.3～0.4cm
16	Po. 27	黄島式	K-6・K-7	１・２層	厚さ0.6～0.9	外面：黒茶色、内面：赤茶色	外面・楕円文（縦位施文）内面・柵状文２段＋楕円文	含む？	楕円文施文後に柵状文。柵状文長（上1.6cm・下2.6cm）　楕円文（長0.5～0.65×幅0.3～0.4cm）
17	Po. 28	黄島式	K-6	１・２層	厚さ0.8～0.9	外面：黒褐色、内面：黄褐色	外面・楕円文（縦位施文）内面・柵状文２段	少含む？	楕円文（長0.5～0.8×幅0.4～0.5cm）柵状文長・上段0.9cm 下段4.9cm
17	Po. 29	黄島式	K-6	３層	厚さ0.8～1.1	橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・柵状文２段	少含む？	楕円文（長0.8×幅0.4cm）柵状文長・上段0.7cm　下段３cm＋α
17	Po. 30	黄島式	L-7	１層	厚さ0.7～0.9	茶褐色	外面・楕円文（上部縦位施文・下部斜位施文）内面・柵状文２段	少含む？	楕円文（長0.4～0.7×幅0.3cm）柵状文長・上段（上段2.7cm　下段2.4cm）
17	Po. 31	黄島式	J-16	３層	厚さ0.7～0.9	黄橙色	外面・楕円文（斜位施文）内面・柵状文２段（斜行沈線の可能性もあり）	なし	楕円文（長0.9×幅0.5cm）柵状文長・下段3.5cm？
17	Po. 32	黄島式	L-7	２層	厚さ0.8	淡黄褐色	外面・楕円文（上部縦位施文・下部斜位施文）内面・柵状文２段	含む	楕円文（長0.4～0.5×幅0.2cm）柵状文長・上段２cm　下段5.1cm＋α
17	Po. 33	黄島式	K-6	３層	厚さ0.5～0.6	橙、黄褐色	内外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	なし	楕円文　長0.5×幅0.5cm　原体長2.4cm
17	Po. 34	黄島式	J-18	２層	厚さ0.4～0.6	黄橙色	外面・楕円文（横位帯状施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.5～0.7×幅0.2～0.3cm）
17	Po. 35	黄島式	J-18	２層	厚さ0.4～0.5	黄橙色	外面・楕円文（横位帯状施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.5～0.6×幅0.2～0.3cm）
17	Po. 36	黄島式	J-18	２層	厚さ0.5～0.6	黄褐色	内外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.3～0.5×幅0.3cm）原体長2.6cm？　上下で原体違う？
17	Po. 37	黄島式	K-6	３層	厚さ0.6～0.8	黄橙色	内外面・楕円文（外面上部縦位・下部、内面横位施文）外面部分的にナデ	なし	楕円文（長0.5×幅0.3cm）浅い器形？
17	Po. 38	黄島式	J-16	３層	厚さ0.6～0.7	灰褐色	外面・楕円文（横位～斜位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.4×幅0.3cm）
17	Po. 39	黄島式	K-6	３層	厚さ0.6～0.7	黄褐色、内面：橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.5～0.8×幅0.3～0.4cm）

表５　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
17	Po. 40	黄島式	K-16	３層	厚さ0.6～0.8	黄褐色	外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	少含む？	楕円文（長0.4×幅0.2～0.3cm）
17	Po. 41	黄島式	K-15	３層	厚さ0.6～0.7	黄橙色	外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.3～0.5×幅0.2～0.3cm）
17	Po. 42	黄島式	土坑１	検出中	厚さ0.5～0.6	黄褐色	内外面・楕円文（外面斜位・内面横位施文）	繊維なし	楕円文（長0.8～1×幅0.6～0.7cm）
17	Po. 43	黄島式	K-6	２層	厚さ1.1	橙色	外面・楕円文（斜位施文）内面・ナデ	繊維少含む	楕円文（長0.7～0.8×幅0.4cm）
17	Po. 44	黄島式	K-6	２層	厚さ0.8～1.0	橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・ナデ	含む	楕円文（長0.6～0.7×幅0.4～0.5cm）
17	Po. 45	黄島式	L-7	２層	厚さ0.6	黄褐色	外面・楕円文（縦位施文）内面・ナデ	繊維含む	楕円文（長0.7～0.8×幅0.6cm）
17	Po. 46	黄島式	K-7	１層	厚さ1.2	黄褐色	外面・楕円文（横位？施文）＋ナデ　内面・ナデ	含む	楕円文（長0.7×幅0.3～0.5cm）
17	Po. 47	黄島式	I-19	２層	厚さ0.8	黄橙色、内面：灰色	外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.4～0.5×幅0.3～0.4cm）文様下端は原体端部
17	Po. 48	黄島式	土坑１	検出中	厚さ0.8～1.5	橙色	外面・楕円文（横位施文）内面・ナデ	なし	楕円文（長0.4～0.7×幅0.4～0.5cm）
17	Po. 49	黄島式	K-7	２層	厚さ0.9～1.5	黄橙色	外面・楕円文（横位？施文）内面・ナデ	少含む？	楕円文（長0.4×幅４cm）
17	Po. 50	黄島式	L-6	１・２層	厚さ0.8～1.1	橙色	外面・楕円文（縦位？施文）内面・ナデ	少含む？	楕円文（長0.9×幅0.5cm）
17	Po. 51	黄島式	表採	排土中	厚さ1.0	橙色	外面・ナデ　内面柵状文２段	少含む？	柵状文　上・長2.3cm　下・3.7cm＋α
17	Po. 52	黄島式	J-20	１層	厚さ0.5～0.8	黄橙色、内面：褐灰色	外面柵状文　内面二枚貝条痕	少含む？	
17	Po. 53	黄島式	J-19	３層	厚さ0.6～0.8	黄橙色、内面：褐灰色	外面二枚貝条痕＋ナデ　内面柵状文２段？	なし	柵状文　上・長３cm　下・４cm＋α　円孔（焼成後）
17	Po. 54	黄島式	J-19	３層	厚さ0.9	橙色	内外面柵状文（外面縦位　内面横位２段）	なし	
17	Po. 55	黄島式	建物１	検出中	厚さ0.5	橙色	内外面・口唇撚糸文（横位施文）	なし	
17	Po. 56	黄島式	J-19	１層	厚さ0.7～1.0	黄橙色	外面・撚糸文＋ナデ（横位施文）	少含む？	
17	Po. 57	黄島式	建物１	検出中	厚さ0.5～0.6	黄橙色	外面・撚糸文、上部ナデ　内面・柵状文・撚糸文（横位施文）	なし	撚糸文原体長３cm　柵状文長1.7cm
17	Po. 58	黄島式	建物１	検出中	厚さ0.6	黄橙色、外面：灰色	外面・撚糸文（横位施文）内面・二枚貝条痕＋ナデ	少含む？	
17	Po. 59	黄島式	K-17	３層	厚さ0.6～0.8	橙色	外面・撚糸文（横位・斜位施文）内面・二枚貝条痕＋ナデ	少含む？	撚糸文原体長2.8cm？
17	Po. 60	黄島式	K-17	３層	厚さ0.7～0.8	橙色	外面・撚糸文（横位施文）＋ナデ　内面・二枚貝条痕＋ナデ	少含む？	
17	Po. 61	黄島式	K-17	３層	厚さ0.7～0.8	黄橙色	外面・撚糸文（横位施文）＋ナデ　内面・ナデ	少含む？	
17	Po. 62	黄島式	建物1	検出中	厚さ0.6	橙色	外面・撚糸文（斜位施文）＋ナデ　内面・ナデ	少含む？	
18	Po. 63	黄島式	J-16	２層	厚さ0.5～0.7	灰黄色	外面・撚糸文（横位施文）内面・ナデ	なし	
18	Po. 64	黄島式	K-17	３層	厚さ0.5～0.7	黄橙色	外面・撚糸文（横位施文）内面・ナデ	なし	

表６　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
18	Po. 65	高山寺式	J-19	３層	厚さ0.7～1.1	橙色	外面・楕円文＋ナデ　内面・斜行沈線文２段	少含む？	
18	Po. 66	高山寺式	K-16	３層	厚さ0.9～1.0	黄橙色	外面・楕円文（横位施文）＋ナデ　内面・斜行沈線文３段？	なし	楕円文・長１？×幅0.7？cm　斜行沈線上 段1.7cm・下 段5cm？　小山形突起？
18	Po. 67	高山寺式	L-12	２層	厚さ0.9～1.5	灰黄褐色	外面・楕円文（斜位施文）内面・斜行沈線文（断面波トタン状）	なし	楕円文長1.1×幅0.5～0.6cm
18	Po. 68	高山寺式	K-17	２層	口径（38.4）厚さ1.0～1.3	褐色	外面・楕円文（縦位施文）内面・ナデ	多	楕円文（長0.7～0.9×幅0.6～0.7cm）
19	Po. 69	高山寺式	I-1	３層直上	厚さ1.1	茶褐色	外面・楕円文（斜位施文）内面・斜行沈線文、二枚貝条痕＋ナデ	なし	楕円文（長0.9～1.4×幅0.3～0.6cm）
19	Po. 70	高山寺式	石組遺構１の北	下層	厚さ0.7～1.0	橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・ナデ	少	楕円文（長0.9～1.1×幅0.5～0.7cm）
19	Po. 71	高山寺式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.5～0.8	黄橙色	外面・楕円文（縦位・斜位施文）内面・ナデ	少	楕円文（長0.5～0.9×幅0.3～0.6cm）楕円文重複著しい
19	Po. 72	高山寺式	K-7	３層	厚さ0.7～1.0	黄褐色	外面・楕円文（横位施文）＋ナデ　内面・ナデ	なし？	楕円文（長0.6×幅0.5cm）黄島式の可能性もあり
19	Po. 73	高山寺式	L-7	２層	厚さ1.4～1.5	黄橙色	外面・楕円文(横位施文)＋ナデ　内面・二枚貝条痕＋ナデ	少？	楕円文（長0.6×幅0.4cm）
19	Po. 74	高山寺式	K-16	３層	厚さ0.7～1.0	黄褐色	外面・楕円文（縦位・斜位施文）内面・ナデ、削り様調整	少	楕円文（長0.9×幅0.7～0.9cm）
19	Po. 75	高山寺式	L-7	２層	厚さ0.8	橙色	外面・楕円文（縦位施文）内面・二枚貝条痕＋ナデ	少	楕円文（長0.5～0.8×幅0.3～0.4cm）
19	Po. 76	高山寺式	K-16	３層	厚さ0.6～0.8	黄褐色	外面・楕円文（斜位施文）	なし	楕円文（長0.7～0.8×幅0.5～0.7cm）
19	Po. 77	高山寺式	K-16	３層	厚さ0.7	黄褐色	外面・楕円文（斜位施文）内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	楕円文（長1.1×幅0.9cm）
19	Po. 78	高山寺式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ1.2	褐色	外面・楕円文（斜位施文）内面・二枚貝条痕＋ナデ	少？	楕円文（長0.9～1.6×幅0.5～0.8cm）
19	Po. 79	高山寺式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ1.5	灰褐色	外面・楕円文(横位施文)＋ナデ　内面・斜行沈線文、ナデ	少？	楕円文（長0.8～1×幅0.5cm）
19	Po. 80	高山寺式	K-7	１層	厚さ1.5	橙褐色	外面・粗大楕円文＋ナデ　内面・ナデ	含む	楕円文の大きさ不明
19	Po. 81	高山寺式	K-10	３層	厚さ1.5	内外面：褐色、断面：灰色	外面・粗大楕円文＋ナデ　内面・ナデ	含む	楕円文（長1.7～2.5×幅1.2cm）
19	Po. 82	高山寺式	J-17	３層	厚さ1.0～1.3	橙色	外面・撚糸文（縦位施文）内面・斜行沈線文	少？	
19	Po. 83	高山寺式	J-17	３層	厚さ1.1～1.2	黄橙色	外面・撚糸文（縦位施文）内面・斜行沈線文	含む	
19	Po. 84	高山寺式	I-17	１層	厚さ0.8～0.9	橙色	外面・二枚貝条痕　内面・斜行沈線文	なし	
19	Po. 85	高山寺式	I-17	３層	厚さ0.8～0.9	黄橙色	外面・二枚貝条痕　内面・斜行沈線文２段	少？	
19	Po. 86	高山寺式	I-17	３層	厚さ1.1～1.2	橙色	外面・二枚貝条痕　内面・斜行沈線文	含む	
19	Po. 87	高山寺式	I-17	３層	厚さ0.8	黄橙色	外面・二枚貝条痕　内面・斜行沈線文	なし	
19	Po. 88	高山寺式	I-17	３層	厚さ0.7～0.9	黄橙色	外面・二枚貝条痕　内面・斜行沈線文	なし	

表７　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
19	Po. 89	高山寺式	I-17	３層	厚さ0.8～0.9	黄橙色	外面・二枚貝条痕　内面・ナデ	なし	
19	Po. 90	二枚貝押圧文土器	J-15、K-16・17	３層	厚さ0.6～0.9	黄橙色・灰褐色	口唇・刻目外面・内面口縁二枚貝背面押圧？　内面・ナデ	なし	
19	Po. 91	無文土器	J-18	２層	厚さ1.0～1.2	橙色	外面無文	少？	
19	Po. 92	無文土器	K-6	２層	厚さ1.8	灰褐色	外面・無文(一部二枚貝条痕)内面ナデ	含む	内面凹凸顕著
19	Po. 93	無文土器	J-16	３層	厚さ1.1	橙色	外面・無文　内面・二枚貝条痕＋ナデ	少	
20	Po. 94	無文土器	J-19	３層	厚さ1.3	灰褐色	外面・無文　内面・削り様の調整	含む	
20	Po. 95	無文土器	J-19	３層	厚さ1.1	橙色	外面・無文　内面・削り様の調整	含む？	口縁部わずかにくびれる
20	Po. 96	無文土器	K-13	３層	厚さ0.7	茶褐色	内外面・二枚貝条痕	なし	器壁薄い　口縁外反
20	Po. 97	無文土器	石組遺構１の東	下層	厚さ0.9	橙色	内外面・二枚貝条痕＋ナデ	少？	
20	Po. 98	無文土器	K-6	２層	厚さ0.8	灰褐色	内外面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
20	Po. 99	無文土器	L-13	３層	厚さ1.0	褐色	内外面・二枚貝条痕、ナデ	含む	
20	Po. 100	無文土器	J-9	２層	厚さ1.1	灰茶色	外面・二枚貝条痕　内面・ナデ、二枚貝条痕	多	
20	Po. 101	無文土器	L-7	１層	厚さ1.4	灰褐色	外面・二枚貝条痕＋ナデ　内面・二枚貝条痕	なし	
20	Po. 102	無文土器	K-15	３層	厚さ0.9～1.0	橙色	外面・ナデ　内面・二枚貝？条痕＋ナデ	少？	
20	Po. 103	無文土器	J-16	３層	厚さ1.0	橙褐色	内外面・ナデ	含む	底部（尖底）
20	Po. 104	無文土器	J-15	３層	厚さ1.0	褐色	内外面・ナデ	繊維含む	底部（尖底）
20	Po. 105	穂谷式	K-6	３層	厚さ0.9	灰褐色	内外面・間延びした山形文（横位施文　波長1.6cm　波高0.6cm）	なし	
20	Po. 106	穂谷式	J-17・J-16	３層	厚さ0.8	灰褐色	内外面口唇・間延びした山形文（外面斜行、内面横位施文　波長・波高不明）	なし	
20	Po. 107	穂谷式	建物１	検出中	厚さ0.8	褐色	内外面口唇・間延びした山形文（外面斜行、ナデ併用　内面横位施文　波長不明　波高0.9cm）	なし	
20	Po. 108	穂谷式	K-17	３層	厚さ0.6～1.0	灰茶色	内外面・間延びした山形文（横位施文　波長1.9cm　波高0.9cm）外面下端に押引文	なし	
20	Po. 109	穂谷式	K-15	３層	厚さ0.8～1.2	外面：褐色、内面：灰褐色	内外面口唇・間延びした山形文（横位施文　波長２cm　波高0.5cm）外面一部ナデ	なし	
20	Po. 110	穂谷式	K-14	３層	厚さ0.9	外面：橙色、内面：黒褐色	内外面・間延びした山形文（横位・縦位施文　波長1.8cm　波高0.6cm）外面上端に押引文　内面ナデ	なし	
20	Po. 111	穂谷式	I-16	３層	厚さ1.1	橙色	外面・波長の長い山形文（横位・斜位施文　波長3.7cm＋α　波高0.7cm）内面指押圧痕（斜行沈線文？）	なし	
20	Po. 112	穂谷式	K-17	１層	厚さ0.9	茶色	外面・間延びした山形文（外面斜行波長２cm　波高0.5cm）、上端に押引文　内面・二枚貝条痕	なし	

表８　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
20	Po. 113	穂谷式	J・K-17	１層	底 径3.6　厚さ1.0	褐色	外面・間延びした山形文（外面横位＋縦位施文　波長2.3cm　波高0.7cm）、上端に押引文　内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
21	Po. 114	穂谷式	J-16	３層	厚さ0.9	外面：橙色、内面：茶色	外面・山形文（横位＋縦位波 長2.5cm　波 高0.7cm）内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
21	Po. 115	穂谷式	K-12	３層	厚さ0.8～1.0	灰茶色	外面・山形文（縦位施文　波長2.5cm　波高1.1cm）内面・ナデ	なし	
21	Po. 116	穂谷式	K-12	１層	厚さ1.0	褐色	外面・山形文（縦位施文　波長2.4cm　波高1.1cm）内面・ナデ	なし	
21	Po. 117	穂谷式	K-15	３層	厚さ0.8	橙色	外面・山形文（縦位施文　波長2.4cm　波高0.6cm）内面・ナデ	なし	
21	Po. 118	穂谷式	K-15	３層	厚さ0.8	にぶい褐色	外面・山形文（縦位施文　波長2.3cm　波高0.9cm）内面・ナデ	なし	
21	Po. 119	穂谷式	K-12	３層	厚さ0.7～1.0	灰褐色	外面・山形文（縦位施文？波長２cm　波高0.5cm)内面・ナデ　山形文間に菱形文	少？	
21	Po. 120	穂谷式	J-17	３層	厚さ0.8～1.1	淡褐色	外面・山形文（縦位施文　波長・波 高 不 明）＋ナ デ　内面・ナデ	なし	
21	Po. 121	押型文＋地文縄文土器	建物１	検出中	厚さ0.7	褐色	外面・山形文（縦位施文　波長2.5cm　波　高0.4cm）＋RL縄文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 122	穂谷式	J-15	３層	厚さ0.8～1.0	濃灰色	外面・山形文（縦位施文　波長1.9cm　波高0.7cm）＋押引文（横位・斜位）内面・ナデ	なし	
21	Po. 123	宮の平式類似	K-16	３層	厚さ0.7～0.9	暗茶色	口縁部隆帯文（羽状刺突文）斜行沈線文＋垂下短沈線文　内面・ナデ	なし	胴部屈曲
21	Po. 124	宮の平式類似	J-17	３層	口径（27.6）厚さ0.9～1.3	黄橙色、褐灰色	刻目隆帯文２条　沈線文（横走・鋸 歯 意 匠　沈 線 末 端 刺突）内面・ナデ	なし	頸部ややくびれ胴部に張り
21	Po. 125	宮の平式類似	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ0.7～1.2	黄橙色、褐灰色	刻目隆帯文２条　横走沈線文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 126	宮の平式類似	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ0.6～0.9	黄橙色、褐灰色	刻目隆帯文２条　横走・斜行沈線文(沈線末端刺突)内面・ナデ	なし	
21	Po. 127	宮の平式類似	J-17	２層	厚さ0.9	橙色	沈線文(鋸歯意匠？)内面ナデ	なし	
21	Po. 128	宮の平式類似	K-15	３層	厚さ0.9	黄橙色、褐灰色	沈線文(鋸歯意匠？)内面ナデ	なし	
21	Po. 129	宮の平式類似	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ0.8～1.2	黄橙色、褐灰色	沈線文（鋸歯意匠・横走）刻目隆帯文１条　内面ナデ	なし	
21	Po. 130	宮の平式類似	K-14	３層	厚さ0.8～1.0	黄橙色、灰褐色	沈線文（鋸歯意匠？　沈線末端刺突）内面・原体不明条痕＋ナデ	なし	
21	Po. 131	平栫式類似土器	K-7	１層	厚さ0.7～1.5	黄橙色	外面・斜行沈線文（鋸歯意匠？)、上 下 に 刺 突 文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 132	妙見・天道ヶ尾式類似土器	J-17	１層	厚さ0.8	灰褐色	口縁部隆帯文(羽状刺突文)、刻目隆帯文　斜行沈線文（鋸歯意匠？下部左端に逆方向の沈線文）内面・ナデ	なし	

表９　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
21	Po. 133	平栫式類似土器	K-16	３層	厚さ0.8	灰茶色	沈線文＋刺突文（鋸歯意匠）上下に刺突文　内面ナデ	なし	口縁内湾・口縁下に段
21	Po. 134	平栫式類似土器	J-15	３層	厚さ0.9	黒茶色	沈線文＋刺突文（斜行意匠）内面・ナデ	なし	
21	Po. 135	平栫式類似土器	K-14	３層	厚さ0.8	灰茶色	垂下(斜行？)沈線文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 136	平栫式類似土器	L-7	２層	厚さ0.7	褐色	波状沈線文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 137	平栫式類似土器	L-7	２層	厚さ0.4	褐色	斜行短沈線文　内面・ナデ	なし	
21	Po. 138	平栫式類似土器	K-16	３層	厚さ0.8～1.0	黄橙色	口縁部・沈線文（斜行？）、刺突文　頸部・横走沈線文　内面・ナデ	なし	口縁下に段
21	Po. 139	平栫式類似土器	K-14	３層	厚さ1.0	茶褐色	凹線文３条　内面・ナデ	なし	内湾器形
21	Po. 140	平栫式類似土器	K-6	２・３層	厚さ0.7	赤茶色	押引文（鋸歯意匠）内面・二枚貝条痕	なし	口縁部下に段
21	Po. 141	地文縄文＋押引文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.1	灰褐色	地文縄文（LR？）＋押引文（横走）内面・ナデ	繊維多	
21	Po. 142	地文縄文＋押引文土器	I-18	１層	厚さ1.0	灰茶色	地文縄文（LR）＋押引文（鋸歯意匠）口唇刻目文　内面・ナデ	繊維多	
21	Po. 143	地文縄文＋押引文土器	表採	排土中	厚さ1.0	茶褐色	地文縄文（RL？）＋押引文（横走）内面・ナデ	多	
21	Po. 144	地文縄文＋押引文土器	J-12	２層	厚さ0.8	灰褐色	押引文(横走)・刻目隆帯文・縄文（LR）内面・ナデ、一部指押圧痕	なし	
21	Po. 145	地文縄文＋押引文土器	J-16	３層	厚さ1.2	灰褐色	地文縄文（LR）＋押引文（鋸歯意匠）口唇刻目文　内面・羽状縄文（LR）	繊維多	波状口縁
22	Po. 146	妙見・天道ヶ尾式類似土器	K-17	第１遺構面直下	口径（30.8）厚さ0.8	黄橙色	口縁・隆帯文（羽状刺突文）刻目隆帯文２条、押引文（波状・横走）垂下刻目隆帯文２条１単位　沈線文(鋸歯意匠)地文LR縄文　内面・ナデ	なし	直口器形
23	Po. 147	地文縄文＋沈線文土器	K14	３層	厚さ1.2	褐色	地文縄文（RL）＋沈線文（斜行）内面・ナデ	繊維多	
23	Po. 148	地文縄文＋沈線文土器	建物１	検出中	厚さ1.0	橙褐色	地文縄文（RL）＋沈線文（鋸歯意匠）内面・ナデ	繊維多	
23	Po. 149	地文縄文＋隆帯文土器	J-19	３層	厚さ0.7	灰褐色	地文縄文（LR）＋刻目隆帯文（横走）内面・ナデ、指押圧痕	なし	
23	Po. 150	地文縄文＋隆帯文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.0	灰褐色	地文縄文（LR）＋刻目隆帯文（横走）＋押引文（横走）内面・ナデ	なし	
23	Po. 151	地文縄文＋沈線文土器	J-16	３層	厚さ1.2	橙色	地文縄文（RL）＋凹線文　内面・ナデ	繊維含む	
23	Po. 152	地文縄文＋沈線文土器	J-18	２層	厚さ1.3～1.6	外面：橙色、内面：茶色	地文縄文（撚り不明）＋沈線文？	繊維多	
23	Po. 153	地文縄文＋押引文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.5	灰褐色	地文縄文（LR）＋押引文（横走）内面・ナデ	繊維多	
23	Po. 154	地文縄文＋隆帯文土器	L-12	２層	厚さ1.2	褐色	地文縄文（RL）＋隆帯文（剥落）＋沈線文(弧状？)内面・ナデ	なし	屈曲口縁

表10　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
23	Po. 155	地文縄文＋隆帯文土器	石組遺構２	下層	厚さ（1.7）	橙色	地文縄文（LR）	繊維多	口縁下に段
23	Po. 156	地文縄文＋沈線文土器	J-17	１層	厚さ0.9～1.0	灰褐色	羽状縄文（LR＋RL）＋沈線文（垂下）内面・ナデ	繊維少量含む	頸部わずかにくびれ？
23	Po. 157	縄文施文土器	建物２	ピット内	厚さ0.8～1.5	灰褐色	外面口唇・縄文（LR）内面・削り様の調整	繊維多く含む	口縁内湾
23	Po. 158	縄文施文土器	J-17	１層	厚さ0.7～1.5	灰褐色	口唇刻目　外面縄文（RL）内面ナデ	繊維含む	
23	Po. 159	縄文施文土器	K-15	３層	厚さ1.1～1.3	橙色	外面縄文（LR）内面削り様の調整	繊維多く含む	
23	Po. 160	縄文施文土器	K-15	３層	厚さ1.1～1.3	橙色	外面縄文（LR）内面ナデか削り様の調整	繊維含む	
23	Po. 161	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.0～1.7	褐色	外面縄文（LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 162	縄文施文土器	J-15	３層	厚さ1.4～2.1	橙褐色	外面縄文（RL）内面ナデ	多	
23	Po. 163	縄文施文土器	J-15	３層	厚さ1.2～1.5	橙褐色	外面縄文（RL）内面ナデ＋削り様の調整	繊維含む	
23	Po. 164	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.3～1.6	橙色、内面：灰色	外面縄文（LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 165	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ0.7～0.8	褐色	外面縄文（LR）内面ナデ	繊維少し含む	
23	Po. 166	縄文施文土器	J-19	１層	厚さ0.8～1.0	茶灰色	外面縄文（RL）＋ナデ　内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 167	縄文施文土器	J-18	２層	厚さ1.1～1.6	外面：橙色、内面：灰色	外面縄文（RL）内面ナデ	繊維多く含む	内面凹凸顕著
23	Po. 168	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.4	外面：橙色、内面：灰茶色	外面縄文（LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 169	縄文施文土器	J-20	１層	厚さ0.9～1.2	褐色	外面羽状縄文（RL＋LR）＋ナデ　口唇・内面縄文（LR）＋ナデ	繊維なし	
23	Po. 170	縄文施文土器	K-7	３層	厚さ1.3～1.7	灰褐色	外面羽状縄文（RL＋LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 171	縄文施文土器	K-14	３層	厚さ1.1～1.3	橙色	外面羽状縄文（RL＋LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 172	縄文施文土器	K-15	３層	厚さ1.0～1.1	褐色	外面羽状縄文（LR＋RL）内面二枚貝条痕＋ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 173	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.2～1.5	灰褐色	外面羽状縄文（LR異方向施文）内面ナデ	繊維含む	
23	Po. 174	縄文施文土器	K-15	３層	厚さ1.0～1.1	灰褐色	外面羽状縄文（RL＋LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 175	縄文施文土器	J-17	２層	厚さ0.7～0.8	橙色	外面羽状縄文（RL＋LR）内面ナデ	繊維多く含む	
23	Po. 176	縄文施文土器	J-15	３層	厚さ1.3～1.5	橙褐色	外面羽状縄文（RL＋？）内面二枚貝条痕＋ナデ	含む	
23	Po. 177	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.2～1.6	褐色	外面羽状縄文（RL異方向施文）内面削り様の調整？＋ナデ）	繊維多く含む	
23	Po. 178	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ1.1～1.7	褐色	外面羽状縄文（RL異方向施文　前々段多条？）内面削り様の調整＋ナデ）	繊維多く含む	
23	Po. 179	縄文施文土器	K-18	１層	厚さ1.5	褐色	外面羽状縄文（LR＋RL）内面ナデ	繊維多く含む	外面煤付着
23	Po. 180	縄文施文土器	K-15	３層	厚さ1.2～1.5	褐色	外面羽状縄文（RL＋LR）内面ナデ	繊維多く含む	

表11　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
23	Po. 181	縄文施文土器	J-17	３層	厚さ0.8～0.9	灰褐色	外面羽状縄文（LR異方向施文）内面ナデ	繊維少量含む	
23	Po. 182	縄文施文土器	粘土採掘坑３	埋土中	厚さ0.8	褐色	外面羽状縄文（LR異方向施文）内面ナデ	繊維少量含む	
23	Po. 183	縄文施文土器	J・K-17	２層	厚さ1.3	橙色	外面縄文（縄巻縄文？　LR＋LR）内面ナデ	繊維含む	縄文、細・太の条が交互に圧痕
23	Po. 184	縄文施文土器	J・K-17	２層	厚さ1.0	褐色	外面縄文（縄巻縄文？　LR＋LR）内面ナデ	繊維含む	縄文、細・太の条が交互に圧痕
24	Po. 185	縄文施文土器	J-14	断割	底径（10.4）厚さ1.6	橙褐色	胴部・外面縄文（LR）、内面ナデ　底外面ナデ	繊維多く含む	平底
24	Po. 186	縄文施文土器	K-6	２層	底径（8.4）厚さ1.1	赤茶色	内外面ナデ	繊維少量含む	平底
24	Po. 187	長山馬籠式	K-9	３層	厚さ0.7	茶灰色	口縁隆帯文　隆帯文上・胴部に二枚貝腹縁刺突文（原体加工）外面二枚貝条痕　内面ナデ	なし	
24	Po. 188	長山馬籠式	J-17	１層	厚さ0.9	灰褐色	口縁隆帯文　隆帯文上に刺突文　内外面ナデ	なし	
24	Po. 189	長山馬籠式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ0.7	橙色	二枚貝腹縁刺突文＋小型の爪形文　内面二枚貝条痕＋ナデ	なし	
24	Po. 190	長山馬籠式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ0.7	橙色	二枚貝腹縁刺突文　瘤状突起内外面ナデ	なし	口縁内湾・波状口縁
24	Po. 191	長山馬籠式	J-10・K-9	１・２層	厚さ0.7	暗茶色	二枚貝腹縁刺突文(原体加工)外面二枚貝条痕　内面ナデ	なし	
24	Po. 192	羽島下層Ⅰ式	K-14	１層	厚さ0.7	灰茶色	隆帯文上下と直下にD字爪形文　内外面・口唇二枚貝条痕	少？	
24	Po. 193	羽島下層Ⅰ式	K-6	２層	厚さ0.6	灰褐色	隆帯文上下と直下にD字爪形文　口唇隆帯文頂部に小さな刺突文　内外面二枚貝条痕	なし	
24	Po. 194	羽島下層Ⅰ式	J-9	２層	厚さ0.7	橙茶色	隆帯文上下と直下にD字爪形文　内外面・口唇二枚貝条痕	少？	
24	Po. 195	羽島下層Ⅰ式	K-9	３層	厚さ0.7	灰茶色	隆帯文上下と直下にD字爪形文　口唇刻目　内外面二枚貝条痕	少？	
24	Po. 196	西川津式	J-10、K-9	２・３層	厚さ1.0	茶褐色	折り返し口縁上と直下に二枚貝腹縁刺突文　外面ナデ　内面二枚貝条痕＋ナデ	少	
24	Po. 197	西川津式	道路１	排土中	厚さ0.8	灰褐色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文　外面二枚貝条痕　内面ナデ	少	
24	Po. 198	西川津式	K-7	３層	厚さ0.8	灰褐色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文　外面二枚貝条痕　内面ナデ	少？	
24	Po. 199	西川津式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ0.9	褐色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文　外面二枚貝条痕　内面削り様の調整＋ナデ	少	
24	Po. 200	西川津式	トレンチ１	埋土中	厚さ0.8	暗灰色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文　内外面二枚貝条痕	なし	
24	Po. 201	西川津式	K-7	１層	厚さ0.8	灰褐色	折り返し口縁上と直下に二枚貝腹縁押引き状刺突文　外面ナデ　内面二枚貝条痕＋ナデ	少	
24	Po. 202	西川津式	銭集中周辺	１・２層	厚さ0.6	褐色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文（原体加工）外面ナデ内面二枚貝条痕	なし	

表12　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
24	Po. 203	西川津式	L-6	１・２層	厚さ0.6	灰褐色	折り返し口縁上に二枚貝腹縁刺突文（原体加工）外面二枚貝条痕　内面ナデ	なし	
24	Po. 204	西川津式	K-1	１層	厚さ0.8	灰褐色	折り返し口縁とその直下に板状工具による押引文	なし	
24	Po. 205	西川津式	K-7	３層	厚さ0.6	灰褐色	折り返し口縁とその直下に半截竹管状工具による押引文 内面ナデ	なし	
24	Po. 206	西川津式	トレンチ３	埋土中	厚さ0.5	黒灰色	折り返し口縁と頸部に押引文（半截竹管状工具）外面二枚貝条痕　内面ナデ	なし	
24	Po. 207	西川津式	K-7	３層	厚さ0.8	橙褐色	幅広の折り返し口縁（半截竹管状工具押引文）外面二枚貝条痕文　内面ナデ	なし	
24	Po. 208	西川津式	K-6	１・２層	厚さ0.7	灰褐色	折り返し口縁（小型刺突文２列）	なし	
24	Po. 209	西川津式	K-9	２層	厚さ0.9	橙色	折り返し口縁・頸部押引文 頸部半円形意匠押引文付加 外面二枚貝条痕　内面二枚貝条痕・指押圧痕	少？	
24	Po. 210	西川津式	K-7	２層	厚さ0.9	橙色	折り返し口縁（押引文）に垂下隆帯文付加	なし	
24	Po. 211	西川津式	K-14	１層	厚さ0.7	灰褐色	折り返し口縁（斜行押引文 直下に横位押引文）　外面二枚貝条痕　内面指押圧痕	なし？	
24	Po. 212	西川津式	K-7	２・３層	厚さ0.6	灰褐色	折り返し口縁（横位押引文）外面二枚貝条痕　内面指押圧痕	なし？	
24	Po. 213	西川津式	J-9	３層	厚さ0.6	暗褐色	折り返し口縁(押引文)　直下に押引文　内外面二枚貝条痕	なし	
24	Po. 214	西川津式	K-7	２層	厚さ0.7	褐色	折り返し口縁（押引文）　直下に斜行押引文　内面二枚貝条痕＋ナデ	なし	波状口縁？
24	Po. 215	西川津式	K-7	３層	厚さ0.8	灰褐色	折り返し口縁（押引文）　直下に押引文（鋸歯意匠）　内面二枚貝条痕、指押圧痕	少？	
24	Po. 216	西川津式	土坑１	検出中	厚さ0.8～1.1	橙色	幅広の折り返し口縁（横走・斜行押引文）　内面二枚貝条痕	含む	
24	Po. 217	西川津式	K-7	２層	厚さ0.5	灰褐色	折り返し口縁　刺突文（鋸歯意匠）　内面二枚貝条痕	なし	
25	Po. 218	西川津式	K-7	２層	厚さ0.7	褐色	折り返し口縁　押引文（鋸歯意匠）　内面指押圧痕＋二枚貝条痕	なし	波状口縁　屈曲器形
25	Po. 219	西川津式	J-9	２層	厚さ0.6～0.9	外面：黒茶色、内面：赤茶色	折り返し口縁　垂下隆帯文押引文（鋸歯意匠）　内面二枚貝条痕	なし	波状口縁　屈曲器形
25	Po. 220	西川津式	銭集中周辺	３層	厚さ0.8	灰茶色	折り返し口縁（横走押引文）押引文（斜行意匠）　内面二枚貝条痕	なし	
25	Po. 221	西川津式	K-7	３層	厚さ0.7	外面：灰茶色、内面：橙色	折り返し口縁（横走押引文か沈線文）　押引文か沈線文(鋸歯意匠）　下端に横走沈線文 内面二枚貝条痕	なし	屈曲器形

表13　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
25	Po. 222	西川津式	K-7	３層	厚さ0.8	灰黄褐色	折り返し口縁　外面二枚貝条痕　内面指押圧痕、二枚貝条痕	なし	波状口縁　屈曲器形
25	Po. 223	西川津式	銭集中周辺	３層	厚さ0.8	橙色	折り返し口縁　外面二枚貝条痕　内面ナデ	少？	波状口縁　屈曲器形？
25	Po. 224	西川津式	銭集中周辺	３層	厚さ0.9	灰褐色	折り返し口縁　内外面二枚貝条痕	少？	屈曲器形？
25	Po. 225	西川津式	K-6	３層	厚さ0.8	橙色	横走押引文　内外綿二枚貝条痕	なし	屈曲器形
25	Po. 226	西川津式	K-7	３層	厚さ0.7	褐茶色	外面上部・間隔を空けた刺突文列３条　外面下部、内面・二枚貝条痕	なし	
25	Po. 227	西川津式	K-7	２・３層	厚さ0.8	灰褐色	外面・押引文（鋸歯意匠）内面・二枚貝条痕	なし	
25	Po. 228	西川津式	K-6	２層	厚さ0.7	褐色	外面・押引文（斜行意匠）内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 229	西川津式	粘土採掘坑２	埋土中	厚さ0.8	にぶい褐色	外面・沈線文（横走、鋸歯意匠）　内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 230	西川津式	K-9	２層	厚さ0.7	灰色	外面・押引文（鋸歯意匠）、段　内面・ナデ、二枚貝条痕	なし	屈曲器形
25	Po. 231	西川津式	K-7	２層	厚さ0.7	橙褐色	外面・沈線文（鋸歯意匠？）内面二枚貝条痕文	なし	
25	Po. 232	西川津式	I-3	２層	厚さ0.7	橙色	外面・横走押引文　内面・ナデ	なし	口縁内湾
25	Po. 233	西川津式	L-12	３層	厚さ0.7	褐色	外面・横走押引文　内面・ナデ	なし	直口器形？
25	Po. 234	西川津式	K-6	２層	厚さ0.6	赤茶色	外面・押引文（横走・鋸歯意匠？）　内面・二枚貝条痕文	なし	短頸・壺形？
25	Po. 235	西川津式	K-6	２層	厚さ0.6	赤褐色	外面・横走押引文、二枚貝条痕　内面・ナデ	なし	短頸・壺形？
25	Po. 236	西川津式	K-7	２層	厚さ0.5	灰褐色	外面・押引文（横走・斜行）内外面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	短頸・壺形？　緩波状口縁
25	Po. 237	西川津式	K-7	２層	厚さ0.6	にぶい橙色	口縁段＋垂下細隆帯文　段部に円形刺突文　外面・二枚貝条痕文　内面・ナデ	なし	
25	Po. 238	西川津式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.5	橙色	下端に刻目細隆帯文　口縁小突起　内外面・二枚貝条痕	なし	円孔（焼成後）
25	Po. 239	西川津式	K-16	３層	厚さ1.1	茶褐色	双曲線状の隆帯文、左端に斜行押引文　外面・ナデ　内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	屈曲器形
25	Po. 240	西川津式	K-14	１層	厚さ0.6	褐色	垂下隆帯文　内面・二枚貝条痕文＋ナデ	なし	屈曲器形
25	Po. 241	羽島下層３式	K-10	１層	厚さ0.8	茶褐色	外面・D字爪形文、二枚貝条痕　内面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 242	磯ノ森式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.5	暗茶色	C字爪形文（ロッキング）＋下端に沈線文　上端に弧状意匠の爪形文　内外面・ナデ	なし	
25	Po. 243	磯ノ森式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.6	暗茶色	C字爪形文（ロッキング）＋上下に沈線文（縦横に配置）内外面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 244	磯ノ森式	J-6・試掘トレンチ24	１層	厚さ0.6	褐灰色	C字爪形文（ロッキング）＋上端に沈線文　内面・ナデ	なし	

表14　新屋宮ノ段遺跡　出土縄文土器観察表（残存・復元値は（　）で示す）

挿図番号	遺物番号	分類・型式	地区・遺構	層位	法量（cm）	色　調	調整・文様	繊維の有無	備　考
25	Po. 245	磯ノ森式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.5	暗茶色	C字爪形文（ロッキング）＋両端に沈線文（縦横に配置、左上に弧状に爪形文）　内外面・二枚貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 246	磯ノ森式	試掘トレンチ24	埋土中	厚さ0.5	暗灰色	C字爪形文（ロッキング　垂下意匠）＋両端に沈線文　内面・ナデ	なし	
25	Po. 247	無文土器	J-15	３層	厚さ0.7	外面：暗灰色、内面：褐色	口唇刻目　外面・ナデ　内面・指押圧痕＋ナデ	なし	
25	Po. 248	中期末？	K-6	２層	厚さ0.6	茶褐色	上端に短沈線文　隆帯文（楕円形意匠？　側縁に沈線文）右端に沈線文　内外面・巻貝条痕＋ナデ	なし	
25	Po. 249	中期末？	K-6	２層	厚さ0.5	褐色	沈線文２条（弧状意匠）　内外面・巻貝条痕	なし	

表15　新屋宮ノ段遺跡　出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（　　）で示す）

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調　整		備　考
					口径	底径	器高		内面	外面	
26	Po. 250	K-6	2層	土製品			5.2	灰褐色		手ずくね整形	縄文か
35	Po. 251	石組遺構1	石組内	瓦質土器・壺	23.6	14.6	32.5	淡茶灰色	ナデ	タタキ	
35	Po. 252	石組遺構1	1層	土器・小皿	(8.6)		(2.8)	淡褐色	ナデ		
35	Po. 253	石組遺構1	1層	陶器・小皿	(10.2)	5.6	1.7	淡赤灰色	ナデ	ヘラケズリ	
35	Po. 254	石組遺構1	1層	陶器・小皿	8.8	3.8	2.1	暗赤褐色	砂目	底部糸切	
46	Po. 255	銭集中	1層	土器・鍋	34.0		13.3	明灰褐色	ヨコハケ	タテハケ・ヨコハケ	
46	Po. 256	銭集中	1層	土器・小皿	13.0	5.4	3.1	淡褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 257	銭集中	1層	土器・小皿	12.8	4.7	2.6	淡褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 258	銭集中	1層	土器・小皿	10.0	6.0	2.9	淡灰褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 259	銭集中	1層	土器・小皿	10.2	6.0	2.0	淡灰褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 260	銭集中	1層	土器・小皿	10.4	6.2	2.1	淡灰褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 261	銭集中	1層	土器・小皿	7.4	3.8	1.7	淡褐色	ナデ	底部糸切	煤付着
46	Po. 262	銭集中	1層	土器・小皿	(6.2)	(3.2)	1.8	淡褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 263	銭集中	1層	土器・小皿		3.2	(2.2)	淡褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 264	銭集中	1層	土器・小皿	(6.8)	(4.0)	1.4	淡灰褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 265	銭集中	1層	土器・小皿	(6.2)	3.6	1.2	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
46	Po. 266	銭集中	1層	土器・小皿	(5.0)	(2.4)	1.0	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
46	Po. 267	銭集中	1層	土器・坏身	(14.0)	(10.4)	2.6	淡赤褐色	ナデ	ナデ	
46	Po. 268	銭集中	1層	陶器・小皿	(8.2)	(4.4)	2.1	茶褐色	ナデ	底部糸切	
46	Po. 269	銭集中	1層	陶器・小皿	(7.4)	(3.0)	2.2	茶褐色	ナデ	底部糸切	煤付着
46	Po. 270	銭集中	1層	磁器・碗		(4.0)	(2.6)	乳白色			青花
56	Po. 271	神社周辺	1層	土器・小皿	(12.8)	(5.8)	2.4	淡褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 272	神社周辺	1・2層	土器・小皿	(12.0)	(9.1)	2.1	淡橙褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 273	神社周辺	1層	土器・小皿	(12.8)	(5.0)	2.7	淡褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 274	神社周辺	1層	土器・小皿	(9.2)	(6.4)	1.6	黒褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 275	神社周辺	1層	土器・小皿	(8.2)	(5.0)	1.5	赤褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 276	神社周辺	1層	土器・小皿	(8.2)	(4.0)	1.9	淡黒褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 277	神社周辺	下層	土器・小皿	(8.0)		(1.4)	橙褐色	ナデ		煤付着
56	Po. 278	神社周辺	1層	土器・小皿		(7.8)	(1.0)	灰褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 279	神社周辺	1層	土器・小皿		5.8	(0.9)	灰褐色	ナデ	底部糸切	底部黒化
56	Po. 280	神社周辺	1層	土器・小皿		(6.8)	(1.6)	淡褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 281	神社周辺	1層	土器・小皿		(7.2)	(0.8)	黒褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 282	神社周辺	1層	土器・小皿		(4.0)	(0.8)	茶褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 283	神社周辺	1層	土器・小皿		(4.2)	(0.9)	黒褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 284	神社周辺	1層	陶器・小皿	8.4	4.6	1.8	暗赤褐色	ナデ	底部糸切	煤付着
56	Po. 285	神社周辺	1層	陶器・小皿	8.6	4.6	2.1	暗赤褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 286	神社周辺	1層	陶器・小皿	8.7	4.6	1.7	赤褐色	ナデ	底部糸切	煤付着
56	Po. 287	神社周辺	1層	陶器・小皿	(10.0)		(1.8)	暗茶色	ナデ		
56	Po. 288	神社周辺	1層	陶器・小皿	8.8	4.4	1.7	淡赤褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 289	神社周辺	1層	陶器・小皿	(8.8)	(5.4)	2.0	暗赤褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 290	神社周辺	1層	陶器・小皿		(3.6)	(0.8)	赤褐色	ナデ	底部糸切	
56	Po. 291	神社周辺	1層	陶器・小皿	9.0	3.0	2.2	淡茶灰色	砂目	底部糸切	煤付着
56	Po. 292	神社周辺	1層	陶器・小皿	(8.2)	3.4	1.8	灰褐色	目跡	底部糸切	煤付着
56	Po. 293	神社建物1	埋納品	陶器・蓋付壺	5.3	2.8	4.1	赤褐色	ナデ	ナデ	産地不明
56	Po. 294	神社周辺	1層	磁器・瓶	17.0	2.6	11.7	白色			印判手
66	Po. 295	J-20	1層	土器・擂鉢	(41.8)		(3.5)	淡褐色	擂目	風化	被熱著しい
66	Po. 296	J-20	1層	土器・擂鉢			(2.3)	灰褐色	擂目	ミガキ	
66	Po. 297	鍛冶炉1	埋土中	土製品・羽口	(8.3)	(9.2)	4.0	淡灰茶色	通風孔	ナデ	鉄滓付着
66	Po. 298	I-18	1層	土製品・羽口	(6.9)	(7.1)	3.2	灰色	通風孔	鉄滓付着	
66	Po. 299	L-18	1層	土製品・羽口	(5.7)	(9.1)	(4.0)	淡灰茶色		鉄滓付着	
66	Po. 300	J-19	1層	土製品・羽口	(12.6)	(8.5)	4.0	灰白色	通風孔	鉄滓付着	
66	Po. 301	J-19	1層	土製品・羽口	(5.5)	(6.5)	3.5	灰褐色	通風孔	鉄滓付着	
66	Po. 302	J-19	1層	土製品・羽口	(8.5)	(9.0)	5.3	灰褐色	通風孔	鉄滓付着	
67	Po. 303	J-19	1層	土製品・羽口	(9.8)		5.5	灰白色	通風孔	鉄滓付着	
67	Po. 304	J-20	1層	土製品・羽口	(8.3)	(9.9)	(5.2)	灰褐色		鉄滓付着	
67	Po. 305	T5	埋土中	土製品・羽口	(8.9)	(9.0)	6.0	灰褐色	通風孔	鉄滓付着	
67	Po. 306	T5	埋土中	土製品・羽口	(8.0)	(5.7)	4.9	灰白色	通風孔	鉄滓付着	
67	Po. 307	T5	埋土中	土製品・羽口	(6.0)	(9.5)	(5.4)	灰色		簀巻き整形	板屋型

表16　新屋宮ノ段遺跡　出土土器・土製品・陶磁器観察表（残存・復元値は（　　）で示す）

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調　整		備　考
					口径	底径	器高		内面	外面	
70	Po. 308	J-10	1層	陶器・皿		(5.4)	(2.8)	淡緑灰色	胎土目積	ヘラケズリ	唐津焼
70	Po. 309	L-10	1層	陶器・皿	(11.0)	(7.2)	1.6	緑灰色	見込み釉剥ぎ	高台内施釉	瀬戸・美濃系
70	Po. 310	J-9	1層	陶器・皿		(4.8)	(1.2)	淡緑灰色	ヘラ彫り	高台内露胎	瀬戸・美濃系
76	Po. 311	道路1	埋土中	陶器・碗		3.6	(3.6)	乳灰色		高台露胎	京焼系

表17　新屋宮ノ段遺跡　出土石製品観察表（残存・復元値は（　　）で示す）

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm・g）				石　材	備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量		
10	S. 1	集石1	上層	敲石	11.7	8.4	5.7	869.6	花崗岩	
10	S. 2	集石1	検出面	石鏃	1.7	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
13	S. 3	貯蔵穴6	検出中	石鏃	1.3	1.2	0.3	0.3	玉髄	
27	S. 4	銭集中	下層	スクレイパー	1.4	3.6	0.5	2.5	黒曜石	
27	S. 5	銭集中	下層	石鏃	2.0	1.3	0.6	0.8	黒曜石	
27	S. 6	K-7	3層	石鏃	2.3	1.7	0.6	1.4	黒曜石	
27	S. 7	K-7	3層	石鏃	2.1	1.9	0.4	0.9	黒曜石	
27	S. 8	K-7	3層	石鏃	1.9	1.7	0.3	0.7	黒曜石	
27	S. 9	J-16	3層	石鏃	1.9	1.8	0.3	0.5	黒曜石	
27	S. 10	銭集中	周辺	石鏃	1.6	1.2	0.2	0.3	黒曜石	
27	S. 11	銭集中	下層	石鏃	2.0	1.3	0.2	0.2	黒曜石	
27	S. 12	K-7	3層	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.3	黒曜石	
27	S. 13	建物1	ピット内	石鏃	1.3	1.3	0.2	0.2	頁岩	
28	S. 14	I-19	2層	石鏃	2.6	1.5	0.5	1.3	サヌカイト	
28	S. 15	建物2	ピット内	石鏃	2.9	1.5	0.3	1.4	サヌカイト	
28	S. 16	J-16	1遺構面下	石鏃	2.4	1.9	0.4	1.0	サヌカイト	
28	S. 17	K-6	2層	石鏃	2.2	1.6	0.3	0.6	サヌカイト	
28	S. 18	J-16	3層	石鏃	2.4	1.7	0.2	0.6	サヌカイト	
28	S. 19	K-17	1層	石鏃	1.6	1.6	0.2	0.3	サヌカイト	
28	S. 20	J・K-17	第1遺構面	石鏃	1.6	1.4	0.2	0.3	サヌカイト	
28	S. 21	J-19	3層	石鏃	1.6	1.0	0.3	0.3	サヌカイト	
65	S. 22	鍛冶炉1	床面	鉄床石	49.1	35.6	10.6	3,0800.0	閃緑岩	

表18　新屋宮ノ段遺跡　出土金属製品観察表

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			備　考
					最大長	最大幅	最大厚	
36	M. 1	石組遺構1	1層	青銅製品・和鏡	11.6		0.9	鏡面に線刻
47	M. 2	銭集中	断割	青銅製品・和鏡	8.9		0.7	
56	M. 3	神社東側	1層	鉄製品・刀	26.8	2	0.4	
56	M. 4	L-6	1・2層	青銅製品・金具	2.2	3.7	0.3	
70	M. 5	L-13	1層	青銅製品・煙管	5.8			
70	M. 6	K-10	1層	青銅製品・吸口	5.4	1.3	1.0	羅宇あり

表19　新屋宮ノ段遺跡　鍛冶関係製品観察表

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm・g）				備　　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
68	F. 1	鍛冶炉１	Ⅷ-1	ノロ	16.7	19.3	8.0	1,564.4	
68	F. 2	鍛冶炉１	Ⅷ-1	椀型鍛冶滓	13.1	11.3	9.5	1,143.7	
68	F. 3	鍛冶炉１	Ⅷ-1	椀型鍛冶滓	9.9	10.3	3.4	345.0	
69	F. 4	J-19	１層	流出溝滓	15.7	13.2	5.0	1,328.0	
69	F. 5	J-19	１層	流出孔滓	11.3	17.0	6.3	1,746.5	
69	F. 6	神社周辺	１層	炉壁	9.5	8.0	4.0	243.0	送風孔
69	F. 7	I-17	１層	炉壁	21.0	25.9	5.3	3,250.0	送風孔

表20　新屋宮ノ段遺跡　出土瓦製品観察表（残存・復元値は（　　）で示す）

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色　調	備　　考
					最大長	最大幅	最大厚		
76	R. 1	道路１	埋土中	軒桟瓦	(2.3)	(6.3)	4.6	灰色	裏側面取り・銀化
76	R. 2	道路１	埋土中	軒桟瓦	(2.5)	(9.2)	4.6	灰色	裏側面取り・銀化
76	R. 3	道路１	埋土中	軒桟瓦	(6.3)	(6.0)	(3.5)	灰色	
76	R. 4	道路１	埋土中	軒桟瓦	(4.4)	(8.8)	4.6	灰色	裏側面取り
76	R. 5	道路１	埋土中	軒桟瓦	(2.3)	(11.5)	(2.5)	灰色	裏側面取り・銀化
76	R. 6	道路１	埋土中	軒桟瓦	(3.5)	(5.0)	5.0	灰色	裏側面取り・銀化
76	R. 7	道路１	埋土中	軒桟瓦	(12.5)	(13.5)	4.0	灰茶色	
76	R. 8	道路１	埋土中	軒桟瓦	(6.5)	(9.5)	4.2	淡灰色	
76	R. 9	６区・７区	表採	桟瓦	25.7	28.3	1.7	灰色	
76	R. 10	６区・７区	表採	桟瓦	24.8	(24.7)	1.8	灰色	銀化
76	R. 11	６区・７区	表採	桟瓦	(19.0)	(22.0)	1.8	灰色	スタンプ・銀化
77	R. 12	J-9	表採	桟瓦	(10.0)	(13.0)	1.7	灰色	スタンプ・銀化
77	R. 13	道路１	埋土中	平瓦	(9.5)	(19.7)	1.9	茶灰色	
77	R. 14	道路１	埋土中	平瓦	(12.0)	(12.9)	1.8	茶灰色	
77	R. 15	道路１	埋土中	平瓦	(12.2)	(13.8)	1.7	茶灰色	
77	R. 16	J-9	表採	桟瓦	(9.2)	(10.1)	1.8	茶灰色	粘土積
77	R. 17	道路１	埋土中	袖瓦	(17.8)	(10.3)	1.7	茶灰色	
77	R. 18	道路１	埋土中	袖瓦	(16.7)	(7.7)	1.8	茶灰色	粘土積
77	R. 19	道路１	埋土中	袖瓦	(10.4)	(9.9)	1.8	茶灰色	煤付着
77	R. 20	道路１	埋土中	袖瓦	(10.2)	(8.0)	1.5	茶灰色	
77	R. 21	道路１	埋土中	板瓦	(11.0)	(16.5)	(2.0)	茶灰色	
77	R. 22	北部	表採	板瓦	(11.3)	(12.2)	2.0	黒灰色	
77	R. 23	道路１	埋土中	板瓦	(9.8)	7.0	2.0	茶灰色	
78	R. 24	神社建物１	周辺	雁振瓦	24.5	24.7	1.5	灰色	沈線
78	R. 25	北部	表採	雁振瓦	25.0	(12.8)	2.0	淡茶灰色	沈線
78	R. 26	道路１	埋土中	桟瓦	(10.7)	(14.8)	1.8	灰茶色	カキ目
78	R. 27	道路１	埋土中	板瓦	(12.0)	(7.0)	1.9	灰茶色	カキ目
78	R. 28	道路１	埋土中	板瓦	(9.2)	(7.2)	1.8	灰茶色	カキ目
78	R. 29	道路１	埋土中	板瓦	(11.0)	(10.2)	1.7	灰茶色	カキ目
78	R. 30	道路１	埋土中	板瓦	(9.8)	(10.5)	1.7	灰茶色	カキ目
78	R. 31	道路１	埋土中	板瓦	(8.7)	(10.0)	1.7	灰茶色	カキ目
78	R. 32	道路１	埋土中	板瓦	(6.6)	(11.1)	1.7	灰茶色	カキ目

表21　新屋宮ノ段遺跡　出土瓦製品観察表（残存・復元値は（　　）で示す）

図版番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色　調	備　　考
					最大長	最大幅	最大厚		
78	R. 33	道路１	埋土中	雁振瓦か	(9.5)	(11.5)	1.9	灰茶色	コビキ痕・沈線
79	R. 34	道路１	埋土中	鯱形瓦製品	(9.5)	(5.9)	(8.9)	灰色	てづくね
79	R. 35	K-13	１層	桟瓦	24.3	17.7	2.0	茶褐色	施釉瓦・ハセ付着
79	R. 36	T3	埋土中	桟瓦か	(6.5)	(6.0)	(1.6)	暗茶褐色	施釉瓦
79	R. 37	神社建物１	周辺	モミツチ	(7.9)	3.3	3.2	赤灰色	表面に植物圧痕
79	R. 38	道路１	検出中	モミツチ	(8.0)	3.2	3.4	淡褐色	表面に植物圧痕
79	R. 39	K-7	１層	ハセ	5.4	2.4	1.6	淡褐色	釉薬の付着なし
79	R. 40	J-17	１層	ハセ	(5.1)	3.1	2.9	暗茶褐色	施釉・刺突痕
80	R. 41	道路１	埋土中	窯壁	(17.5)	15.8	8.1	淡灰褐色	被熱
80	R. 42	道路１	埋土中	窯壁	(20.8)	(9.6)	8.0	茶灰色	被熱
80	R. 43	道路１	埋土中	窯壁	(19.3)	(11.4)	13.3	灰色	被熱
80	R. 44	道路１	埋土中	窯壁	(15.8)	(10.7)	7.9	茶灰色	被熱
80	R. 45	J-9	１層	窯壁	(10.5)	10.9	5.2	灰色	被熱
80	R. 46	道路１	埋土中	窯壁	(10.0)	12.9	7.3	茶灰色	被熱
80	R. 47	道路１	埋土中	窯壁	(21.2)	(9.4)	5.5	茶灰色	被熱
81	R. 48	道路１	埋土中	窯壁	(17.5)	(12.0)	6.4	茶灰色	被熱・コビキ痕
81	R. 49	北部	表採	窯壁	(16.0)	(10.0)	6.9	灰色	被熱
81	R. 50	北部	表採	窯壁	(9.4)	7.0	11.9	灰色	被熱
82	R. 51	道路１	埋土中	窯壁	(16.5)	(7.1)	5.3	茶灰色	被熱
82	R. 52	道路１	埋土中	窯壁	(10.0)	10.0	4.1	灰色	被熱
82	R. 53	J-9	表採	窯壁	(9.0)	11.6	7.4	灰色	被熱
82	R. 54	J-9	表採	窯壁	(7.1)	(8.6)	6.2	茶灰色	被熱
82	R. 55	道路１	埋土中	窯壁	(17.9)	(14.9)	5.6	茶灰色	被熱・コビキ痕
82	R. 56	道路１	埋土中	窯壁	(12.0)	19.0	(6.8)	灰色	被熱
83	R. 57	道路１	埋土中	窯壁	(14.9)	(10.5)	4.6	茶灰色	被熱
83	R. 58	神社建物１	周辺	窯壁	(10.5)	(6.5)	(5.7)	淡赤灰色	煤付着・竈か
83	R. 59	神社建物１	周辺	窯壁	(7.2)	(11.0)	(5.5)	暗赤灰色	煤付着・竈か
84	R. 60	J-11	表採	火柱	(11.1)	(11.6)	(11.7)	灰色	被熱
84	R. 61	道路１	埋土中	火柱	28.4	(15.0)	21.3	灰色	被熱
84	R. 62	道路１	埋土中	火柱	(15.2)	(13.0)	19.2	灰色	被熱
85	R. 63	道路１	埋土中	火柱	(18.9)	(11.0)	(12.2)	灰色	被熱
85	R. 64	道路１	埋土中	火柱	14.9	15.0	(22.5)	茶灰色	被熱
85	R. 65	道路１	埋土中	窯壁	(15.7)	19.5	(8.0)	灰色	被熱
86	R. 66	道路１	埋土中	窯壁	(15.2)	(11.1)	(8.6)	灰色	被熱・瓦の圧痕
86	R. 67	６区・７区	表採	窯壁	(14.4)	(10.3)	7.1	灰色	被熱・粘土付着
86	R. 68	道路１	検出中	桟瓦	(8.4)	(17.1)	2.7	灰色	粘土付着
86	R. 69	道路１	埋土中	窯壁	(11.5)	(6.9)	6.6	灰茶色	瓦の圧痕・鉄分付着
86	R. 70	道路１	埋土中	窯壁	(10.4)	(10.9)	(10.9)	灰色	被熱・瓦の圧痕
86	R. 71	道路１	埋土中	窯壁	(7.0)	(9.0)	1.8	灰色	被熱・釉薬付着
87	R. 72	６区・７区	表採	窯壁	(15.4)	(18.8)	(17.7)	茶灰色	被熱・瓦の圧痕
87	R. 73	道路１	埋土中	窯壁	(17.9)	(20.4)	(8.0)	茶灰色	被熱・瓦の圧痕
87	R. 74	道路１	埋土中	窯壁	(15.9)	(12.0)	(9.0)	灰色	被熱・瓦の圧痕
87	R. 75	道路１	埋土中	窯壁	(13.2)	(12.2)	6.8	灰色	被熱・瓦の圧痕

表22　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(mm)	内径(mm)	穿径(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
36	C1	326	石組遺構1		天禧通寶		24.8	20.0	6.6	1.3	2.8	100	青銅	4	北宋	1017	
36	C2	334	石組遺構1		一銭		28.0			1.6	6.5	100	銅		近代日本	1877	明治10年
38	C3	1267-17	銭集中	下層	開元通寶（背月）		25.4	20.8	7.2	1.7	3.1	100	青銅	2	唐	621	
38	C4	1209-2	銭集中		開元通寶		24.3	20.2	6.4	1.3	2.4	100	青銅	4	唐	621	
38	C5	1267-43	銭集中	下層	開元通寶		24.3	18.6	6.4	1.5	2.2	100	青銅	5	唐	621	
38	C6	1267-19	銭集中	下層	開元通寶		23.4	20.6	6.9	1.1	1.9	100	青銅	4	唐	621	
38	C7	1267-20	銭集中	下層	開元通寶		24.3	20.4	6.9	1.3	*1.6	95	青銅	3	唐	621	
38	C8	1222-1	銭集中		開元通寶		23.8	19.8	6.7	1.4	*2.5	90	青銅	4	唐	621	
38	C9	1267-62	銭集中	下層	開元通寶		24.7	19.3	6.3	1.3	*1.4	80	青銅	3	唐	621	
38	C10	712-4	銭集中		開□通□					1.1	*0.9	50	青銅	3	唐	621	開元通寶
	非掲載	1283-16	銭集中	２層	□元通□					1.1	*0.5	40	青銅	4	唐	621	開元通寶
38	C11	1267-16	銭集中	下層	開元通寶（背越）		24.2	19.2	6.7	1.3	1.7	100	青銅	3	唐	845	会昌開元
38	C12	1267-38	銭集中	下層	宋通元寶		24.9	18.7	6.1	1.3	2.6	100	青銅	3	北宋	960	
38	C13	1240	銭集中		太平通寶		24.9	19.9	6.6	1.2	1.5	100	青銅	3	北宋	976	
38	C14	1201	銭集中		□化元寶	行書	24.6	18.7	6.1	1.4	*1.9	75	青銅	3	北宋	990	淳化元寶
	非掲載	1208-1	銭集中		□化□□	真書					*0.3	10	青銅	2	北宋	990	淳化元寶
38	C15	1267-33	銭集中	下層	至道元寶	草書	24.5	17.0	6.5	1.2	2.5	100	青銅	2	北宋	995	
38	C16	1267-32	銭集中	下層	咸平元寶		24.2	18.1	6.1	1.0	1.7	100	青銅	4	北宋	998	
38	C17	1267-31	銭集中	下層	咸平元寶		23.9	18.6	6.0	1.0	1.6	100	青銅	3	北宋	998	
38	C18	1209-1	銭集中		景德元寶		25.1	19.6	6.1	1.2	1.7	100	青銅	4	北宋	1004	
38	C19	1283-7	銭集中		景德元寶		25.0	19.3	6.0	1.3	2.6	100	青銅	4	北宋	1004	
38	C20	353-3	銭集中		祥符元寶		25.3	18.5	6.2	1.2	2.2	100	青銅	3	北宋	1008	
38	C21	1267-44	銭集中	下層	祥符元寶		24.4	17.5	6.3	1.3	2.4	100	青銅	4	北宋	1008	
38	C22	1213	銭集中		祥符元寶		24.9	18.1	6.1	1.1	*1.2	80	青銅	4	北宋	1008	
38	C23	1231	銭集中		祥□□寶		24.9	19.9		1.4	*1.0	60	青銅	4	北宋	1008	祥符通寶／元寶
	非掲載	1283-20	銭集中	２層	□□通□	真書				1.3	*0.4	20	青銅	4	北宋	1008	祥符通寶
	非掲載	1283-23	銭集中	２層	□符□□	真書				1.3	*0.2	20	青銅	4	北宋	1008	祥符通寶
38	C24	1267-26	銭集中	下層	天禧通寶		25.3	20.3	6.5	1.6	2.6	100	青銅	3	北宋	1017	
38	C25	1237	銭集中		天禧通寶		25.0	20.8	6.2	1.3	2.5	100	青銅	4	北宋	1017	
38	C26	1267-25	銭集中	下層	天禧通寶		25.4	20.7	6.2	1.3	2.9	100	青銅	4	北宋	1017	
39	C27	1221	銭集中		天聖元寶	真書	25.3	20.7	7.4	1.6	2.2	100	青銅	4	北宋	1023	
39	C28	1230	銭集中		天聖元寶	真書	25.0	18.4	6.1	1.3	2.2	100	青銅	4	北宋	1023	
39	C29	1207-2	銭集中		天聖元寶	真書	24.2	19.1	6.8	1.2	2.3	100	青銅	4	北宋	1023	
39	C30	1223	銭集中		天聖元寶	真書	24.7	20.0	7.5	1.4	*1.9	80	青銅	4	北宋	1023	
39	C31	1222-2	銭集中		天聖元寶	篆書	25.4	19.9	6.7	1.8	2.8	100	青銅	3	北宋	1023	
39	C32	1267-53	銭集中	下層	天聖元寶	篆書	23.3	19.1	6.6	1.5	*1.8	90	青銅	4	北宋	1023	
39	C33	1283-8	銭集中		皇宋通寶	真書	24.0	19.0	6.6	1.2	1.6	100	青銅	4	北宋	1039	
39	C34	1267-34	銭集中	下層	皇宋通寶	真書	24.7	20.7	7.0	1.4	2.0	100	青銅	4	北宋	1039	
39	C35	1217	銭集中		皇宋通寶	真書	24.5	19.1	7.6	1.3	*1.4	60	青銅	3	北宋	1039	
39	C36	1283-15	銭集中		皇宋□寶	真書	24.3	19.9	6.9	1.1	*1.0	60	青銅	3	北宋	1039	
39	C37	1267-71	銭集中	下層	皇宋通寶	真書				1.2	*0.7	40	青銅	3	北宋	1039	
	非掲載	1283-14	銭集中		皇宋通寶	真書	25.3	20.6	8.0	1.4	*1.9	90	青銅	4	北宋	1039	
39	C38	1283-12	銭集中		皇宋通寶	篆書	24.5	20.7	7.7	1.2	1.8	100	青銅	4	北宋	1039	
39	C39	353-5	銭集中		皇宋通寶	篆書	24.5	20.3	6.5	1.2	2.2	100	青銅	4	北宋	1039	
39	C40	1267-49	銭集中	下層	皇宋通寶	篆書	24.4	19.1	6.9	1.4	*2.1	90	青銅	4	北宋	1039	
39	C41	1197-1	銭集中		皇宋通寶	篆書	24.2	19.9	7.0	1.5	*1.6	60	青銅	3	北宋	1039	

表23　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(mm)	内径(mm)	穿径(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
	非掲載	1209-3	銭集中		皇宋通寶	篆書			7.6	1.0	*0.7	40	青銅	3	北宋	1039	
	非掲載	1283-21	銭集中	２層	□宋□□	真書				1.2	*0.3	25	青銅	3	北宋	1039	皇宋通寶
	非掲載	1197-2	銭集中		□宋□□	篆書				1.4	*0.2	10	青銅	4	北宋	1039	皇宋通寶
39	C42	712-2	銭集中		至和元寶	真書	24.1	18.0	6.9	1.6	2.0	100	青銅	3	北宋	1054	
39	C43	1267-42	銭集中	下層	至和元寶	真書	23.5	18.8	6.2	1.4	2.1	100	青銅	4	北宋	1054	
39	C44	1222-3	銭集中		嘉祐通寶	篆書				1.3	*1.0	30	青銅	4	北宋	1056	
	非掲載	1283-24	銭集中	２層	□祐□□	篆書					*0.1	5	青銅	3	北宋	1056	嘉祐通寶
	非掲載	1229	銭集中		嘉□□寶	真書				1.2	*0.5	20	青銅	3	北宋	1056	嘉祐通寶／元寶
39	C45	1267-51	銭集中	下層	治平元寶	真書	24.2	19.0	6.6	1.5	*1.4	60	青銅	3	北宋	1064	
39	C46	1267-41	銭集中	下層	治平元寶	篆書	23.3	19.4	6.6	1.6	2.0	100	青銅	3	北宋	1064	
39	C47	1267-29	銭集中	下層	熙寧元寶	真書	24.5	20.0	7.1	1.4	2.1	100	青銅	3	北宋	1068	
39	C48	1267-18	銭集中	下層	熙寧元寶	真書	24.0	19.9	7.2	1.6	2.3	100	青銅	4	北宋	1068	
39	C49	1267-30	銭集中	下層	熙寧元寶	真書	23.8	20.0	7.0	1.5	1.7	100	青銅	3	北宋	1068	
39	C50	1235	銭集中		熙寧元寶	真書	23.6	19.8	7.0	1.6	3.0	100	青銅	4	北宋	1068	
40	C51	1239	銭集中		熙寧元寶	篆書	24.3	20.4	7.5	1.1	1.9	100	青銅	4	北宋	1068	
40	C52	712-3	銭集中		熙寧元寶	篆書	23.8	19.1	7.2	1.3	*1.8	90	青銅	4	北宋	1068	
40	C53	1369-1	銭集中	１層	熙寧元寶	篆書	23.8	19.3	6.5	1.3	2.8	100	青銅	3	北宋	1068	
40	C54	1247	銭集中		□□元寶	篆書	24.2	19.7	6.0	1.5	*1.1	50	青銅	3	北宋	1068	熙寧元寶
	非掲載	1244	銭集中		□寧□□	篆書				1.6	*0.3	20	青銅	3	北宋	1068	熙寧元寶
40	C55	1212	銭集中		元豊通寶	行書	24.4	20.4	7.3	1.2	2.1	100	青銅	4	北宋	1078	
40	C56	712-1	銭集中		元豊通寶	行書	24.3	17.9	6.5	1.8	2.4	100	青銅	3	北宋	1078	
40	C57	1267-40	銭集中	下層	元豊通寶	行書	24.2	19.0	7.5	1.2	2.0	100	青銅	3	北宋	1078	
40	C58	1267-54	銭集中	下層	元豊通寶	行書	24.0	19.6	6.5	1.3	1.6	100	青銅	3	北宋	1078	
40	C59	1233	銭集中		元豊通寶	篆書	24.4	19.0	7.0	1.3	2.4	100	青銅	4	北宋	1078	
40	C60	1218	銭集中		元豊通寶	篆書	24.4	19.3	6.8	1.8	1.7	100	青銅	4	北宋	1078	
40	C61	1236	銭集中		元豊通寶	篆書	24.3	17.9	6.2	1.5	2.8	100	青銅	3	北宋	1078	
40	C62	1267-45	銭集中	下層	元豊通寶	篆書	24.2	18.1	6.7	1.4	2.2	100	青銅	4	北宋	1078	
40	C63	1243	銭集中		元豊通寶	篆書	24.2	18.1	6.3	1.7	2.4	100	青銅	4	北宋	1078	
40	C64	1242	銭集中		元豊通寶	篆書	24.6	19.8	7.3	1.6	2.8	100	青銅	4	北宋	1078	歪み
	非掲載	1267-73	銭集中	下層	□豊□□	行書				1.1	*0.4	20	青銅	3	北宋	1078	元豊通寶
	非掲載	1267-82	銭集中	下層	□豊□□	行書				1.5	*0.3	20	青銅	3	北宋	1078	元豊通寶
40	C65	353-4	銭集中		元祐通寶	行書	24.6	21.1	7.6	1.7	2.5	100	青銅	3	北宋	1086	
40	C66	1267-58	銭集中	下層	元祐通寶	行書	23.8	19.3	6.2	1.3	1.4	100	青銅	4	北宋	1086	
40	C67	1283-13	銭集中		元祐通寶	行書	23.6	18.9	6.7	1.1	1.5	100	青銅	3	北宋	1086	
40	C68	1283-11	銭集中		元祐通寶	行書	23.8	18.8	6.3	1.2	*1.8	90	青銅	4	北宋	1086	
40	C69	1238	銭集中		元祐通寶	行書	24.1	19.2	6.9	1.1	*1.2	80	青銅	4	北宋	1086	
40	C70	1267-66	銭集中	下層	元祐通寶	行書	25.0	19.1	5.7	1.3	*1.1	40	青銅	3	北宋	1086	
40	C71	1228	銭集中		元祐通寶	行書	24.8	18.9	6.6	1.2	*0.9	50	青銅	3	北宋	1086	
40	C72	1267-68	銭集中	下層	元祐通寶	行書				1.1	*0.8	40	青銅	3	北宋	1086	
40	C73	1227	銭集中		元祐通寶	行書				1.4	*0.9	40	青銅	4	北宋	1086	
40	C74	1283-18	銭集中		□□通寶	行書				1.3	*0.9	40	青銅	4	北宋	1086	元祐通寶
41	C75	1267-37	銭集中	下層	元祐通寶	篆書	24.4	19.7	7.2	1.3	2.4	100	青銅	3	北宋	1086	
41	C76	1204	銭集中		元祐通寶	篆書	24.5	19.9	7.2	1.4	2.5	100	青銅	4	北宋	1086	
41	C77	1283-9	銭集中		元祐通寶	篆書	24.0	19.2	7.0	1.3	1.8	100	青銅	4	北宋	1086	歪み
41	C78	1253	銭集中		元祐通寶	篆書	24.6	18.3	6.9	1.1	1.8	100	青銅	3	北宋	1086	
41	C79	1267-60	銭集中	下層	元祐通寶	篆書	21.5	19.4	7.6	1.6	1.9	100	青銅	4	北宋	1086	
	非掲載	1283-22	銭集中	２層	□祐□□	行書				1.3	*0.2	10	青銅	4	北宋	1086	元祐通寶

表24　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(mm)	内径(mm)	穿径(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
	非掲載	1267-81	銭集中	下層	□祐□□	篆書				1.1	*0.2	10	青銅	3	北宋	1086	元祐通寶
41	C80	1215	銭集中		紹聖元寶	行書	25.4	20.4	7.9	1.4	1.4	100	青銅	3	北宋	1094	
41	C81	1283-4	銭集中		紹聖元寶	篆書	23.8	19.0	6.3	1.5	2.8	100	青銅	3	北宋	1094	
41	C82	1202	銭集中		元符通寶	行書	24.1	18.4	6.3	1.2	2.2	100	青銅	4	北宋	1098	
41	C83	1267-36	銭集中	下層	元符通寶	行書	24.0	18.1	6.3	1.5	2.4	100	青銅	2	北宋	1098	
41	C84	1267-46	銭集中	下層	聖宋元寶	行書	24.8	19.3	6.4	1.1	1.4	100	青銅	3	北宋	1101	
41	C85	1267-47	銭集中	下層	聖宋元寶	篆書	24.3	18.0	6.5	1.4	*1.9	90	青銅	4	北宋	1101	
41	C86	1234	銭集中		大観通寶		24.4	21.1	6.4	1.6	*2.0	80	青銅	3	北宋	1107	
41	C87	1267-63	銭集中	下層	大観通寶		24.1	21.5	6.1	1.7	*1.6	75	青銅	3	北宋	1107	
41	C88	1283-5	銭集中		政和通寶	真書	24.6	20.9	5.7	1.5	2.6	100	青銅	2	北宋	1111	
41	C89	1267-28	銭集中	下層	政和通寶	真書	24.7	21.0	6.4	1.3	2.2	100	青銅	2	北宋	1111	
41	C90	1267-27	銭集中	下層	政和通寶	真書	24.6	20.1	6.1	1.3	2.0	100	青銅	3	北宋	1111	歪み
41	C91	1267-39	銭集中	下層	政和通寶	篆書	25.0	21.9	6.5	1.5	2.2	100	青銅	3	北宋	1111	
	非掲載	1283-17	銭集中	２層	□和□□	篆書					*0.1	5	青銅	3	北宋	1111	政和または宣和
	非掲載	712-6	銭集中		□□元寶				6.6	1.5	*1.2	60	青銅	3	北宋		歪み
	非掲載	1226-2	銭集中		□□□寶	行書				1.2	*0.4	20	青銅	4	北宋		
	非掲載	1267-79	銭集中	下層	□□□寶					1.4	*0.3	10	青銅	4	北宋		
	非掲載	1267-74	銭集中	下層	□□□寶					1.1	*0.4	20	青銅	3	北宋		
	非掲載	1267-75	銭集中	下層	□□□寶					1.0	*0.3	20	青銅	3	北宋		
	非掲載	1208-2	銭集中		□□元□	真書				1.3	*0.2	10	青銅	2	北宋		
	非掲載	1283-19	銭集中	２層	□□通□	篆書				1.1	*0.8	25	青銅	4	北宋		
	非掲載	1267-76	銭集中	下層	□□通□	真書				1.4	*0.4	20	青銅	2	北宋		
	非掲載	1267-72	銭集中	下層	元□□□	篆書				1.2	*0.4	20	青銅	2	北宋		
41	C92	1267-50	銭集中	下層	淳熙元寶（背十）	真書	23.8	18.8	5.9	1.2	1.7	100	青銅	3	南宋	1183	
41	C93	1283-17	銭集中	２層	淳□□寶（背十）	真書			6.3	1.3	*0.6	40	青銅	3	南宋	1183	淳熙元寶
41	C94	1267-48	銭集中	下層	洪武通寶（背北平）		24.3	20.6	5.8	1.9	1.9	100	青銅	3	明	1368	歪み
41	C95	1224、1267-67	銭集中		洪武通寶		23.8	20.7	5.8	1.2	1.4	100	青銅	3	明	1368	鋳不足
41	C96	353-2	銭集中		洪武通寶		23.2	19.7	6.9	2.0	2.0	100	青銅	3	明	1368	
41	C97	1226-1	銭集中		永楽通寶		25.6	20.6	6.2	1.6	3.0	100	青銅	2	明	1408	
41	C98	1267-1	銭集中	下層	永楽通寶		25.5	20.3	5.7	1.5	1.6	100	青銅	3	明	1408	
41	C99	1283-2	銭集中		永楽通寶		25.3	20.9	5.9	1.6	2.6	100	青銅	2	明	1408	
41	C100	1283-10	銭集中		永楽通寶		25.3	21.1	6.0	1.6	2.7	100	青銅	2	明	1408	
41	C101	1267-6	銭集中	下層	永楽通寶		25.3	20.5	5.5	1.3	1.9	100	青銅	2	明	1408	
41	C102	1267-11	銭集中	下層	永楽通寶		25.2	20.8	5.7	1.8	3.1	100	青銅	1	明	1408	
41	C103	1267-8	銭集中	下層	永楽通寶		25.2	20.8	5.6	1.7	2.2	100	青銅	2	明	1408	
41	C104	1267-9	銭集中	下層	永楽通寶		25.2	21.0	5.8	1.4	2.5	100	青銅	2	明	1408	
41	C105	1267-5	銭集中	下層	永楽通寶		25.2	20.6	5.7	1.3	2.1	100	青銅	2	明	1408	
41	C106	1267-3	銭集中	下層	永楽通寶		25.1	20.6	5.9	1.6	3.3	100	青銅	1	明	1408	
41	C107	1211	銭集中		永楽通寶		25.1	20.8	6.0	1.4	2.9	100	青銅	1	明	1408	
41	C108	1206	銭集中		永楽通寶		25.1	20.7	5.9	0.9	1.5	100	青銅	1	明	1408	
41	C109	1267-14	銭集中	下層	永楽通寶		25.1	21.0	5.8	1.5	2.2	100	青銅	1	明	1408	
41	C110	1283-1	銭集中		永楽通寶		25.1	20.8	5.5	1.6	2.4	100	青銅	2	明	1408	
41	C111	1267-10	銭集中	下層	永楽通寶		25.1	20.7	5.3	1.5	2.1	100	青銅	2	明	1408	
41	C112	1267-12	銭集中	下層	永楽通寶		25.1	21.2	5.6	1.0	1.8	100	青銅	2	明	1408	

表25　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(mm)	内径(mm)	穿径(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
42	C113	1214	銭集中		永楽通寶		25.0	20.9	5.8	1.6	2.4	100	青銅	1	明	1408	
42	C114	1203	銭集中		永楽通寶		25.0	21.3	6.0	1.1	1.6	100	青銅	1	明	1408	
42	C115	1225	銭集中		永楽通寶		25.0	21.1	5.9	1.3	1.9	100	青銅	1	明	1408	
42	C116	1267-4	銭集中	下層	永楽通寶		25.0	21.1	5.5	1.3	2.3	100	青銅	2	明	1408	
42	C117	1267-2	銭集中	下層	永楽通寶		25.0	20.9	5.8	1.2	2.3	100	青銅	2	明	1408	
42	C118	1267-7	銭集中	下層	永楽通寶		24.9	20.8	5.7	1.8	3.0	100	青銅	2	明	1408	
42	C119	1216	銭集中		永楽通寶		24.8	20.8	5.7	1.2	1.8	100	青銅	1	明	1408	
42	C120	1205	銭集中		永楽通寶		24.8	20.9	6.0	1.6	2.7	100	青銅	2	明	1408	
42	C121	1207-1	銭集中		永楽通寶		24.8	21.2	5.8	1.4	3.1	100	青銅	2	明	1408	
42	C122	1267-13	銭集中	下層	永楽通寶		24.7	20.7	5.9	1.2	1.6	100	青銅	2	明	1408	
43	C123	1219	銭集中		永楽通寶		24.6	20.7	5.6	1.4	2.2	100	青銅	1	明	1408	
43	C124	1267-15	銭集中	下層	永楽通寶		24.9	21.5	6.3	1.4	*1.2	70	青銅	1	明	1408	
43	C125	1267-64	銭集中	下層	永楽通寶					1.5	*1.0	40	青銅	1	明	1408	
	非掲載	1267-70	銭集中	下層	永□□□					1.4	*0.4	20	青銅	1	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1267-69	銭集中	下層	永□□□					1.6	*0.3	10	青銅	1	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1267-65	銭集中	下層	永□□□					1.2	*0.7	20	青銅	1	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1220	銭集中		□□□寶					1.5	*0.5	25	青銅	2	明	1408	永楽通寶
43	C126	1283-6	銭集中		宣徳通寶		25.6	21.1	5.3	1.9	5.4	100	青銅	2	明	1433	
43	C127	1283-3	銭集中		朝鮮通寶		23.7	20.0	5.4	1.3	2.2	100	青銅	2	李氏朝鮮	1423	
43	C128	1267-35	銭集中	下層	朝鮮通寶		23.5	20.4	5.4	1.6	3.0	100	青銅	1	李氏朝鮮	1423	
43	C129	1267-57	銭集中	下層	不明		23.7	20.0	6.1	1.3	1.6	100	青銅	5	不明		
43	C130	1267-55	銭集中	下層	不明		23.6	18.5	6.8	1.1	2.1	100	青銅	5	不明		
	非掲載	712-5	銭集中		不明					1.4	*0.8	40	青銅	4	不明		
	非掲載	712-7	銭集中		不明						*0.1	5	青銅		不明		
	非掲載	1267-61	銭集中	下層	不明		23.2		7.4	0.9	1.3	100	青銅		不明		極薄
	非掲載	1267-78	銭集中	下層	不明					1.3	*0.4	20	青銅		不明		
	非掲載	1267-77	銭集中	下層	不明					1.6	*0.4	25	青銅		不明		
	非掲載	1267-80	銭集中	下層	不明					1.1	*0.4	20	青銅		不明		
	非掲載	1267-84	銭集中	下層	不明					1.6	*0.9	25	青銅		不明		
	非掲載	1267-83	銭集中	下層	不明					1.5	*0.5	25	青銅		不明		歪み
	非掲載	1267-85	銭集中	下層	不明						*0.2	10	青銅		不明		
43	C131	1267-56	銭集中	下層	不明		22.7	17.9	8.3	1.1	1.8	100	青銅		中世日本		模鋳銭
43	C132	1267-52	銭集中	下層	不明		23.2	18.6	7.0	1.5	*1.5	80	青銅		中世日本		模鋳銭
43	C133	1267-59	銭集中	下層	不明		21.8		6.0	1.1	*0.7	80	青銅		中世日本		模鋳銭、極薄
43	C134	1241	銭集中		不明				6.4	1.2	*1.5	70	青銅		中世日本		模鋳銭
43	C135	1232	銭集中		不明				6.8	1.1	*1.3	60	青銅		中世日本		模鋳銭
43	C136	1267-22	銭集中	下層	寛永通寶		24.4	20.0	5.9	1.3	2.7	100	青銅	2	近世日本	1636	古寛永称芝銭
43	C137	353-1	銭集中		寛永通寶		24.8	20.2	6.9	1.1	2.7	100	青銅	4	近世日本	1653	古寛永称建仁寺銭
	非掲載	1246、1267	銭集中		□永通寶		23.5	19.3	6.4	0.8	*0.8	80	青銅	3	近世日本	1726	新寛永不旧手十万坪銭、極薄
43	C138	1267-21	銭集中	下層	寛永通寶		23.1	18.1	6.3	1.1	2.1	100	青銅	2	近世日本	1736	新寛永十万坪銭
43	C139	1267-24	銭集中	下層	寛永通寶		22.5	17.0	6.9	1.0	1.5	100	青銅	2	近世日本	1736	新寛永四ツ宝銭
43	C140	1267-23	銭集中	下層	寛永通寶		23.2	19.1	6.6	1.0	*1.1	100	青銅	2	近世日本	1736	新寛永四ツ宝銭、歪み
43	C141	1369-2	銭集中	1層	□永通□		24.5	19.1	6.1	1.7	2.8	100	鉄	3	近世日本	1738	新寛永鉄一文銭
43	非掲載	1245	銭集中		不明							100	鉄		近世日本		分解のため測定不能
43	C142	393-2	K-15		開元通寶		24.7	21.1	8.0	1.3	1.8	100	青銅	2	唐	621	

表26　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(mm)	内径(mm)	穿径(mm)	厚(mm)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
43	C143	1148	神社南東		開元通寶(背月)		24.8	19.9	6.5	1.5	*2.0	90	青銅	3	唐	621	ボタン穴２
44	C144	1174-1	K-7	１層	開元通寶		23.2	9.9	7.2	1.4	2.9	100	青銅	3	唐	621	
44	C145	1155	K-7	１層	開元通寶		23.3	17.9	7.0	1.4	2.1	100	青銅	5	唐	621	
	非掲載	1157	K-7	１層	開□通□					1.4	*0.7	30	青銅	3	唐	621	開元通寶
44	C146	1348	配石遺構５周辺		祥符元寶		24.6	18.6	6.4	1.2	2.6	100	青銅	3	北宋	1008	
44	C147	1162	K-7	１層	祥符通寶		25.0	20.7	6.5	1.2	1.7	100	青銅	4	北宋	1008	
44	C148	1172	K-7	１層	天聖元寶	篆書	24.9	21.0	7.9	1.1	1.5	100	青銅	4	北宋	1023	
44	C149	1325	K-7	３層	□道元□	篆書			6.2	1.7	*1.3	50	青銅	3	北宋	1032	明道元寶
44	C150	1174-2	神社南東		皇宋通寶	真書	24.6	20.2	6.8	1.2	1.8	100	青銅	3	北宋	1039	
44	C151	1173	K-7	１層	皇宋通寶	篆書	24.9	21.1	7.3	1.2	1.8	100	青銅	3	北宋	1039	
44	C152	569	T2		皇宋通寶	篆書	23.1	17.5	7.1	1.1	*1.7	80	青銅	3	北宋	1039	
44	C153	1292	L-6	２層	熙寧元寶	真書	23.5	20.7	7.5	1.3	2.6	100	青銅	3	北宋	1068	
44	C154	1138	K-7	１層	熙寧元寶	真書	25.0	20.3	6.9	1.6	1.9	100	青銅	3	北宋	1068	
44	C155	1151	K-7	１層	熙寧元寶	真書	23.9	19.9	7.2	1.6	*1.8	90	青銅	3	北宋	1068	
44	C156	1146	K-7	１層	熙寧元寶	篆書	23.9	19.0	7.2	1.3	2.1	100	青銅	4	北宋	1068	
44	C157	230	粘土採掘坑２北		元豊通寶	篆書	24.1	18.6	7.9	1.3	2.4	100	青銅	3	北宋	1078	
44	C158	1171	K-7	１層	元豊通寶	篆書	24.5	18.6	6.6	1.2	2.7	100	青銅	3	北宋	1078	
44	C159	1145	K-7	１層	元祐通寶	行書	24.5	21.1	7.3	1.2	2.3	100	青銅	3	北宋	1086	
44	C160	1147	K-7	１層	元祐通寶	行書	24.6	20.1	7.2	1.5	1.8	100	青銅	3	北宋	1086	
44	C161	1137	K-7	１層	元祐通寶	篆書	24.1	18.9	7.4	1.4	2.0	100	青銅	3	北宋	1086	
44	C162	1144	K-7	１層	元祐通寶	篆書	24.4	20.0	7.3	1.4	2.4	100	青銅	3	北宋	1086	
44	C163	1156、1158-1	K-7	１層	元祐通寶	篆書	24.2	19.5	7.7	1.2	*1.6	75	青銅	3	北宋	1086	
44	C164	393-1	K-15		紹聖元寶	真書	24.2	16.7	6.5	1.2	2.3	100	青銅	3	北宋	1094	
45	C165	1345	銭集中周辺	３層	紹聖元寶	篆書	23.8	18.8	7.3	1.1	2.1	100	青銅	4	北宋	1094	
45	C166	1141-1	K-7	１層	聖宋元寶	行書	24.0	18.6	7.0	1.5	2.3	100	青銅	3	北宋	1101	
45	C167	1142	K-7	１層	聖宋元寶	篆書	23.4	17.8	6.0	1.4	1.8	100	青銅	5	北宋	1101	
45	C168	1159	K-7	１層	大観通寶		24.5	21.7	6.9	1.4	1.2	100	青銅	3	北宋	1107	
45	C169	1141-2	K-7	１層	□□元寶	真書				1.3	*1.0	50	青銅	3	北宋		
45	C170	1168	K-7	１層	□□元寶	篆書				1.3	*0.9	40	青銅	4	北宋		
	非掲載	1143	K-7	１層	□□元寶					1.3	*0.4	30	青銅	2	北宋		
	非掲載	1163	K-7	１層	□□□寶					1.3	*0.4	20	青銅	4	北宋		
	非掲載	1161-2	K-7	１層	□□□寶					1.2	*0.6	25	青銅	4	北宋		
45	C171	1140	K-7	１層	永楽通寶		25.2	21.5	5.8	1.9	3.3	100	青銅	2	明	1408	
45	C172	1149	K-7	１層	永楽通寶		24.7	21.2	6.2	1.6	1.8	100	青銅	1	明	1408	
45	C173	1153	K-7	１層	永楽通寶		24.6	21.0	6.4	1.3	1.5	100	青銅	1	明	1408	
45	C174	1154	K-7	１層	永楽通寶		24.6	21.3	6.1	1.4	*2.0	80	青銅	2	明	1408	
45	C175	1150-1	K-7	１層	永楽通寶		25.1	21.1	6.0	1.4	*1.6	75	青銅	1	明	1408	
	非掲載	1150-2	K-7	１層	永□□寶					1.4	*0.8	30	青銅	2	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1152	K-7	１層	永□通□					1.6	*0.8	40	青銅	2	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1174-3	神社南東		□楽□□					1.2	*0.4	25	青銅	2	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1164-1	K-7	１層	□□□寶					1.1	*0.5	25	青銅	2	明	1408	永楽通寶
	非掲載	1164-2	K-7	１層	不明					1.3	*0.2	10	青銅	5	不明		
45	C176	1161-1	K-7	１層	不明		22.1		6.7	0.7	*0.7	60	青銅		中世日本		模鋳銭
	非掲載	1158-2	K-7	１層	不明					1.5	*0.5	30	青銅		中世日本		模鋳銭

表27　新屋宮ノ段遺跡　出土銭貨観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	遺　構	層位	銭　名	書体	外径(㎜)	内径(㎜)	穿径(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	残存(%)	材質	摩滅度	銭　籍	初鋳年	備　　考
45	C177	197	K-10	1層	寛永通寶		24.6	19.4	6.7	1.3	2.2	100	青銅	3	近世日本	1726	新寛永不旧手十万坪銭
45	C178	350	神社北東		寛永通寶		23.9	19.8	7.0	1.5	3.3	100	青銅	2	近世日本	1726	新寛永不旧手十万坪銭
45	C179	71	K-12	1層	寛永通寶		23.1	18.5	6.6	1.3	2.7	100	青銅	2	近世日本	1736	新寛永十万坪銭
45	C180	336	神社東		寛永通寶		22.9	19.2	7.1	0.9	1.9	100	青銅	2	近世日本	1736	新寛永四ツ宝銭
45	C181	339	神社北		寛永通寶		24.5	19.6	6.3	1.4	2.8	100	青銅	4	近世日本	1738	新寛永秋田銭
	非掲載	1290	K-7	2層	不明		27.4		7.2	3.5	4.0	100	鉄		近世日本		新寛永鉄銭？
45	C182	355	J-14		十銭		17.8			1.4	2.0	100	銀		近代日本	1910	明治43年

写 真 图 版

１．調査区遠景（北西上空より）

２．調査区遠景（北東上空より）

写真図版２

１．調査区遠景（西上空より）

２．調査区遠景（南西上空より）

１．配石遺構１・２　検出（南東より）

２．配石遺構１　石の積み上げ（北東より）

写真図版４

１．配石遺構１・２
検出（東より）

２．配石遺構１
検出（東より）

３．配石遺構２
検出（北東より）

１．配石遺構３
検出（北東より）

２．配石遺構４
検出（北西より）

３．配石遺構５
検出（南より）

写真図版６

１．配石遺構５　検出（北西より）

２．配石遺構５　土器（Po. 1）検出中（北より）

１．配石遺構５
検出（西より）

２．配石遺構５
土器検出（東より）

３．集石１
検出（南東より）

写真図版８

１．集石２
検出（東より）

２．集石３
検出（東より）

３．集石３
完掘（東より）

１．集石４
検出（北より）

２．集石５
検出（北より）

３．集石６
検出（北より）

写真図版10

1．貯蔵穴１
　　完掘（東より）

2．貯蔵穴２
　　完掘（南西より）

3．貯蔵穴３
　　完掘（南より）

1．貯蔵穴４
完掘（北より）

2．貯蔵穴５
完掘（東より）

3．貯蔵穴６
完掘（南より）

写真図版12

1．貯蔵穴８
　　完掘（北より）

2．貯蔵穴９
　　完掘（南西より）

3．貯蔵穴10
　　完掘（西より）

1．貯蔵穴11
断面（東より）

2．貯蔵穴11
完掘（北東より）

3．貯蔵穴12
完掘（東より）

写真図版14

1．貯蔵穴13・14
完掘（北東より）

2．陥穴１
完掘（北より）

3．陥穴２
完掘（北より）

1．L−12区　Po. 68
出土状況（北より）

2．K−15区　縄文土器
出土状況（北東より）

3．K−７区　縄文土器
出土状況（北より）

写真図版16

1．火山灰試料採取
　　トレンチ６（北東より）

2．火山灰試料採取
　　トレンチ７（北東より）

3．火山灰試料採取
　　K−14区（東より）

１．石組遺構１　検出（北より）

２．石組遺構１・神社建物１　全景（北東より）

１．石組遺構１　土器検出（北より）

２．石組遺構１　完掘（西より）

1．石組遺構１
土器検出（東より）

2．石組遺構１
土器検出（北より）

3．和鏡（M. 1）
出土状況（西より）

写真図版20

1．銭集中
検出（北より）

2．銭集中
検出（北西より）

3．和鏡（M. 2）
出土状況（西より）

1．土坑１
上面検出（北西より）

2．土坑１
下面検出（南西より）

3．土坑１
完掘（北西より）

１．神社建物１　検出（西より）

２．神社下層建物群　完掘（南東より）

1．神社建物１
検出（西より）

2．神社建物１
Po. 293検出（西より）

3．神社建物１
断割（南西より）

写真図版24

1．土坑２
検出（南西より）

2．神社下層建物群
検出（南東より）

3．神社下層建物群
完掘（北東より）

1．建物跡１　完掘（北より）

2．建物跡２　完掘（北より）

1．建物跡１～５
完掘（南東より）

2．建物跡１
完掘（東より）

3．建物跡３～５
完掘（南より）

1．鍛冶炉１　完掘（西より）

2．鍛冶炉１　排滓孔（南より）

1．鍛冶炉１
断面（東より）

2．鍛冶炉１
燃焼部断面（北東より）

3．鍛冶炉１
燃焼部（北より）

1．鍛冶炉１
燃焼部の底面（北より）

2．鍛冶炉１
排滓部全景（南東より）

3．鍛冶炉１
排滓孔のノロ（F. 1）
（南より）

写真図版30

1．鍛冶炉１と鉄床石
（南より）

2．鉄床石（S. 22）
（南東より）

3．鉄床石の表面
（南より）

1．鍛冶炉１
作業面の断面（南より）

2．鍛冶炉１
鞴座の断面（北より）

3．鍛冶炉１
鞴座完掘（北西より）

1．鍛冶炉１
完掘（東より）

2．鍛冶炉１
石材除去後（北より）

3．鍛冶炉１
石材除去後（南東より）

１．道路１　検出（北西より）

1．道路１
瓦類出土状況（西より）

2．道路１
断面（北より）

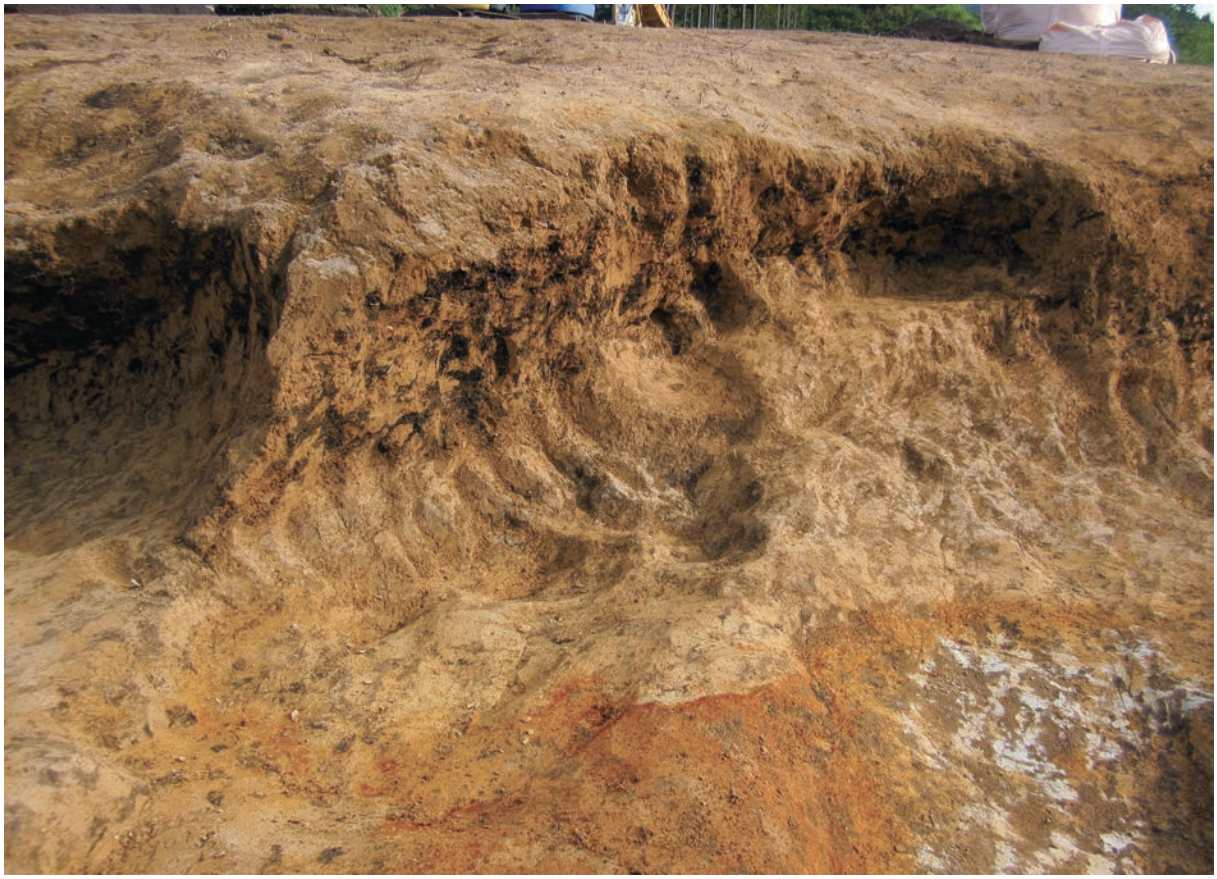
3．道路１
完掘（北西より）

1．土取穴１
完掘（南東より）

2．土取穴２
検出（南より）

3．土取穴２
完掘（北より）

１．土取穴２　切り合い状況（北東より）



２．土取穴２　壁面の掘削痕（南西より）

1．土取穴３
完掘（北東より）

2．集石遺構２
検出（南より）

3．集石遺構２
完掘（南より）

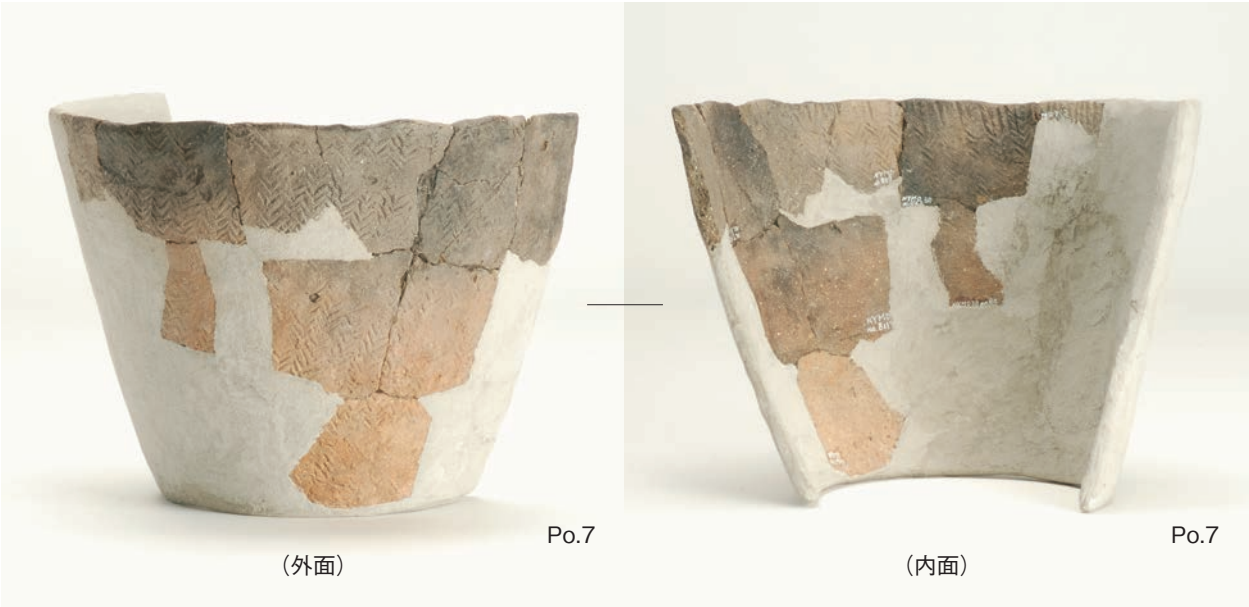
1．配石遺構５　縄文土器（外面）

2．配石遺構５　縄文土器（内面）　（S＝１：３）

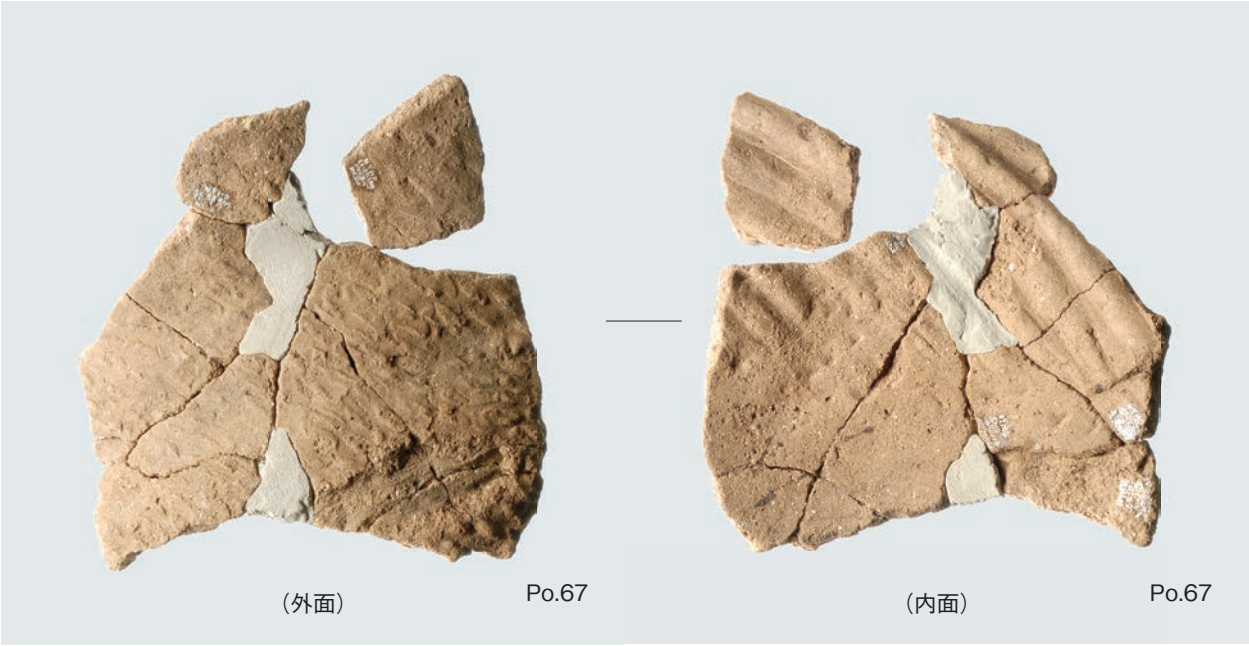
1．貯蔵穴１・11　縄文土器（外面）　（S＝２：３）

2．集石遺構１・貯蔵穴６　石器　（S. 1はS＝２：３、S. 2・S. 3はS＝１：１）

1．神宮寺式・黄島式（外面）　（S＝２：３）



2．黄島式　（S＝１：３）



1．高山寺式　（S＝1：3）

2．高山寺式（外面）　（S＝1：3）

1．黄島式（外面）　（S＝２：３）

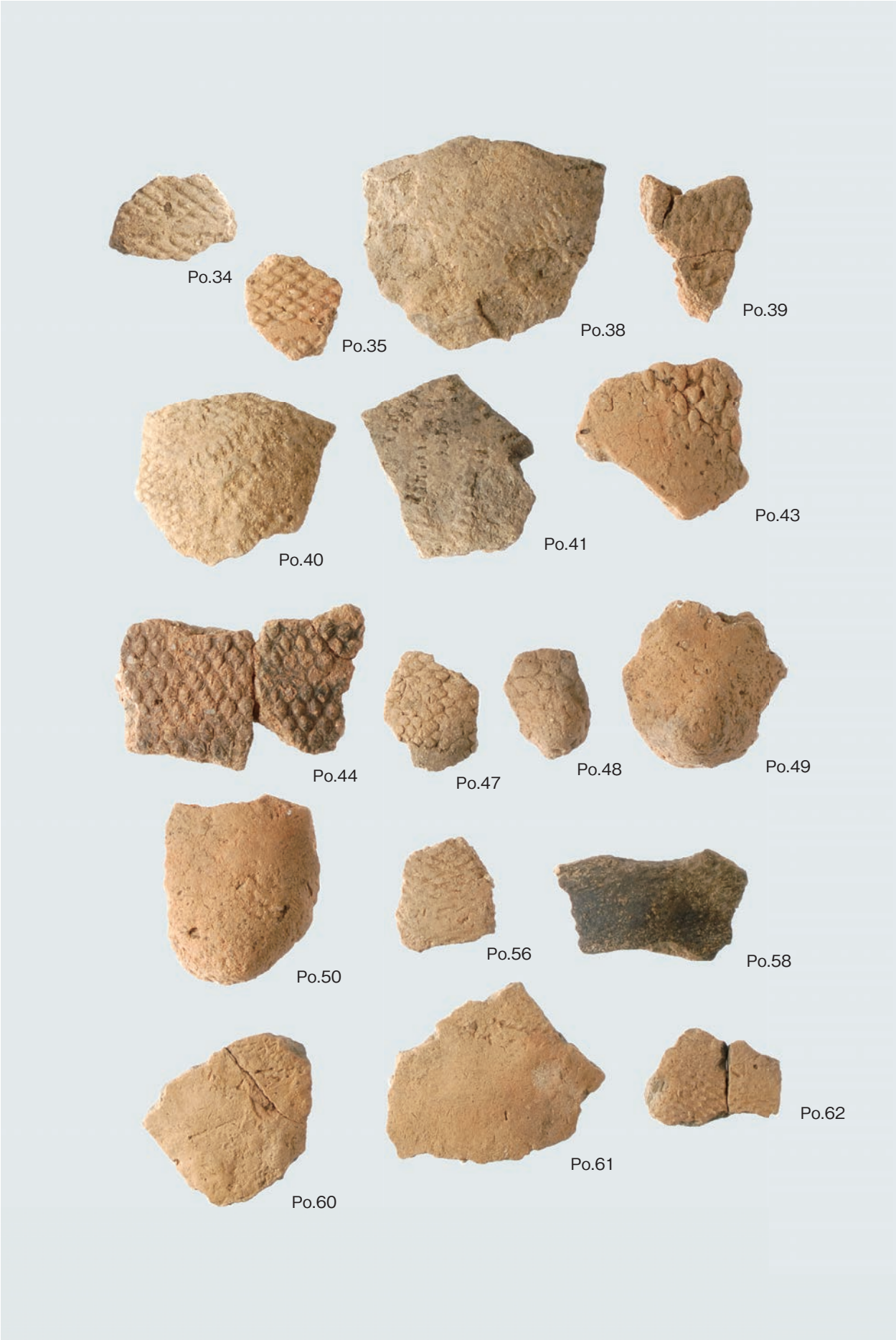
1．黄島式（内面）　（S＝２：３）

Po.28
Po.29
Po.30
Po.31
Po.32
Po.33
Po.36
Po.42
Po.37
Po.45
Po.51
Po.52
Po.53
Po.54
Po.55
Po.57
Po.59
Po.46

1．黄島式（外面）　（S＝２：３）

Po.28
Po.29
Po.30
Po.31
Po.36
Po.33
Po.42
Po.32
Po.37
Po.51
Po.45
Po.55
Po.54
Po.52
Po.53
Po.57
Po.59
Po.46

1．黄島式（内面）　（S＝２：３）


Po.34
Po.35
Po.38
Po.39
Po.40
Po.41
Po.43
Po.44
Po.47
Po.48
Po.49
Po.50
Po.56
Po.58
Po.60
Po.61
Po.62

1．黄島式（外面）　（S＝２：３）

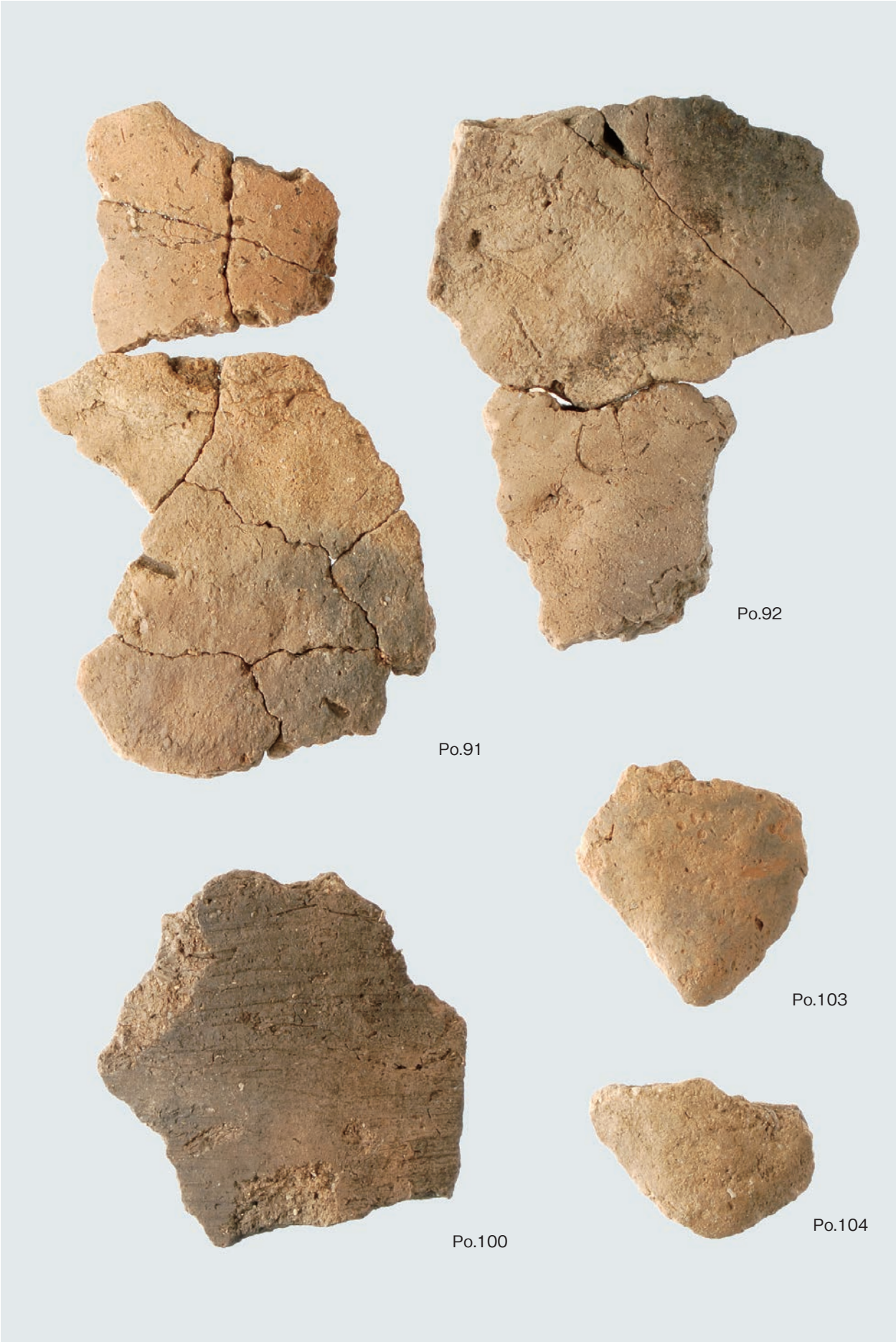
1．黄島式・高山寺式（外面）　（S＝２：３）

1．高山寺式・二枚貝押圧土器・無文土器（外面）　（S＝２：３）

1．高山寺式・二枚貝押圧土器・無文土器（内面）　（S＝２：３）

1．無文土器・穂谷式（外面）　（S＝２：３）

1．無文土器・穂谷式（内面）　（S＝２：３）

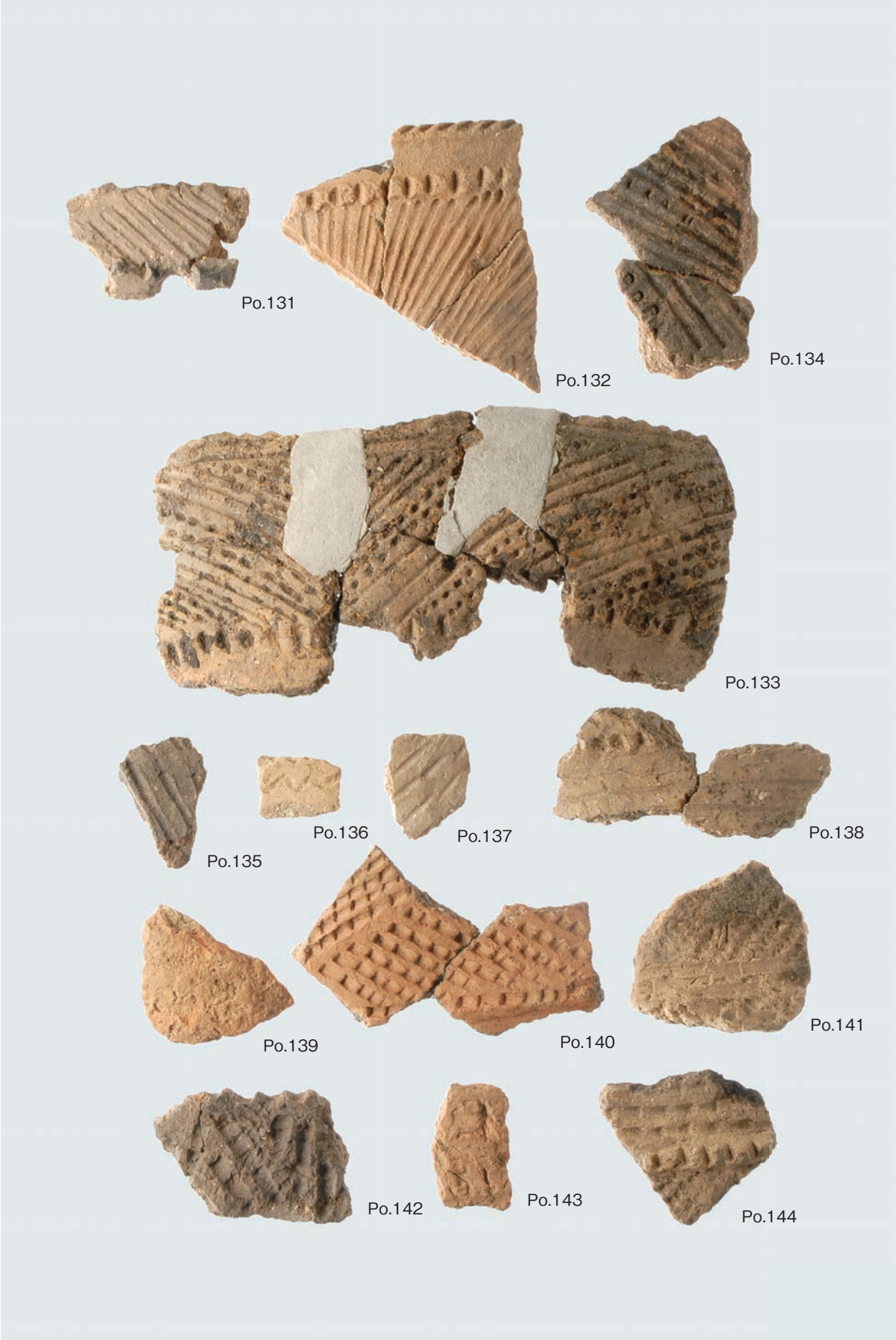


1．無文土器（外面）　（S＝２：３）

1．穂谷式（外面）　（S＝1：2）

2．宮の平式類似（外面）　（S＝2：3）

1．穂谷式・宮の平式類似（外面）　（S＝２：３）

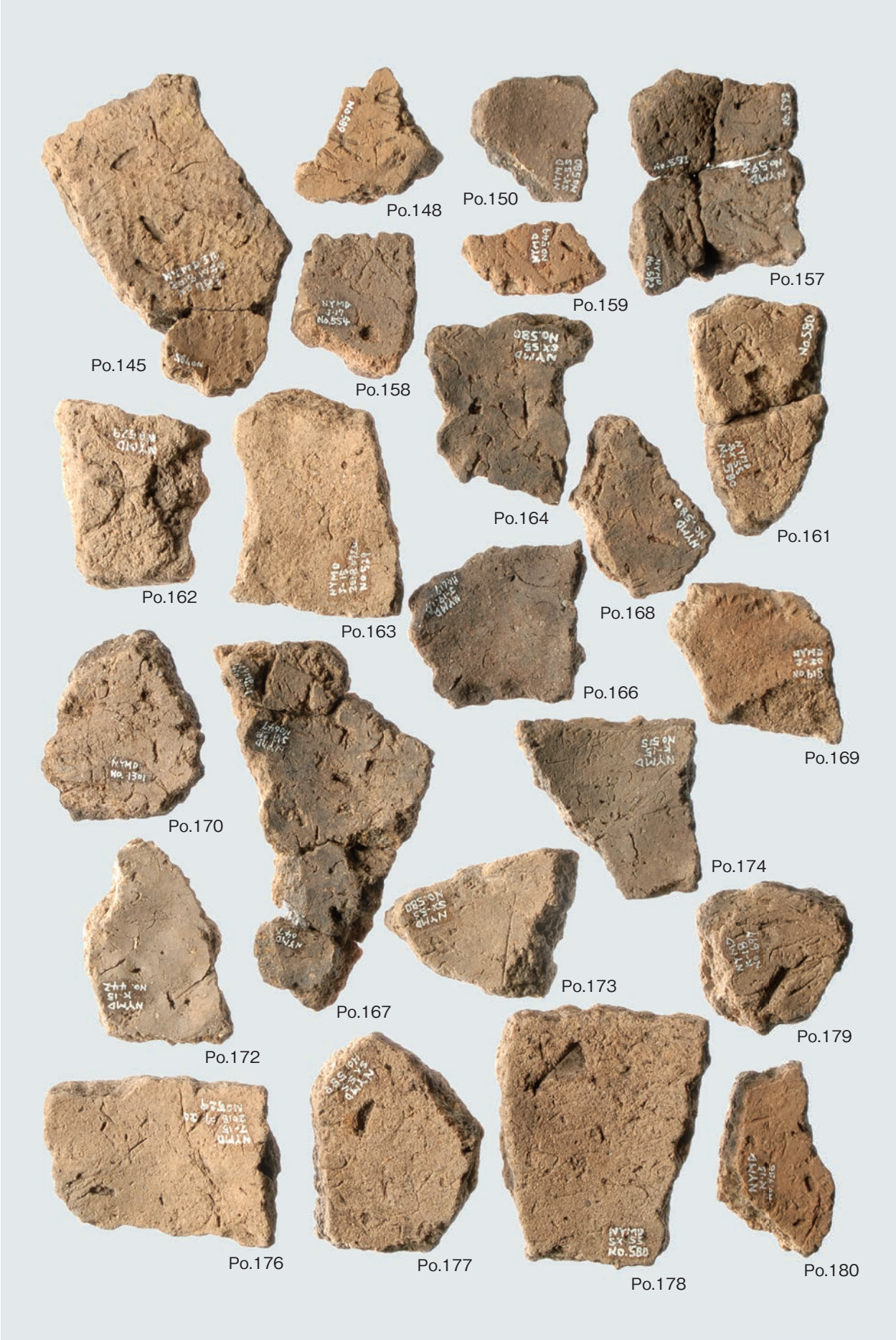


1．平栫・妙見・天道ヶ尾式類似・縄文地押引（外面）　（S＝２：３）

1．妙見・天道ヶ尾式類似（外面）　（S＝２：３）

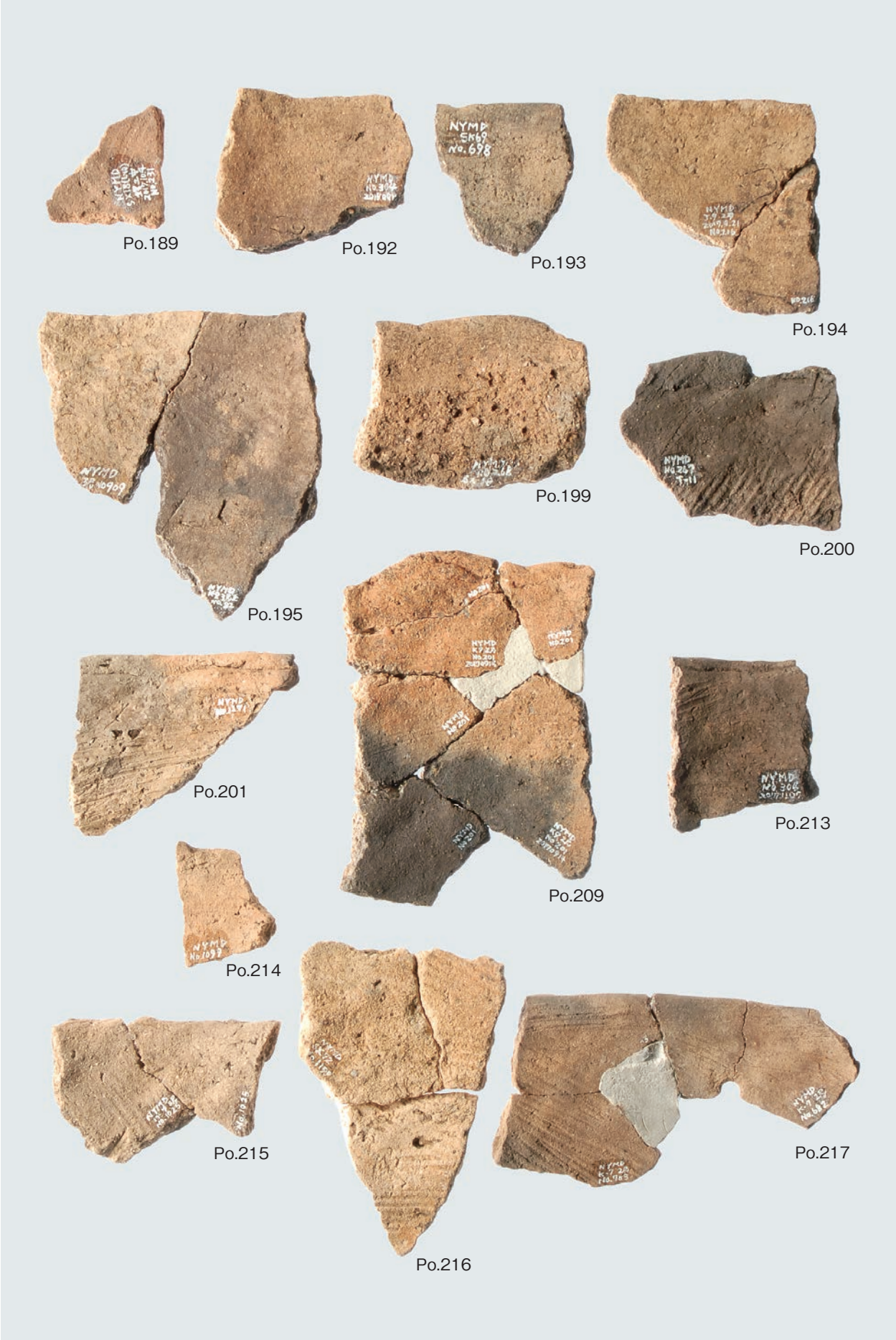
1．妙見・天道ヶ尾式類似・縄文施文（外面）　（S＝２：３）

1．縄文地押引・縄文施文（外面）　（S＝２：３）



1．縄文地押引・縄文施文（内面）　（S＝２：３）

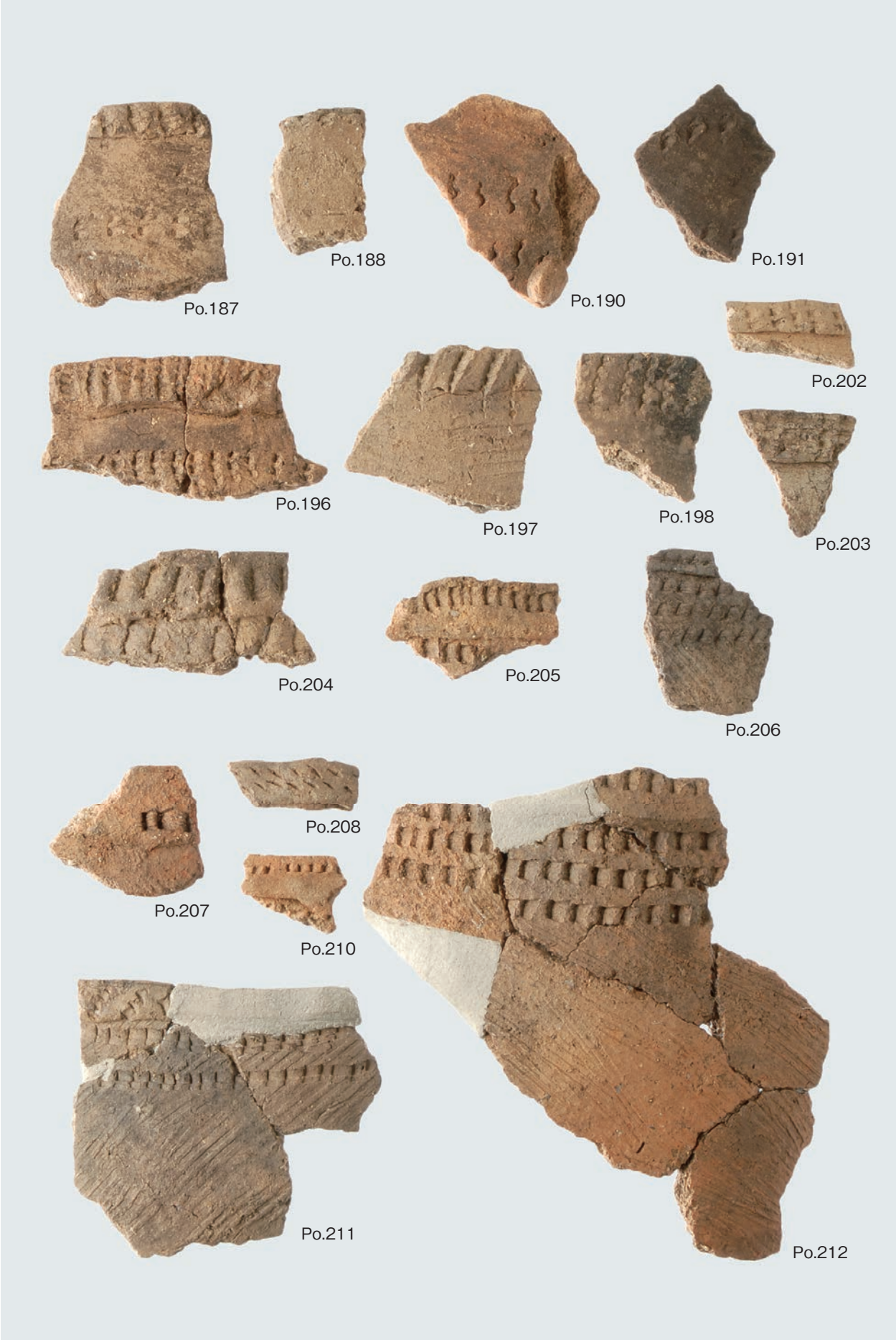
1．長山馬籠式・羽島下層Ⅰ式・西川津式（外面）　（S＝２：３）



1．長山馬籠式・羽島下層Ⅰ式・西川津式（内面）　（S＝２：３）

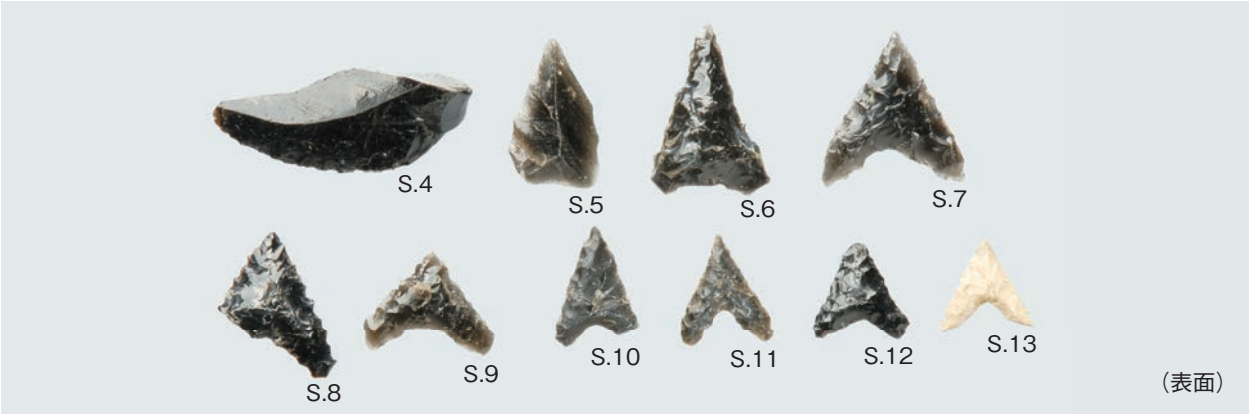
1．西川津式・羽島下層Ⅲ式・磯ノ森式・無文土器（外面）　（S＝２：３）

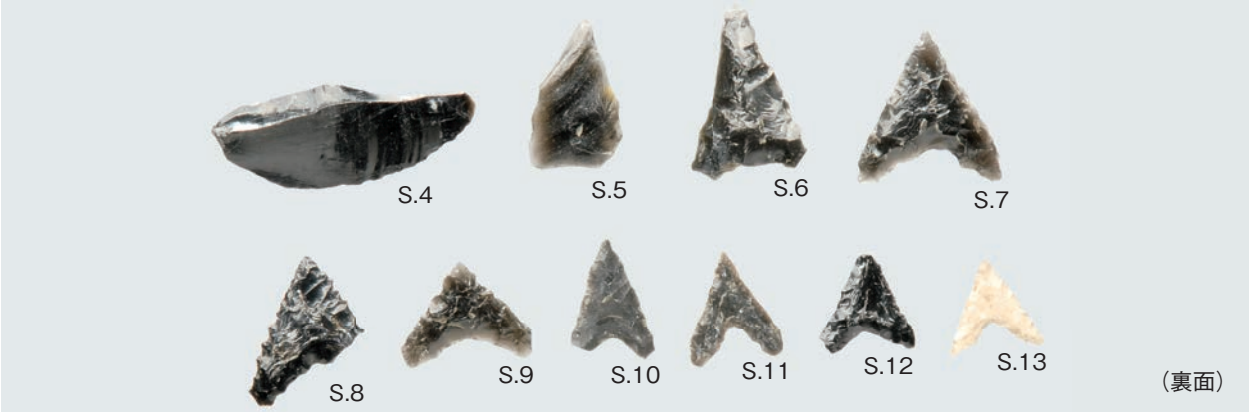
1．西川津式・羽島下層Ⅲ式・磯ノ森式・無文土器（内面）　（S＝２：３）



1．長山馬籠式・西川津式（外面）　（S＝２：３）

1．西川津式・羽島下層Ⅲ式・磯ノ森式・中期末土器（外面）　（S＝２：３）





1．黒曜石・頁岩製石器　（S＝1：1）

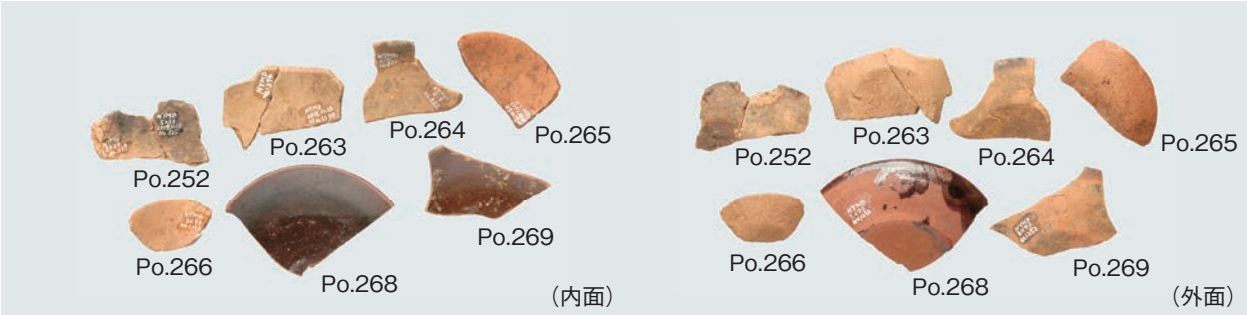
2．サヌカイト製石器　（S＝1：1）

1．石組遺構１　（S＝１：３）

3．石組遺構１（S＝１：３）

2．石組遺構１　（S＝１：２）

4．石組遺構１（S＝１：３）



5．石組遺構１・銭集中　（S＝１：３）

1．銭集中

2．銭集中

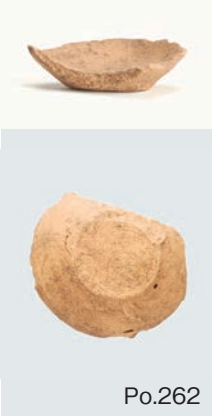
3．銭集中

4．銭集中

5．銭集中

6．銭集中

7．銭集中

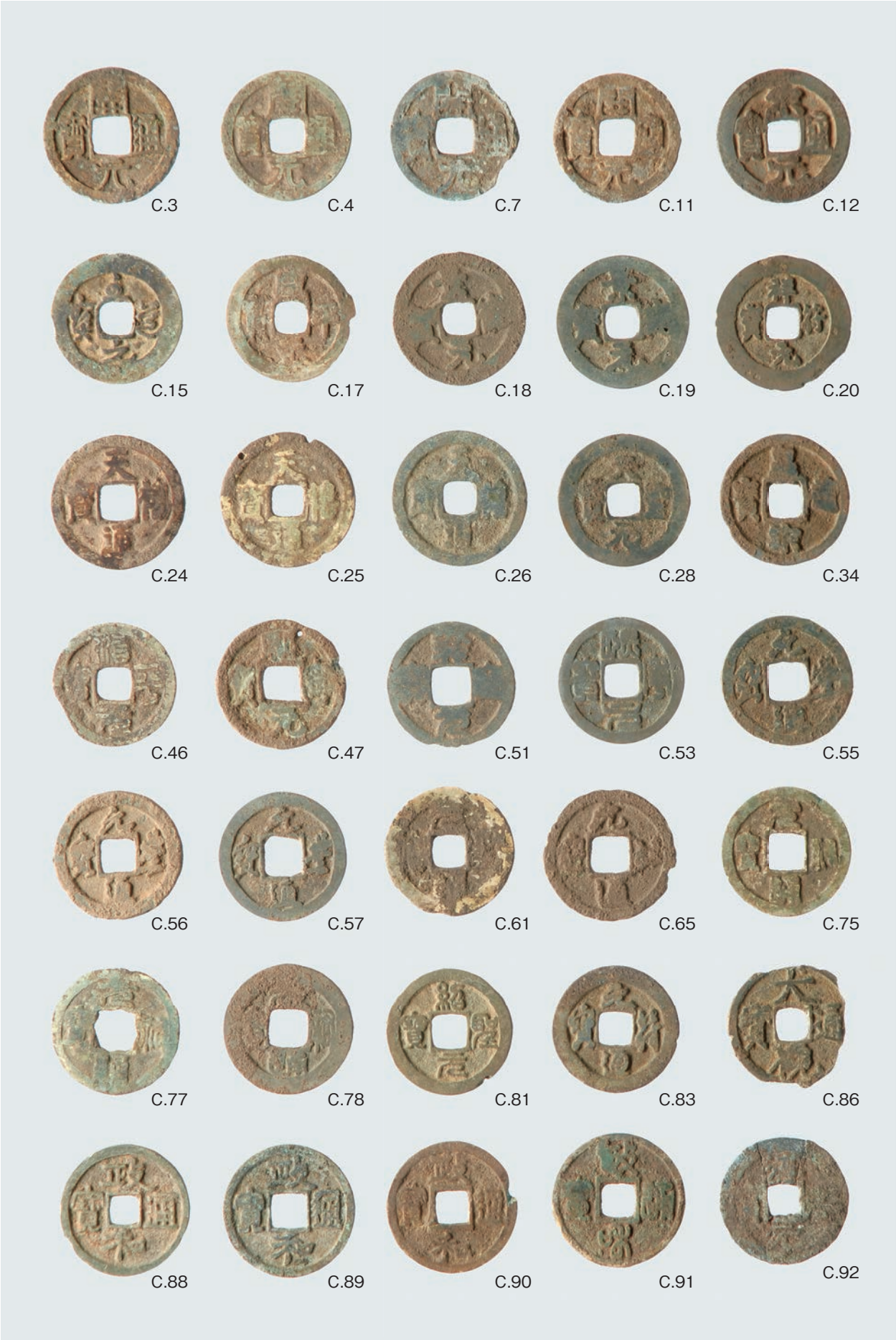


8．銭集中

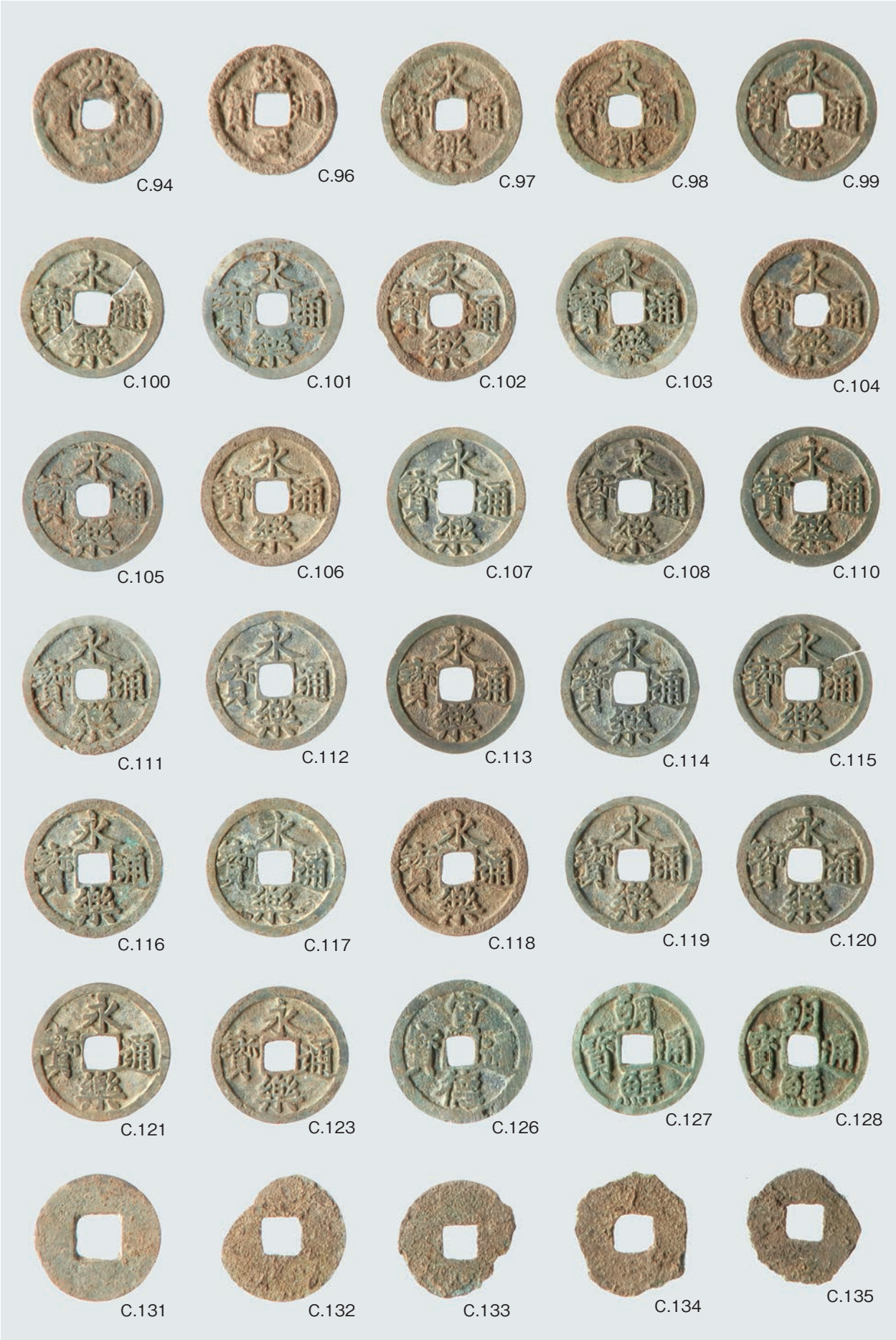
9．銭集中

10．銭集中　（S＝１：３）

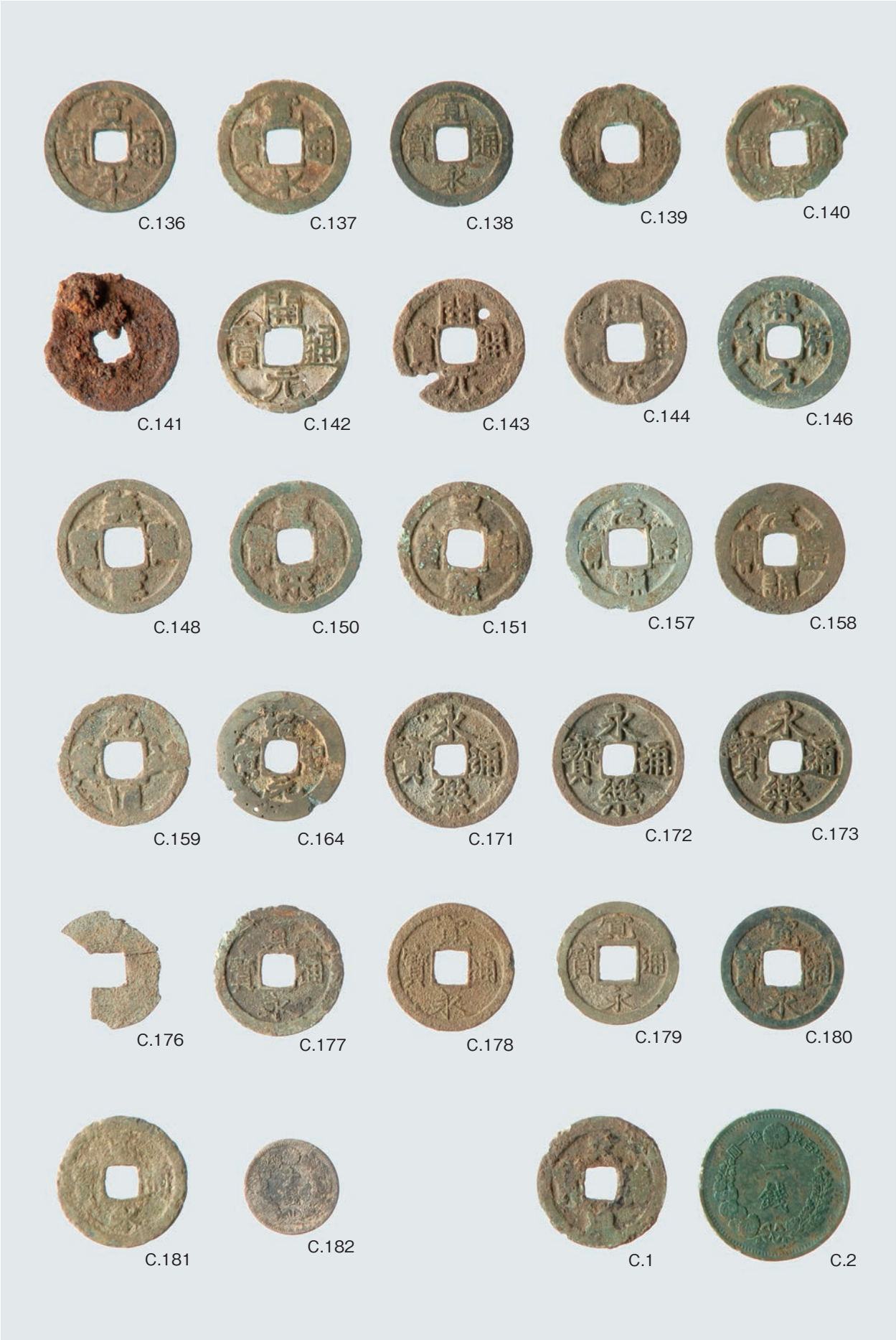
11．銭集中　（S＝１：２）


C.3
C.4
C.7
C.11
C.12
C.15
C.17
C.18
C.19
C.20
C.24
C.25
C.26
C.28
C.34
C.46
C.47
C.51
C.53
C.55
C.56
C.57
C.61
C.65
C.75
C.77
C.78
C.81
C.83
C.86
C.88
C.89
C.90
C.91
C.92

1．銭貨①　　（S＝1：1）


C.94
C.96
C.97
C.98
C.99
C.100
C.101
C.102
C.103
C.104
C.105
C.106
C.107
C.108
C.110
C.111
C.112
C.113
C.114
C.115
C.116
C.117
C.118
C.119
C.120
C.121
C.123
C.126
C.127
C.128
C.131
C.132
C.133
C.134
C.135

1．銭貨②　　（S＝1：1）


C.136
C.137
C.138
C.139
C.140
C.141
C.142
C.143
C.144
C.146
C.148
C.150
C.151
C.157
C.158
C.159
C.164
C.171
C.172
C.173
C.176
C.177
C.178
C.179
C.180
C.181
C.182
C.1
C.2

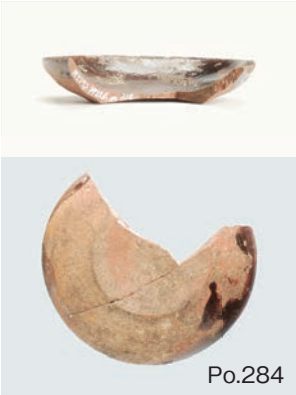
1．銭貨③　　（S＝1：1）

1．神社建物１周辺

2．神社建物１周辺

3．神社建物１周辺

4．神社建物１周辺　（内面）　（外面）



5．神社建物１周辺

6．神社建物１周辺

7．神社建物１周辺

8．神社建物１周辺

9．神社建物１周辺

10．神社建物１周辺

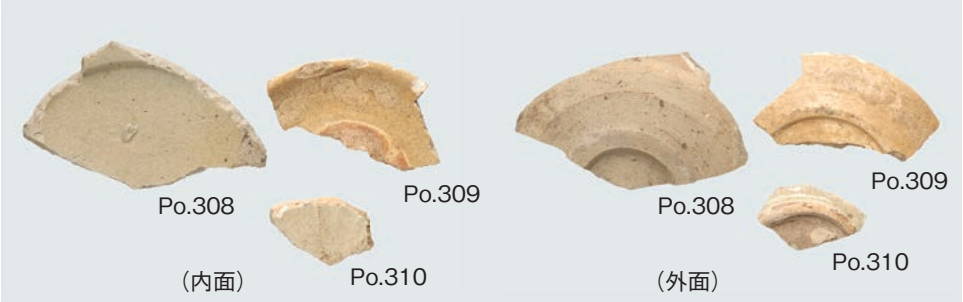
11．神社建物１周辺

12．神社建物１周辺
（S＝１：３）

1．神社建物１　（S＝１：２）

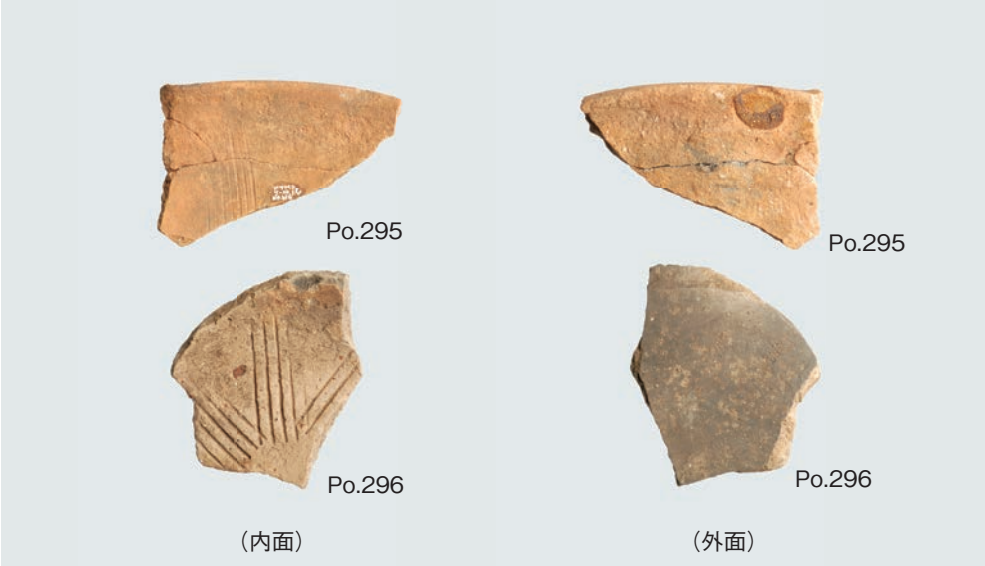
2．神社建物１周辺　（S＝１：１）

3．神社建物１周辺　（S＝１：２）

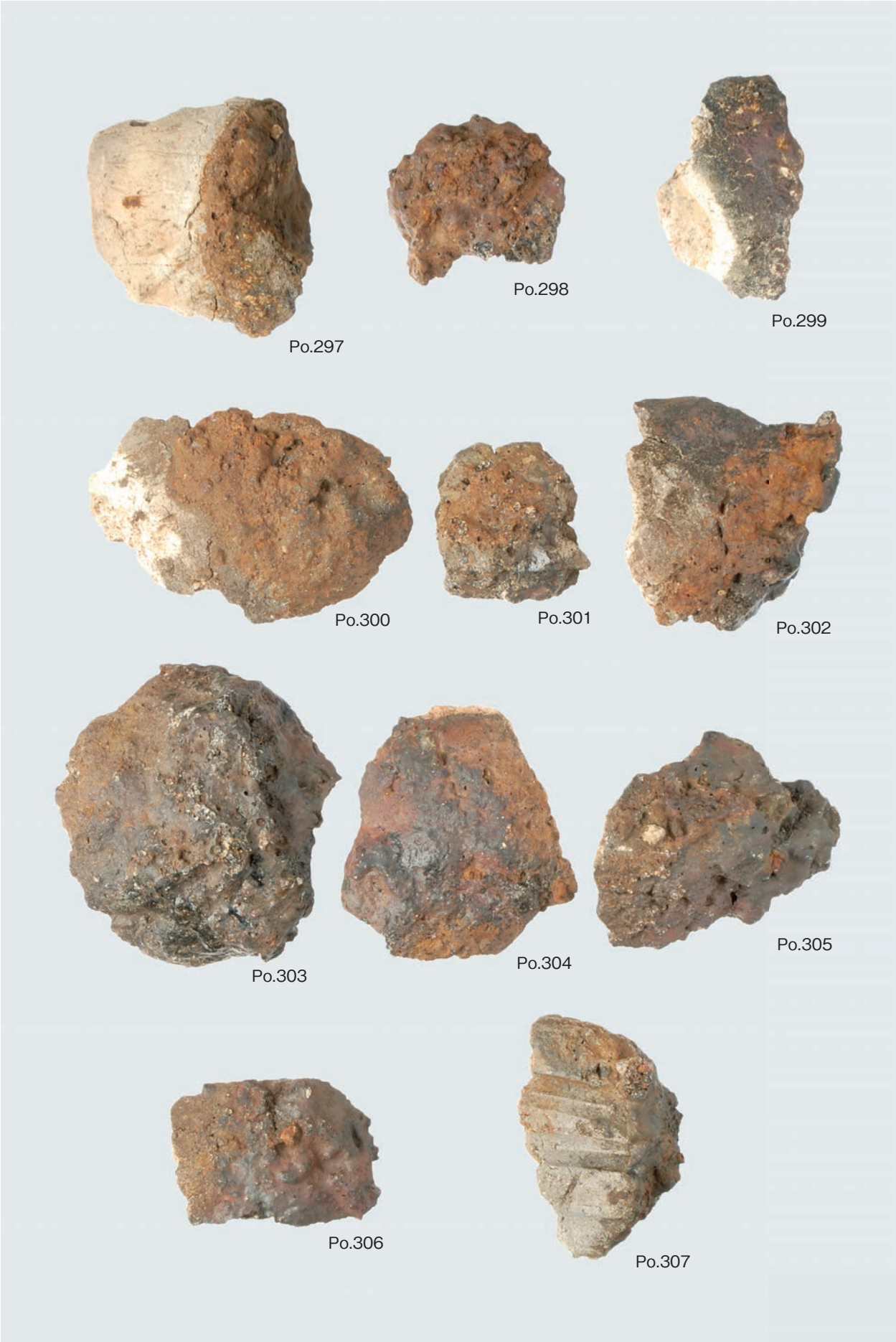


4．陶器皿　（S＝１：３）

6．煙管
（S＝１：２）



5．土製擂鉢　（S＝１：３）


Po.297
Po.298
Po.299
Po.300
Po.301
Po.302
Po.303
Po.304
Po.305
Po.306
Po.307

1．羽口　　（S＝1：2）

F.1

F.4

F.2

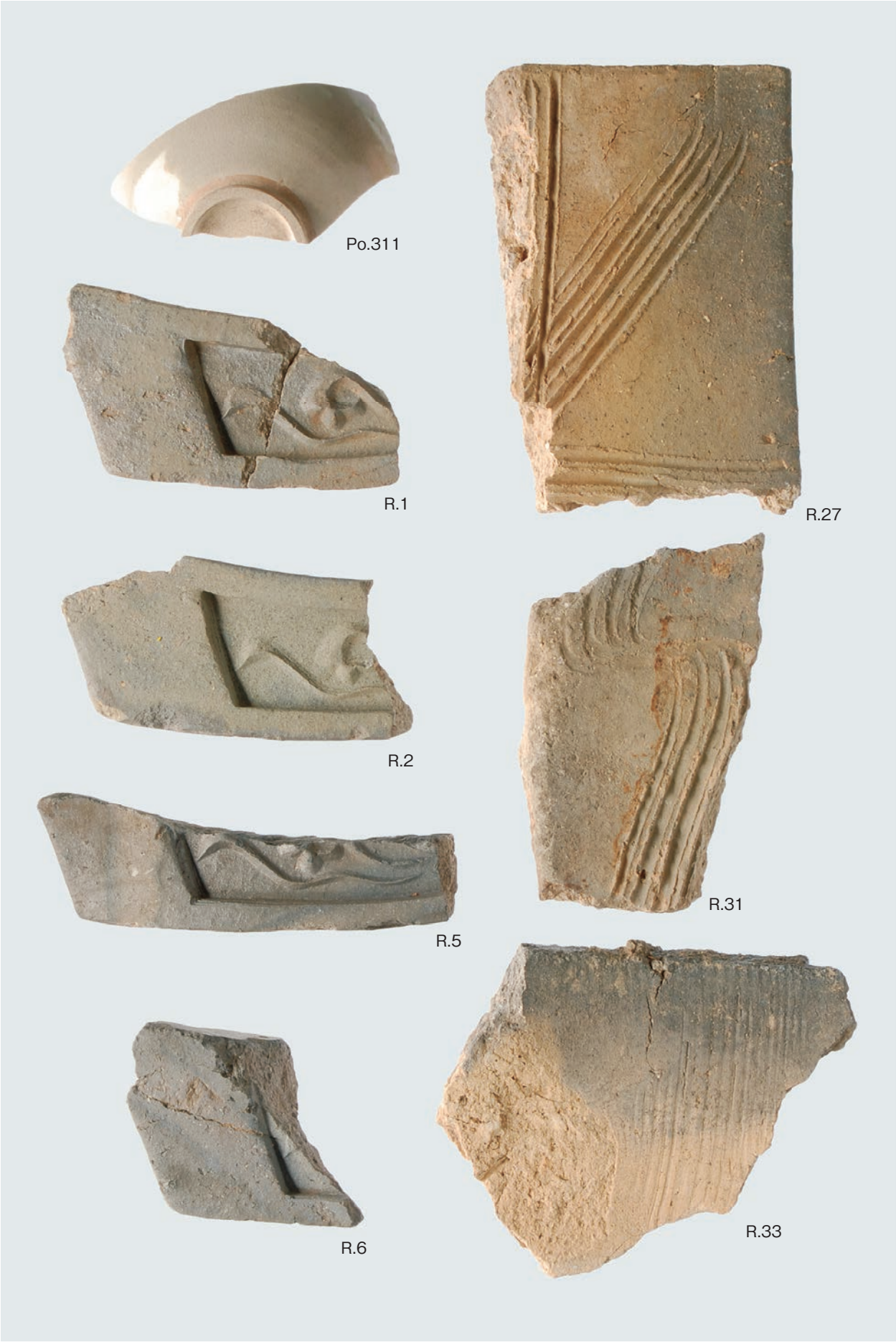
F.5

F.3

F.6

F.7

1．鉄滓　　（S＝1：3）



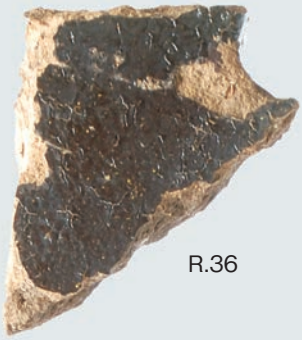
1．陶器・軒桟瓦・板瓦　（S＝２：３）

1．軒桟瓦　（S＝1：3）

2．鯱形土製品（R. 34）　（S＝2：3）

1．桟瓦（R. 11の幅は22㎝）

2．雁振瓦・袖瓦・板瓦・施釉瓦（R. 24の長さは24. 5㎝）


R.36

R.39

R.40

R.37

R.38

R.71

R.68

1．施釉瓦・窯道具・窯壁部材　（S＝２：３）

1．窯壁（R. 46の高さは12. 9㎝）

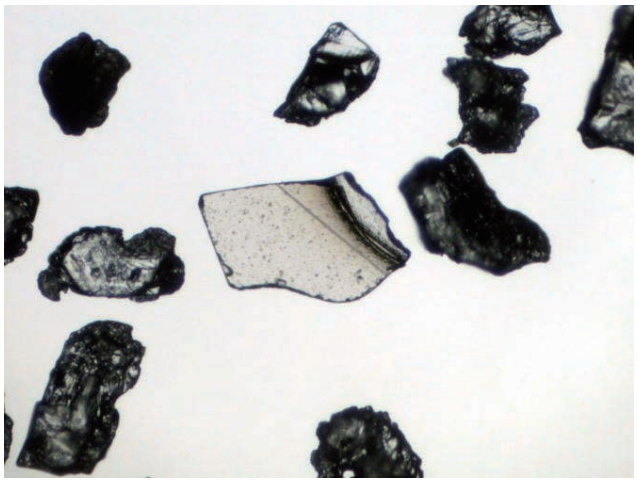
2．窯壁（R. 56の長さは19㎝）

1．火柱（R. 61の高さは28. 4㎝）

2．火柱（R. 64の高さは15㎝）

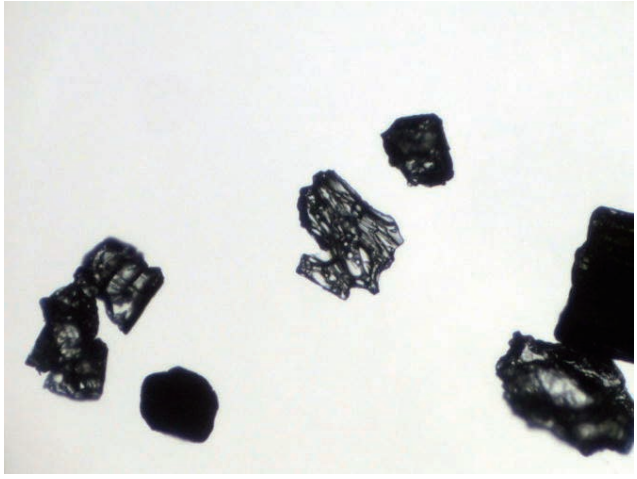
1．窯壁部材（R. 67の長さは14. 4㎝）

2．窯壁部材（R. 73の高さは15. 4㎝）



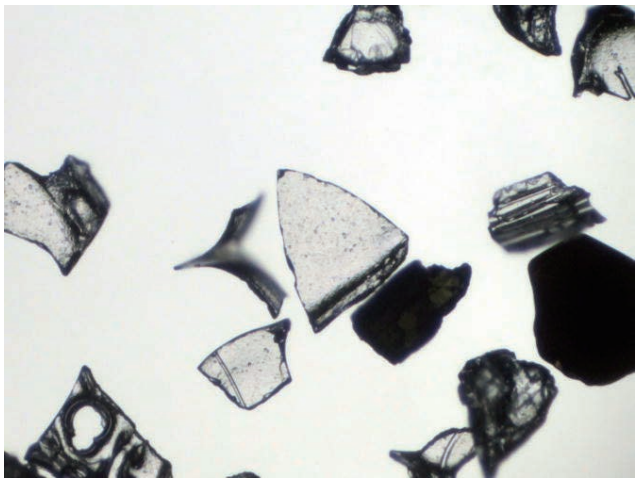
0.2mm

写真１　トレンチ６南壁東地点・試料16（透過光下）
K-Ahに由来する淡褐色バブル型ガラス
（中央）.



0.2mm

写真２　トレンチ７・試料５（透過光下）
ATK-Ahに由来する無色透明のバブル型ガラスや繊維束状軽石型ガラス.



0.2mm

写真３　トレンチ７・試料14（透過光下）
SIに含まれる繊維束状軽石型ガラス．右端の有色鉱物は角閃石.

新屋宮ノ段遺跡　テフラ分析写真（第３章第１節）

報　告　書　抄　録

ふりがな	にいやみやのだんいせき
書名	新屋宮ノ段遺跡
副書名	一般国道183号鍵掛峠道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	23
編著者名	佐伯純也・高橋章司・柳浦俊一・火山灰考古学研究所・文化財調査コンサルタント
編集機関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所在地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　TEL・FAX　0859-26-0455 eメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦2021年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新屋宮ノ段遺跡	日野郡 日南町新屋	31401	2-0316	35度 6分 2秒	133度 11分 30秒	平成29年 5月18日～ 令和元年 7月30日	5,620㎡	道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新屋宮ノ段遺跡	散布地	縄文時代 中世 近世 近代	配石遺構、陥穴、貯蔵穴、土坑、石組遺構、建物跡、神社跡、銭集中、精錬鍛冶炉、粘土採掘坑、道路	縄文土器（早期～中期）、土師器、瓦質土器、陶磁器、石器、金属製品、銭貨、鉄生産と近代瓦の生産に関連する遺物。	縄文時代早期の配石遺構と、精錬鍛冶炉を検出。和鏡２面が出土。

要　約

新屋宮ノ段遺跡では、縄文時代の配石遺構５基と集石６基、貯蔵穴14基、陥穴２基を検出し、縄文時代早期から前期の土器が多数出土した。中世の遺構は、経塚と見られる石組遺構を検出し、内部から瓦質土器の壺が出土した。また、周辺からは和鏡が２面出土しているほか、銭貨の集中を確認した。調査区の中央部では大型の建物２棟が整然と建てられており、鉄滓の出土から、製鉄に関する建物と考えられる。その他に製鉄に関連する遺構は、精錬鍛冶炉１基を検出した。近世には丘陵の先端部に青瀧神社が建てられており、近代まで複数回の建替を行いながら維持されていた。近代には、調査地の近くで燻瓦の生産が行われており、調査区内からは、巨大な粘土採掘坑と道路の路盤に転用された達磨窯の部材が多数出土した。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書23

鳥取県日野郡日南町

新屋宮ノ段遺跡

２０２１年３月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９―２６―０４５５

印　　刷　　勝 美 印 刷 株 式 会 社